

青森県埋蔵文化財調査報告書 第410集

新田遺跡Ⅱ

—八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2006年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは平成10年度以降、八戸南環状道路建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を進めて参りましたが、平成15年度・16年度には新田遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代早期～晩期及び古代に至る各時期の人間活動の痕跡が確認され、縄文時代早期中頃、中期終わり頃、後期のはじめ、古代の集落跡が検出されました。

本報告書では平成15年度の調査成果の一部と平成16年度の調査成果をあわせ、集落に関連する内容をまとめたものです。特に、縄文時代中期の集落では、東北地方南半に分布の中心がある複式炉をもつ住居跡や、大木10式土器が発見されています。複式炉は県内ではこれまで検出例が少なく、文化の動態をとらえるうえで貴重な事例であります。

本遺跡の所在する八戸市是川地区には、国指定史跡である是川石器時代遺跡をはじめ縄文時代早期から古代まで連綿と遺跡が営まれております。本遺跡もこの地域における濃密な人間の活動を示すもので、今回の調査成果によって、是川地区の歴史像がより具体的になると確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行まで御指導・御協力を賜った関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 白鳥隆昭

例言

- 1 本報告書は、八戸南環状道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成15年度・平成16年度に発掘調査を実施した新田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は青森県埋蔵文化財調査センター職員が担当し、執筆者の氏名は文末に記した。依頼原稿、石器実測の一部は下記に依頼し、依頼原稿については執筆者名を文頭に記した。




炭化材の樹種同定	高橋利彦 (木工舎「ゆい」)
炭化種実同定	吉川純子 (古代の森研究会)
¹⁴ C年代測定	小林謙一・遠部 慎 (国立歴史民俗博物館)
土器の胎土分析・火山灰同定	柴 正敏 (弘前大学工学部 地球環境学科)
土壌(焼土)の自然科学的分析	赤沼英男 (岩手県立博物館)
石器の実測図作成	(株) アルカ
- 3 出土した石器の石質鑑定は松山 力氏(八戸市文化財審議委員)に依頼した。
- 4 本報告書に掲載した遺跡位置図には、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図『八戸東部』・『苦米地』を複写して使用した。
- 5 基本層序及び遺構の土層注記には、小山忠正・竹原秀雄『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997・1998年)を使用した。
- 6 本書を編集するにあたり、下記の方々からご指導・ご協力を得た。(順不同 敬称略)
小林謙一、新井達哉、中村明央、能登谷宜康、村本周三、星 雅之、小林 克、菅野美香子、菅原一彦、小島朋夏、大野憲司、河田弘幸、榮 一郎、児玉 準、小保内裕之、村木 淳、杉山陽亮、宇田川浩一、(財)岩手県埋蔵文化財センター、秋田県埋蔵文化財センター、福島県文化センター白河館、一戸町教育委員会

凡例

- 1 遺構の表記は、青森県埋蔵文化財調査センターで定めた下記の略号を使用している。

S B 掘立柱建物跡	S D 溝跡	S E 井戸跡	S I 住居跡
S K 土坑	S N 焼土遺構	S Q 配石・集石遺構	S R 土器埋設遺構
S T 捨て場	S V 溝状土坑	S X その他の遺構	
- 2 挿入中の北方位は、座標北である。
- 3 測量法の改正により経緯度の記載方法が旧日本測地系から日本測地系2000に変更となったため、抄録では両者の数値を併記しているが、挿入・本文には全て旧日本測地系を使用している。
- 4 挿入のうち遺構図の縮尺は、各挿入にスケールとともに示した。ただし、座標の表示のあるものについてはスケールを示していない場合がある。
- 5 遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器：1/4	剥片石器：1/2	礫石器(石製品)：1/3または1/5
--------	----------	--------------------
- 6 挿入中で用いたスクリーントーンは次のとおりである。

 焼土	 柱痕	 硬化面
--	--	---
- 7 縄文原体の基本的な分類は『日本先史土器の縄文』(山内清男、1979年)に従ったが、観察表中ではその名称を一部略記した場合がある。

目次

序

例言・凡例

目次

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査の方法	2
第4節 調査の経過	2

第2章 遺跡周辺の環境と遺跡の層序

第1節 周辺の地形	4
第2節 周辺の遺跡	4
第3節 遺跡の層序	8

第3章 検出遺構とその出土遺物

第1節 検出遺構の概要	13
第2節 検出遺構とその出土遺物	14

第4章 遺構外出土遺物

第1節 土器・土製品	90
第2節 石器	107
第3節 その他の出土遺物	117

第5章 自然科学的分析

第1節 八戸市新田遺跡出土炭化材の樹種	118
第2節 八戸市新田遺跡縄文時代中期より出土した炭化種実	124
第3節 土器付着漆および顔料分析	128
第4節 青森県八戸市新田遺跡出土炭化材の ¹⁴ C年代測定	131
第5節 新田遺跡土器胎土分析について	136
第6節 新田遺跡出土の火山灰について	140
第7節 新田遺跡採取土壌の自然科学的調査結果	142

第6章 考察

第1節 縄文時代中期末葉の土器について	149
第2節 複式炉の使用法について	156
第3節 複式炉の分布について	157
第4節 石器について	160

引用・参考文献167

遺物観察表168

写真図版185

抄録

奥付

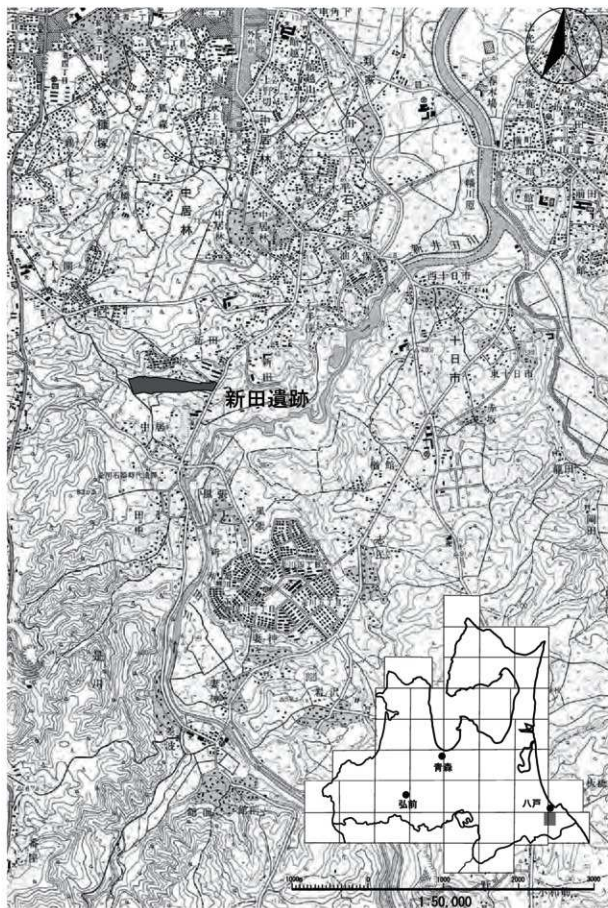


図1 新田遺跡の位置 (S=1/50,000)

第1章 調査の概要

第1節 調査にいたる経緯

平成7年度に、建設省青森工事事務所（現 国土交通省青森河川国道事務所）から、八戸南環状道路建設事業の実施計画策定に伴い、予定地内に所在が予想される遺跡の取り扱いをめぐって、青森県教育庁文化課（現 文化財保護課）に照会がなされた。そこで、建設予定地内を関係者で踏査した結果、まず分布調査・確認調査を先行させ、発掘調査の条件が整った遺跡から順次、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を行うこととした。工事の工程の都合上、翌平成8年度には弥次郎窪遺跡から調査を開始し、平成10年度から13年度までに、丹内・蟹沢(2)・新田・潟野・黒坂・松ヶ崎・蟹沢(3)・楯館遺跡の調査を行った。

新田遺跡・潟野遺跡については、史跡・是川石器時代遺跡に近いこともあって、是川遺跡が予定地に延びていることが懸念されたため、平成10年4月に青森工事事務所、文化課、埋蔵文化財調査センターの三者が現地協議を行い、同年度内に、用地買収済みの区域の調査を先行した。調査の結果、縄文時代の遺構・遺物が発見されたが、是川遺跡とは年代が異なるものであった。

その後、工事計画と設計の変更をうけ、平成14年9月に、改めて青森河川国道事務所・文化財保護課・埋蔵文化財調査センターの三者で現地踏査及び調査打合せを行ない、翌平成15年度から埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することになった。

第2節 調査要項

1 調査目的

八戸南環状道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する新田遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。

- | | |
|------------|--|
| 2 発掘調査期間 | 平成16年4月20日から同年9月8日まで |
| 3 遺跡名及び所在地 | 新田遺跡（青森県遺跡番号 03141）
八戸市是川字新田 8-6、外 |
| 4 調査面積 | 平成15年度 4,750㎡（本報告書分では500㎡を掲載）
平成16年度 4,400㎡ |
| 5 調査委託者 | 国土交通省青森河川国道事務所 |
| 6 調査受託者 | 青森県教育委員会 |
| 7 調査担当機関 | 青森県埋蔵文化財調査センター |
| 8 調査体制 | |
| 調査指導員 | 市川 金丸 元青森県考古学会会長（考古学） |
| 調査員 | 松山 力（八戸市文化財審議委員） |
| 調査担当者 | 青森県埋蔵文化財調査センター |
| 所長 | 佐藤 良治（現 青森県立図書館長） |
| 次長 | 福田 友之（現 青森県立郷土館副館長） |

総務GL 工藤 和夫(現 青森県商工労働部資源エネルギー課副参事)
 調査第二GL 三浦 圭介(現 青森県埋蔵文化財調査センター次長)
 文化財保護主査 中村 哲也
 文化財保護主事 斉藤 慶吏
 調査補助員 成田 英規 土岐 真以 教賀 優子 加藤 渉

第3節 調査の方法

グリッド 平成10年度の調査で設定した、昭和43年建設省告示第3059号による平面直角座標系第X系を基準としたグリッドによる分層発掘を実施した。1グリッドは4m四方とし、北から南に向かってローマ数字とアルファベットの組み合わせでI A、I B… I Y、II A、II B…のごとく、西から東に向かって算用数字で0、1、2、3…のごとく表記した。グリッドライン交点は南北ライン名と東西ライン名を・(ハイフン)でつなぎ、これを呼称とした。グリッド名は南西隅のグリッドライン交点の呼称をもって代表させた。平成10年度の調査は隣接する潟野遺跡も対象としたため、当時の潟野遺跡・新田遺跡の調査対象区域をすべてをカバーできるように、グリッド起点(交点名I A-0)は、公共座標値X=53,000 Y=55,000の地点とした。現地には20m毎に木杭を打設したが、調査対象範囲が拡大されたこと、打設後6年が経過し、多くのグリッド杭が腐食していたことから、平成15年度調査時に用地内に設置されていた路線測量用基準点を用いて、業者委託により4級基準点を新設し、これを基に新たに杭を打設した。

土層の掘削 表土は調査担当者立ち会いの下、重機を用いて掘削した。それ以下は基本的に手掘りで層毎に掘り進めた。ただし、谷部の遺物を含まない黒色土は、重機を用いて掘削したことがある。トレンチ等による試掘の結果、遺物が確認されなかった黄褐色火山灰土を最終面とした。

遺構精査 大きさにより適宜二分法・四分法を用い、堆積土を上位から順に掘削した。遺物は3次元の座標を記録して取り上げた。

遺物の取り上げ トータルステーションにより3次元の位置を記録して取り上げた。

遺構名 種類毎・検出順に付し、調査の結果、遺構でないかと判断したものは欠番とした。

層序名 遺構外にローマ数字、遺構内の土層に算用数字を用い、上位から順に付した。

写真撮影 主に35mmカメラで行い、カラーリヴァーサルフィルム、モノクロネガフィルムを用いた。メモ用にデジタルカメラを用いた。また、適宜6×6判カメラも使用した。

第4節 調査の経過

平成15年度 すでに『大開遺跡・新田遺跡』(青森県埋蔵文化財調査報告書第384集)で述べてあるので、繰り返さない。

平成16年度 4月20日、隣接する潟野遺跡と併せて、職員4人、調査補助員8人、作業員110人の体制で調査を開始した。新田遺跡の調査終了後は、潟野遺跡の調査に合流する予定であった。新田遺跡・潟野遺跡それぞれの調査体制は上述の2分の1を基本としたが、作業内容に応じて適宜変更することとした。前年度に表土の除去を終えたII Sライン以北は遺構検出作業を進めた。翌日から、

重機を使用して表土の除去を開始した。II Pライン以北は畑地造成時に削平されており、谷部以外は表土を除去した段階で既に地山が露出した。また、調査区東部は尾根状地形のため、黒色土（後述の第III層）の堆積が薄く遺構検出も容易であった。この部分の古代の住居跡、縄文時代中期の住居跡等の精査は順調に進んだ。そのため、7月初めに空中写真を撮影し、8月上旬をめどに調査を終了する予定であったが、谷部西側の黒色土中に住居跡が検出されたため、空中写真撮影を1週間遅らせて実施した。空中写真の撮影後、古代の住居であるSI-05周辺から縄文時代中期の遺構が黒色土中で検出されはじめ、調査期間を延長することとした。同時に重機を用いて、遺構に影響のない範囲の遺物がほとんど含まれない黒色土（第III層）を除去したが、限定された範囲のものとなった。

第IV層中には早期から前期前葉の遺物が包含されており手掘りで掘削したが、予想以上の作業量であった。こうした事情から、9月8日まで調査を行った。調査終了後、一部の危険箇所は重機を用いて埋め戻しを行った。（中村）

第2章 遺跡周辺の環境と遺跡の層序

第1節 周辺の地形

八戸市域には北から順に、十和田湖及びその外輪山に源を発する奥入瀬川、五戸川、浅水川、岩手県七時雨山・早坂高原付近に源を発する馬瀬川、平庭岳に源を発する新井田川が流れており、これらの河川とその支流によって形成された段丘地形が発達している。八戸市西部から北部では、高位の段丘から順に、蒼前平段丘、天狗岱段丘、高館段丘、根城段丘、田面木段丘、名久井段丘に区分されている。地域によっては更に細分され、あるいは異なる名称が与えられており、新井田川と太平洋に挟まれた階上岳山麓線以北の地域では、高位から蒼前平高位段丘・蒼前平低位段丘（蒼前平段丘相当）、白銀段丘・野場段丘（天狗岱段丘相当）、種中段丘（高館段丘相当）、根城段丘、田面木段丘、名久井段丘に区分されている（松山 1983）。

新田遺跡は新井田川中流の左岸に位置する。標高 15m 前後から 80m 前後まで複数の段丘面を含む広大な範囲が遺跡として登録されているが、平成 10・15・16 年度の調査対象区域は標高 15～24m 前後の田面木段丘面である。八戸市立図書館南小学校の南方約 1km の地点から新井田川に流れ込む小枝谷が遺跡の西方から南方を限っている。田面木段丘は段丘礫層上に八戸火山灰層と完新世堆積物を乗せるが、完新世火山灰は成層状態では確認されていない。遺跡周辺の基盤岩は、通産省工業技術院地質調査所発行の 1:200,000 地質図（平成 3 年発行）によれば、粘板岩及び砂岩、泥岩・砂岩・及び礫岩、輝石安山岩溶岩及び火砕岩である。新井田川の右岸には、苦鉄質火山岩・石灰岩が分布する。

この地域を含む青森県南部地域には、完新世以降、十和田火山を給源とする火山灰（二ノ倉、南部、中根、十和田 a、十和田 b）および白頭山火山灰が分布することが知られている。その降下年代や産状は『新田遺跡・大開遺跡』に述べているので、ここでは繰り返さない。

第2節 周辺の遺跡

八戸市の馬瀬川・新井田川中流域には、後期旧石器時代の田向冷水遺跡をはじめとして、近世に至るまでの多数の遺跡が知られている。遺跡の数は縄文時代早期以降増加し、縄文時代後期の遺跡が最も多い。新田遺跡の所在する是川地区周辺では、土橋川を境として、東側に縄文時代前期～中期の遺跡が多く、西側では後期の遺跡が多い。遺跡だけでなく、東側には蟹沢遺跡・重地遺跡・松ヶ崎遺跡など縄文時代前期から中期の大規模な集落が点在するが、この時期の大規模な遺跡は土橋川西側には知られていない。一方、縄文時代後期前半になると、土橋川の西側で丹後谷地 (1) 遺跡、田面木遺跡など大規模な集落が現れ、縄文時代後期の遺跡も増える。東側では後期後半になって、風張 (1) 遺跡のような大規模な集落が現れるが、それ以前の大規模な遺跡は知られていない。晩期には遺跡数は減少する。弥生時代も同様の傾向が続く。古墳時代の遺跡は田向冷水遺跡以外に知られていない。飛鳥時代になると遺跡はやや増加する傾向にあり、奈良時代になると、田面木平遺跡をはじめとする集落遺跡、丹後平古墳群や鹿島沢古墳群の群集墳が形成されるようになり、平安時代には、集落数も増加する。

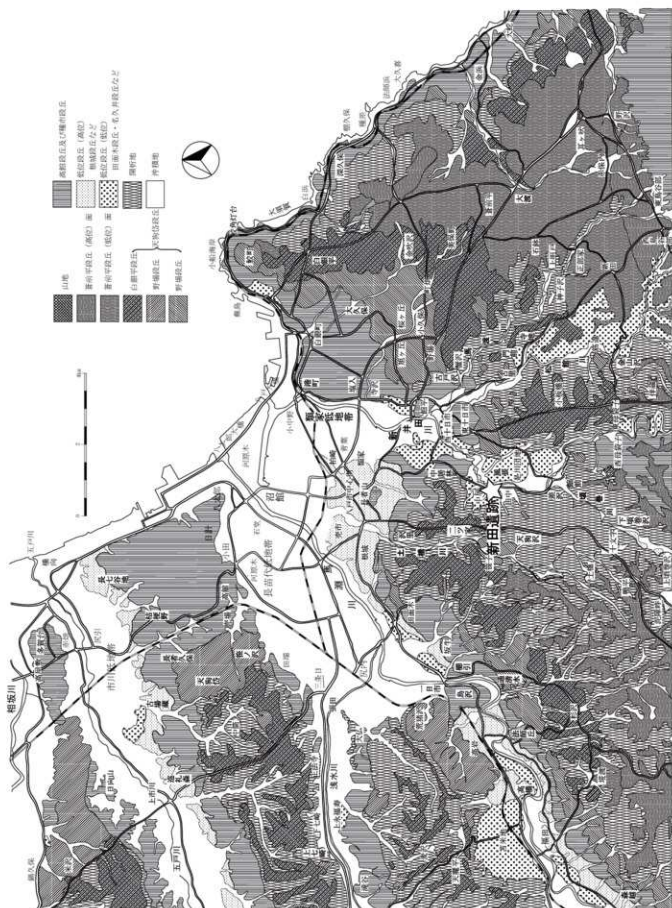


図2 八戸付近の段丘区分図(松山 1983を一部改変)

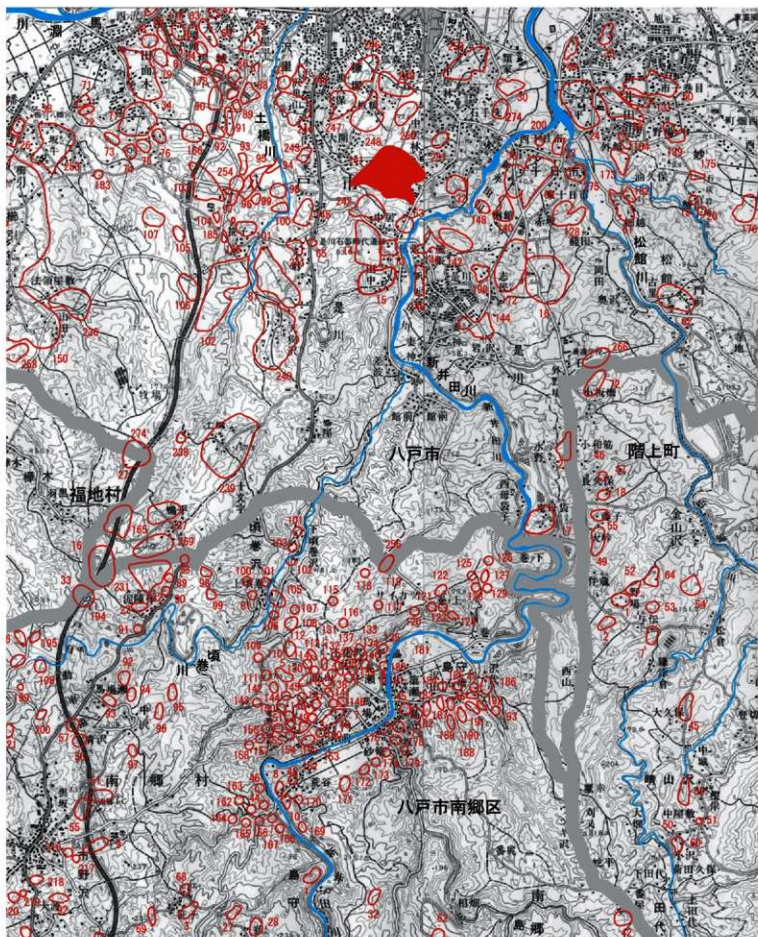


図3 新田遺跡と周辺の遺跡 (S=1/50,000)

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
65125	池ノ沢 (1) 遺跡	縄文 (後)	65154	草坂 (1) 遺跡	縄文 (後)	65183	上庄平遺跡	縄文 (中・後)
65126	砂峠遺跡	縄文 (後)	65155	大隈遺跡	縄文 (後)	65184	池ノ下遺跡	縄文 (後)
65127	池ノ沢 (2) 遺跡	縄文 (後・後)	65156	草坂 (2) 遺跡	縄文 (後・後)	65185	柳田 (2) 遺跡	縄文 (後)
65128	池ノ沢 (3) 遺跡	縄文 (後)	65157	草坂 (3) 遺跡	縄文 (後)	65186	武代遺跡	縄文 (前)
65129	池ノ沢 (4) 遺跡	縄文 (後)	65158	草坂 (4) 遺跡	縄文 (前・後)	65187	長ノ平 (1) 遺跡	縄文 (後)
65130	小林遺跡	縄文 (後・後)	65159	乃功遺跡	縄文 (前・後)	65188	長ノ平 (2) 遺跡	縄文 (後・後)
65131	天瀬 (1) 遺跡	縄文 (後)	65160	伊前遺跡	縄文 (後)	65189	伊田沢遺跡	縄文 (中・後)
65132	大久保遺跡	縄文 (後)	65161	内山遺跡	縄文 (前・後・後)	65190	高取遺跡	縄文 (前)
65133	上ノ元式遺跡	縄文 (後)	65162	日暮ら (1) 遺跡	縄文 (後)	65191	石橋 (2) 遺跡	縄文 (前)
65134	下ノ元式遺跡	縄文 (後)	65163	日暮ら (2) 遺跡	縄文 (中・後・後)	65192	石橋 (3) 遺跡	縄文 (後)
65135	高津水遺跡	縄文 (後)				65193	野田川遺跡	縄文 (後)
65136	石塚 (2) 遺跡	縄文 (前)	65164	日暮ら (3) 遺跡	縄文 (後)	65194	堀久保遺跡	縄文 (前)
65137	山子 (1) 遺跡	縄文 (後)	65165	林遺跡	縄文 (後)	65195	長谷遺跡	縄文 (後)
65138	山子 (2) 遺跡	縄文 (後・後)	65166	山口遺跡	縄文 (後)	65196	宇久吉 (1) 遺跡	縄文 (後)
65139	山子 (3) 遺跡	縄文 (後)	65167	二代 (1) 遺跡	縄文 (後・後)	65197	宇久吉 (2) 遺跡	縄文 (後)
65140	宇ノ脇遺跡	縄文 (前・後)	65168	二代 (2) 遺跡	縄文 (前)	65198	石ノ森 (1) 遺跡	縄文 (後・後)
65141	熊堂遺跡	縄文 (前)	65169	竹野遺跡	縄文 (後・後)	65199	石ノ森 (2) 遺跡	縄文 (後)
65142	長瀬尾 (2) 遺跡	縄文 (後)	65170	上荒分遺跡	縄文 (後)	65200	堀井沢遺跡	縄文 (後)
65143	長瀬尾 (3) 遺跡	縄文 (前)	65171	黒坂台遺跡	縄文 (後・後)	65216	下野沢 (1) 遺跡	縄文 (後)
65144	西院遺跡	縄文 (後)	65172	二ツ石遺跡	縄文 (後)	65217	下野沢 (2) 遺跡	縄文 (後)
65145	タビヒ和遺跡	縄文 (前)	65173	小山田遺跡	縄文 (後)	65218	黄栗遺跡	縄文 (後)
65146	玉輪遺跡	縄文 (後)	65174	坂本遺跡	縄文 (後)	65219	市野良平 (1) 遺跡	縄文 (後)
65147	北山 (4) 遺跡	縄文 (中・後・後)	65176	砂塚遺跡	縄文 (後)	65220	市野良平 (2) 遺跡	縄文 (後)
65148	野山遺跡	縄文 (草)	65177	小平遺跡	縄文 (前・中)	65221	柳平 (1) 遺跡	縄文 (草・後・後)
65149	柳遺跡	平安	65178	白山遺跡	縄文 (後)	65222	孫森遺跡	縄文 (草)
65150	大久保 (1) 遺跡	縄文 (前・後・後)	65179	ヒノコ前遺跡	縄文 (後)			
65151	大久保 (2) 遺跡	縄文 (前)	65180	長瀬 (1) 遺跡	縄文 (後)			
65152	大久保 (3) 遺跡	縄文 (後)	65181	長瀬 (2) 遺跡	縄文 (後・後)			
65153	小尾遺跡	縄文 (後)	65182	稲佐遺跡	縄文 (後)			

青森県遺跡地図(青森県教育委員会 平成10年3月発行)を基に作成。一部加筆。表中の「遺跡番号」は2ヶ所は自治体名と次の通り対応する。
03 八戸市 63 陸上町 64 福地村
65 八戸市南郷区(旧南郷村)

第3節 遺跡の層序

八戸南環状道路用地は、本遺跡内では田面木段丘面から河谷平野に当たる。調査区北側の斜面から南流する沢地形が複数あり、本書で報告する調査区にも二本の沢地形が流れ込んでいる。

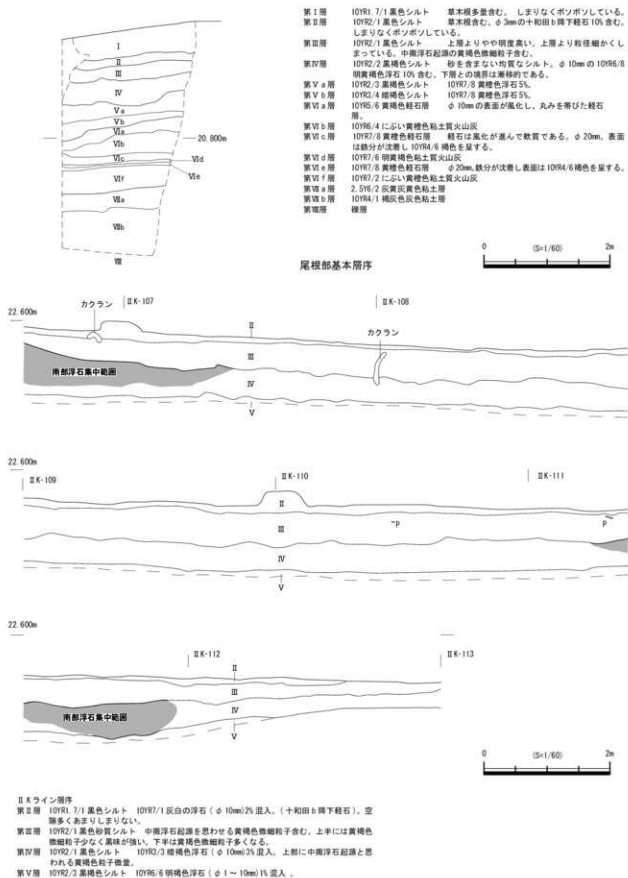
平成10年度の調査の段階で、沢地形に当たる部分にトレンチを設定した。しかし、この時点で調査区の地形の全容は不明で、トレンチを設定した場所が沢地形に当たることを把握できず、おおむね『新田遺跡・大間遺跡』で報告した基本層序と同様の堆積であると考えた。平成16年度の調査を開始する時点では、この層序を引き続き使用することとした。調査が進むにつれて、調査区全体の地形を把握でき、尾根部分の層序と土質がやや異なることも明らかとなった。しかし、おおむね尾根部の層序と対応し、また、遺物の出土状況から考えても、尾根部の層序と同一の層名を用いても大きな齟齬は無いものと考えられたので引き続き同じ層序を用いることとした。以下に層序を述べる。

第Ⅰ層 10YR2/1 黒色シルト 表土(旧耕作土)。草木根を多く含み、しまりが無くぼそぼそしている。

第Ⅱ層 10YR1.7/1～2/1 黒色シルト φ3mmの十和田b降下軽石10%含む。しまり無くぼそぼそしている。

第Ⅲ層 10YR2/1 黒色砂質シルト 上層よりやや明度が高い。粒径が細かくしまっている。中微浮石起源の黄褐色微細粒子含む。縄文時代前期中頃以降の主要な包含層である。谷部では尾根部より砂が少なくシルトが多くなる。

第Ⅳ層 10YR2/2 黒色シルト 砂を含まない均質なシルト。φ1cmの10YR6/8明黄褐色浮石10%含む。下層との境界は漸移的である。谷部では砂が混じり、南部浮石が少なくなる。縄文時代早期



尾根部基本層序

谷部基本層序

図4 基本層序

後半～縄文時代前期前半の包含層である。

第Ⅴ層 第Ⅵ層の八戸火山灰と第Ⅳ層の黒色土の中間にある黄褐色火山灰土で、a・bに細分できる。

第Ⅴa層 10YR5/6 黄褐色シルト質火山灰土 縄文時代早期中葉の物見台式の主要な包含層である。

第Ⅴb層 10YR5/8 黄褐色シルト質火山灰土 第Ⅴa層よりしまっている。

第Ⅵ層 八戸火山灰層である。a～fの細分層は、八戸火山灰第Ⅵ層～第Ⅰ層にそれぞれ対応する。

第Ⅵa層 10YR5/6 黄褐色浮石層 風化のため表面が丸みを帯びたφ10mmの軽石層。

第Ⅵb層 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質火山灰土

第Ⅵc層 10YR7/8 黄橙色軽石層 軽石は水分を含み軟質である。φ20mm、表面には鉄分が沈着し、褐色を呈する。

第Ⅵd層 10YR7/6 明黄褐色粘土質火山灰層

第Ⅵe層 10YR7/8 黄橙色軽石層

第Ⅵf層 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土質火山灰土

第Ⅶ層 谷に堆積した粘土層。色調により2細分した。

第Ⅶa層 2.5YR6/2 灰黄褐色粘土層

第Ⅶb層 10YR4/1 灰黄褐色粘土層

第Ⅷ層 礫層

谷部では、第Ⅲ層はシルトが多くなり、第Ⅳ層は砂が混じり、土質の差が尾根部に比べて小さくなる。そのため、断面での識別は比較的容易だが、平面での識別はやや困難を伴う場合があり、層位を誤って取り上げた遺物も一定量存在すると考えられる。(中村)

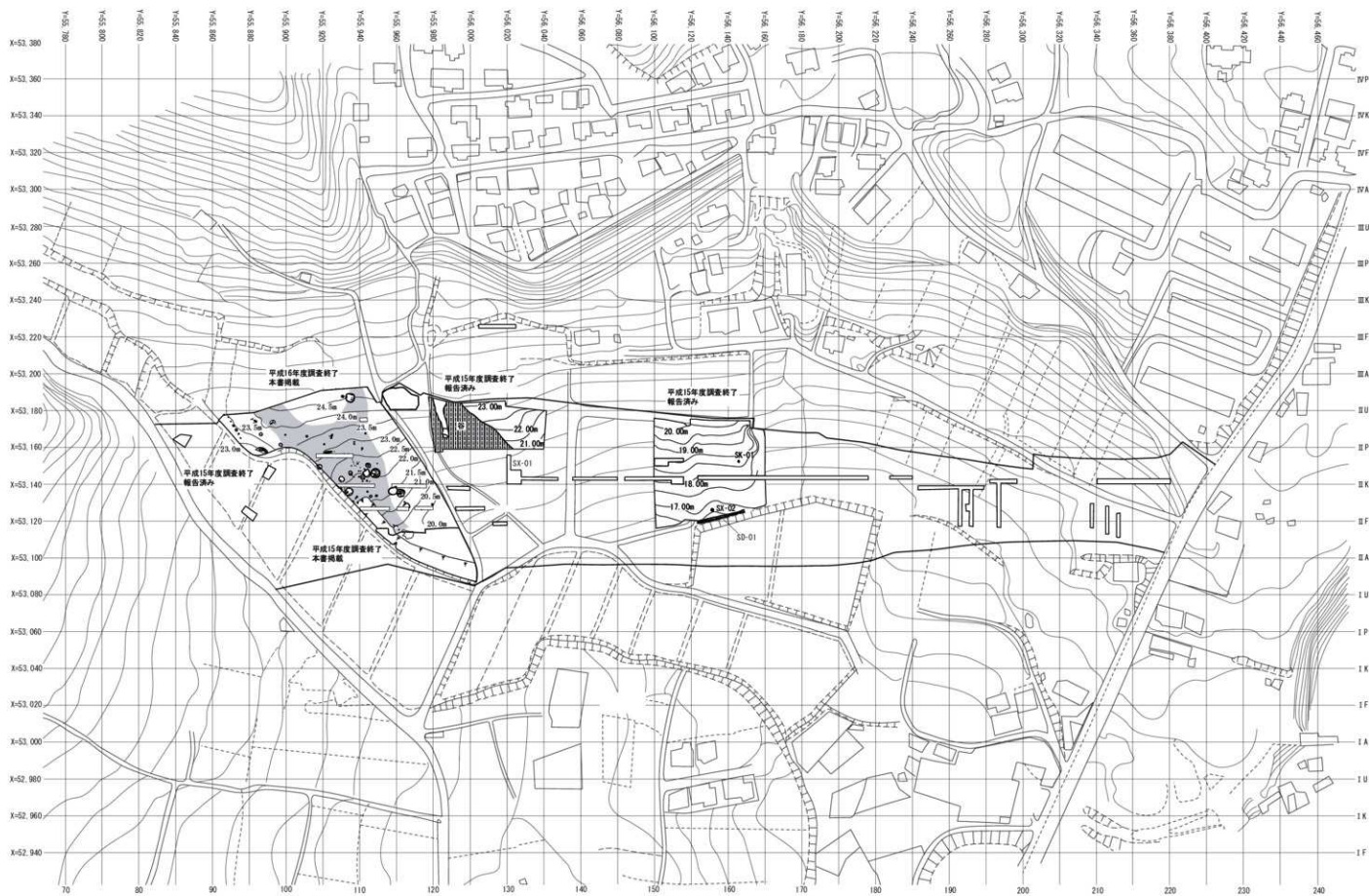


図5 調査区位置図 (S=1/2,000)

第3章 検出遺構とその出土遺物

第1節 検出遺構の概要

本報告書では平成15・16年度に本調査を実施して検出された縄文時代早期・縄文時代前期前半、縄文時代中期末葉・縄文時代後期初頭・古代を中心とする集落について報告する。検出された遺構は、竪穴住居跡12軒、土坑12基、不明遺構7基、焼土14基、不明遺構7基、土器埋設炉2基、溝状土坑1基、ピット群1である(表2)。表には位置・規模・検出面・重複など基本的な情報を記載し、文中ではこれら以外の属性について触れることとした。

調査区は遺跡の西端に当たり、西側と南側は谷地形で限られている。この谷地形は現在水田となっている。調査区中央部には北側の斜面から南流する浅い沢地形が認められ、第Ⅲ層の黒色砂質シルト及び第Ⅳ層の黒色シルトが埋積している。

縄文時代早期の遺構、竪穴住居跡2軒・土坑1基(SI-01・SI-12、SK-11)は谷部からはずれた位置にある。その他(SX-03・08・09)は谷に当たる部分に位置する。

縄文時代早期後半～前期の焼土遺構のうち2基は(SN-05・11)は調査区西側を限る谷の落ち際に位置する。1基(SN-14)は調査区南東部の尾根部に位置する。

縄文時代中期末葉の遺構(SI-02・04・07・14・15、SK-06・14・15・16、SN-07・08・09・10、SR-01、SX-04・05・06・07)は沢地形を中心に分布する。

縄文時代後期初頭の遺構(SI-13)は沢の中央部に位置する。

縄文時代晩期の土坑(SK-12・13)は沢部の黒色土中に2基検出された。

谷部中央には弥生時代以降のピット群が検出された。

古代の遺構は調査区南半に3基(SI-05・08・09)検出された。(中村)

表2 遺構一覧表

遺構の長軸・短軸は下端を計測した。上端は遺構の検出レベルや腐蝕後の崩落により容易に変化する性質のものである。一方、下端は変化しないと考えられるので、規模を必ず下の通りに入力していると考えられる。ただし、機土は上端を計測した。深さはセクション図・エレベーション図における最深部の値を使用した。

遺構名 (略号)	調査 年度	グリッド	検出層位	重複	規模(m)			時期	備考
					長軸	短軸	深さ		
SI-01	04	II V ~ II W-108 ~ 109	IV ~ V		4.41	4.18	0.65	早期中葉	
SI-02	04	II S-95	IV		1.58	0.90	—	中期末葉	伊規模
SI-03	04	II Q-106	III		0.68	0.62	—	中期末葉	
SI-04	04	II O-95 ~ 97	V		6.26	2.16	0.18	中期末葉	
SI-05	04	II L-110 ~ 111	III		3.17	3.12	0.86	奈良時代	
SI-06	04	欠番			—	—	—		
SI-07	04	II I ~ II J-115 ~ 116	IV		4.30	4.19	0.21	中期末葉	
SI-08	04	II G ~ II H-115 ~ 116	V		2.79	2.66	0.29	古代(10C前葉以前)	
SI-09	04	II E-114 ~ 115	III		—	—	0.33	奈良時代	SK-09から変更
SI-10	04	欠番			SI10	0			SN-16に変更
SI-11	04	II K ~ II M-111 ~ 112	III ~ IV		4.71	4.65	0.32	中期末葉	
SI-12	04	II I ~ II J-113 ~ 115	V		4.39	3.53	0.31	早期	
SI-14	04	II I ~ II J-108	III		4.64	3.96	0.33	中期末葉	SK-08から変更
SI-15	04	II S-97 ~ 98	IV		2.93	2.51	—	中期末葉～後期初頭	
SK-04	04	II Q-96	V		1.69	1.69	0.62	前期後半以降	
SK-05	04	II P-99	V		1.84	1.33	0.40	前期後半以降	
SK-06	04	II K-107	III		2.93	2.76	0.21	中期末葉	
SK-07	04	欠番			—	—	—		SI-13に変更
SK-08	04	欠番			—	—	—		SI-14に変更
SK-09	04	欠番			—	—	—		SI-09に変更
SK-10	04	II H-119	IV		0.78	0.75	0.34	前期後半以降	

遺構名 (略号)	調査 年度	グリッド	検出層位	重複	規模 (m)			時期	備考
					長軸	短軸	深さ		
SK-11	04	II V～II W-107	V		0.78	0.62	0.49	早期	
SK-12	04	II I-112	III		1.00	0.80	0.20	晚期	
SK-13	04	II I-111	III		1.23	1.03	0.10	晚期	
SK-14	04	II M-104	III		2.41	2.36	0.16	中期末葉	
SK-15	04	II K～II L-110	III		2.28	2.09	0.09	中期末葉	
SK-16	04	II M-110～111	III		2.28	1.90	0.31	中期末葉	
SK-17	04	II Q-106	III		0.62	0.54	0.14	前期後半以降	
SK-18	04	II Q-102	IV		0.79	0.68	0.29	前期前半以前	
SK-19	04	欠番			—	—	—	—	
SN-03	04	II Q-99	III		0.46	0.41	0.12	前期後半以降	
SN-04	04	II Q-93	III		0.57	—	0.17	前期後半以降	
SN-05	04	II S-92	III		0.51	0.41	0.06	前期前半以前	
SN-06	04	II T-92	III		0.36	0.25	0.02	前期前半以前	
SN-07	04	II J-107	III		—	0.45	0.09	前期後半以降	
SN-08	04	II J-107	III		0.74	0.51	0.07	前期後半以降	
SN-09	04	II I-109	III		0.45	0.40	0.04	中期末葉	
SN-10	04	II I-109	III		0.97	0.96	0.09	中期末葉	
SN-11	04	II T-91	III		—	—	0.13	前期前半以前	
SN-12	04	II Q-93	III		0.55	0.49	0.09	前期後半以降	
SN-13	04	II R-93	III		0.98	0.86	0.24	前期後半以降	
SN-14	04	II G-118	V		0.38	—	0.03	早期	
SN-15	04	II K～II S-92	III		1.22	0.91	0.19	前期後半以降	
SN-16	04	II M-109	III		0.65	0.52	0.10	中期末葉	SI-10 から変更
SX-03	03	II D-116	IV		—	—	—	早期	
SX-04	04	II P-105	III		—	—	—	中期末葉以降	
SX-05	04	II J-107	III		—	—	—	前期後半以降	
SX-06	04	II P-109	III		—	—	—	中期末葉	
SX-07	04	II Q-106	III		—	—	—	中期末葉	
SX-08	04	II Q-110	V		—	—	—	早期後葉	
SX-09	04	II O-110	III		—	—	—	中期末葉	
SK-01	04	II J-114	III		0.57	0.44	0.22	中期末葉	
SI-13	04	II L-108	III		0.95	0.91	0.21	中期末葉	SK-07 から変更
SI-01	04	II O-105～106	III		3.19	0.27	1.16	前期後半以降	

第2節 検出遺構とその出土遺物

第1号竪穴住居跡 [SI-01] (図7～10)

[平面形] 不整形円形を呈する。[床面・柱穴] 床面は全体的に軟弱であり、硬化面は検出されなかった。18基のビットが床面で検出されている。Pit1とPit9は平面形が長楕円で、いずれも底面付近で柱痕跡状の小ビットが確認されている。Pit8は不整形で掘り込みも浅く、柱穴以外の可能性が考えられる。これら以外のビットは壁近くをめぐるように配置されており、壁面に対して斜めに掘り込まれている。[炉] 明確に炉と判断できる痕跡は確認できなかった。[堆積土] 基本層序第IV層から第III層に相当する層がレンズ状に堆積している。2層で南部浮石が厚く堆積しており、3層より上位については自然堆積と考えられる。3層より下位についても遺物は含まれているものの人為的な堆積要因を示す特徴は確認されなかった。[出土遺物] 土器26点(637.2g)、敲磨器類11点、石皿・台石類2点、磨製石斧1点、石鐘1点、総数15点の石器が出土している。土器はすべて早期中葉に属するもので、本遺構の堆積土か、周辺の第IV層からのみ出土した。磨製石斧(9-3)は遺構外第III層で主体をなす擦り切り痕跡のあるものとは異なる。成形時の敲打痕が基部付近に顕著に残り、断面形状は偏円をなす。刃部には再生を目的とした粗雑な剥離が加えられている。堆積土からは剥片石器が1点も出土しておらず、遺構外第IV層同様、礫石器が全体の組成の中で大きな割合を占めていることがうかがえる。出土層位は7層を中心としており、S-13、14、15、16、17、18、19、20、21について

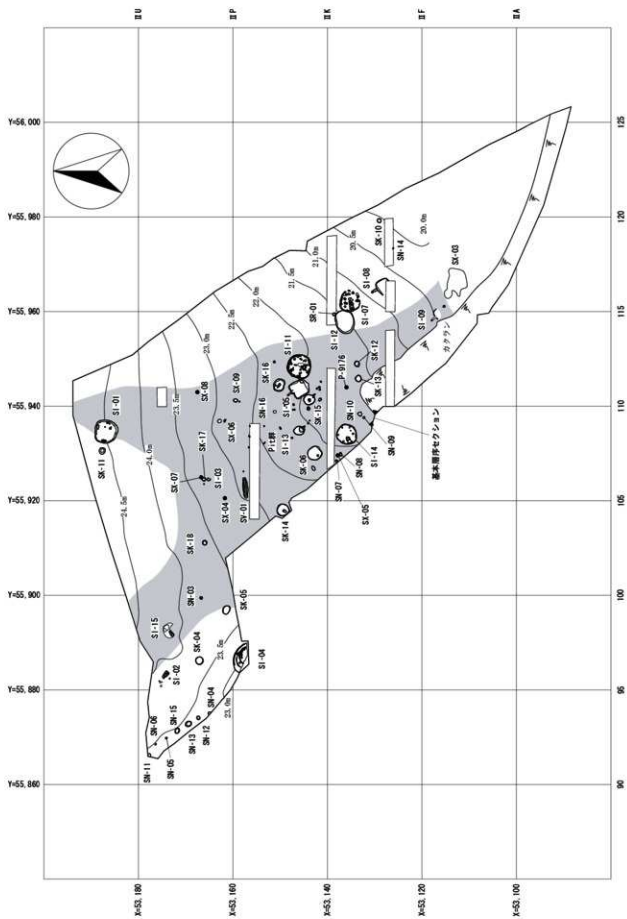


図6 遺構配置図 (S=1/800)

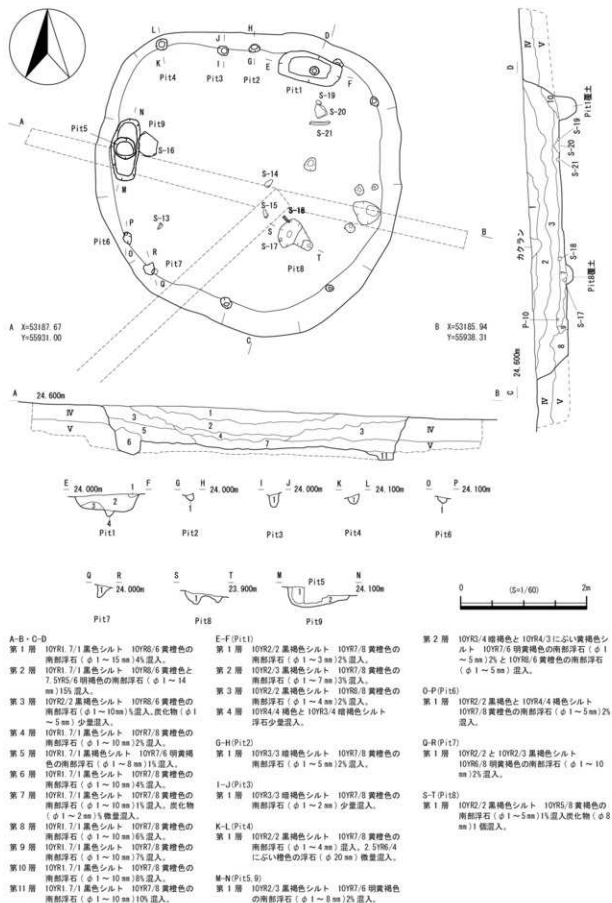


図7 第1号竅穴住居跡(1)

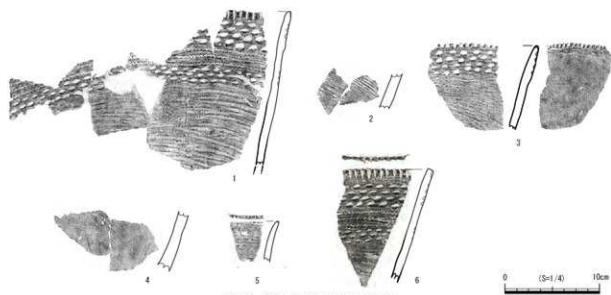
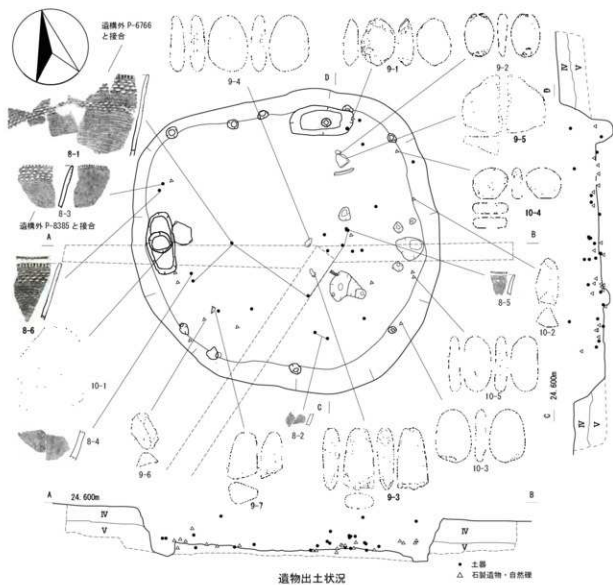


図8 第1号竖穴住居跡(2)

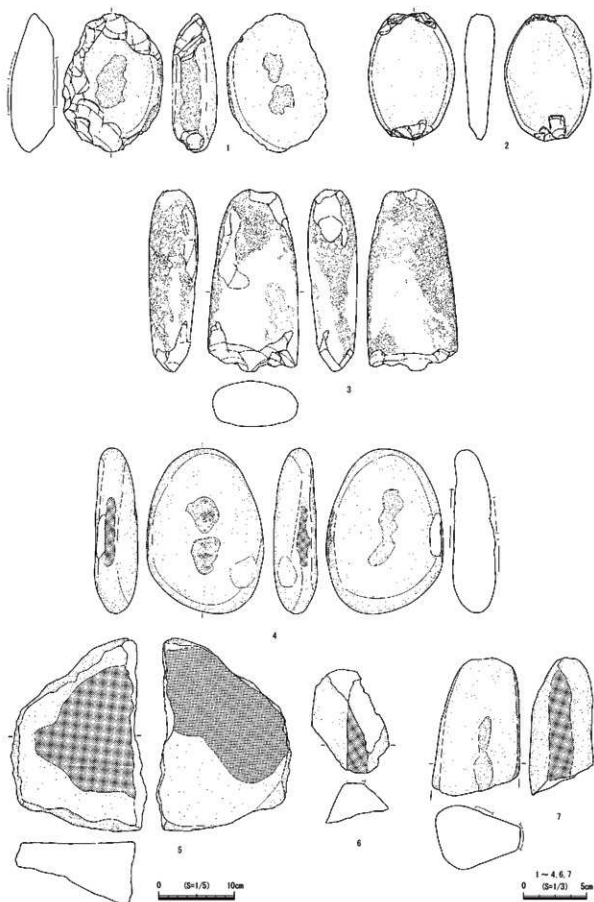


图9 第1号竖穴住居跡(3)

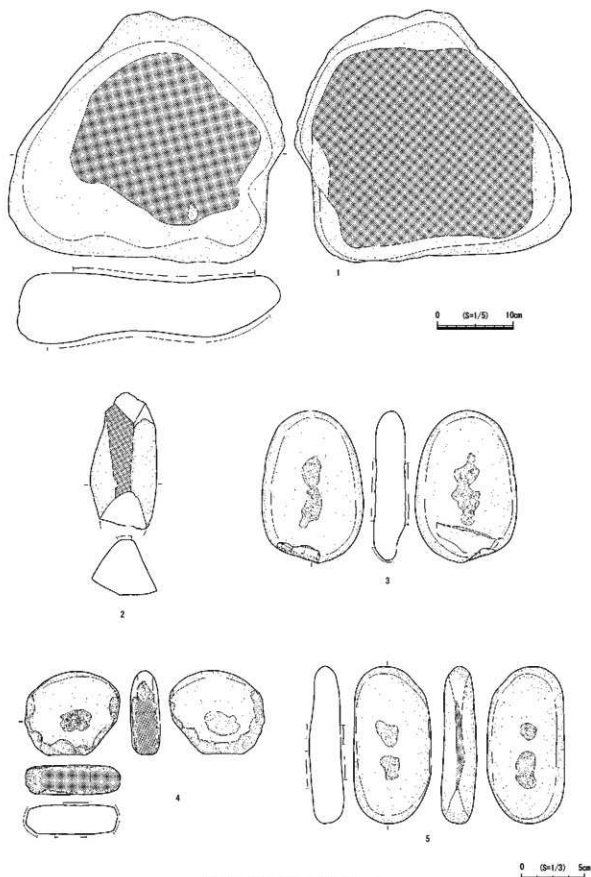


図10 第1号竪穴住居跡(4)

ては床面出土遺物と判断されるものである。[時期] 堆積土に含まれる遺物から判断して早期中葉（白浜式期）に帰属するものと考えられる。（斉藤）

第2号竪穴住居跡 [SI-02] (図11)

[検出状況] 周辺は削平をうけており、当初、炉だけを検出した。精査終了後、周辺の掘削を進めた段階で、炉に伴うと考えられる硬化面とピットを検出した。[炉] 土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。土器埋設部は石囲いを伴わない。土器の口辺は赤化していたが、周辺や土器内に焼土は形成されていなかった。土器内は、第Ⅲ層類似の土層を取り除いた時点で炭化材と焼土粒の混じりしまりのない土壌が現れ、底面まで類似の土壌が堆積していた。この土壌からクリ、トチノキの子葉・果皮の破片が検出された（第5章第2節参照）。また出土した炭化物1点はクリと同定された（第5章第1節参照）。土器内は下位1/3まで、熱によるハジケが観察された。石組部は2連で、底面に石は認められず、焼土が形成されていた。前庭部は堅くしまっていた。[出土遺物] 土器1点・石織1点が土器埋設部土器内から、土器7点（54.3g、うち重量不明1点）、剥片1点が炉堆積土から出土した。[時期] 炉の土器埋設部に用いられた土器から縄文時代中期末葉である。（中村）

第3号竪穴住居跡 [SI-03] (図12～13)

[検出状況] 周辺は削平をうけており、表土を除去した段階で炉石の上端が検出された。この段階で掘り方を確認するためベルトを設定して掘り下げた。しかし、遺構が黒色土中に構築されていたこと、検出面から床面と考えられる面までが浅かったことから掘方は確認できなかった。[床] 硬化した床は確認できなかった。炉のレベルから判断して第Ⅲ層中に床があったと思われる。[炉] 方形の石囲炉である。焼土の焼けは概して弱く、部分的によく焼けたブロックが認められた。炉石は赤化が認められた。[埋設土器] 石囲炉の中心から約1.3m北西に完形土器が埋設されていた。土器内の第Ⅲ層相当層を取り除くと、下位1/3に焼土粒混じりの土壌が堆積していた。土器内はハジケは確認できないがやや赤化していた。これらの状況から、土器内で火を使用した可能性が考えられる。[出土遺物] セクションベルトを設定した範囲から縄文時代中期末葉の土器が64片（835.8g）出土した。石器は碎片・剥片・微小剥離痕のある剥片各1点がセクションベルトを設定した範囲内から出土した。土器内からは7点の土器片が出土した。炉の南1.3mの位置から板状の縄が出土した。ただし、掘方・床面ともに不明であるため、これらの遺物が本住居跡に伴うかどうか不明である。[時期] 埋設された土器から、縄文時代中期末葉である。[その他] 石囲炉の下位約20cmで焼土1基とピット4基を確認した。焼土は粒状を呈し、現地性の焼土とは考えにくい。ピットは石囲い炉の一部と平面的に重複するので本住居跡に伴わない可能性もある。ピットの深さは検出面から数cmである。（中村）

第4号竪穴住居跡 [SI-04] (図14～15)

[検出状況] 本住居跡は床面で4条の壁溝が検出されており、重複関係から3回にわたる拡張が行われた可能性が考えられる。南側半分が大きく削平されているが、攪乱土層中より本遺構に由来するものと考えられる多量の土器が出土している。[平面形] 削平により、全体形状は不明であるが一番新しい第Ⅳ期では長楕円形を呈するものと考えられる。[床面・柱穴・壁溝] 北西部部分を中心に硬

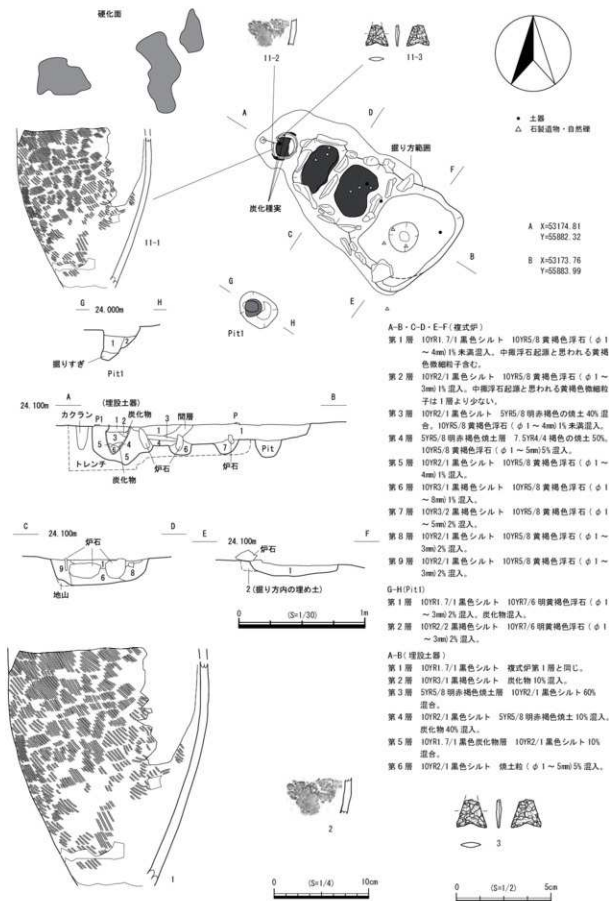


図11 第2号竪穴住居跡

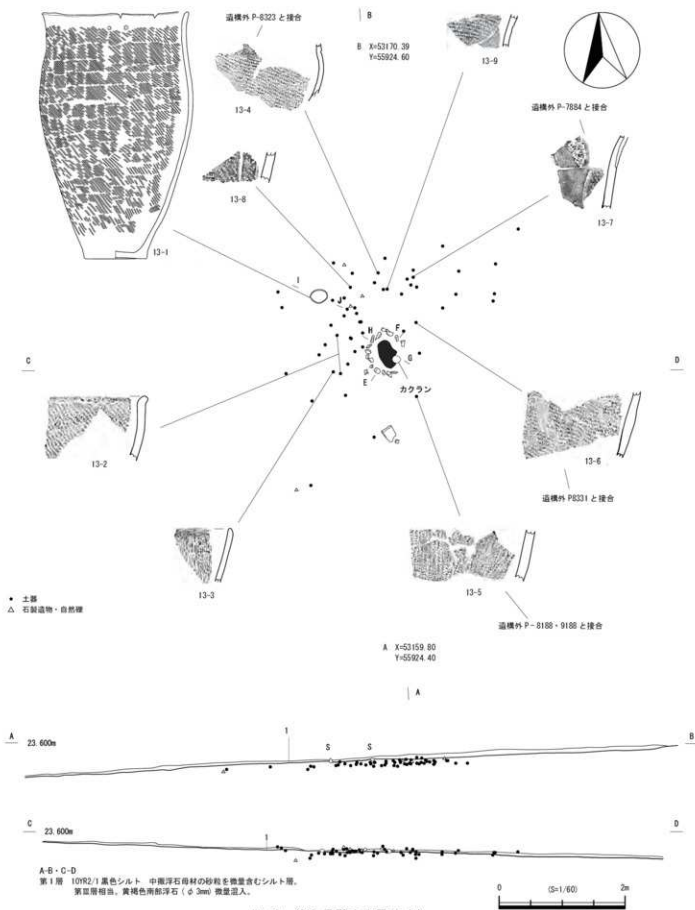


図 12 第 3 号竪穴住居跡 (1)

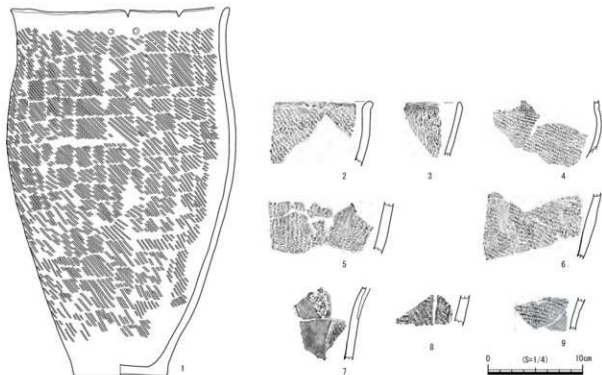
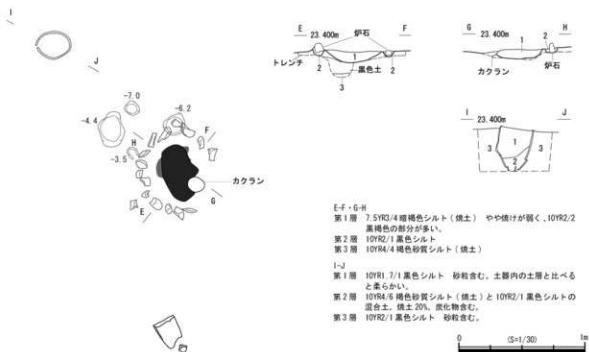
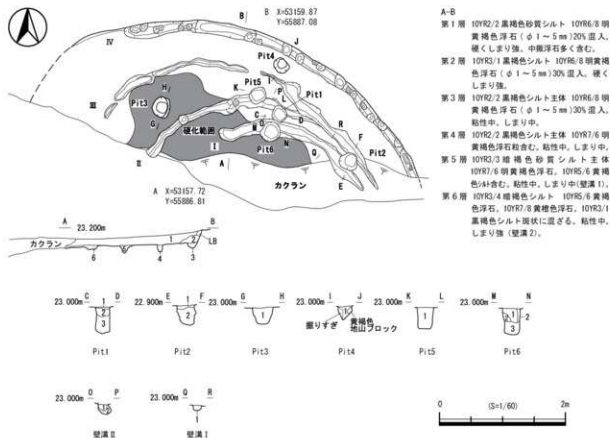


図13 第3号竪穴住居跡(2)



C-D (Pit1)

- 第1層 10YR2/3 黒褐色シルト主体 中層浮石多く含む住居増殖土1層に相当浮石約2%混ざる。粘性弱。しまり強。
第2層 10YR2/2 黒褐色シルト主体 10YR5/8 黄褐色シルト浮石粒が環状に混ざり版状の塊相呈している。粘性中。しまり強。
第3層 10YR2/3 黒褐色シルト主体 10YR5/6 黄褐色シルトブロック状に含まれる。粘性中。しまり中。

E-F (Pit2)

- 第1層 10YR3/1 黒褐色シルト主体 浮石約3%中層浮石多く含む。粘性強。しまり中。
第2層 10YR3/4 暗褐色シルト主体 10YR6/6 明黄褐色 (φ3~5cm) ブロック状に多く含む。

G-H (Pit3)

- 第1層 10YR2/3 黒褐色シルト主体 粘性弱。しまり強。中層浮石多く含む住居増殖土1層に近似浮石約3%混ざる。10YR3/4 暗褐色シルト (φ3~5cm) ブロック含む。密硬化面を切るPit。

I-J (Pit4)

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト主体 10YR6/8 明黄褐色ブロック含む。浮石約2%含む。粘性中。しまり弱。

K-L (Pit5)

- 第1層 10YR2/3 黒褐色シルト主体 10YR3/3 に近い黄褐色シルト (地山由来) 混ざる。(φ5mm)程度の炭化物1%。浮石約7%。粘性中。しまり中。

M-N (Pit6)

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト主体 直径5mm程度の浮石約5%。10YR5/8 黄褐色粘質シルトブロック含む。粘性強。しまり中。
第2層 10YR2/1 黒色シルト主体 10YR5/8 黄褐色粘質シルト面状に含む貼り床状の塊相。粘性中。しまり中。
第3層 10YR2/1 黒色シルト主体 浮石質シルト (10YR5/8 黄褐色) 環状に含む貼り床状の塊相。粘性中。しまり弱。

O-P (壁溝1)

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト主体 10YR6/8 明黄褐色浮石約2%含む。
第2層 10YR3/3 暗褐色砂質シルト主体 10YR7/6 明黄褐色浮石約40%含む。10YR5/6 黄褐色シルト40%含む。

Q-R (壁溝2)

- 第1層 10YR3/4 暗褐色シルト 10YR5/6 黄褐色と 10YR7/8 黄褐色浮石混入。10YR3/1 黒褐色シルト面状に混ざる壁溝1の第2層に似る。



図14 第4号竪穴住居跡(1)

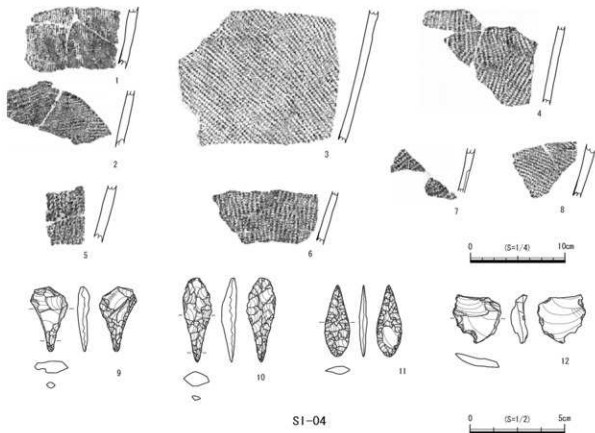
面が確認されているが、壁溝Ⅲの内側では特に顕著であった。Pit1、2、3、4は重複関係ならびに堆積土の特徴から第Ⅳ期に伴うものと考えられる。第Ⅳ期に伴うピットの堆積土はいずれも黒色土とロームブロックの混合土で埋め戻されおり、検出時に1層として確認された薄い黒色土は土圧によって住居跡の堆積土が相対的にピットの上面まで下がったものと考えられる。Pit5は壁溝Ⅱよりも新しく、第Ⅲ期もしくは第Ⅳ期に伴うものと考えられる。Pit6は壁溝Ⅰの掘方を確認した際に検出されたものであり、第Ⅱ期以降に構築され第Ⅳ期よりも古いものと考えられる。壁溝Ⅰ～Ⅳいずれについても堀方底面には顕著なピット状の凹凸がみられ、平面形状は直線的ではない。壁溝Ⅳは西側で途切れており、壁も不明瞭である。[堆積土] 壁溝、ピットには黒色土とロームブロックの混合土が堆積しており、特に壁溝Ⅰの堆積土は堅くしまっている。壁際の2層については褐色土が混ざり、壁の崩壊土と考えられる。壁溝Ⅰ～Ⅲ、およびピットについては人為堆積、住居跡掘方については自然堆積による埋積と考えられる。[出土遺物] 堆積土中から土器が56点(1308.2g)、壁溝Ⅰの覆土から微小剥離痕のある剥片、壁溝Ⅳの覆土から剥片、Pit1より石織がそれぞれ1点出土している。堆積土からは剥片4点、石織、石錐、二次調整のある剥片、微小剥離痕のある剥片、両極加撃痕跡のある剥片、砕片、敲磨器類が各1点出土している。また、堆積土中から琥珀塊・琥珀片が3点(計15.8g)出土した。[時期] 堆積土および、周辺の攪乱土より出土した遺物から判断して中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第5号竪穴住居跡 [SI-05] (図15～17)

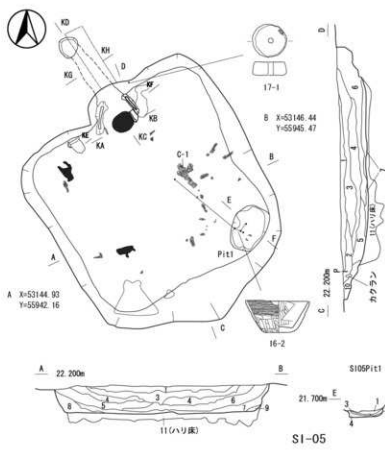
[堆積土] 10層に分層した。第2層に白頭山火山灰、第4層に十和田火山灰を含み、これに挟まれて焼土が堆積していた。焼土は廃棄されたものと考えられた。その他は黒色シルトである。[炭化材・焼土] 第7層中から若干の炭化材および焼土が検出された。本住居跡は焼失住居と考えられる。焼土・炭化材は床面から数cm程度浮いていた。炭化材1点がコナラ属コナラ節と同定された(第5章第1節参照)。[壁] 壁はやや斜めに立ち上がっているが、遺構廃絶後の崩落のためと思われる。南壁の中央部がスロープ状になり、外側にやや張り出すが、硬化面などは観察されなかった。[床] 黒色土の張り床で、軟弱である。[カマド] 地下式のカマドで北側中央に位置する。袖は粘土により構築され、末端に粘板岩の板石を起っていた。焼土は厚さ約12cmである。煙道部は長さ125cmで、火床面から緩やかに下る。[柱穴] 検出されなかった。[周溝] 検出されなかった。[その他の施設] 床面南西隅にピットが検出された。[出土遺物] カマド脇から土師器杯・甕が、カマド上から土師器甕が、Pit1から土師器杯がそれぞれ出土した。また、堆積土から土器片が55片出土したが、周辺の包含層から紛れ込んだものと考えられる。石器は、敲磨器類1点、石皿・台石1点、石織1点が堆積土から、敲磨器類1点、石織1点がカマドから出土した。[時期] 出土した土師器から、奈良時代と考えられる。(中村)

第7号竪穴住居跡 [SI-07] (図17～19)

[重複] 後述する炉の検出状況から新旧2軒の竪穴住居跡が重複したのと考えられる。[平面形] やや不整な円形を呈する。[堆積土] 黒色シルトの単層である。[炭化材・焼土] 堆積土中から炭化材



S1-04



A-B・C-D

全体に十和田ト浮石を1%含んでいる。

第1層 10R2/2黒褐色シルト 下層の粘土の土壌化

したものを含んでいる。

第2層 10R2/1黒色シルト 10R5/6黄褐色シルト質

火山灰(白濁山火山灰)を透切れ透切れに含む。

第3層 10R2/4暗褐色シルト(粘土)とその土壌化

した10R2/2黒褐色シルト

第4層 10R3/1黒褐色シルト 2.5%にぶい黄色シル

ト質火山灰(十和田火山灰)を透切れ透切れに含む。

第5層 10R2/1黒色シルト 他の層より粘粒細かい。

柔らかい。

第6層 10R3/1黒褐色シルト

第7層 10R2/1黒色シルト 炭化材出土層。

第8層 10R3/1黒褐色シルト

第9層 10R3/1黒褐色シルト

第10層 10R2/1黒色シルト

第11層 10R2/1黒色シルト 10R7/8黄褐色浮石(φ1

~3mm)混入。かたくなりあり。

E-F(Pit)

第1層 10R2/1黒色 10R5/6黄褐色浮石(φ1~

5mm)混入。かたくなりあり。

第2層 10R2/1黒褐色 2.5%にぶい黄色の粘土

10%混入。かたくなりあり。粘性あり。

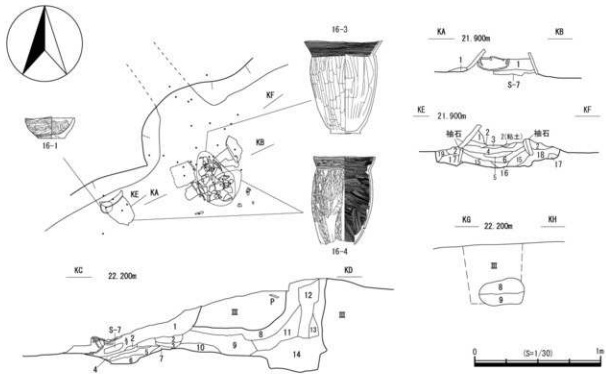
第3層 10R2/2黒褐色 2.5%にぶい黄色の粘土

40%混入。かたくなりあり。粘性あり。

第4層 10R2/3黒褐色 黄褐色浮石(φ1~2mm)3%

混入。かたくなりあり。粘性あり。

図15 第4号竪穴住居跡(2)・第5号竪穴住居跡(1)



KA-KB・KC-KD・KE-KF・KG-KH

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR7/4 にぶい黄褐色の粘土（カマドの粘土）10% 混入。10YR8/3 淡黄褐色浮石（ ϕ 1~3mm）5% 混入。かたくしりあり。
 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR7/4 にぶい黄褐色のカマドの粘土 80%。10YR8/3 淡黄褐色浮石（ ϕ 1~5mm）5% 混入。焼土粒（ ϕ 1~3mm）微量混入。かたくしりあり。粘性あり。
 第3層 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土（ ϕ 1~10mm）。皮化物（ ϕ 1~5mm）40% 混入。かたくしりあり。粘性あり。
 第4層 10YR2/2 黒褐色シルト 7.5YR5/8 明褐色焼土ブロック（ ϕ 30mm）。焼土粒（ ϕ 1~5mm）。皮化物（ ϕ 1~5mm）。10YR6/8 明黄褐色浮石（ ϕ 1~8mm）30% 混入。ややかたく。粘性あり。（火床面として作用した層）。
 第5層 10YR4/4 褐色と 7.5YR3/4 暗褐色混合シルト 2.5YR4/8 赤褐色焼土。ややかたい。粘性あり。
 第6層 2.5YR4/8 赤褐色焼土 かたい。火床面。
 第7層 10YR2/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石（ ϕ 1~3mm）10% 混入。焼土粒（ ϕ 1~5mm）3% 混入。かたくしりあり。
 第8層 10YR2/2 黒褐色シルト 7.5YR5/4 にぶい褐色の焼土粒（ ϕ 1~5mm）10% 混入。やわらかい。しりあり。

- 第9層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色の粘土 10% 混入。やわらかい。
 第10層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR7/4 にぶい黄褐色のカマドの粘土 30% 混入。ややかたくしりあり。粘性あり。
 第11層 10YR2/1 黒色シルト 10YR7/4 にぶい黄褐色と 10YR6/8 明黄褐色浮石（ ϕ 1~5mm）5% 混入。やわらかい。粘性ややあり。
 第12層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/4 にぶい黄褐色と 10YR7/6 明黄褐色粘土 30% 混入。煙溜りの粘土の層序。
 第13層 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土。かたくしりあり。
 第14層 10YR2/1 黒褐色シルト 10YR6/4 にぶい黄褐色と 10YR5/8 黄褐色の粘土 20% 混入。やわらかい。
 第15層 10YR2/1 黒色シルト 焼土下の変色層。
 第16層 10YR2/3 黒褐色シルト
 第17層 10YR2/2 黒褐色シルト（結核）
 第18層 10YR2/1 黒色シルト（結核）
 第19層 10YR1/7 1 黒色シルト（結核）
 第20層 10YR2/1 黒色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石（ ϕ 1~3mm）3% 混入。かたい。

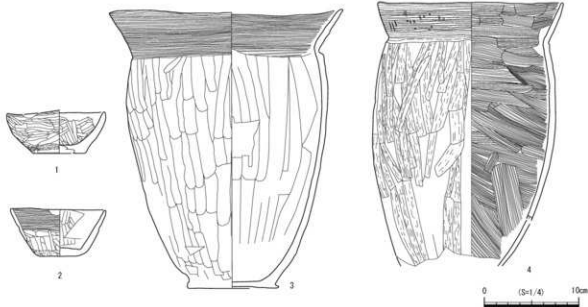


図16 第5号竈穴住居跡(2)

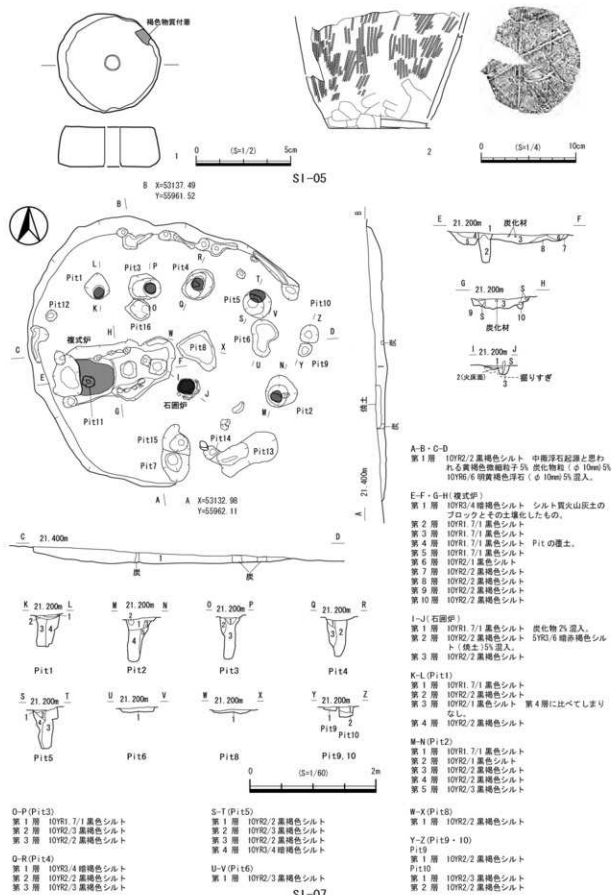
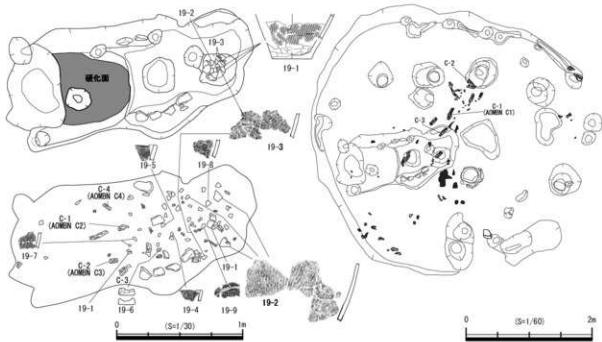
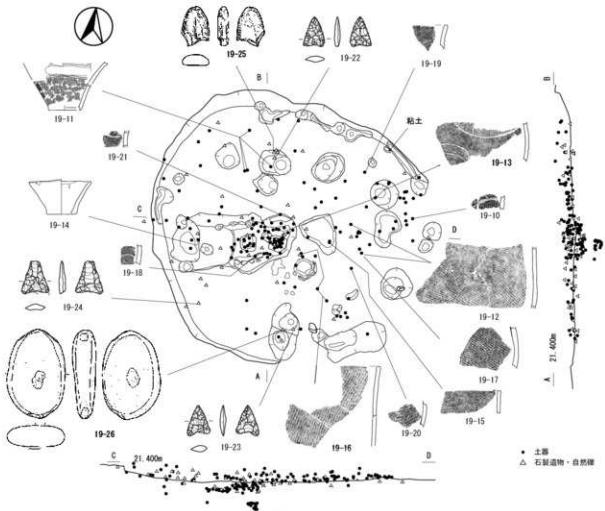


図 17 第 5 号竪穴住居跡 (3)・第 7 号竪穴住居跡 (1)



複式炉平面図(上)・遺物出土状況(下)

炭化材出土状況



遺物出土状況

図18 第7号竪穴住居跡(2)

化と少量の焼土が検出された。いずれも床面から数センチ上位で出土している。本住居跡は焼失住居である。炭化材は元の長さが数十 cm 以上と推定され、上層の部材と考えられる。炭化材 3 点について ^{14}C 年代測定を実施し、2 点は縄文時代後期初頭、1 点は奈良時代の年代が得られた（第 5 章第 4 節参照）。樹種はいずれもクリと同定された（第 5 章第 1 節参照）。[壁] 東～南東の壁は検出されなかった。もっとも残存状況のよい北西側で約 20 cm である。[床面] 第 IV 層～第 V 層を床面とする。硬化面は認められなかった。[炉] 半円形の石囲炉と複式炉が検出された。石囲炉は床面の南東側、中軸線上の壁よりの位置に検出された。石囲の規模は直径約 40 cm で、内側には焼土が形成されていた。焼土は半截後に残った土壌を採取し水洗選別を実施したが植物遺体は検出されなかった。複式炉は、西壁に接して検出された。住居跡中央側に石囲部、西側に前庭部が認められた。東側には土器の底部付近の破片（図 19-1）が残存するピットがあり、土器埋設部の一部が残存したものと考えられる。前庭部は硬化していた。石囲部は礫が抜けていた。堆積土中で炭化材と土器片及び炉石と思われる礫が出土した。土器片や礫は炭化材の上や同レベルで認められた。炭化材は細かく、中には節のある小枝状のものもあり、炭化材が砕けたのではなく元の材が細かなものであったと考えられる。また、住居堆積土で検出された炭化材はこれらより大型であるが、複式炉上にも分布する。一方、細かな炭化材は複式炉覆土以外に集中する状況は見られない。これらの状況から、この炭化材は住居の部材が落ち込んだものとは考えられず、複式炉の廃絶時、ないしは廃絶以後に炉石・炉体土器の抜き取りや遺物の投げ込みが行われたものと考えられる。複式炉覆土から出土した炭化材は ^{14}C 年代測定を実施し、縄文時代中期末葉の年代が得られている（第 5 章第 4 節参照）。樹種はいずれもクリである。従って石囲炉が新しく、複式炉が古いと考えられる。[柱穴] 床面から 14 基のピットを検出した。Pit1・3・4・5・15 が主柱穴と考えられ、Pit3・15・5・2 が複式炉に伴うと考えられる。[出土遺物] 土器は堆積土中から 135 点、2753.5g、複式炉覆土からは 83 点、748.7g 出土した。複式炉の土器埋設部に当たると考えられるピットから縄文時代中期末葉の土器底部（図 19-1）が出土している。堆積土から出土した土器はいずれも縄文時代中期末葉の土器である。図 19-11 は、胴部文様帯下位に隆起線により水平方向に展開する文様を描くものである。石器は Pit3 上面から磨製石斧 1 点、同覆土から剥片 1 点、Pit7 覆土から蔽磨器・二次調整のある剥片各 1 点、堆積土から石鏃 5 点・剥片 4 点、微小剥離痕のある剥片 2 点・両極加撃痕のある剥片 1 点が出土した。19-25 は磨製石斧の基部であるが、正面中央に縦方向の擦痕が筋状にみられる。石斧としての機能を失った後に擦り切りを意図した再加工がなされたものと考えられる。遺物と堆積土出土炭化材の上位からも下位からも出土し、特定の傾向を示すものではない。[時期] 複式炉を持つ住居跡が、炉の形態や出土土器から縄文時代中期末葉、石囲炉を持つ住居跡が縄文時代中期末葉から後期初頭と考えられる。（中村）

第 8 号竪穴住居跡 [SI-08]（図 20～21）

[平面形] 北西～南東を軸とする隅丸方形を呈する。[カマド] 北東方向に煙道がのびる地下式構造のカマドである。袖の構造は壊されているため不明であるが、袖石と考えられる礫片が火床面近くに散在している。[床面・柱穴] 北東隅を除くほぼ全面に貼床が施されており、南東隅では顕著な硬化面が確認されている。硬化面の箇所では地山ブロックが層状に堆積しており、数次にわたる床の補修が行われた可能性が考えられる。[堆積土] 焼土層に含まれる形で灰白色火山灰が上下二層、層状

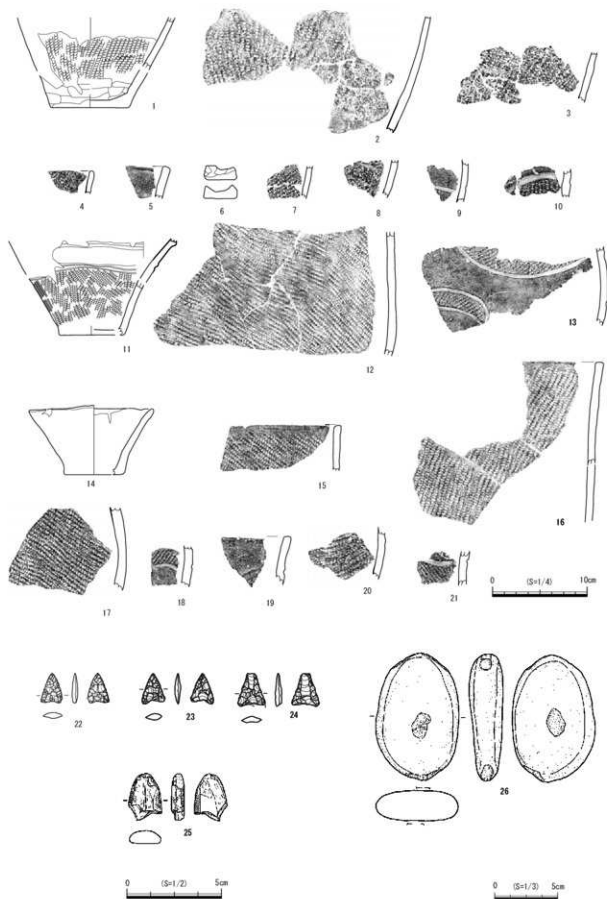


图 19 第 7 号竖穴住居跡 (3)

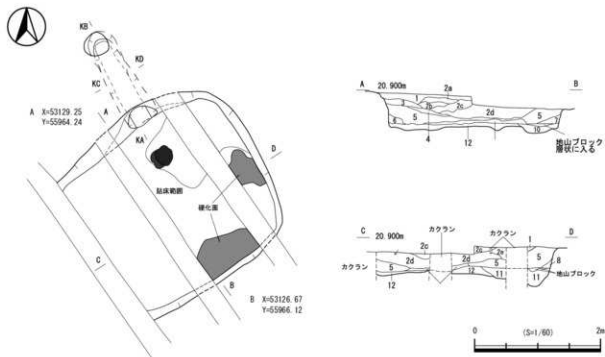
に堆積している。[出土遺物] 本遺構に確実に伴う遺物は出土していない。堆積土・床面から70片(447.2g)の土器が出土したがいずれも流れ込んだものと思われる。[時期] 堆積土中の十和田a火灰より、10世紀前葉以前に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第9号竪穴住居跡〔SI-09〕(図22)

[検出状況] 平成15年度調査時に掘り下げを行った際、遺構の存在に気づかず南側を掘削してしまった。平成16年度調査の際黒色土の落ち込みを認識し、土坑として調査を開始したが、カマドの存在が明らかになった時点で住居と認識した。[堆積土] 2層に分層された。第2層は焼土である。第2層の焼土は柱穴と思われるピットにも詰まっていた。[炭化材・焼土] 焼土下から炭化材が出土した。焼失住居の可能性はある。材1点はカエデ属と同定された(第5章第1節)。[壁] 遺存状況が悪く、カマド脇の一部が残存するだけである。[床面] 第Ⅲ層を床面とし軟弱である。[カマド] 袖は基部がわずかに残存していた。粘土により構築されている。火床面も焼けが弱い。[出土遺物] 第2層の焼土上面から土師器杯が1点出土した。底部は穿孔されている(写真図版7右最上段)。カマド煙道部から石核が1点出土した。[時期] 出土した土師器から奈良時代である。(中村)

第11号竪穴住居跡〔SI-11〕(図23～32)

[平面形] やや扁平な円形を呈する。[堆積土] 黒色シルトの単層である。[炭化材・焼土] 覆土中から炭化材と焼土が検出された。本住居跡は焼失住居跡である。炭化材・焼土とも床面から3cm～20cm浮いた状態で出土している。焼土と炭化材の関係は、焼土が炭化材と同レベルないしやや上位から出土する傾向がある。出土した炭化材4点は¹⁴C年代測定を実施し、縄文時代中期末葉の年代が得られている(第5章第4節参照)。材は18点について同定を実施し、オニグルミ・コナラ属コナラ節が各1点、他はすべてクリ・クリ類似種であった(第5章第1節参照)。[壁] 黒色土中に遺構が構築されており、検出が困難だったため、遺存状況が悪い。底面からはまっすぐ立ち上がるようである。[床面] 第Ⅳ層・第Ⅴ層を床面とする。住居軸線の奥壁側に硬化面が認められた。[炉] 土器埋設部・石囲部・前庭部を持つ複式炉で、作り替えが行われている。[柱穴] 床面に16基のピットを確認した。平面の規模や深さからPit1・14・3・11・12・4・7・16が主柱穴と考えられる。このうち、Pit7・3・4・14・12が旧炉に、Pit16・11・1・12・4が新炉に対応するものと思われる。Pit5・12は深さから主柱穴とは考えたいが、平面的位置からすると、旧炉の段階で想定される床面に収まりきらず、新炉に対応するものとする。[その他の施設] 新炉前庭部の壁際から剥片集積が2基検出された。剥片集積1から28点、剥片集積2から25点の剥片が出土した。どちらも周辺の土層(基本層序第Ⅳ層に当たる)と同様の土に埋まっており、掘方は確認できなかった。壁際には溝溝と小ピットが断続的に巡る。[出土遺物] 土器は131点2538.3g出土した。内訳は床面から1点、堆積土から130点である。すべて縄文時代中期末葉のものである。石器は複式炉から砥磨器類、石皿・台石、石製品、石錐、石鏃、砥石、剥片各1点、微小剥離痕のある剥片2点、Pit13から二次調整のある剥片1点、剥片2点、Pit11から両極加撃痕のある剥片1点、堆積土から石鏃3点、二次調整のある剥片9点、剥片16点、微小剥離痕のある剥片10点、磨製石斧1点、両極加撃痕のある剥片1点が出土した。31-10は左側縁に尖頭状のエッジが形成されており、石錐の可能性はある。32-3は複



A-B・C-D

第1層 10YR2/2 黒褐色シルト

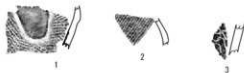
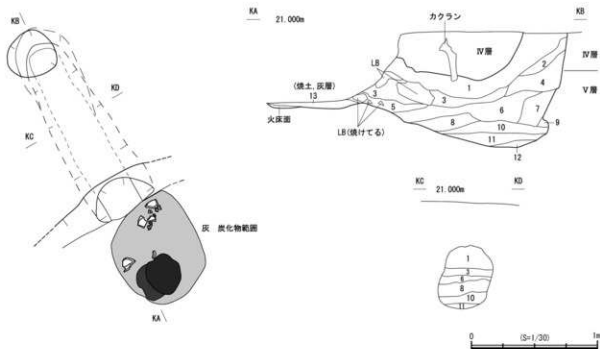
第2a層 10YR2/3 暗褐色シルト（焼土） 十和田a火山灰5%混入。かたくし
まりあり。第2b層 10YR2/3 暗褐色シルト（焼土） 十和田a火山灰20%混入。10YR7/8
黄褐色浮石（φ1~5mm）5%混入。炭化物少量混入。かたくしまり
あり。第2c層 10YR2/2 黒褐色シルト（焼土） 十和田a火山灰40%混入。10YR6/8
明黄褐色浮石（φ1~5mm）1%混入。炭化物少量混入。かたくしまり
あり。第2d層 10YR2/2 黒褐色シルト（焼土） 十和田a火山灰が層の右側に5%混入。
10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1~5mm）10%混入。かたくしまりあり。第2e層 10YR2/2 黒褐色シルト（焼土） 10YR2/3 暗褐色シルト。10YR4/6 桃
色シルト。10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1mm）少量混入。かたくしまり
あり。第3層 10YR2/1 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1mm）少量混入。
かたくしまりあり。第4層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石（φ1mm）微量混入。や
やかたくしまりあり。4層と5層界面に薄い砂層有。第5層 10YR2/1 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1~5mm）5%混入。
かたくしまりあり。ラミナ状の塊積状態。第6層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1~10mm）10%混
入。かたくしまりあり。第7層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1~5mm）10%混入。
焼土と炭化物5%混入。かたくしまりあり。粘性あり。第8層 10YR2/1 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1mm）少量混入。
やや柔らかくしまりあり。第9層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1~10mm）10%混
入。かたくしまりあり。第10層 10YR1/7/1 黄色シルト主体 9層+5層+7層との間に10YR5/6 黄褐
色の砂質シルトが層状に含まれる。10YR4/4 桃色シルト（φ3cm）
混入。10YR5/6 黄褐色シルト（φ3cm）斑状に含まれる。第11層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR4/4 桃色シルト（φ4cm）混入。
10YR5/6 黄褐色砂質シルト斑状に含まれる。硬化著しい。しまり強。
粘性中（浮石φ5mm含む地山ブロック）。特に5層+8層との間に多い。第12層 10YR2/1 黒褐色シルト主体 10YR4/4 桃色シルト（φ3cm）20%斑状
に含む。白色浮石粒（φ5mm）1%混入。粘性中。しまり中。

図20 第8号竪穴住居跡(1)



KA-KB・KC-KDセクション

- 第1層 10YR3/1 黒褐色粘性シルト 10YR3/3 暗褐色土 30%、10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ1~5mm) 少量混入、ややもろくしまりなし。
- 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 火山砕粒土、粘性中、しまり弱。
- 第3層 10YR3/1 黒褐色と 10YR3/3 暗褐色粘性シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ1~5mm) 微量混入、ややもろくしまりなし。
- 第4層 10YR2/1 黒褐色シルト 浮石粒微量、粘性中、しまり弱。
- 第5層 10YR2/2 黒褐色シルト ロームブロック (φ30mm) 20%、焼熟したカマド腐植土。
- 第6層 10YR4/4 褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色シルトを斑状に含む。
- 第7層 10YR2/1 黒色シルト 粘性中、しまり弱。
- 第8層 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性中、しまり弱、浮石質ロームブロック多量含む。
- 第9層 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中、しまり弱。
- 第10層 10YR5/6 黄褐色シルト 浮石質ロームブロック 50% 含む。
- 第11層 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中、しまり中、砂質浮石斑状に含む。
- 第12層 10YR2/1 黒色シルト 粘性中、しまり弱。
- 第13層 10YR2/2 黒褐色シルト 2.5YR5/8 明赤褐色焼土粒 (φ3~10mm) 斑状に含む、炭化物 (φ3~5mm) 5% 含む、粘性中、しまり中。

図21 第8号竪穴住居跡(2)

式炉の炉石として利用されていたものである。片面に研磨面があり、裏面には凹II類がみられる。両端は打ち割られており、部分的なつぶれも生じている。剥片集積1は剥片2点、微小剥離痕のある剥片25点、二次調整のある剥片1点で構成される。石材は全て珪質頁岩であるが、母岩としては最大7つのグループに分類できる。剥片集積2は剥片4点、微小剥離痕のある剥片21点、二次調整のある剥片1点、両極加撃痕跡のある剥片1点で構成される。このうち、2組に接合関係が確認された。(28-12,13) いずれも、折断面で接合している。石材は全て珪質頁岩であり、母岩としては最大8つのグループに分類できる。[時期] 出土した土器から、縄文時代中期末葉である。(中村)

第12号竪穴住居跡 [SI-12] (図32)

[平面形] 小判型を呈する。[堆積土] 第V層がやや濁ったようなシルトで、3層に分層した。壁に近いほど黒みが弱くなり、壁との識別が難しくなる。[壁] 緩やかに立ち上がる。[床面] 第V層を床面とする。硬化面は認められない。[炉] 検出されなかった。[柱穴] 壁際に小ビット状の落ち込みが巡っていたためすべて半載を行った(写真図版8)が、明確にビットといえるものはなかった。床面に柱穴は検出されなかった。[出土遺物] 堆積土からムシリI式の細片1片が出土したのみである。[時

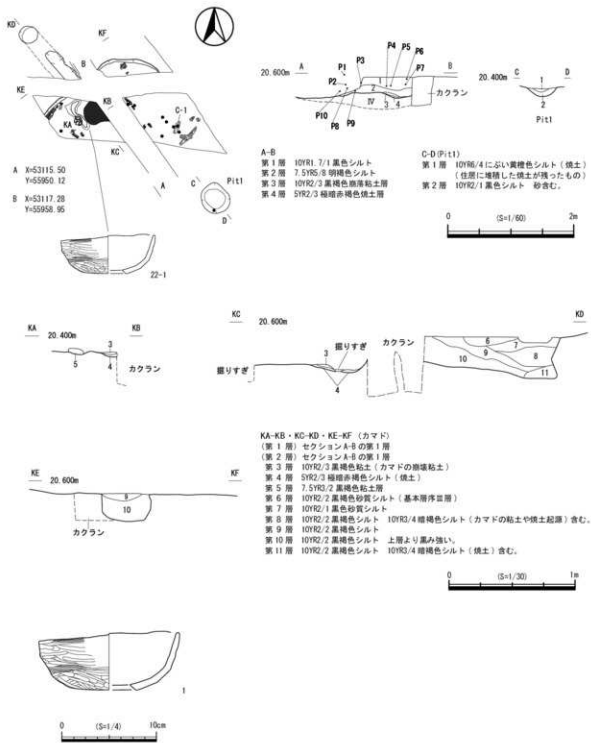


図 22 第9号竪穴住居跡

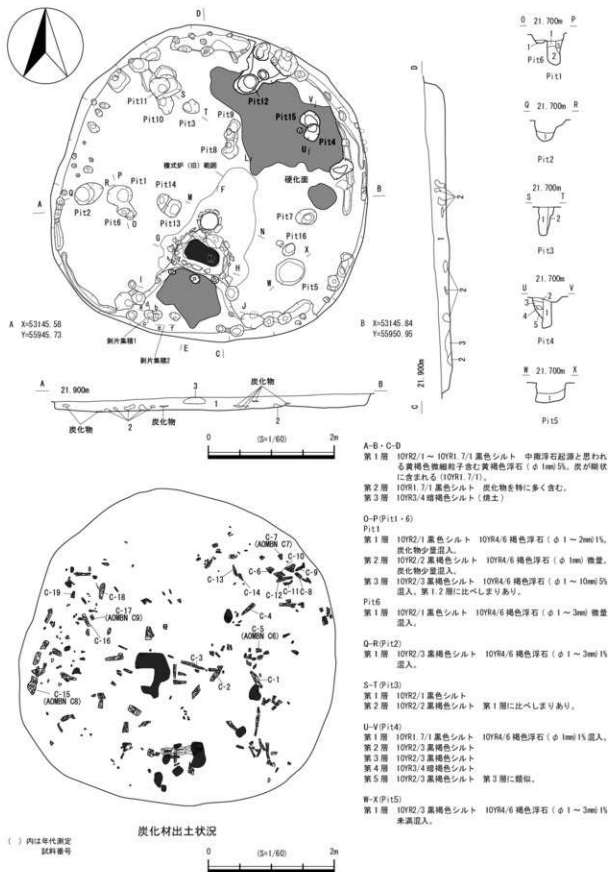
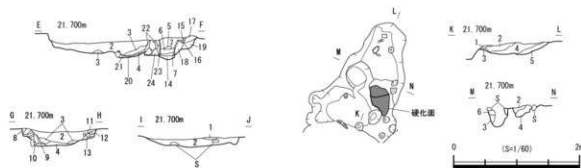


図23 第11号竅穴住居跡(1)



複式炉(新)

複式炉(旧)

E-F・G-H・I-J(複式炉新)

- 第1層 10YR4/4褐色シルト(粘土)
 第2層 10YR2/2黒褐色シルトなし、炭化物多量。
 第3層 10YR1/7/1黒色シルト 炭化物。
 第4層 10YR2/2黒褐色シルト 地層に比し詰まっている。
 第5層 7.5YR4/4褐色シルト 焼土。炭化材1~5%混入。しまりなくボソボソしている。
 第6層 10YR2/1黒色シルト しまりなくボソボソしている。
 第7層 10YR2/2黒褐色シルト 地層に比し詰まっている。
 第8層 10YR2/2黒褐色シルト 10YR6/8明黄褐色浮石(φ1~3mm)少量。しまりあり。
 第9層 10YR2/3黒褐色シルト 10YR6/8明黄褐色浮石(φ1~5mm)5%混入。しまりあり。
 第10層 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/8明黄褐色浮石(φ1~5mm)微量。炭化物少量混入。しまりややあり。
 第11層 10YR2/2黒褐色と10YR4/4褐色の混合シルト 10YR6/8明黄褐色浮石(φ1~5mm)1%混入。しまりあり。
 第12層 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/8明黄褐色浮石(φ1~3mm)微量。しまりあり。
 第13層 10YR2/1黒色シルト 10YR6/8明黄褐色浮石(φ1~3mm)1%混入。しまりあり。
 第14層 10YR1/7/1黒色と10YR4/4褐色の混合シルト 10YR7/4に5%黄褐色浮石(φ1~5mm)1%混入。粘性あり。
 第15層 10YR2/2黒褐色シルト 10YR7/8黄褐色浮石(φ1mm)1%。かたくしまりあり。

- 第16層 7.5YR2/3暗褐色シルト 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~8mm)3%混入。かたくしまりあり。
 第17層 10YR2/2黒褐色シルト 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~3mm)1%未満。5YR3/6暗赤褐色粘土混入。
 第18層 10YR2/2黒褐色シルト 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~12mm)2%混入。炭化物(φ10mm)。焼土(全体的に)混入。
 第19層 10YR2/2黒褐色シルト 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~5mm)3%混入。炭化物1%混入。かたくしまりあり。
 第20層 7.5YR3/4暗褐色シルト 10YR3/4暗褐色。シルト。炭化物混入。
 第21層 10YR2/1黒色と10YR2/2黒褐色の混合シルト 10YR6/8明黄褐色浮石(φ1~2mm)1%未満混入。炭化物混入。粘性あり。
 第22層 10YR2/1黒色シルト 10YR6/8明黄褐色浮石(φ1mm)1%未満混入。炭化物1%。かたくしまりあり。
 第23層 10YR2/3黒褐色シルト 焼土1%未満。かたくしまりあり。
 第24層 10YR3/3暗褐色シルト 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~8mm)1%混入。かたくしまりあり。

K-L・M-N(複式炉旧)

- 第1層 10YR2/2黒褐色シルト 7.5YR3/4暗褐色の粘土粒(φ5mm)混入。
 第2層 10YR2/2黒褐色シルト 10YR7/8明黄褐色浮石(φ1~5mm)1%混入。
 第3層 10YR2/2黒褐色シルト
 第4層 10YR2/2黒褐色シルト 10YR7/8明黄褐色浮石(φ1~3mm)1%混入。炭化材1%混入。
 第5層 10YR3/3黒褐色シルト 10YR7/8明黄褐色浮石(φ1mm)1%未満混入。
 第6層 焼土。

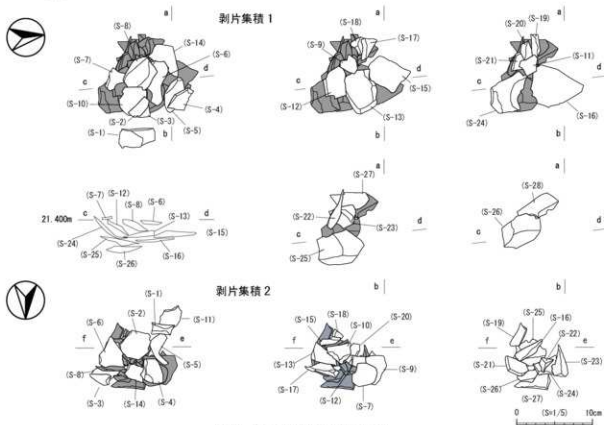
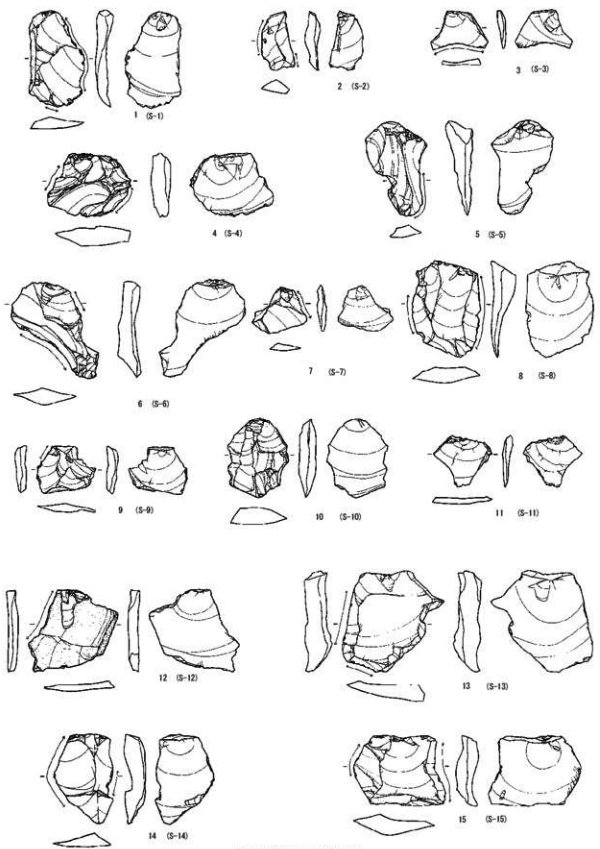
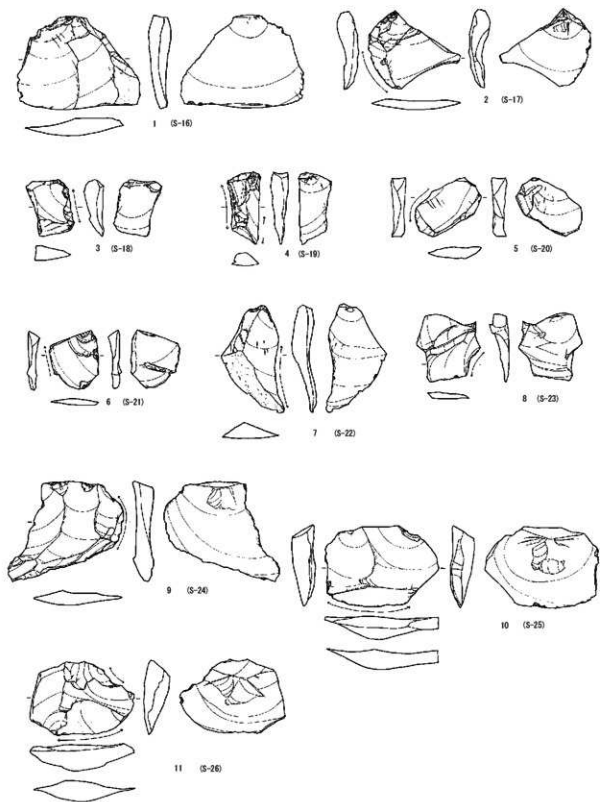


図24 第11号竈穴住居跡(2)



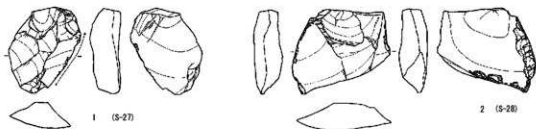
剥片集積 I 出土遺物 (1)

図 25 第 11 号竪穴住居跡 (3)

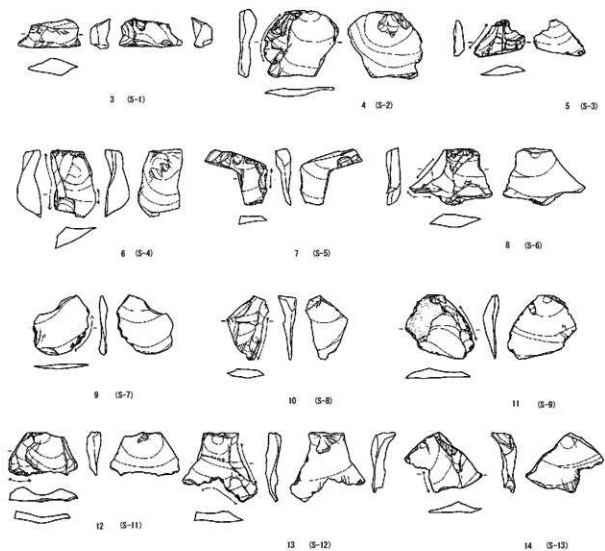


割片集積 1 出土遺物 (2)

図 26 第 11 号 竪穴住居跡 (4)



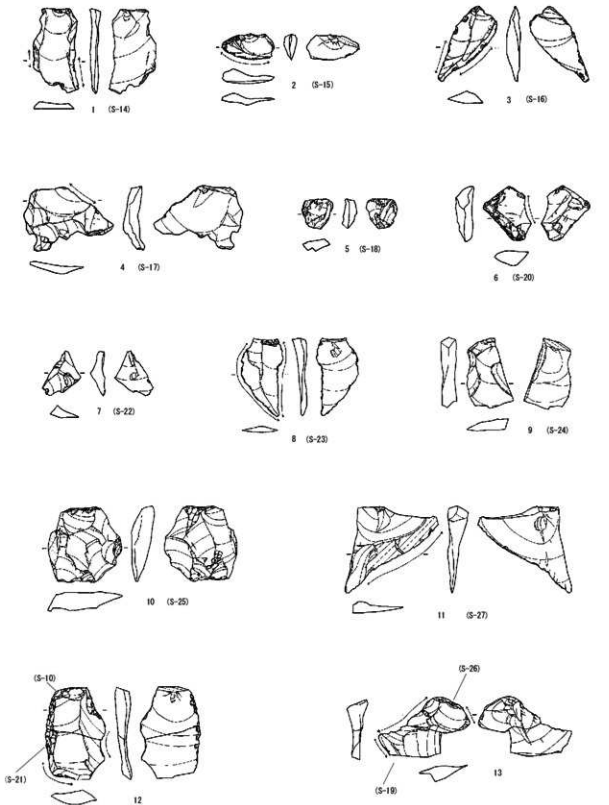
剥片集積 1 出土遺物 (3)



剥片集積 2 出土遺物 (1)

図 27 第 11 号竪穴住居跡 (5)





剥片集積 2 出土遺物 (2)

図 28 第 11 号竪穴住居跡 (6)



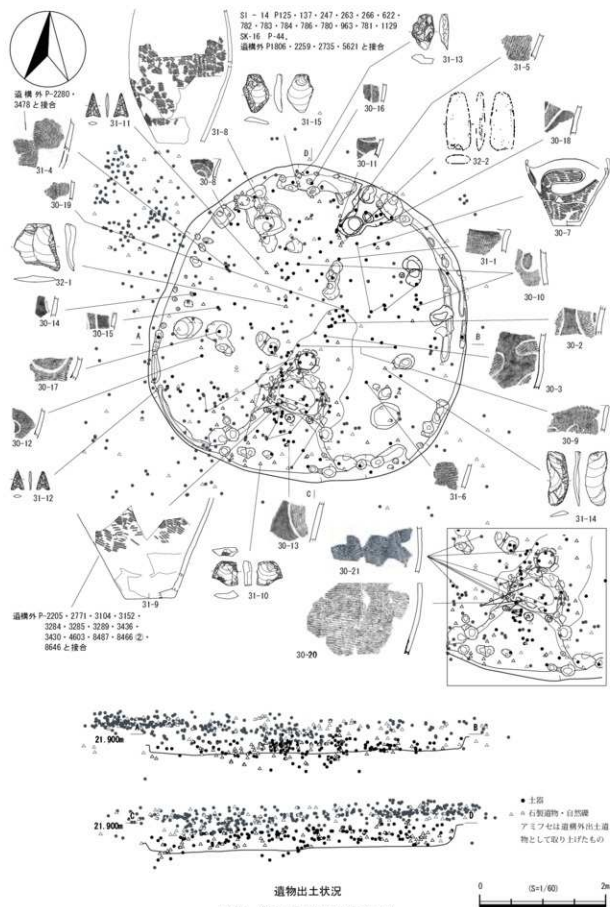
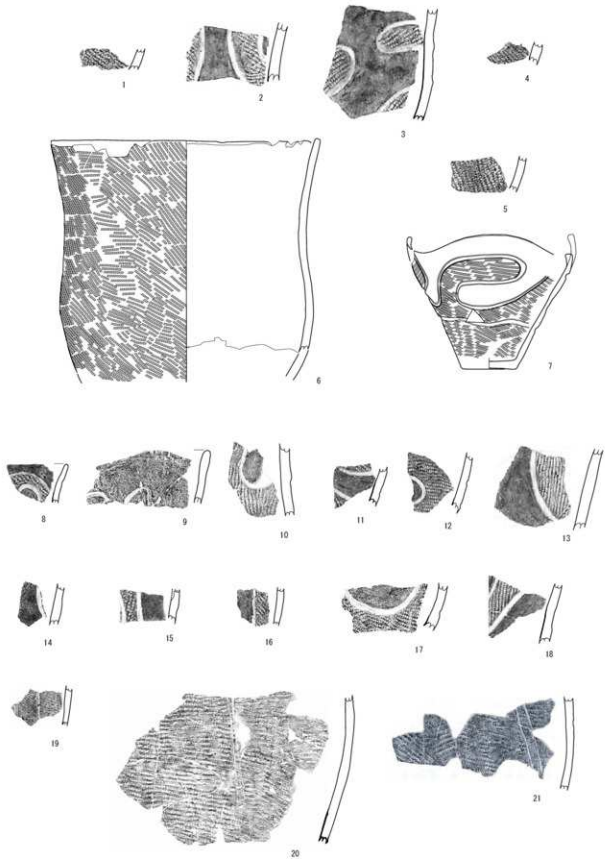
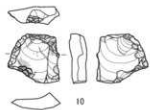
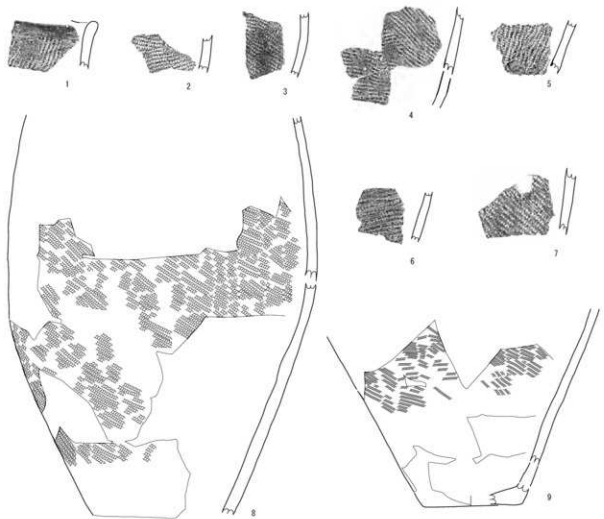


図 29 第 11 号竪穴住跡 (7)



0 (5=1/4) 10cm

図30 第11号竪穴住居跡(8)



SI-11 複式炉

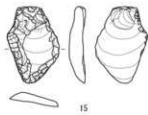
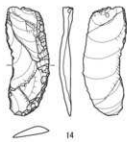
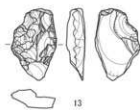


図31 第11号竪穴住居跡(9)

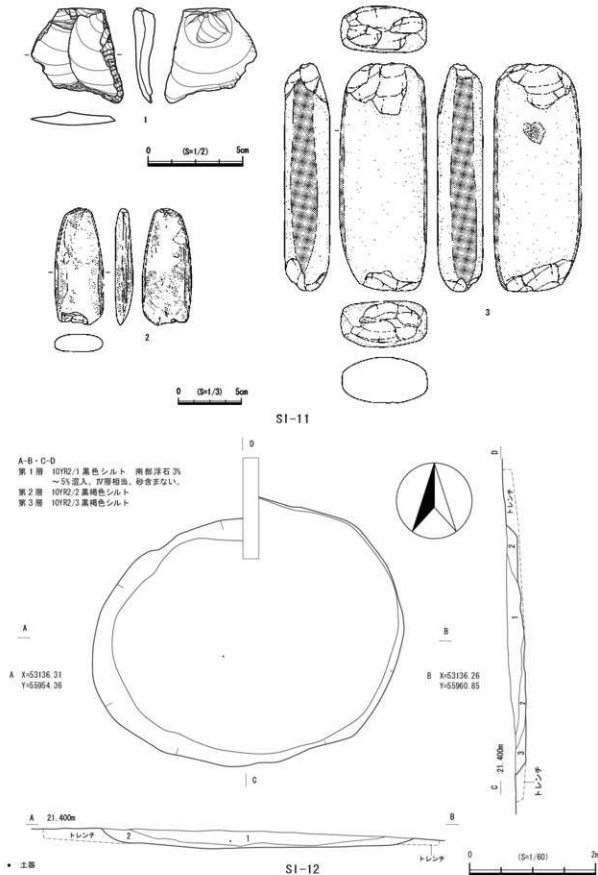


図32 第11号竖穴住居跡(10)・第12号竖穴住居跡

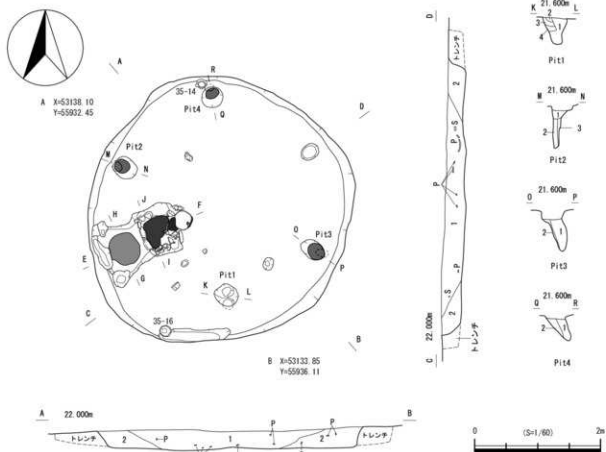
期] 堆積土の様相から、縄文時代早期の遺構と考えられる。(中村)

第14号竪穴住居跡〔SI-14〕(図33～39)

[検出状況] 第Ⅲ層中で、黒色の落ち込みを検出し、当初SK-08として調査を開始した。しかし、数cm掘り下げた時点で落ち込みはなくなり、遺構として認識することは困難であった。そこで包含層の掘削を再開したが、次第に当初のSK-08とは重複しながらもややずれた位置で、遺物が円形の分布を持って出土し始めた。土色から遺構を平面的に認識することはできなかったが、遺物の分布を手がかりにSK-08として精査を再開した。最終的に炉が検出されたので、調査終了時に番号を振り替え、SI-14とした。当初SK-08として認識した落ち込みは、完全に埋没していない遺構の一部にたまった土層と思われる。[平面形] 円形を呈する。[堆積土] 黒色シルトで、2層に分層した。第1層には遺物が多量に含まれていた。[壁] 第Ⅲ層中から掘り込まれていたため、上部は堆積土との識別が難しく、掘り上がった状況はやや外傾しているが、本来はまっすぐ立ち上がっていた可能性が高い。[床面] 第Ⅳ～Ⅴ層を床面とする。硬化面は認められなかった。[炉] 土器埋設部・石囲部・前庭部を持つ複式炉である。土器埋設部の炉体土器周辺の土壌は焼土化した部分が認められた。炉体土器内は、住居堆積土と同質の土壌(土器内第3層)を取り除いた段階で焼土粒・炭化物を多く含む土壌(土器内第4～6層)が現れた。これより上位の器内面は著しい赤化が認められた。これより下位の器内面は熱を受けてはいるが、灰褐色を呈し、明らかに受熱量の違いが認められる。従って、土器内には土ないしは何らかの内容物が充填された状態で火が焚かれたと考えられる。土器内第4層から琥珀が、底面付近から炭化クルミ殻が出土した。石囲部は一連で、底面に石敷は認められず、焼土が形成されていた。前庭部には硬化面が認められた。[柱穴] 床面から5基の柱穴が検出された。Pit1～4は同程度の規模だが、Pit5はやや浅い。[出土遺物] 複式炉堆積土中から土器が47点、石皿・台石類2点、二次調整のある剥片1点、剥片1点が出土した。第1層中の壁際から、上半部を欠失した注口土器(図35-14)が1点出土した。堆積土中からは多量の土器(1421点、29384.0g、うち重量不明4点)・石器類が出土した。石器の内訳は敲磨器10点、石皿・台石3点、碎片5点、石錐3点、石槍1点、石織15点、二次調整のある剥片13点、剥片42点、微小剥離痕のある剥片10点、両極加撃痕のある剥片3点である。堆積土から琥珀片が3点(S-126、172、遺構外S-3327)、複式炉埋設土器内の第1層から1点(計8.2g)の琥珀片が出土した。堆積土中の遺物は出土状況から、遺構廃絶後の窪地に廃棄されたものと考えられる。[時期] 炉内出土遺物から考えて、縄文時代中期末葉と考えられる。(中村)

第15号竪穴住居跡〔SI-15〕(図40)

第Ⅳ層を掘り下げている途中で方形に配置された石囲炉の上端とⅢ層土が集中する範囲を検出した。Ⅲ層土の広がり直径約3mの三日月形を呈しており、竪穴住居跡の堆積土に相当するものと判断して精査をおこなった。[平面形] 掘方の平面形については不明であるが、堆積土の範囲から円形に近いものと考えられる。[床面・柱穴] 石囲炉の北東側では第Ⅳ層上面に硬化面を確認した。硬化範囲は前庭部の反対側に顕著に認められ、硬化の程度は北側に相対的に弱くなる。柱穴と考えられるピットは確認できなかった。[炉] 北東-南西を主軸とする石囲炉を検出した。石囲炉の南西には浅



A-B・C-D

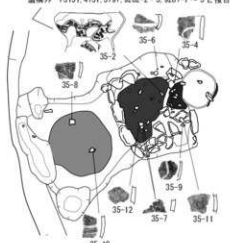
- 第1層 10YR1.7/1黒色シルト 10YR2/8黄褐色浮石(φ1~15mm)5%含む。炭化物(φ1~8mm)1%混入。炭化物比較的多く含む。遺物を多量に含む。
 第2層 10YR2/2黒褐色と10YR2/1黒色シルト 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~8mm)7%混入。炭化物(φ1~5mm)1%混入。かたくしまりあり。粘性ややあり。中層浮石多く含む。

K-L(Pit1)

- 第1層 10YR2/1黒色シルト
 第2層 10YR3/4暗褐色シルト
 第3層 10YR3/2暗褐色シルト
 第4層 10YR2/2黒褐色シルト

S1-14 P571.594.859 SK-15 P11.12.24.29

遺構外 P3151.4731.5797.9282-2・3.9287-1~3と接合



M-N(Pit2)

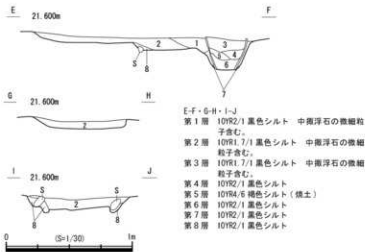
- 第1層 10YR2/2黒褐色シルト
 第2層 10YR2/2黒褐色シルト
 第3層 10YR3/2暗褐色シルト

O-P(Pit3)

- 第1層 10YR2/1黒色シルト 黄褐色浮石(φ1~5mm)2%含む。
 第2層 10YR3/1黒褐色シルト 黄褐色浮石(φ5~10mm)5%含む。

Q-R(Pit4)

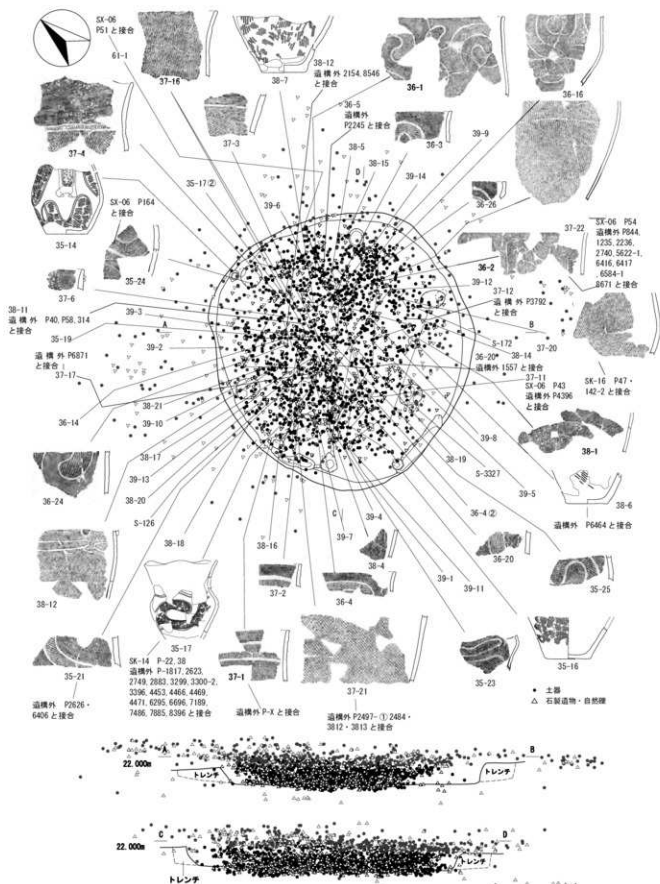
- 第1層 10YR1.7/1黒色シルト
 第2層 10YR2/2黒褐色シルト



E-F・G-H・I-J

- 第1層 10YR2/1黒色シルト 中層浮石の微細粒子含む。
 第2層 10YR1.7/1黒色シルト 中層浮石の微細粒子含む。
 第3層 10YR1.7/1黒色シルト 中層浮石の微細粒子含む。
 第4層 10YR2/1黒色シルト
 第5層 10YR4.6褐色シルト(黄土)
 第6層 10YR2/1黒色シルト
 第7層 10YR1/1黒色シルト
 第8層 10YR2/1黒色シルト

図33 第14号竪穴住居跡(1)



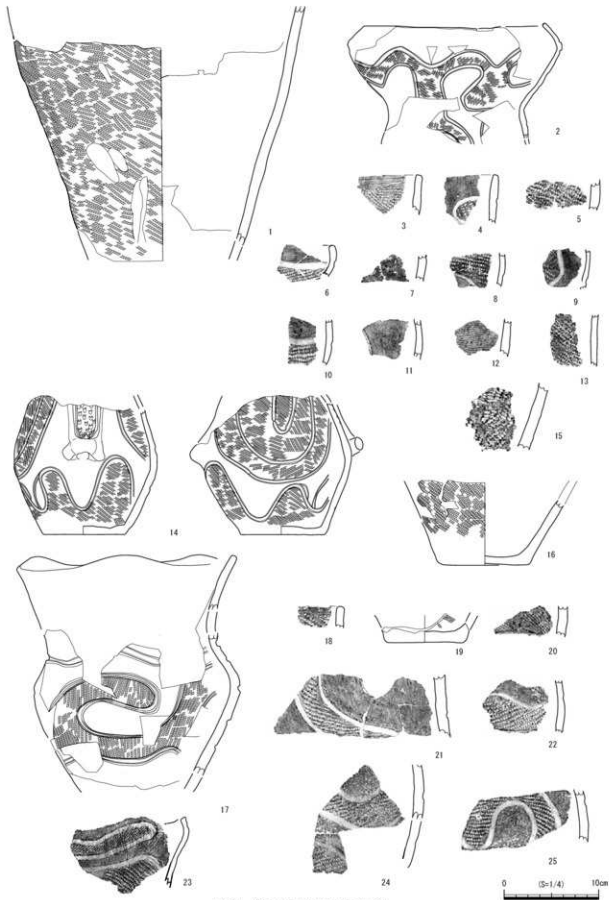


図35 第14号竖穴住居跡(3)

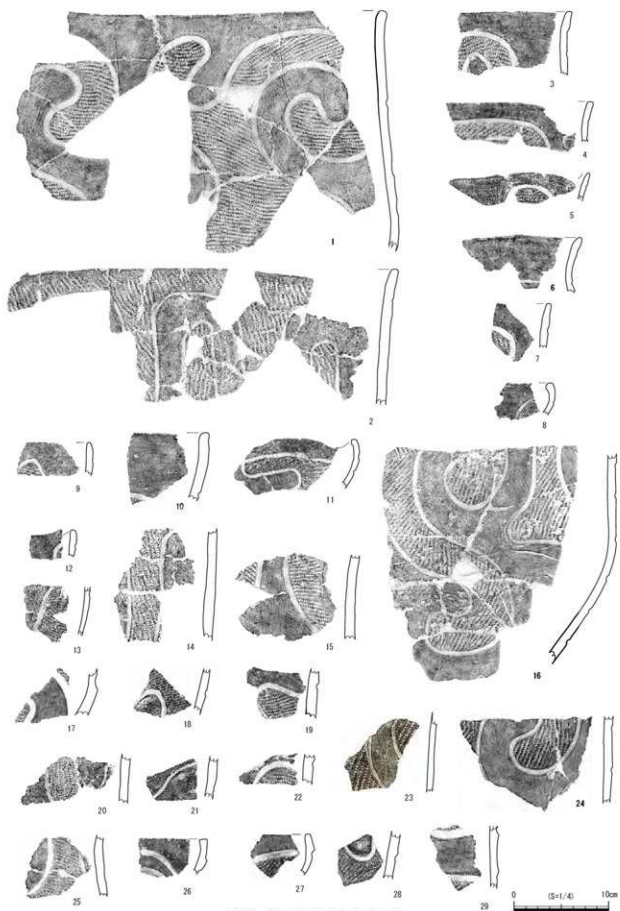


图36 第14号竖穴住居跡(4)

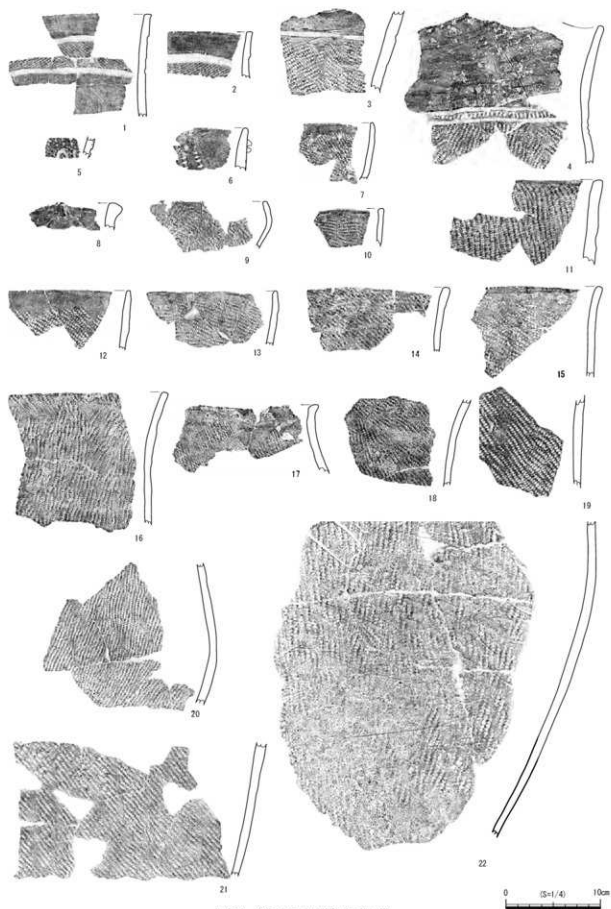


図37 第14号竪穴住居跡(5)

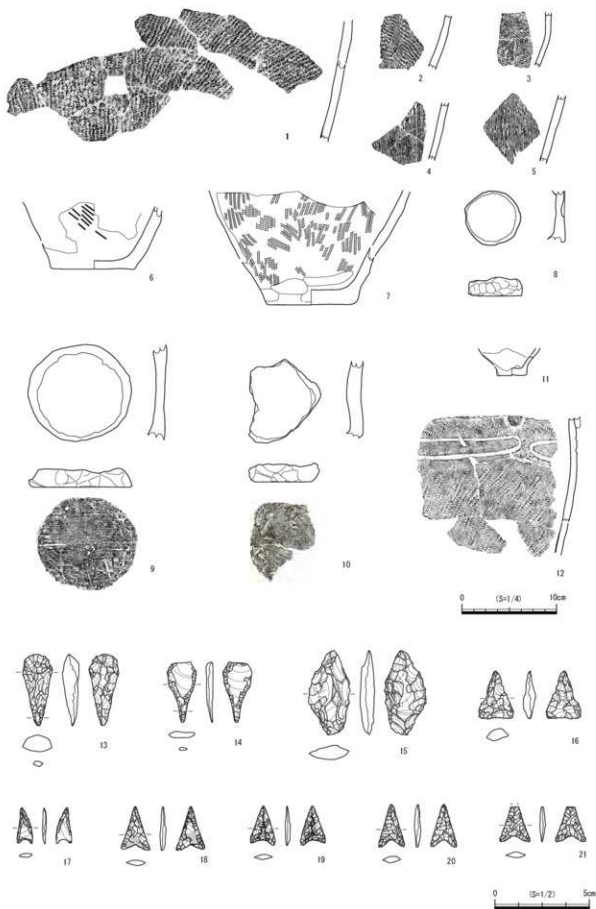


图38 第14号竖穴住居跡(6)

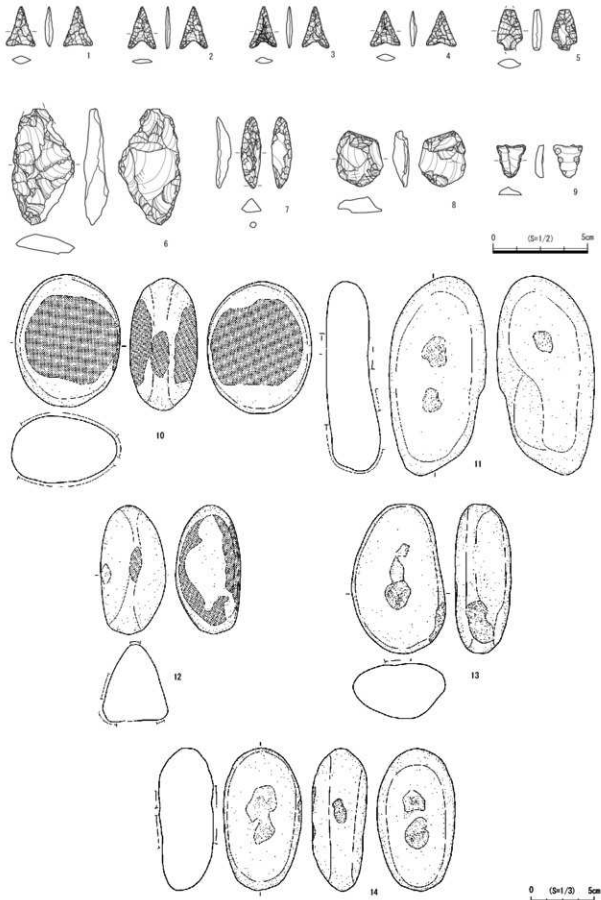


図39 第14号竪穴住居跡(7)

い掘方が前庭部を形成する。石囲炉に隣接して弱い焼土がみられたが、土層断面から地床炉と考えられる。[堆積土]石囲炉の上位に堆積している土層は基本層序第Ⅲ層に相当する層である。[出土遺物]堆積土中から10点(99.8g)の土器が出土した。[時期]炉の形態、周辺より出土した遺物から判断して縄文時代中期末葉～後期初頭頃に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第4号土坑〔SK-04〕(図41)

[堆積土]底面直上では地山起源のロームあるいは浮石ブロックが壁際より土坑底面中央に傾斜して堆積している。これら崩壊土の色調は上位から下位、壁際から底面中央にかけて漸移的に暗色になる特徴があり、自然堆積によって埋積されたものと考えられる。[出土遺物]堆積土中から13片(113.2g)の土器、剥片1点が出土している。[時期]遺構の形状および堆積土出土遺物から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第5号土坑〔SK-05〕(図41)

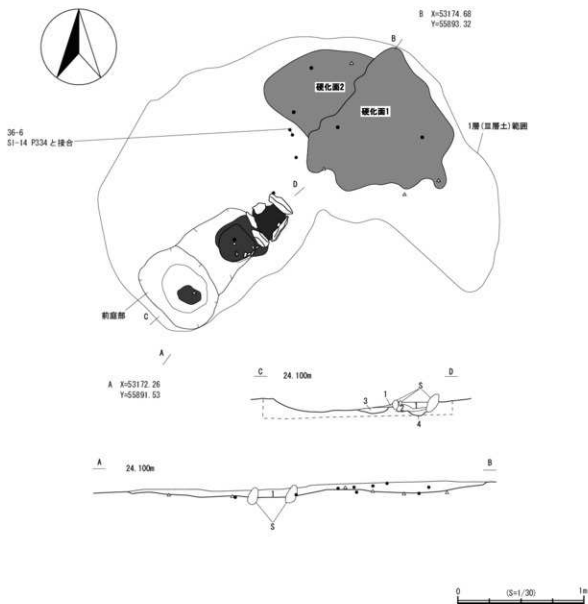
[平面形]東西にやや長い小判型を呈する。[堆積土]11層に分層した。第Ⅲ層類似の黒色シルトが主体である。壁際に崩落土と思われる火山灰土が認められたことから自然堆積と考えられる。[壁]短軸方向はやや外傾気味に立ち上がるが、長軸方向の壁はオーバーハンク気味に立ち上がる。[底面]第Ⅴ層を底面とし、平坦である。[出土遺物]堆積土中位から中期前葉～中葉、堆積土上位から中期末葉の土器片が計13片(147.4g)出土したが、いずれも周辺から流れ込んだものと考えられる。また、石鏃1点、剥片2点が出土した。[時期]明確な時期は不明である。堆積土の様相から、縄文時代前期後半から晩期のうちいずれかと考えられる。本遺跡で検出された他の遺構の時期を参照すれば、縄文時代中期末葉から後期初頭の可能性が高い。(中村)

第6号土坑〔SK-06〕(図42～44)

[平面形]円形を呈する。[堆積土]谷を埋積する黒色シルトと同質の土壌で、壁との識別が困難であった。3層に分層した。[壁]掘り上がりは底面から湾曲して立ち上がるが、壁と堆積土の識別が困難であったため、直線的に立ち上がった可能性もある。[底面]沢地形埋積土の第Ⅳ層相当層を底面とする。[出土遺物]多量の土器(370点、6599.3g、うち重量不明2点)・石器類が出土した。堆積土上位からは縄文時代後期初頭の土器が少量出土したが、主体を占めるのは縄文時代中期末葉の土器である。図43-9は土製品・注口のいずれか判然としない。縄文時代後期の可能性がある。石器の内訳は砥磨器類2点、砕片8点、石錐1点、石筥1点、石鏃1点、二次調整のある剥片25点、微小剥離痕のある剥片2点、磨製石斧3点、両極加撃痕のある剥片1点である。44-22は磨製石斧の欠損品を再加工し、擦り切った際の残片である。溝の擦り切りは両側から加えられており、5mmほどの厚さに達したところで割り取っている。[時期]出土遺物から考えて、縄文時代中期末葉と考えられる。(中村)

第10号土坑〔SK-10〕(図45)

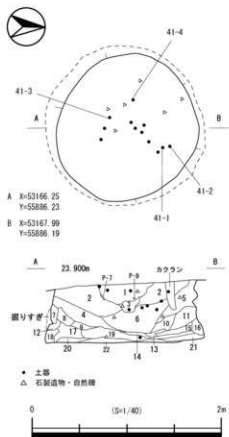
[堆積土]底面直上の壁際に黄褐色の崩壊土がわずかにみられる。[出土遺物]なし。[時期]検出層



A-B
第1層 10YR1/7/1 黒色砂質シルト 10YR5/8 明黄褐色浮石 (φ 5mm) 5% 混入。炭化物 (φ 5mm) 1% 混入。

C-D
第1層 10YR2/1 黒色シルト 5YR5/8 明赤褐色焼土微量混入。10YR5/8 黄褐色浮石 (φ 1~3mm) 2% 混入。砂少量混入。
第2層 10YR2/1 黒色シルト 5YR5/8 明赤褐色焼土 20% 混入。10YR5/8 黄褐色浮石 (φ 1~2mm) 1% 混入。炭化物少量混入。砂少量混入。
第3層 5YR5/8 明赤褐色シルト (焼土) 10YR3/1 黒褐色土 20% 混入。10YR5/8 黄褐色浮石 (φ 1~5mm) 5% 混入。砂少量混入。
第4層 10YR2/1 黒色シルト (やや砂質) 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ 1~5mm) 3% 混入。砂少量混入。石部伊能方埋土。

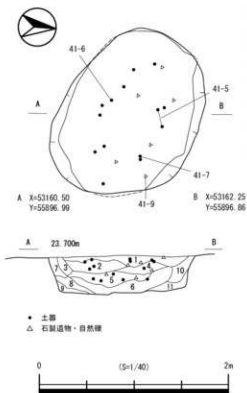
図40 第15号竪穴住居跡



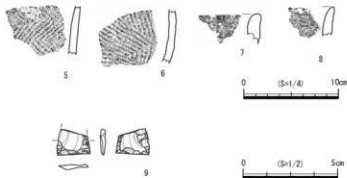
- 第 1 層 10YR2/3 黒褐色シルト 黄色浮石 (φ1~3mm) 15 混入, 白色軽石 (φ1~2mm) 15 混入, 炭化物わずかに含む。
- 第 2 層 10YR2/2 黒褐色シルト 黄色浮石 (φ1~10mm) 2% 混入, 白色軽石 (φ1~7mm) 1% 混入。
- 第 3 層 10YR2/2 黒褐色と 10YR3/4 暗褐色混合シルト 黄色浮石 (φ1~8mm) 2% 混入, 白色軽石 (φ1~2mm) 1% 混入, 炭化物 (φ1~4mm) 1% 混入。
- 第 4 層 10YR2/2 黒褐色シルト 黄色浮石 (φ1~4mm) 1% 混入, 白色軽石 (φ1~3mm) 2% 未混入。
- 第 5 層 10YR2/3 黒褐色シルト 黄色浮石 (φ1~4mm) 1% 混入, 白色軽石 (φ1~3mm) 1% 混入。
- 第 6 層 10YR2/1 黒色粘質シルト 浮石 (φ1~7mm) 1% 混入, 十和田 b (φ1~2mm) 微量混入。
- 第 7 層 10YR3/4 暗褐色と 10YR4/6 褐色砂質シルト 浮石 (φ1~3mm) 2% 混入, 十和田 b (φ1~3mm) 1% 混入。
- 第 8 層 10YR2/3 黒褐色と 10YR4/6 褐色砂質シルト 浮石 (φ1~12mm) 2% 混入, 十和田 b (φ1~2mm) 微量混入。
- 第 9 層 10YR2/2 黒褐色と 10YR3/4 暗褐色混合シルト 浮石 (φ1~5mm) 2% 混入, 十和田 b ごく微量混入。
- 第 10 層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1~2mm) 1% 未混入, 十和田 b (φ1~3mm) 1% 混入。
- 第 11 層 10YR2/3 黒褐色と 10YR4/6 褐色混合シルト 浮石 (φ1~4mm) 2% 混入, 十和田 b (φ1mm) 少量混入。
- 第 12 層 10YR5/6 黄褐色と 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1~2mm) 3% 混入, 十和田 b (φ1mm) 少量混入。
- 第 13 層 10YR2/1 黒色粘質シルト 浮石 (φ1~2mm) 1% 混入, 十和田 b ごく微量混入。
- 第 14 層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1mm) ごく微量混入, 十和田 b (φ1~3mm) 3% 混入。
- 第 15 層 10YR4/4 褐色と 10YR2/3 黒褐色混合シルト 浮石 (φ1~5mm) 3% 混入, 十和田 b (φ1mm) 微量混入。
- 第 16 層 10YR3/3 暗褐色シルト 浮石 (φ1~2mm) 1% 混入, 十和田 b (φ1~2mm) 1% 混入。
- 第 17 層 10YR2/2 黒褐色と 10YR4/4 褐色混合シルト 浮石 (φ1~7mm) 4% 混入, 十和田 b (φ1~5mm) 3% 混入。
- 第 18 層 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト 浮石 (φ1~2mm) 2% 混入, 十和田 b (φ1mm) 1% 混入。
- 第 19 層 10YR2/1 黒色粘質シルト 浮石 (φ1~13mm) 1% 混入, 十和田 b (φ1~5mm) 1% 未混入。
- 第 20 層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1~3mm) 2% 混入, 十和田 b (φ1mm) 1% 混入。
- 第 21 層 10YR3/4 暗褐色と 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト 浮石 (φ1~7mm) 2% 混入, 十和田 b (φ1mm) 少量混入。
- 第 22 層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1~2mm) 1% 未混入, 十和田 b (φ1mm) 微量混入。



SK-04



- 第 1 層 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 浮石 (φ1~3mm) 2% 混入, 中層浮石多量含む, 砂粒分が最も多い。
- 第 2 層 10YR2/2 黒褐色シルト 浮石 (φ1~8mm) 2% 混入, 中層浮石多量含む。
- 第 3 層 10YR3/4 暗褐色シルト 浮石 (φ1~5mm) 3% 混入, 中層浮石多量含む。
- 第 4 層 10YR2/3 黒褐色シルト 浮石 (φ1~2mm) 2% 混入, 中層浮石多量含む。
- 第 5 層 10YR1/7 1 黒色粘質シルト 浮石 (φ1~4mm) 2% 混入, 十和田 b (φ1mm) 1% 混入。
- 第 6 層 10YR1/7 1 黒色シルトと 10YR4/4 褐色粘土 浮石 (φ1~7mm) 2% 混入, 中層浮石多量含む, 炭 (φ1~3mm) 微量含む。
- 第 7 層 10YR3/3 暗褐色シルトと 10YR4/4 褐色シルト質火山灰土 浮石 (φ2~5mm) 2% 混入, 中層浮石多量含む。
- 第 8 層 10YR2/1 黒色粘質シルトと 10YR4/4 褐色火山灰土 浮石 (φ1~2mm) 2% 混入, 中層浮石多量含む。
- 第 9 層 10YR5/6 黄褐色火山灰土と 10YR3/3 にぶい黄褐色シルト 浮石 (φ1~2mm) 1% 混入, 中層浮石多量含む。
- 第 10 層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1~5mm) 5% 混入, 中層浮石多量含む。
- 第 11 層 10YR2/3 黒褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色火山灰土 浮石 (φ1~5mm) 5% 混入, 中層浮石多量含む。



SK-05

図 41 第 4 号土坑・第 5 号土坑

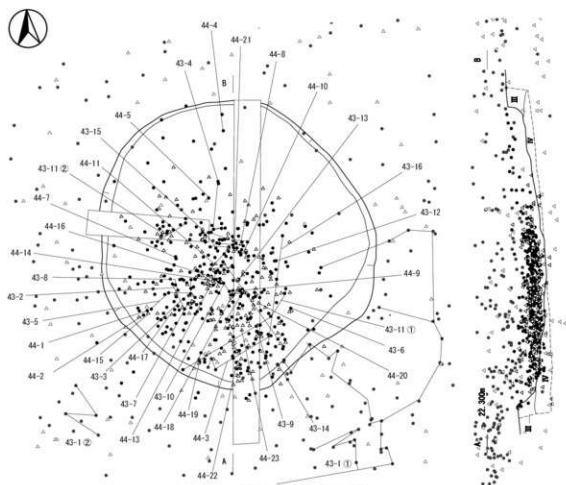
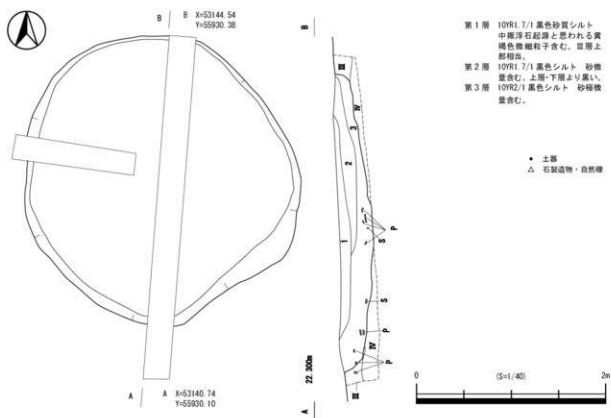


図42 第6号土坑(1)

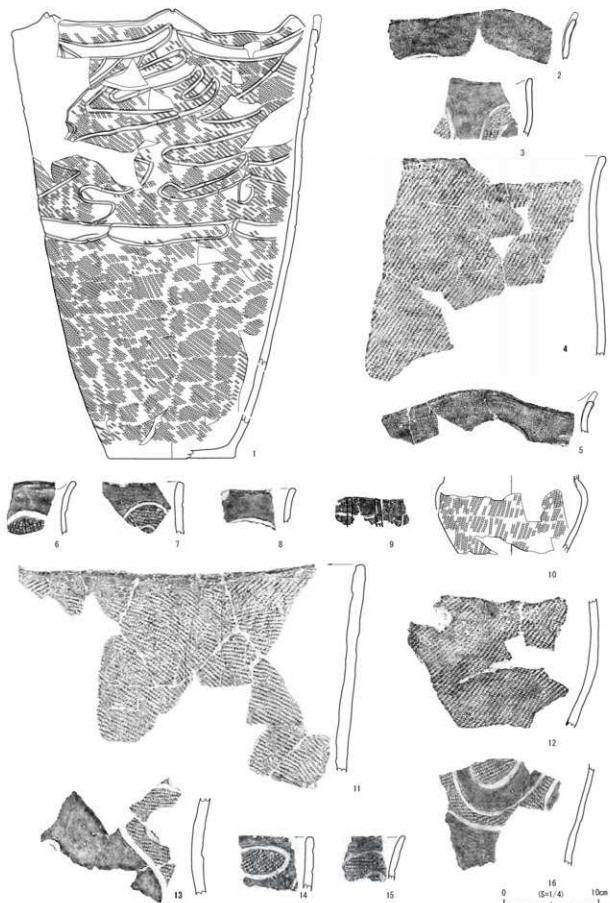


图43 第6号土坑(2)

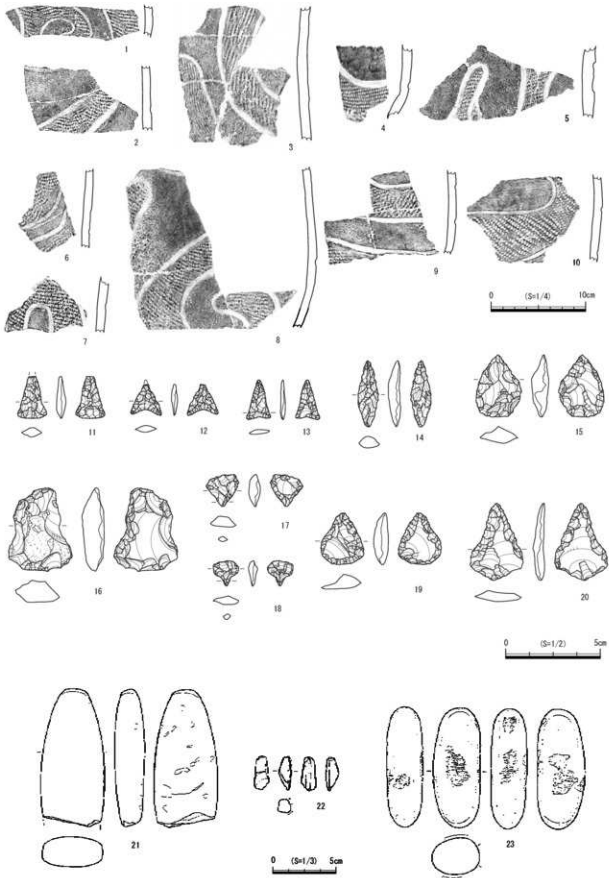
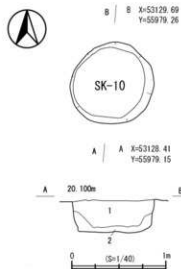


図44 第6号土坑(3)



SK-10

- 第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR6/6 明黄褐色浮石 (φ1~5mm)5%混入。硬くしまりあり。
 第2層 10YR2/1 黒色シルト (1層よりやや黒み強) 10YR7/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)2%混入。硬くしまりあり。粘性あり。

SK-11

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~10mm)20%混入。炭化物微量混入。硬くしまりあり。
 第2層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)15%混入。硬くしまりあり。
 第3層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR3/4 暗褐色の土20%混入。10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)15%混入。硬くしまりあり。
 第4層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR3/4 暗褐色の土10%混入。10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~10mm)15%混入。硬くしまりあり。
 第5層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~10mm)25%混入。硬くしまりあり。
 第6層 10YR3/4 暗褐色と 10YR4/4 褐色混合シルト 10YR5/8 黄褐色浮石

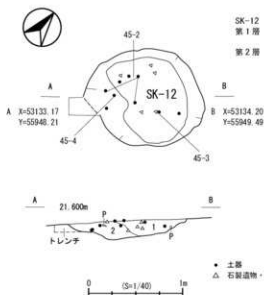
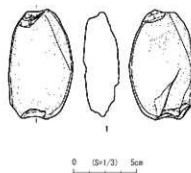
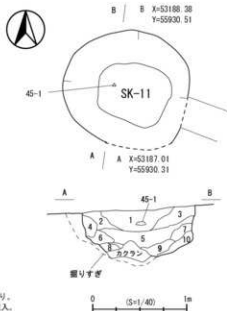
(φ1~5mm)20%混入。硬くしまりあり。

- 第7層 10YR3/4 暗褐色と 10YR4/4 褐色混合シルト (5層よりやや褐色多い) 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)20%混入。硬くしまりあり。

- 第8層 10YR3/4 暗褐色と 10YR4/4 褐色混合シルト (6層よりやや褐色少ない) 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)20%混入。硬くしまりあり。

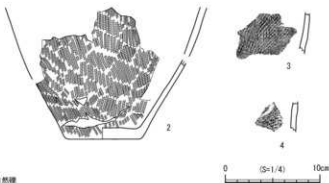
- 第9層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~15mm)15%混入。硬くしまりあり。

- 第10層 10YR3/4 暗褐色と 10YR4/4 褐色混合シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)10%混入。硬くしまりあり。



SK-12

- 第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR4/6 褐色浮石 (φ1~5mm)2%混入。砂微量含む。基本層作第三層よりは砂少ない。
 第2層 10YR1/7 1 黒色シルト 10YR1/7 1 黒色シルト 10YR4/6 褐色浮石 (φ1~5mm)1%混入。



- 土器
- △ 石製遺物・自然標

図45 第10号土坑・第11号土坑・第12号土坑

位より縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。

第11号土坑〔SK-11〕（図45）

〔堆積土〕黒褐色～暗褐色土を主体とするが、周囲の基本層序第IV層との境界は漸移的である。壁際にはロームブロックが顕著にみられ、自然堆積による埋積の特徴を示す。壁の崩壊土と想定したロームブロックは暗色の堆積土と互層になっており、暗色土のみを掘り上げた底面および壁面の凹凸は極めて顕著である。堆積土中にしまりの弱い木根による攪乱が確認されており、本遺構については形成年代の古い風倒木痕の可能性も考えられる。〔出土遺物〕1層より石錐が1点出土している。〔時期〕堆積土の特徴から縄文時代早期に帰属するものと考えられる。（斉藤）

第12号土坑〔SK-12〕（図45）

〔平面形〕やや不整な円形を呈する。〔堆積土〕黒色シルトだが、第III層よりは砂を含む量が少なく、しまりが無い。〔壁〕底面から緩やかに立ち上がる。〔底面〕第III層を床面とし、平坦である。平面形は不整である。〔出土遺物〕土器は縄文時代晩期のものが出土した。石器は二次調整のある剥片2点、剥片1点が出土した。〔時期〕出土した土器から縄文時代晩期と考えられる。（中村）

第13号土坑〔SK-13〕（図46）

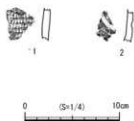
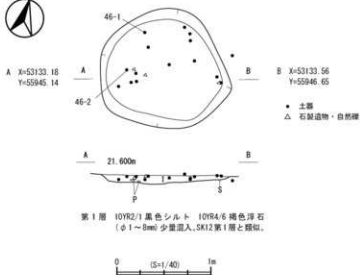
〔平面形〕やや不整な円形を呈する。〔堆積土〕黒色シルトだが、第III層よりは砂を含む量が少なく、しまりが無い。〔壁〕底面から斜めに立ち上がる。〔底面〕第III層を底面とし、平坦である。〔出土遺物〕縄文時代中期末葉の土器小片が出土したが流れ込みと思われる。石器は微小剥離痕のある剥片1点、両極加撃痕のある剥片が出土した。〔時期〕堆積土の様相が第12号土坑に類似するので、第12号土坑と同様縄文時代晩期の可能性が高い。（中村）

第14号土坑〔SK-14〕（図46～50）

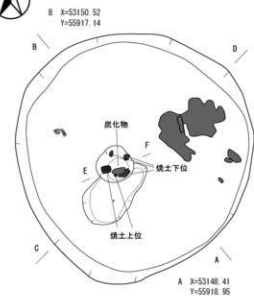
〔平面形〕円形である。〔堆積土〕第III層類似の黒色シルトで、壁面の第III層との識別が困難であった。〔底面〕第IV層を底面とする。〔壁〕検出が困難であったため、遺存状況が悪い。やや外傾気味に立ち上がる。〔焼土〕底面に弱い焼土を検出した。焼土と暗褐色シルトがブロック状に堆積しており、熱を受けて赤化した土壌が攪拌・移動されたものと判断された。焼土中や暗褐色シルト中から炭化したトチノキの果皮片が少量出土した。この焼土に隣接して、砂を微量含む土壌が堆積していた。〔出土遺物〕堆積土中から土器（186点、10697.0g）石器が出土した。石器の内訳は砕片4点、石鏝6点、二次調整のある剥片2点、剥片14点、微小剥離痕のある剥片3点である。これらに混在して炭化したクリ・トチの果皮・子葉が出土した（第5章第2節参照）。また、焼土中から径10cm前後の円礫が出土した。〔時期〕出土した土器から縄文時代中期末葉と考えられる。（中村）

第15号土坑〔SK-15〕（図51）

〔平面形〕円形である。〔堆積土〕沢地形を埋積する第III層と同質の黒色シルトである。〔壁〕黒色土中に構築されており検出が困難であったため、遺存状況が悪く詳細は不明である。〔底面〕第III層を

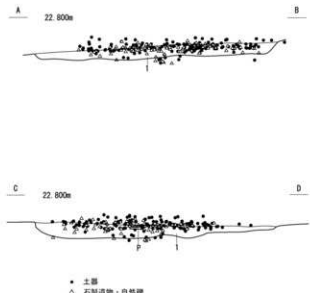


SK-13



A-B・C-D
第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 中層浮石起源の黄褐色微細粒子含む。層辺よりやや砂なし。微細粒子2%含む。

E-F (焼土)
第1層 10YR2/1 黒色シルト
第2層 10YR2/3 黒褐色シルト (焼土)
第3層 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土混入。
第4層 5YR5/8 明赤褐色シルト (焼土)



SK-14

図46 第13号土坑・第14号土坑(1)

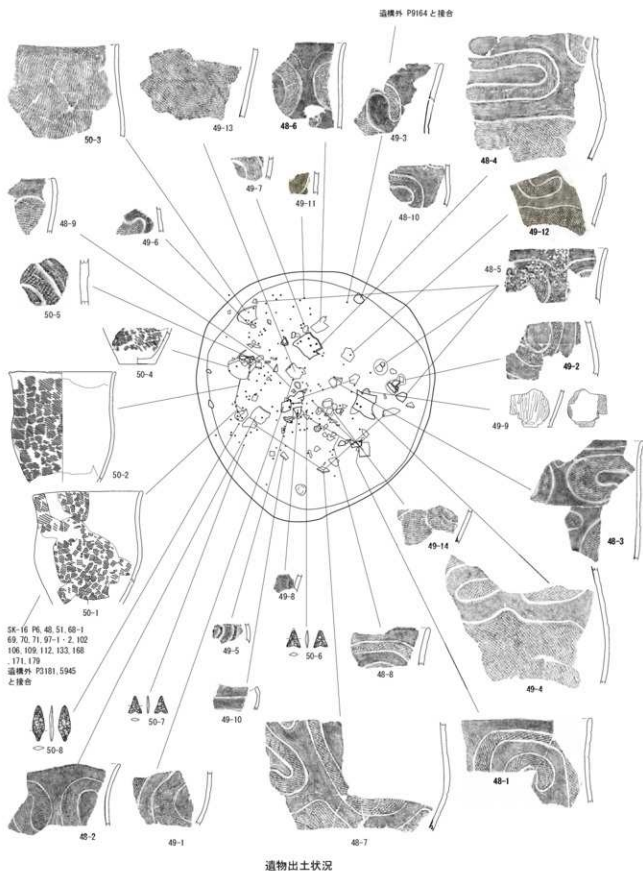


図47 第14号土坑(2)

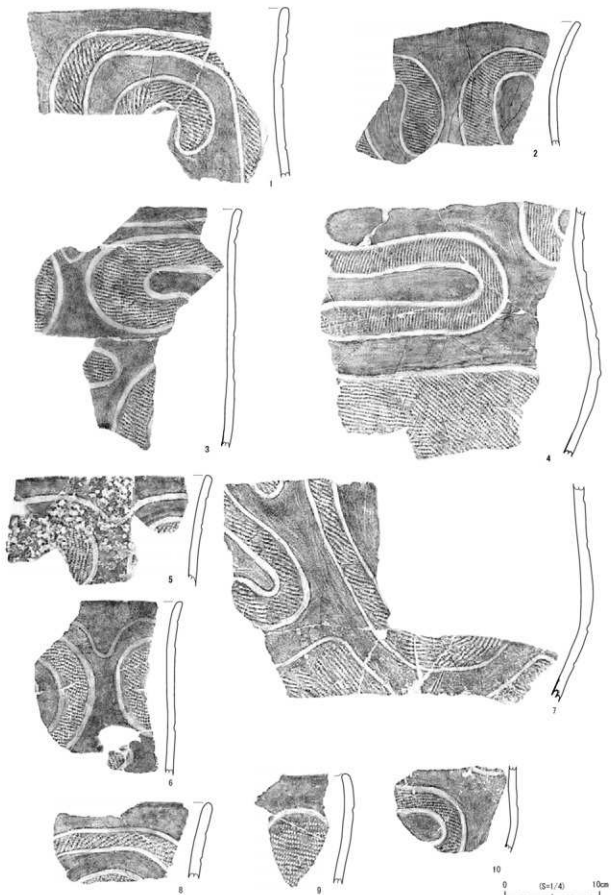


图48 第14号土坑(3)

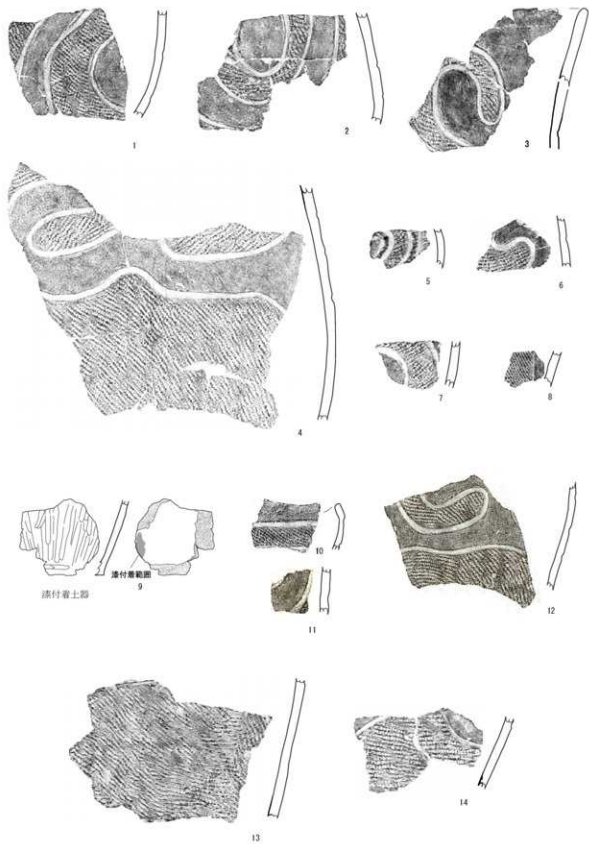


図49 第14号土坑(4)

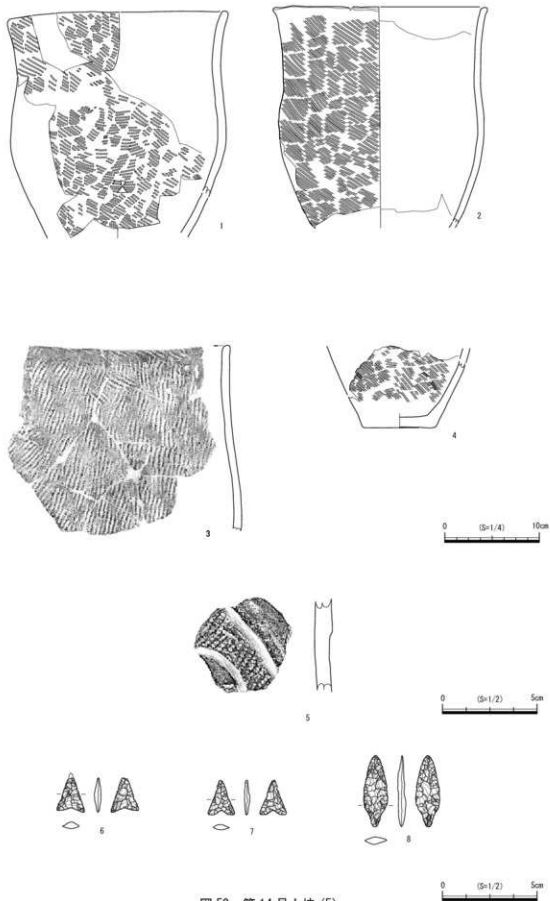
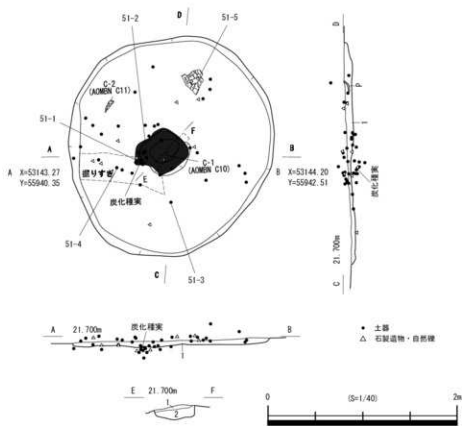


图50 第14号土坑(5)



A-B・C-D

第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ1~10mm) 10% 混入。炭化物種微量混入。

E-F

第1層 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 焼土粒 10% 含む。

第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土粒 30% 含む。

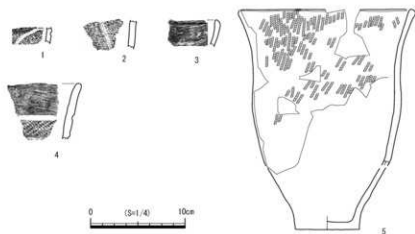


図51 第15号土坑

底面とし、平坦である。〔焼土〕底面中央に焼土が検出された。確認面の平面形は方形に近い。焼土は厚さ 15cm 程度で、暗褐色のあまり焼けていない土壌とともに粒状に認められ、周辺部への土色の漸位は認められなかった。この点から焼土は掘方を持ち、攪拌されていたものと考えられる。〔出土遺物〕堆積土中から 34 点 (847.3g) の土器が出土した。いずれも縄文時代中期末葉の土器である。石器は、敲磨器、剥片が各 1 点出土した。また、底面北西部と焼土上面からそれぞれ炭化材が出土した。炭化材は長さ 10cm、太さ 3cm 程度である。燃焼材の可能性が考えられる。これらの炭化材を用いて ^{14}C 年代測定を実施し、縄文時代中期後葉に近い年代が得られている (第 5 章第 4 節参照)。焼土上面の炭化材はクリと同定された。焼土中から縄文時代中期末葉の土器片と炭化果が出土した (第 5 章第 2 節参照)。〔時期〕出土した土器から縄文時代中期末葉である。(中村)

第 16 号土坑〔SK-16〕(図 52～53)

〔平面形〕やや不整な小判型である。〔堆積土〕第 III 層類似の黒色土で、8 層に細分した。〔壁〕底面からやや外傾して立ち上がる。〔底面〕第 V 層を底面とし、平坦である。〔焼土〕底面に弱い不整形の焼土が検出された。焼土はブロック状で暗褐色のシルトと混在しており、これらを掘り上げると深さ 10cm 程度の落ち込みとなった。〔出土遺物〕土器は堆積土中から 174 点 (4485.9g) 出土した。底面の焼土・暗褐色シルトから 10 点 (370.8g) 出土した。土器の時期はすべて縄文時代中期末葉である。石器は敲磨器 2 点、二次調整のある剥片 1 点、剥片 2 点、微小剥離痕のある剥片 1 点、両極加撃痕のある剥片 1 点が出土した。〔時期〕出土した土器から考えて、縄文時代中期末葉である。(中村)

第 17 号土坑〔SK-17〕(図 54)

〔堆積土〕中搬浮石を多量に含む黒褐色シルトの単層からなる。〔遺物〕土器が 2 片 (63.0g) 出土した。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 18 号土坑〔SK-18〕(図 54)

〔堆積土〕2 層、3 層、4 層の黒褐色シルトに対し、第 1 層および第 5 層の黒色シルトが貫入するような様相を呈している。第 1 層および第 5 層については植物による攪乱の可能性も考えられる。〔遺物〕なし。〔時期〕検出層位から縄文時代前期前半以前に帰属するものと考えられる。(斉藤)

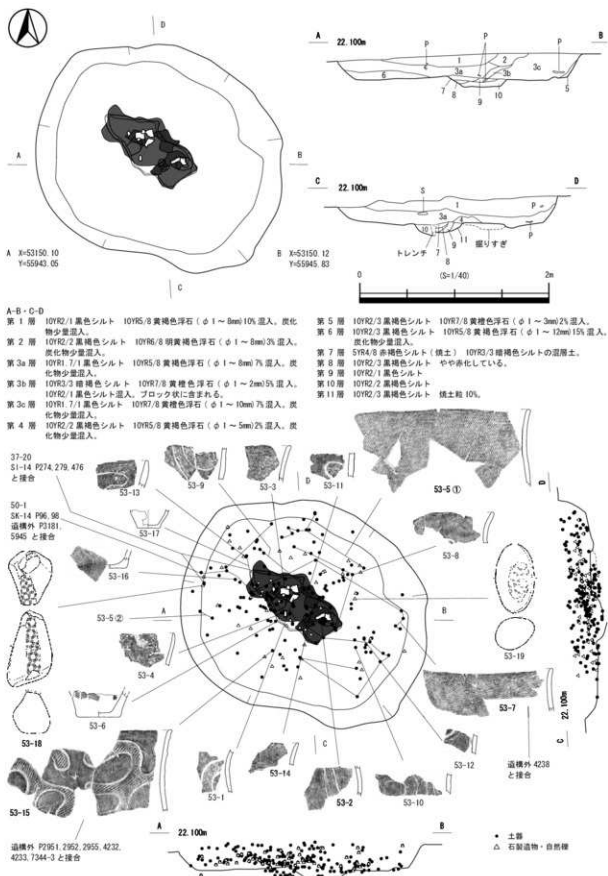
第 3 号焼土遺構〔SN-03〕(図 54)

〔特徴〕直径 25 cm ほどの円形を呈する。断面の色調は漸移的であり、現地性の焼土と考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 4 号焼土遺構〔SN-04〕(図 54)

〔特徴〕一部調査区外に広がるため全体を検出していないが直径 25 cm 程度の円形を呈するものと考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 5 号焼土遺構〔SN-05〕(図 54)



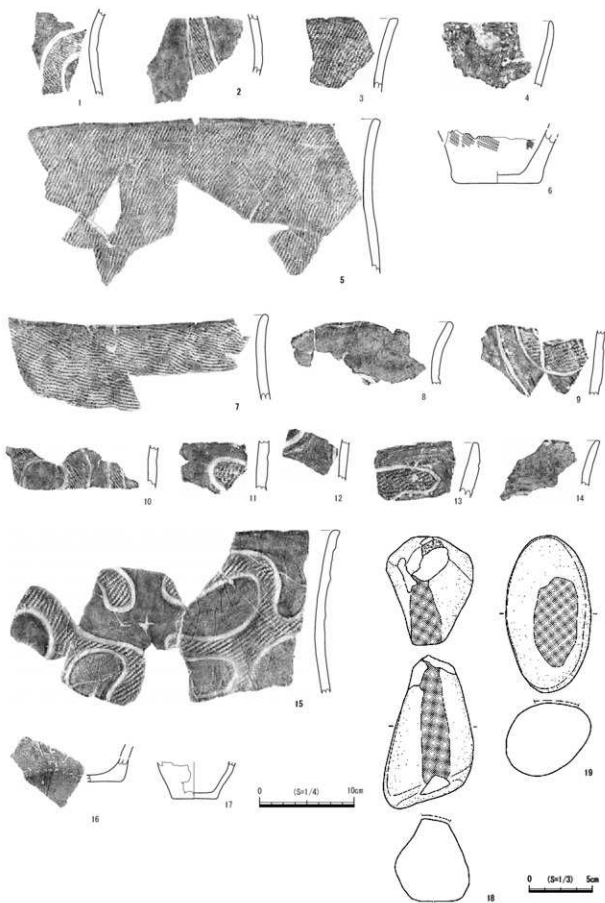
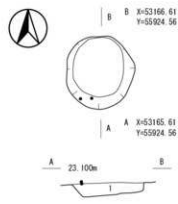
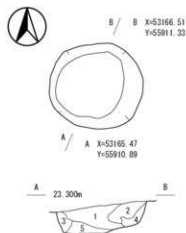


图 53 第 16 号土坑 (2)



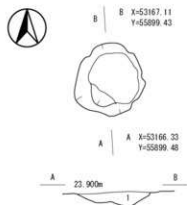
第1層 10YR2/3 黒褐色土浮石 (φ2~5mm以下) 2% 含む。炭化物 (φ3~5mm) 2% 含む。中層浮石多く含む。粘性中。

SK-17



第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~8mm) 20% 混入。しまり中。粘性強。
 第2層 10YR2/1 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~10mm) 15% 混入。しまり中。粘性中。
 第3層 10YR2/1 黒褐色と 10YR2/3 暗褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm) 5% 混入。しまり中。粘性中。
 第4層 10YR2/1 黒褐色と 10YR4/4 褐色土が塊状に混ざるシルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~8mm) 10% 混入。しまり中。粘性中。
 第5層 10YR2/1 黒色粘性シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~10mm) 10% 混入。しまり中。粘性中。

SK-18



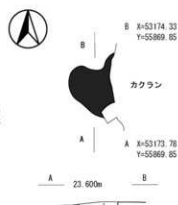
第1層 10YR2/2 黒褐色シルト 7.5YR6/8 褐色粘土が30%塊状に混入。10YR7/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm) 5% 混入。硬くしまりなし。

SN-03



第1層 10YR2/1 黒色土 浮石 1% 混入。

SN-04



第1層 10YR2/2 黒褐色土

SN-05



図54 第17号土坑・18号土坑・焼土(1)

〔特徴〕一部攪乱を受けており、全体の形状は不明であるが、概ね直径25cm程度の不整形円形を呈するものと考えられる。断面の色調は漸移的であり、現地性の焼土と考えられる。〔時期〕検出層位から中坩浮石降下以前に形成されたものと考えられる。(斉藤)

第6号焼土遺構〔SN-06〕(図55)

〔特徴〕第Ⅳ層上面で赤化した土壌を確認した。赤化の度合いは微弱で、熱以外の要因で赤化した可能性もある。〔時期〕検出層位から縄文時代前期前半以前に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第7号焼土遺構〔SN-07〕(図55)

〔特徴〕一部調査区外に広がるため全体の形状については不明。断面の色調は漸移的であるため、現地性の焼土と考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第8号焼土遺構〔SN-08〕(図55)

〔特徴〕平面形態は不整形円形を呈し、黒色土と焼土ブロックが斑状に混ざる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第9号焼土遺構〔SN-09〕(図55)

〔特徴〕第Ⅲ層掘り下げ中に検出した。不整形で焼けが弱く、木根による攪乱もうけている。現地性のものかどうかの判断は困難であった。〔時期〕検出層位と周辺出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。(中村)

第10号焼土遺構〔SN-10〕(図55)

〔特徴〕第Ⅲ層掘り下げ中第9号焼土に近接して検出した。不整形で焼けがやや強い部分が斑状に存在する。廃棄焼土の可能性が高い。〔時期〕検出層位と周辺出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。(中村)

第11号焼土遺構〔SN-11〕(図55)

〔特徴〕調査区外に広がるため全体形状については不明である。堆積土は2層に分かれるが、色調は漸移的であり、周囲の土壌との差は不明瞭である。現地性の焼土と考えられる。〔出土遺物〕土器が2点出土した。2層より二次調整のある剥片1点が出土している。〔時期〕検出層位および周辺より出土した遺物から縄文時代前期前葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第12号焼土遺構〔SN-12〕(図56)

〔特徴〕第Ⅳ層で直径45cmほどの中坩浮石の集中がみられ、その中心がわずかに赤変している。断面の色調は斑状であり、非常に不明瞭である。本遺構の赤色土は被熱による酸化とは別の脈絡で生じた可能性も考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期前半以降に帰属するものと考えられる。

(齊藤)

第13号焼土遺構〔SN-13〕(図56)

〔特徴〕中掘浮石ブロックの下位で周囲よりもやや赤みを帯びた暗褐色土が検出された。断面からは明瞭なまとまりをつかむことができず、基本層序第Ⅲ層に焼土ブロックが斑状に混ざり合う状態であった。本遺構の赤色土は被熱による酸化とは別の脈絡で生じた可能性も考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(齊藤)

第14号焼土遺構〔SN-14〕(図56)

〔特徴〕第Ⅴ層上面で検出した。平面形は瓢型を呈する。断面はこれに対応して両端の円形部分はやや厚く、3cm程度である。くびれ部は明確な焼土を確認できない。〔時期〕検出層位から縄文時代早期と考えられる。(中村)

第15号焼土遺構〔SN-15〕(図56)

〔特徴〕基本層序第Ⅲ層中で周囲よりもやや赤みを帯びた褐色土が検出された。周囲との境界は漸移的であり、現地性の焼土と考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(齊藤)

第16号焼土遺構〔SN-16〕(図57)

〔検出状況〕第Ⅲ層掘り下げ中に焼土を検出した。周辺を精査し、ビットかと思われる黒色の落ち込みを平面で認識し、断ち割り調査を実施した。しかし、断面ではビットの存在を確認できなかった。そのため、整理段階で焼土として扱うこととした。焼土は径約60cm、厚さ約10cmである。〔時期〕周辺から出土した土器から縄文時代中期末葉である。(中村)

第3号不明遺構〔SX-03〕(図57・58)

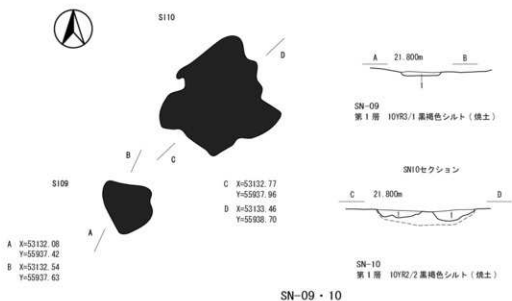
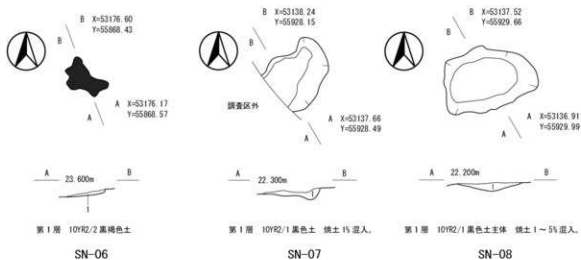
〔特徴〕第Ⅳ層中で、東西6m、南北5mの範囲で礫が検出された〔出土遺物〕土器は小片が数片混在していたのみでほとんど出土しなかった。石匙、剥片各3点、微小剥離痕のある剥片、磨石各1点が出土している。〔時期〕検出層位と出土土器から縄文時代早期後葉と考えられる。(中村)

第4号不明遺構〔集石遺構〕〔SX-04〕(図58)

〔特徴〕こぶし大程度の円礫を主体とする集石遺構である。個々の礫にレベル差はほとんどみられない。礫の石質はチャート、粘板岩、頁岩などが主体で、全体の130点中61点の礫に被熱に由来すると考えられる赤色変化がみられる。〔出土遺物〕被熱痕跡のみられる磨石の破片が1点含まれている。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(齊藤)

第5号不明遺構〔剥片集中遺構〕〔SX-05〕(図59)

〔特徴〕基本層序第Ⅲ層中で剥片8点が折り重なっている出土している状態を確認した。剥片石器



SN-09・10

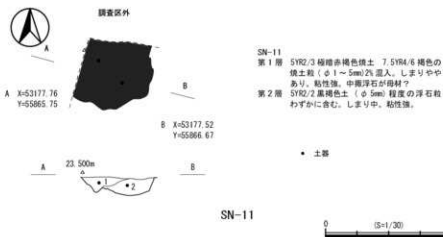


図 55 焼土 (2)

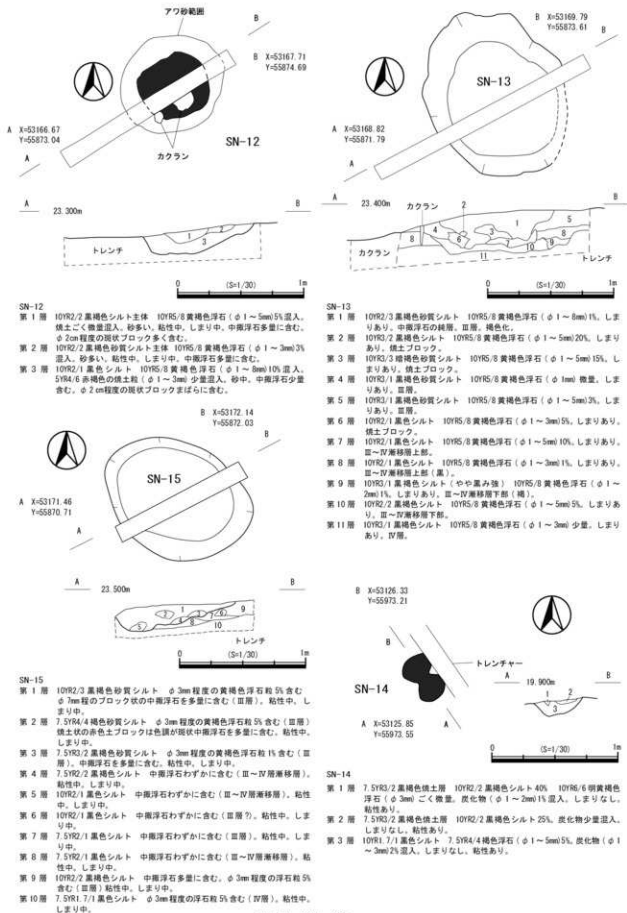
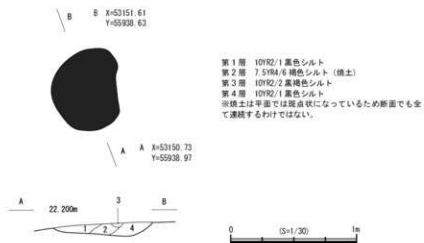
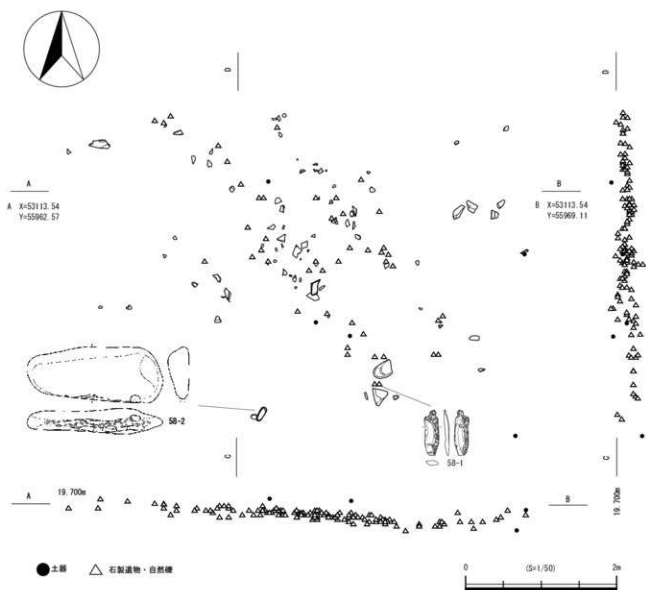


図56 焼土(3)

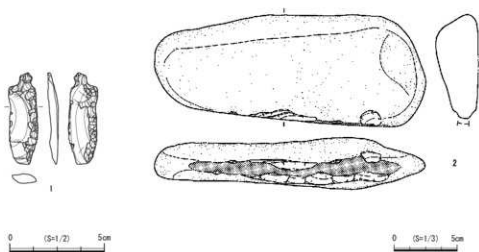


SN-16



SX-03

図57 第3号不明遺構(1)



SX-03 出土遺物

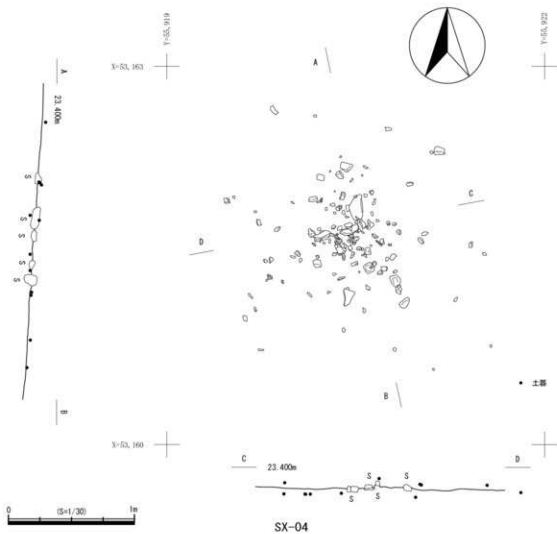


図58 第3号不明遺構(2)・第4号不明遺構

8点はいずれも珪質頁岩を素材としている。鋭利な側縁部には微小剥離痕がみられ、母岩としては5つ以下のグループに分類できる。接合関係は確認できなかった。[時期] 周囲の遺物、検出土層から縄文時代中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第6号不明遺構〔SX-06〕(図60～62)

〔特徴〕第Ⅲ層で炭化物と多量の土器の集中を確認した。土器の集中は直径3m、深さ40cm程度の範囲に広がる。遺物集中範囲の中央最低面で同一個体の土器片(図62-1)の上に直径20cm程度の焼土がみられた。土器片の内面に焼土範囲と符合する黒変、および黒色付着物を確認し、炉の可能性を考慮して精査を行ったが、接合後の検討では黒変が焼成時に形成されたことを否定する明確な根拠を得ることができなかった。焼土の入った土器が廃棄されていた可能性が考えられる。底面でピット1基を確認した。[堆積土] 炭化物および人工遺物が多量に含まれており、廃棄行為によって形成された人為堆積層と考えられる。[出土遺物] 土器が276点(9590.9g)出土した。図62-1は器内面の上位1/4が熱により赤化し、剥落が著しい。下位1/3は灰褐色～黒褐色で、器面の荒れもさほど目立たない。炉に使用された土器が廃棄されたものと考えられる。Pit1より二次調整のある剥片1点が出土している。堆積土からは剥片12点、微小剥離痕のある剥片5点、二次調整のある剥片、碎片各3点、磨製石斧、敲磨器類各2点、石鏃、石錐各1点が出土している。[時期] 出土遺物から縄文時代中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第7号不明遺構(剥片集中遺構)〔SX-07〕(図63～65)

〔特徴〕基本層序第Ⅲ層中に剥片石器32点が直径18cm、深さ14cmの範囲にまとまった状態で出土した。剥片の多くは折り重なる状態で接しているが、北東側にまとまる4点の石器は主要剥離面が地面に直立する状態であった。出土した剥片石器はいずれも珪質頁岩を素材としており、剥片3点、微小剥離痕のある剥片29点で構成される。母岩としては15以下のグループに分類できる。そのうち、2組については接合関係を確認した。(斉藤)

第8号不明遺構〔SX-08〕(図65)

〔特徴〕遺物がほとんどみられない基本層序第Ⅴ層で土器片が直径40cmほどの範囲に集中して出土した。土坑の可能性を考えてトレンチ調査をおこなったが、明瞭な掘り方を確認することはできなかった。土器44点(386.0g)はすべて同一個体と思われる。[時期] 出土遺物から縄文時代早期(ムシリⅠ式)に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第9号不明遺構〔SX-09〕(図65)

〔特徴〕基本層序第Ⅳ層上面でⅢ層のブロックを確認し、掘り下げたところ焼土(3層)がみられた。プランが不明瞭であったため周囲のⅣ層土を更に掘り下げたところピット1基を確認した。[時期] 周辺より出土している遺物、検出層位から縄文時代中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第1号土器埋設炉〔SR-01〕(図66)

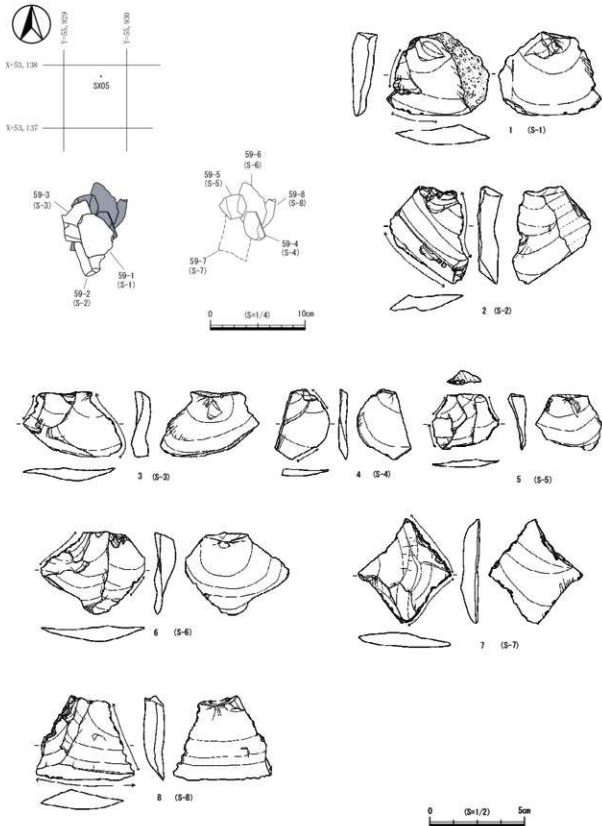


図 59 第 5 号不明遺構

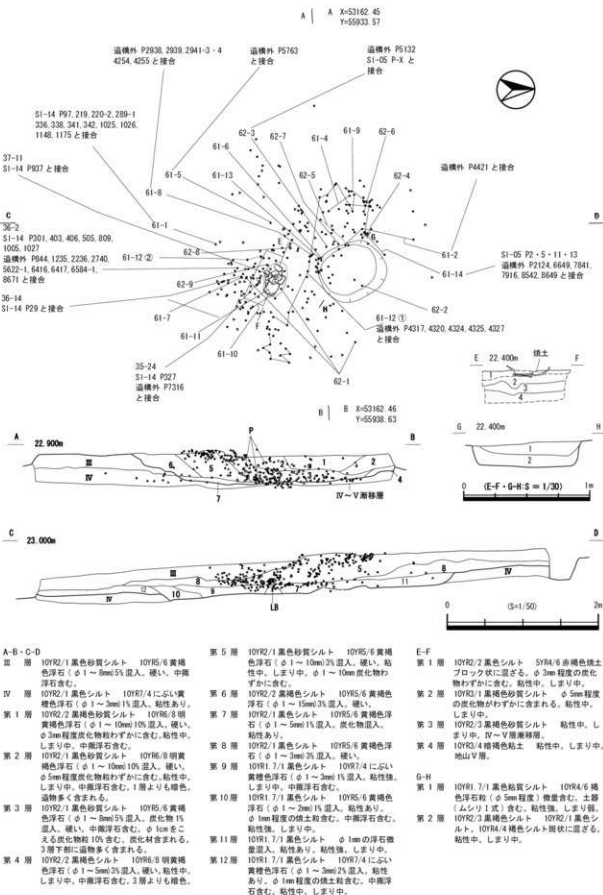


図60 第6号不明遺構(1)

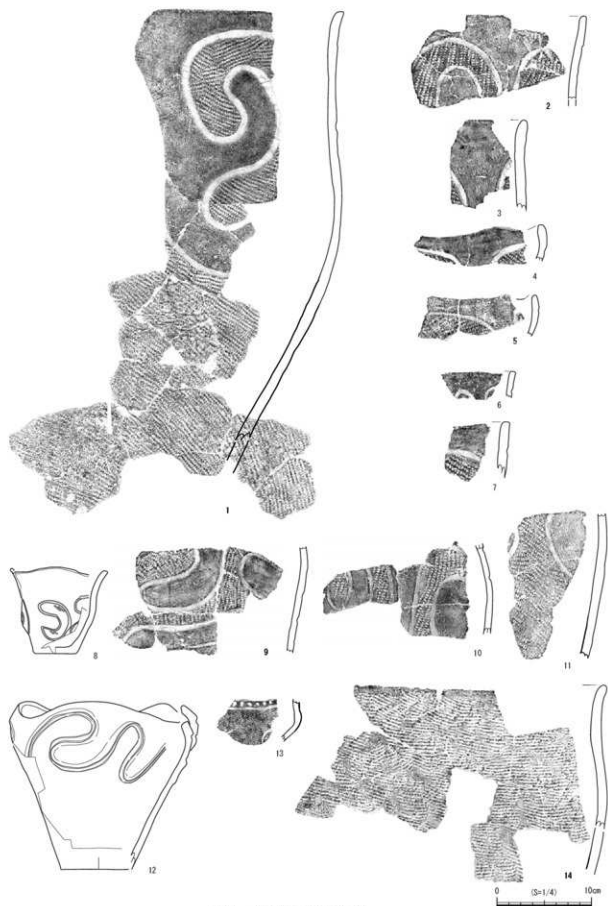


図61 第6号不明遺構(2)

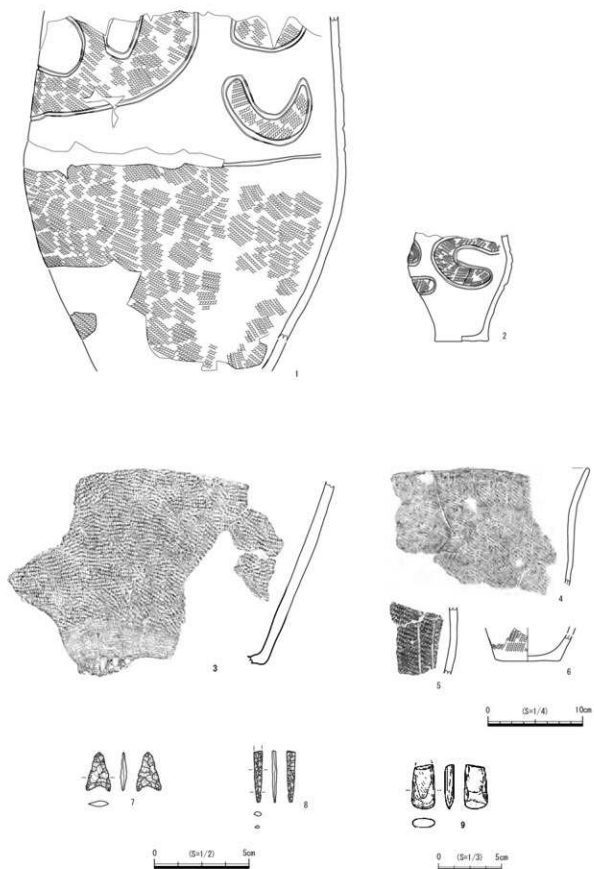


图 62 第 6 号不明遺構 (3)

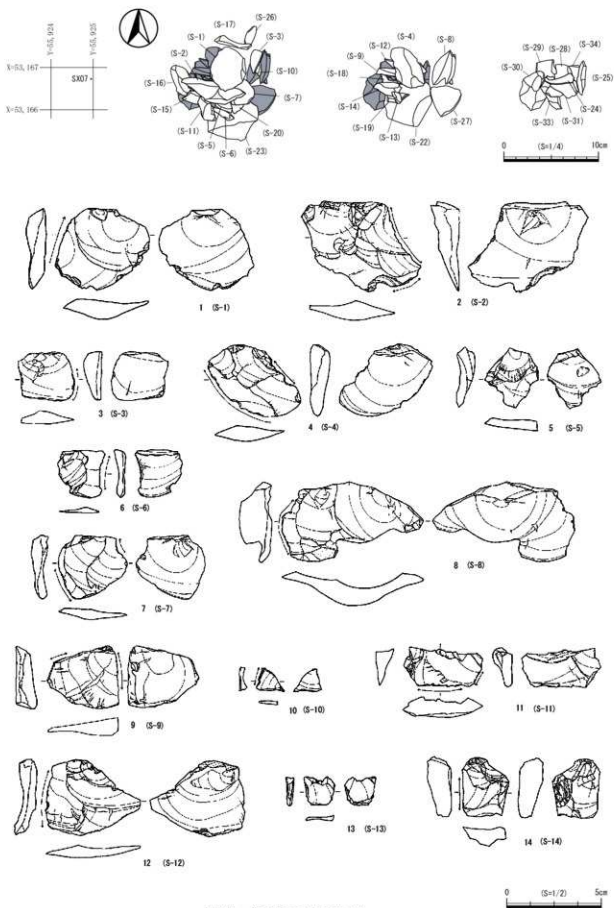


図63 第7号不明遺構(1)

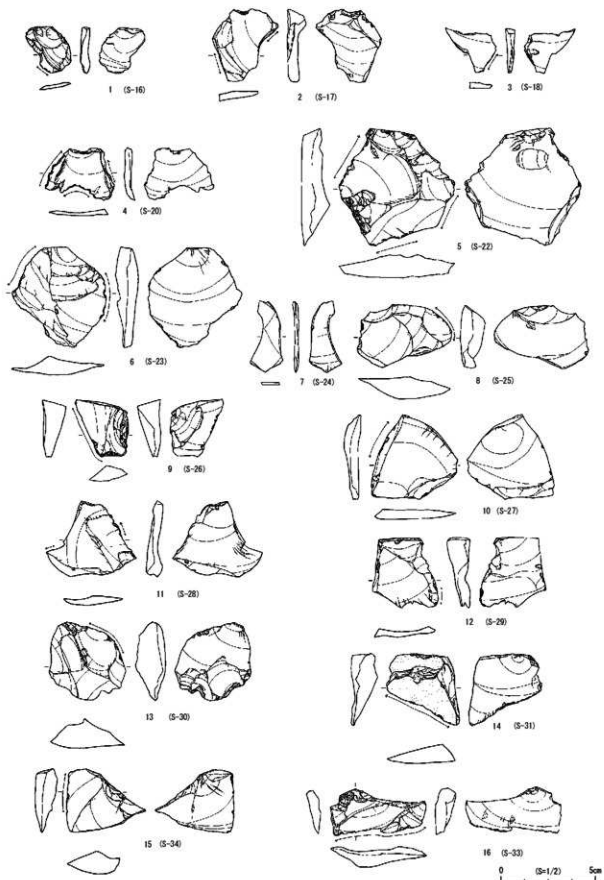


图 64 第 7 号不明遺構 (2)

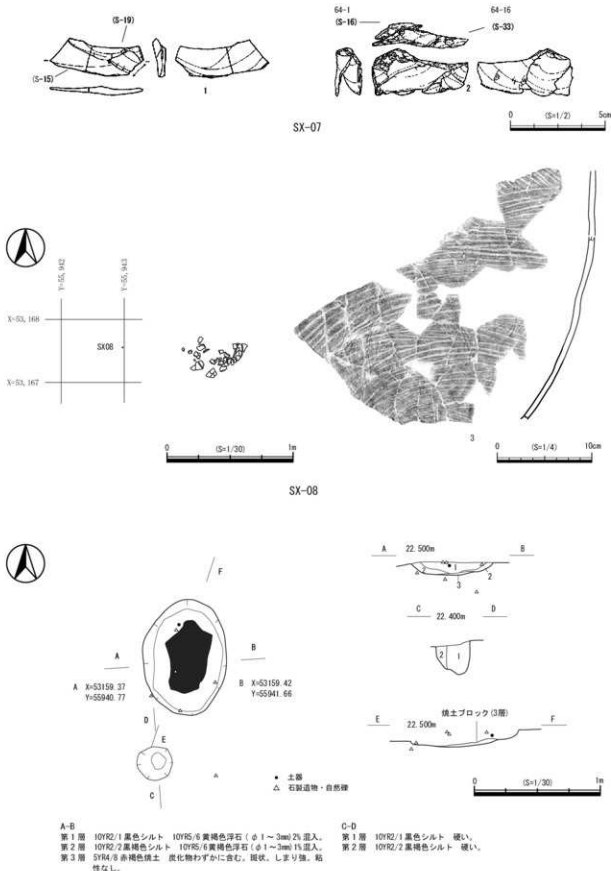
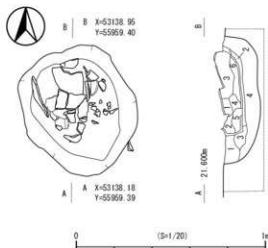


図65 第7号不明遺構(3)・第8号不明遺構・第9号不明遺構

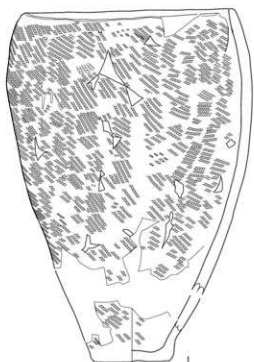


埋設土器内

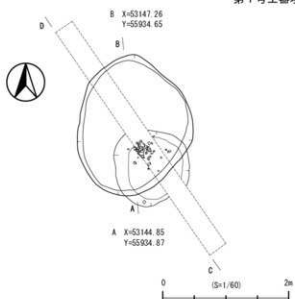
- 第1層 10YR2.2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色の焼土粒 30% 混入。
 第2層 10R1.7/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色の焼土粒少量混入。
 第3層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色の浮石 (φ 1 ~ 8mm) 2% 混入。焼土粒微量混入。
 第4層 10YR5.8 黄褐色焼土層 10YR2/1 黒色のシルト少量混入。炭化物少量混入。
 第5層 10YR2.2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1 ~ 3mm) 2% 混入。焼土微量混入。
 第6層 10YR2.2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色の焼土粒 3% 混入。

掘り方

- 第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1 ~ 3mm) 1% 少量混入。
 第2層 10YR2.2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色焼土粒 (φ 1 ~ 3mm) 1% 混入。
 第3層 10YR2.2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色焼土粒 10% 混入。
 第4層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1 ~ 4mm) 1% 混入。炭化物わずかに含む。

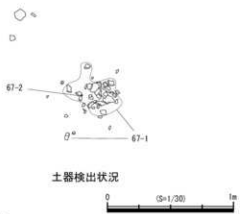
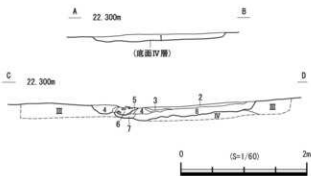


第1号土器埋設炉 (SR-01)



A-B・C-D

- 第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 中層浮石起源と思われる黄褐色微細粒子含む。Ⅲ層上部埋没。
 第2層 10YR1.7/1 黒色シルト
 第3層 10YR2/1 黒色シルト
 第4層 10YR2/1 黒色シルト
 第5層 10YR4.4 褐色シルト 軽い焼土。
 第6層 10YR2.1 黒褐色と3/3 暗褐色シルト 焼土 (φ 1 ~ 5mm) 1% 混入。ただし、土器内面に明確な焼土面はなく土器内も焼けていない。
 第7層 10YR2.2 黒褐色シルト 焼土粒 (φ 1 ~ 10mm) 1% 混入。第5層よりはっきりしている。
 第8層 10YR1.7/1 黒色シルト



土器検出状況

第2号土器埋設炉 (SI-13)

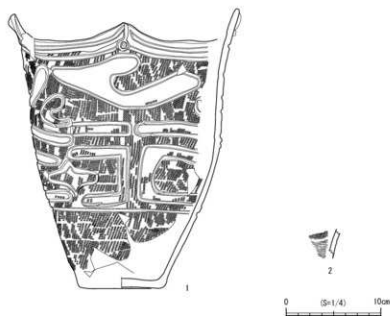
図66 第1号土器埋設炉・第2号土器埋設炉 (1)

〔特徴〕 基本層序第Ⅳ層で粗製土器の深鉢が横倒しの状態で据えられていた。土器の状態はやや口縁部が斜め上位に据えられており、土器内部には厚さ5cmほどの焼土が堆積していた。この焼土はブロック状で黒色土と斑状に混ざっているが、焼土面の状態は水平な面をなしており、さらに土器に接する掘方埋土が焼土を形成していることなどから、土器内部で火が焚かれた可能性が考えられる。土器内面は、堀方内に設置された状態の上部が焼けていることからこの可能性は支持される。〔時期〕埋設土器より縄文時代中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第2号土器埋設炉〔SI-13〕(図66)

〔検出状況等〕 第Ⅲ層を掘り下げ中に、径約2.2mの円形の落ち込みを検出し、SK-07とした。しかし数cm掘り下げた時点で落ち込みは認識できなくなり、遺構としてとらえることは困難であった。そのため、更に第Ⅲ層を掘削した。これより約30cm下位で焼土と横位に埋設された土器を検出した。周辺にビット状のシミが黒色土中に認識されたため、SI-13と命名し精査をおこなったが、ビットは確認できず、床面も検出できなかった。従って、積極的に住居跡としてとらえることはできず、整理段階で土器埋設炉とした。ただし、遺物の注記等はSI-13を使用しているので、資料表見の際などは注意されたい。本遺構周辺の遺物の出土状況を見ると、遺物の分布が薄く上位から掘り込みが存在したと考えられ、先に述べた落ち込みは本遺構の一部に堆積した土層であった可能性が高い。

〔特徴〕 土器は斜位に埋設されており、土器下および底部周辺には焼土が形成されていた。土器内部に焼土は認められなかったが、熱のため器内面が荒れており、土器内で火を使用したものと考えられる。いわゆる斜位土器埋設炉である。〔出土遺物〕 炉体は縄文時代後期初頃の小型の深鉢である。剥



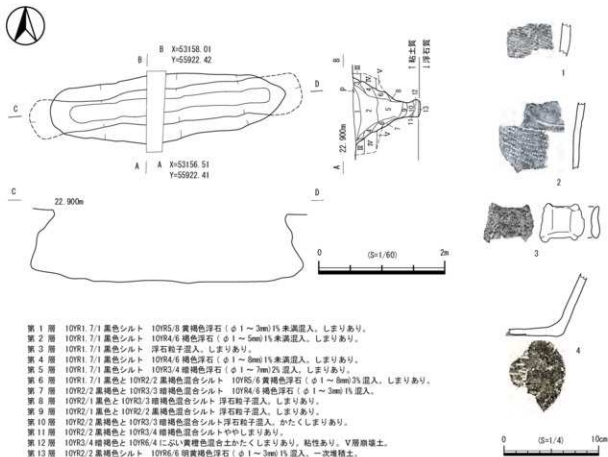
第2号土器埋設炉出土遺物

図67 第2号土器埋設炉(2)

片が 1 点出土した。(中村)

第 1 号溝状土坑〔SV-01〕(図 68)

〔堆積土〕底面から第 9 層にかけては地山に由来する暗褐色ロームの崩壊土が堆積している。黒色土の薄層と、ローム土に漸移的な色調変化がみられることから自然堆積によって埋積が進行したものと考えられる。〔掘方〕土坑両端の平面形態は円形を呈しており、長軸方向の断面形状は底面付近で袋状に広がる。〔出土遺物〕土器が 32 点(388.4g)出土しているが、すべて周辺包含層からの混入と考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)



SV-01

図 68 第 1 号溝状土坑

ピット群 (図 69)

Ⅱ K ~ Ⅱ P-106 ~ 112 の 24 × 20m の範囲でピット群が検出された。ピットの平面形は円形ないしは楕円形で、堆積土には十和田 b 降下軽石を含んでいる。従って、掘り込み面は第Ⅱ層中と考えられ、本来の深さは 20cm 以上になると思われる。詳細な時期は不明だが、十和田 b 降下軽石を堆積土に含むことから弥生時代かそれ以降の所産と考えられる。(中村)

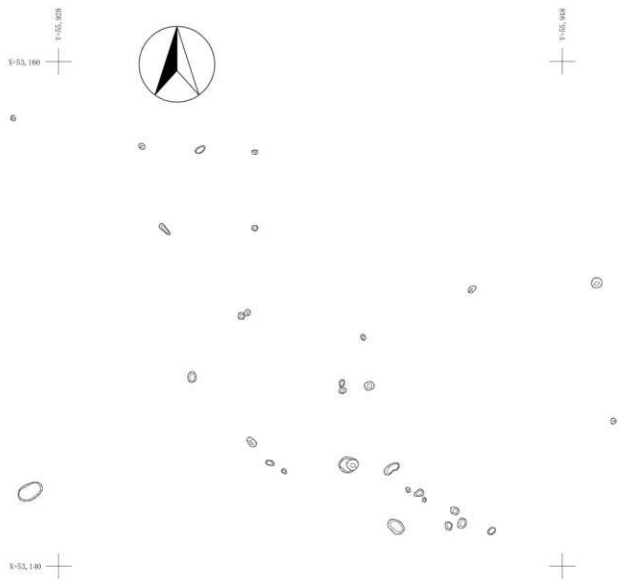


図 69 ピット群

第4章 遺構外出土遺物

第1節 土器・土製品

遺構外からは9,350点(143,140.8g、うち不明14)の土器が出土した。層序毎の内訳は、第Ⅱ層から942点(13,862.4g)、第Ⅲ層から7,436点(119,240.7g、うち不明10)、第Ⅳ層から925点(9,556.8g、うち不明4)、第Ⅴ層から29点(349.9g)である。調査区内は畑地造成のため削平されていたこともあって、第Ⅱ層・第Ⅲ層の分布は限定されたものであった。しかし、土器の全出土量のおよそ8割が第Ⅲ層から出土している事実から、第Ⅲ層が主要な包含層であることがわかる。第Ⅲ層出土土器はそのほとんどが縄文時代中期末葉のものである。第Ⅳ層・第Ⅴ層からは縄文時代早期・前期前葉の土器が出土した。以下に遺物の分類を述べる。

1 縄文土器

第Ⅰ群土器(図70-1～6)

白浜・小舟渡平式土器群に比定されるもの。

第1類(図70-1) 口縁部に爪形刺突と沈線が施されるもの。

1は、口縁部に縦位の爪形刺突と横位の爪形刺突を各1列、間隔を開けて2段巡らす。この範囲に鋸歯状沈線が施される。口唇部は上面から刻まれている。内面は口縁部に条幅0.5mmの条痕調整の痕跡を残すが、それ以下は縦方向のミガキである。

第2類(図70-2～4) 口縁部に爪形刺突文が施されるもの。

2～4は、口縁部に爪形文と貝殻復縁刺突が施される。口唇部は前面に刻みが施されている。

第3類(図70-5・6) 口縁部に爪形刺突文のないもの。

いずれも条痕調整である。5は浅い条痕調整が施される。砂粒・粘土の移動痕が多く、条の幅は約2mmである。口唇部は上面を刻んでいる。6は条幅・条間とも1.5mmで、溝底は平坦である。

第Ⅱ群土器(図70-7～36)

物見台式に比定されるもの。ヘラ描きの沈線と貝殻復縁刺突文により文様が施される。貝殻復縁刺突文は沈線と平行に施される場合と、沈線上に施される場合がある。文様の屈曲点に円形の刺突文が施されるものもある(24, 27～29, 31・32・34)。文様モチーフは小片が多いため全容を知り得ないものが多いが、口縁部の平行沈線間に弧線文を向かい合わせに配したもの(7)、複合鋸歯文風のもの(27～30, 32・33)などがある。27～29・32は同一個体と思われ、内面に条幅・条間とも0.5mm以下のハケメ状の調整痕が認められる。32内面には工具が静止した痕跡が認められ、工具の形状は幅10mmの板状工具と考えられる。

第Ⅲ群土器(図70-37～43、図71)

ムシリⅠ式に比定されるもの。

第1類(図70-37～43、図71-1～4)

微隆起線で幾何学的な文様を描くもの。水平な微隆起線間を斜位や縦位の平行な微隆起線で区画し、区画内に梯子状に微隆起線を貼り付ける。微隆起線上には絡条体圧痕が施されるもの(図71-3・4)もある。

第2類(図71-5)

口唇部下に二条の微隆起線を巡らし、微隆起線上に縄文を回転施文するもの。浅く、条幅・条間とも不揃いな条痕が施される。

第3類(図71-6～16)

条痕調整が施されるもの。条幅3～6mmのものが大多数で、条間と条幅は同程度である。断面はやや丸みを帯びる。内面に同様の条痕が施されるものがあるが、外面とは条間・条幅とも異なるものがある。図71-16は、内外面とも浅く条幅・条間とも不揃いな工具による条痕が施される。

第4類(図71-17～20)

条痕により菱形や円形の幾何学的なモチーフを描くもの。条痕の工具は第3類と同様である。

第5類(図71-21～28)

外面に絡条体圧痕を持つもの。絡条体圧痕を横位・斜位に施している。間隔は5mm～10mmである。内面には条幅・条間とも0.5mm～1mmの条痕が施されるものが多い。

第6類(図71-29～32)

深い沈線に施すもの。沈線は幅・深さとも2.5mmで、それぞれの条は独立した棒状工具で引かれていると思われる。

第7類(図71-33・34)

無文のもの。薄手で、丁寧にナデられている。34は乳房状尖底の底部である。外面の調整は上記の1～6類とは異なるものの、胎土は類似し、本群に伴うものと考えられる。

第IV群土器(図72、図73-1～12)

縄文時代前期前葉～中葉に属するもの。

第1類(図72-1～5・7・8・10・11・26)

1～3は同一個体と思われる。口唇部上面にヘラ状工具による刻みが施される。口唇部下約15mmを無文帯とし、横位のナデ調整痕が残る。無文帯以下には0段多条RL原体の閉じた末端を上に向けて横位回転施文する。内面はヘラ状工具による横位のナデ調整が施され、砂粒の移動痕が残る。胎土・焼成とも良好で、堅緻である。胎土には繊維を含んでいる。

第2類(図72-12・14・15・17～22、24・25、73-2～5)

斜縄文が施されるもの。口唇部はナデられているが、口縁部は全体に不整な小波状の様相を呈している。第1類に比べると軟質で、繊維が目立つ。

第3類(図72-16)

結節回転文が施されるもの。LR縄文施文後、結節回転文が施される。口縁部は第2類と同様である。胎土には繊維を含み、やや軟質である。類例は和野前山遺跡第VIII群土器に見られる。

第4類(図72-6・9・13・29)

結束第1種羽状縄文を施すもの。口縁部は第2類・第3類と同様である。9は原体の上下を変

えて施文し、文様が菱形を呈する。29は胴部上半に0段多条のRL縄文を横位回転施文し、胴部下半に結束第1種羽状縄文を施文する。底部は尖底である。胎土には繊維を含みやや軟質である。

第5類(図73-1)

押し引き沈線が施されるもの。胴部には1.2cmの幅で縄文が4段施されている。早稲田6類b(佐藤・二本柳・角鹿 1960)に相当する。

第6類(図72-23・30)

口縁部から胴部に単軸絡条体1類を施文するもの。器形・調整、胎土の点では第2類～第4類と同様である。

第7類(図72-28)

口縁部～胴部上半に組紐の回転文、胴部下半にLR縄文を回転させるもの。

第8類(図73-7・8)

底部が上げ底で、底面に縄文が施文されるもの。胴部には回転縄文が施される。7は、付加条またはLR直前段多条原体を横位回転する。文様は底部付近まで施される。器面の一部に、縄文施文後、器面上位から移動した粘土が覆い被さり、その上に更に縄文が施文された状況が観察される。粘土が柔らかい状態で施文したと思われる。内面には条幅2.5mm、条間1～1.5mmの条痕調整が残る。3～4条一単位である。底面は外面と同じ原体が回転施文される。胎土は繊維を含むが第IV群第1類～第7類と比較すると少ない。

第9類(図73-9～12)

円い堅い繊維により結節回転文が施されるもの。内面は平滑に調整される。繊維を微量含んでいるが、第IV群土器の中ではもっとも少なく硬質である。

第10類(図41-8) 円筒下層d式に相当するもの。

第V群土器(図73-13～21)

縄文時代中期前葉～中葉に比定されるもの。本群の大部分は図示した。13から15は口縁部に縄文原体の側面圧痕による平行線文・鋸歯文などを施す。円筒上層a式である。17・18は口縁部文様帯下端が2条の隆帯で区切られる。口縁部文様帯には隆帯と刺突が施される。円筒上層c式である。20・21は口縁部文様帯に素文の隆帯を施すもので、円筒上層d式である。

第VI群土器(図74-1・2)

縄文時代中期大木8b式・榎林式に比定されるもの。図74-1はRLR縄文施文後、隆沈線による渦巻き文を施文する。口縁部は回線上に無文部が形成される。図74-2は口縁部が肥厚し、波頂部下に内外面とも凹点が施される。

第VII群土器(図74-3～16)

縄文時代中期大木9式・最花式に比定されるもの。

第1類(図74-5・6)

磨消縄文により逆U字縄文が施されるもの。沈線はA1⁽¹⁾タイプである。大木9式に比定される。

第2類 (図74-3・4・7・8・10～12・16)

頸部に列点が施され、口縁部は無文である。胴部は縄文地紋に垂下する沈線文が施される。沈線はCタイプである。最花式に比定される。

第3類 (図74-9・14)

口縁部に円形刺突文を施すもの。胴部に単軸絡条体1類回転文が施される。

第4類 (図74-13・15)

口縁部を折り返し、無文部とする、あるいはナデによって折り返し口縁風の効果を呈するもの。

第Ⅷ群土器 (図74-17～26、図75、図76-1～8)

縄文時代中期大木10式に比定されるもの。本遺跡で時期比定できる遺物の大半を占める。広義の磨消縄文により曲線的な文様を描くものが大半であるが、遺物のモチーフの全容がわかるものは少ない。用いられる沈線はAタイプ⁽¹⁾のみである。ここでは、遺構出土遺物の中で遺構外出土遺物に見られないタイプも含めて、手法により分類する。なお、磨消縄文の定義は第6章第1節を参照されたい。

第1類 (図74-17～26、図75-1～22・27、図76-4～8)

広義の磨消縄文により曲線的な文様を描くもの。

第2類 (図75-23～26・28)

広義の磨り消し縄文(第6章第1節の属性の分類参照)によって曲線的な文様を描くが、稜沈線を用いるもの。図75-17～22は、沈線による区画内に円形刺突文を充填する。

第3類 (図61-12)

隆起線を用い曲線的な文様を描くもの。

第4類 (図37-1、48-4)

広義の磨消縄文を用いて平行化した文様を描くもの。

第5類 (図19-11)

隆起線を用いて横方向に展開する文様を描くもの。

第6類 (図76-1～3)

口頸部に半円形の刺突を施すもの。

第Ⅸ群土器 (図76-9～21、図77)

第Ⅶ群～第Ⅷ群に伴うと考えられるもの。第Ⅶ群と第Ⅷ群の出土量の比率から考えて、大半は第Ⅷ群に伴うものであろう。

第1類 (図76-9～21、図77-1～4)

胴部に縄文を施す深鉢。口縁部が直立するもの(図76-9・12)、やや内湾気味のもの(同10・11・13)、やや外反するもの(同16～18、21)、やや内傾するもの(19～20)がある。用いられる縄文は単節で、回転方向はほとんどが縦位回転である。

第2類 (図19-14、49-9)

無文の土器。

第3類 (図77-5～9)

小型の土器。

底部 (図 77-10・11)

2 点図示した。接合面が良好な状態で観察される。底部円盤の外周に、指押さえの痕跡が顕著に残る。底部資料にはこのような事例が多く認められる。

第 X 群土器 (図 78、図 79-1 ~ 9)

縄文時代後期初頭から前葉のもの。用いられる沈線は A1 である。

第 1 類 (図 78-12)

頸部・胴部に横位・縦位の隆帯をめぐらせ、隆帯上に棒状工具による刺突を施すもの。牛ヶ沢 III 群に比定される。

第 2 類 (図 78-1 ~ 11・13、図 79-1 ~ 3)

沈線により渦巻きや三角形を組み合わせた入り組み文を描くもの。弥栄平式に相当する。

第 3 類 (図 79-4 ~ 9) 十腰内 I 式に比定されるもの。

第 XI 群土器 (79-10 ~ 17)

縄文時代晩期のもの。79-12・15 は眼鏡状隆帯を持つ浅鉢である。16 は口縁部に平行沈線をめぐらし、下端の平行沈線に粘土粒を貼り付ける。粘土粒上には沈線が施される。胴部は縦位の条痕が施される。これらは大洞 C2 式に比定されると考えられる。

各群土器の出土傾向は以下の通りである。

第 I 群土器 SI-01 に近い調査区北部に多い。

第 II 群土器 調査区南部の第 V 層に集中する。

第 III 群土器 谷の全面から出土する。谷の西側からは出土しない。谷の東側の尾根上からも出土する。

第 IV 群土器 谷から多く出土するが、谷の西側、調査区西端からも出土する。谷の東側にはほとんど分布しない。

第 V 群土器 谷の南部からごく少量出土する。

第 VI 群土器 調査区北西部の谷と SK-15・16 周辺に集中する。

第 VII 群土器 II 0 ~ II P-102 ~ 104 グリッドにのみ見られる。

第 VIII・IX 群 削平を受けて表土直下で第 IV ~ V 層が露出する区域をのぞきほぼ調査区全域から出土する。掘り込みの確認できた遺構上に集中する傾向があるが、それ以外にも SN-16 付近、II G ~ II J-109-114、II N ~ II O-102 ~ 105 に集中地点が見られる。SN-16 付近の集中は、SN-16 が本来掘方を持つ遺構の一部であった可能性を示唆する。後二者は、遺構外にも遺物の廃棄地点があったものと解釈できる可能性がある。

第 X 群土器 第 1・2 類は谷中央部から南部にかけての II H ~ II M-104 ~ 114 から出土した。

第 3 類は II K ~ II M-110 ~ 112 グリッドから少量、II C ~ II D-122 にやや集中して出土した。

第 XI 群土器 谷中央部、II J ~ II N-103 ~ 111 から出土する。

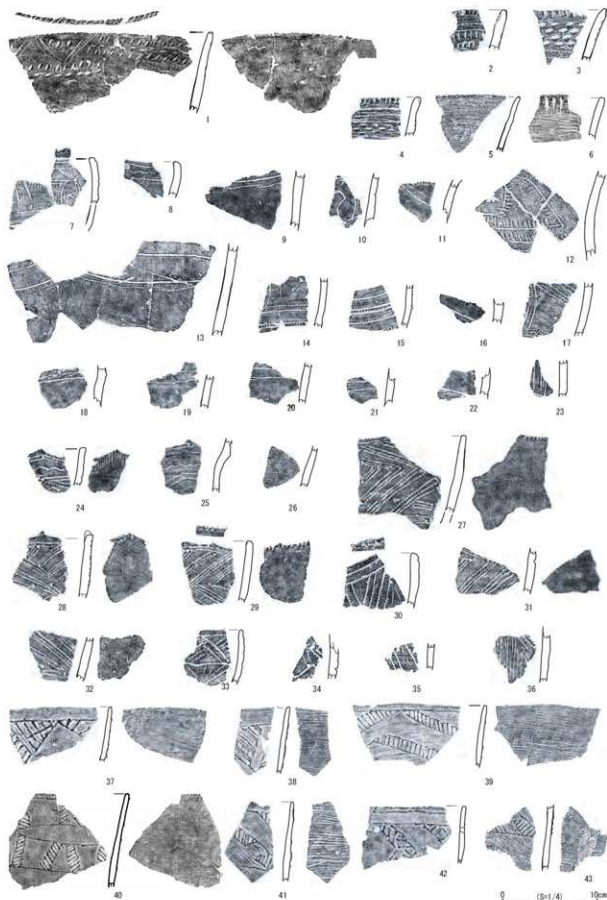


图70 遺構外出土土器(1)



図 71 遺構外出土土器 (2)

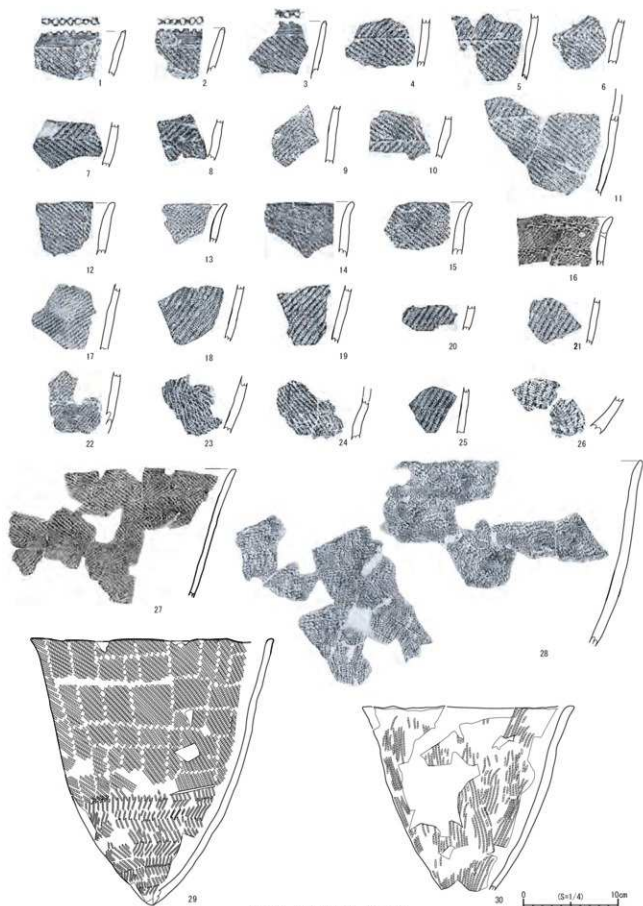


图 72 遺構外出土土器 (3)

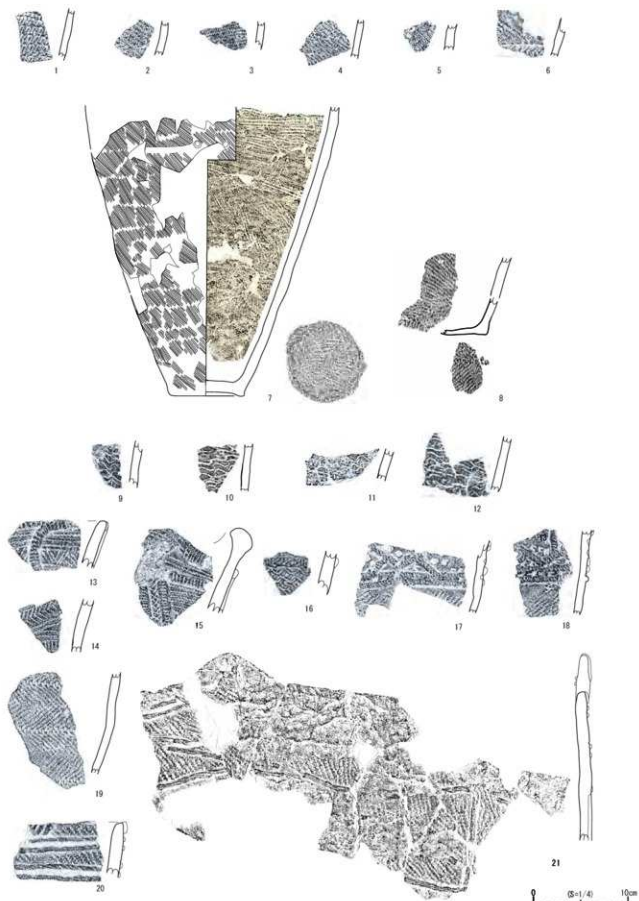


图 73 遺構外出土土器 (4)

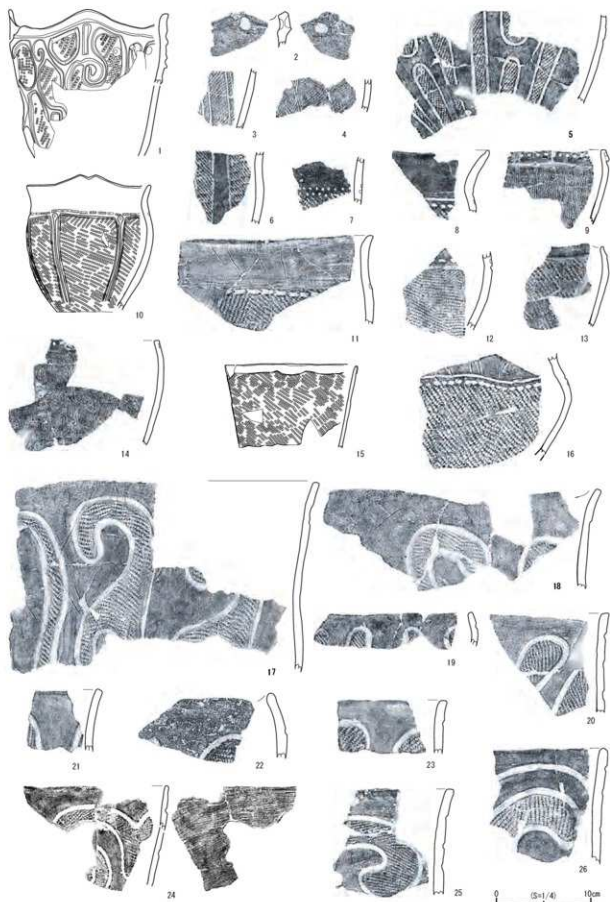


图 74 遺構外出土土器 (5)

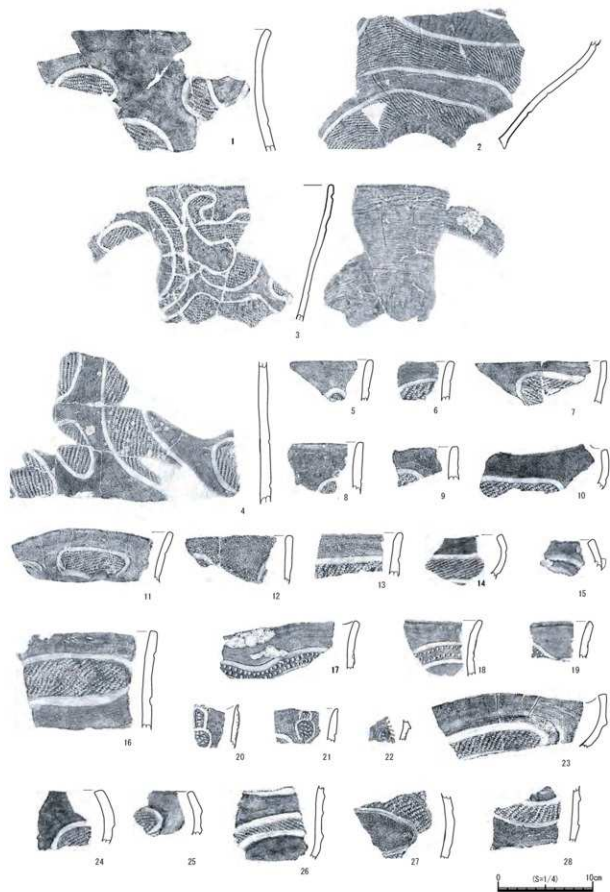


图 75 遺構外出土土器 (6)

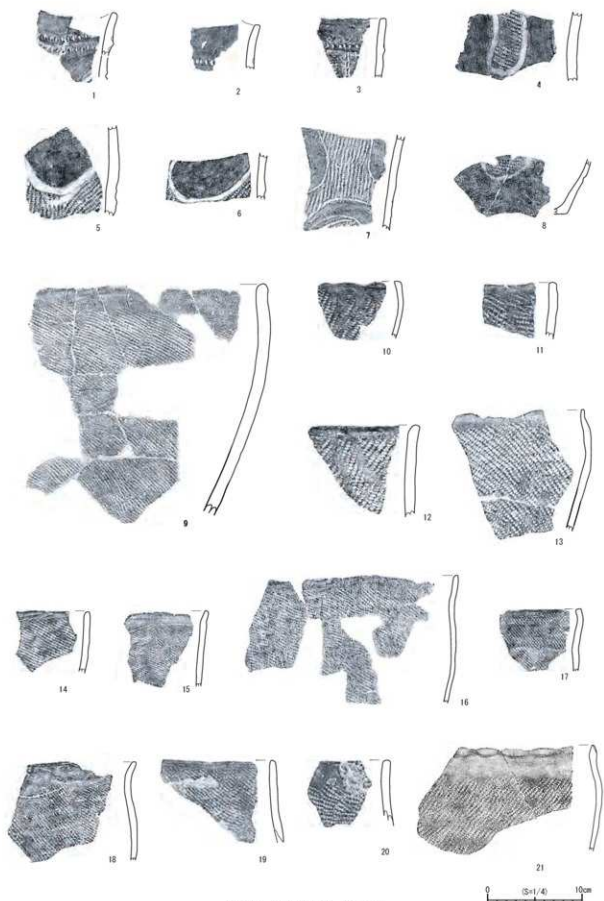


图 76 遺構外出土土器 (7)

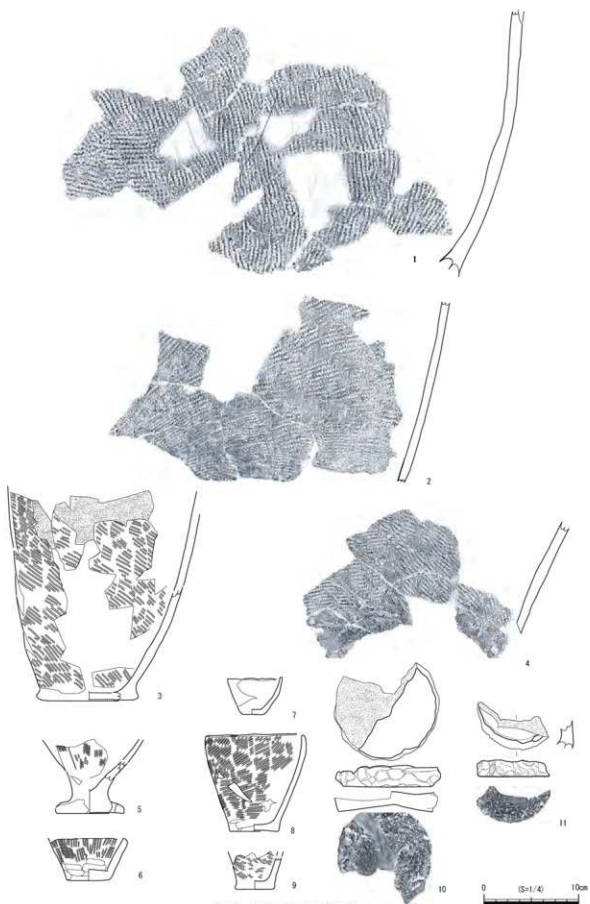


図 77 遺構外出土土器 (8)

縄文時代早期～前期中葉の土器は第Ⅳ～Ⅴ層を主要な包含層とし、出土量は少ないが、各群によって分布傾向に明らかな違いがある。第Ⅰ群土器期は調査区北部、第Ⅱ群土器期は調査区南部、第Ⅲ群土器期は調査区東半、第Ⅳ群土器期は調査区西半をそれぞれ主体としていたといえ、各時期の土地利用のあり方が異なっていたことを示すものである。

2 古代の土器 (図 79-18・

19)

遺構外から極少量出土した。古代の土器で図化に耐えるものは2点のみであった。平安時代のもと考えられる。

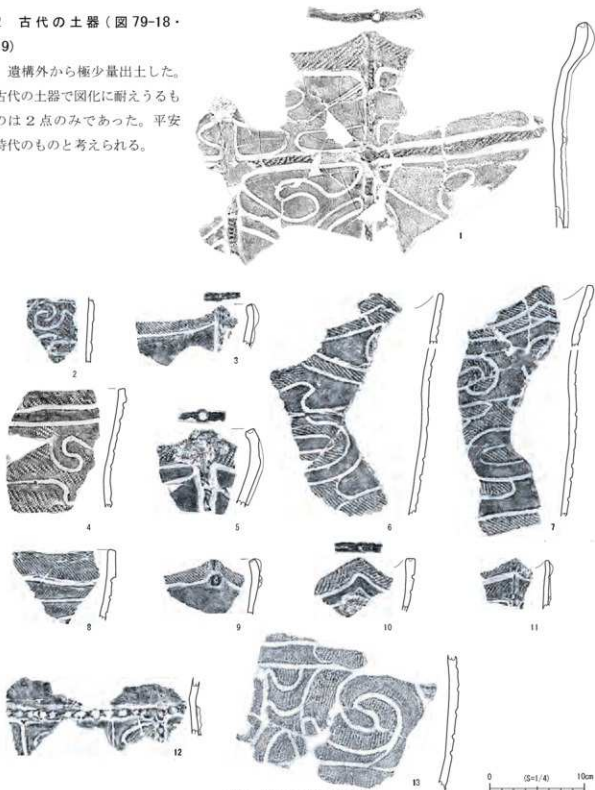


図 78 遺構外出土土器 (9)

3 土製品 (図 79-20)

環状の土製品で、中央上方から下方に貫通孔がある。

(中村)

註

(1) 沈源は次のように分類した。観察表中に用いる分類も同様である。

A1 類：先端の丸い工具を器面に垂直に当てたもの。 A2 類：先端の丸い工具を器面に垂直に当てたもの。A1 類に比べて深い。 B 類：先端の丸い工具を垂直に当てたもので、A 類より深い。 C 類：先端が平たい工具を器面に垂直に当てたもの。 D 類：先端の丸い工具を器面に下から斜めに当てたもの。



図 79 遺構外出土土器 (10)・土製品

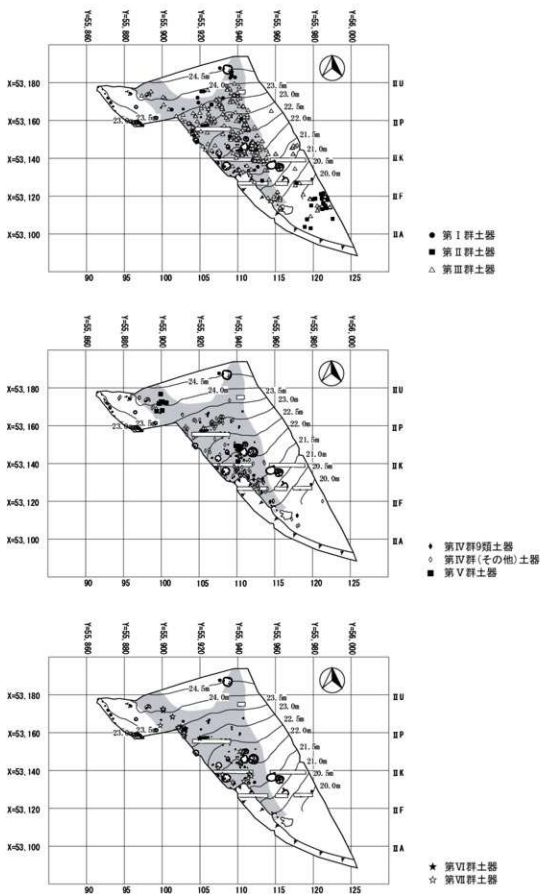
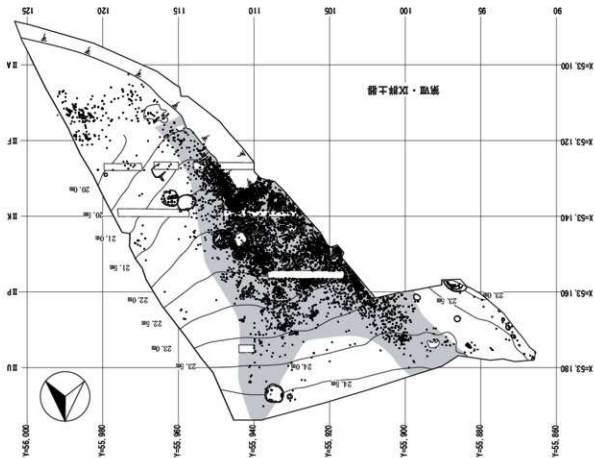
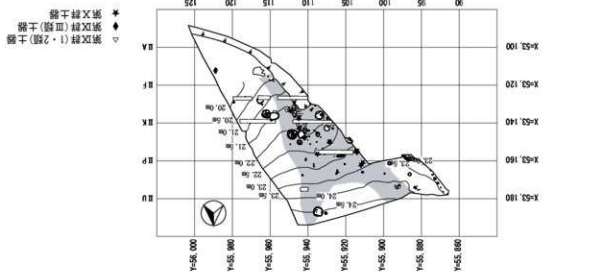


図80 遺構外土器出土状況(1)

图 81 遺構外土器出土状況 (2)



第2節 石器

遺構外では剥片石器 632 点、礫石器 126 点を含む総数 4,596 点の石製遺物が出土している。これらのうち、本遺跡を代表する資料 116 点を図示した。ここでは、各資料の個別的な特徴について記載する。文章中で用いている各器種の内容、細別類型については第 6 章第 4 節で述べる。

1 石鏃

第 I 層より I a 類、II c 類が各 1 点出土している。第 II 層からは I a 類 (83-1)、I b 類 (83-2)、I c 類 (83-3) の 3 点が出土しており、いずれも無茎鏃 (I 類) である。第 III 層では I a ~ d 類の無茎鏃の他に有茎鏃 (II 類) が伴うが、主体をなすのは I c 類 (83-10 ~ 31) である。

2 石槍

第 III 層より 3 点、第 IV 層より 1 点、総数 4 点が出土している。第 III 層出土資料は、いずれも破損品であり、基部もしくは先端部が欠けている。83-41 については比較的厚みがあるため、未製品・失敗品の可能性が考えられる。

3 石匙

第 I 層で 1 点、第 III 層で 5 点、第 IV 層で 7 点、総数 13 点が出土している。84-1、85-1 は腹面右側縁に調整打面を加えて背面左側縁に直線的な刃部もしくは深い調整刻溝が加えられている。特に 85-1 は I 類を代表する資料である。

4 石錐

第 II 層で 1 点、第 III 層で 5 点、第 I 層および攪乱箇所から 2 点、総数 8 点が出土している。83-4 はつまみ部を円形に調整しており、刃部の径は約 3mm である。84-5 はつまみ部が直線的に整えられている。平面形態は石鏃 I b 類に近いが、側縁の内彎は二次的な加工とは判断できず、IV 類に含めた。

5 二次調整のある剥片 (不定形石器)

第 I 層で 1 点、第 II 層で 8 点、第 III 層で 63 点、第 IV 層で 31 点、第 V 層で 2 点の総数 105 点が出土している。

6 磨製石斧

第 II 層で 4 点、第 III 層で 7 点、第 IV 層で 4 点、総数 15 点が出土している。これらのうち、第 III 層と第 IV 層ではそれぞれ 1 点の未製品が含まれる。多くは緑色細粒凝灰岩、輝緑岩を素材としているが、87-2 は砂岩を素材とし、片側に礫面を残した状態で剥離調整と研磨が加えられている。85-10 は折損面にパッチ状の光沢面 (写真図版 37) が形成されており、折損によって生じた鋭利な破損面が挿器の刃部として利用された可能性が考えられる。85-7、85-11 は基部付近に線状の敲打痕 (敲 I 類) が形成されており、一時的に刃部側を保持する形で敲打器として使用された可能性が考えられる。

7 石皿・台石

第 II 層で 1 点、第 III 層および第 IV 層で各 2 点、総数 4 点が出土している。85-9、86-11 は明瞭な縁が形成され、石材には砂岩が用いられている。86-12 は発達した光沢面が凹面を縁取る形で帯状に形成されており、凹面の中央部分では光沢の発達がわずかに弱い。

8 砥石

第 III 層で 1 点が出土している。86-11 は石皿 II 類の機能部、脚部に幅 5 ~ 15mm、深さ 5mm 程度の

溝が数条形成されており、石皿破損後の転用品と考えられる。同様の溝は 85-9、89-4 などの粗粒質の石材が用いられている石皿類の裏面にも形成されている。

9 磨石

第Ⅱ層で 2 点、第Ⅲ層で 16 点、第Ⅳ層で 43 点、第Ⅴ層で 5 点が出土している。攪乱箇所から出土した 2 点を含めると総数 68 点が出土している。本遺跡で出土している磨石は磨面が礫面の稜線部分に形成されるもの（磨Ⅰ類）が主体となり、遺構外の層位的な出土傾向としては半数以上が第Ⅳ層からの出土である。

10 凹石

第Ⅲ層で 8 点、第Ⅳ層で 6 点、総数 14 点が出土している。本器種は使用痕が単独になるものを取り上げているが、磨痕が複合してみられるものが圧倒的に多く、量的な評価にあたっては敲磨器の点数を考慮する必要がある。凹みの形状は線状（凹Ⅰ類）が主体である。

12 敲石

第Ⅲ層で 3 点、第Ⅳ層で 1 点、第Ⅴ層で 1 点、総数 5 点が出土している。凹石同様、敲打痕が単独にみられるものを敲石としているが、「磨り」や「凹み」等の使用痕と重複する率は高い。円礫の一部に敲打痕跡がみられるもの（90-3）がほとんどであるが、敲打によって機能部分が整形されているものもみられる。（86-4）

13 敲磨器

第Ⅳ層で 9 点が出土している。単独の機能としては上記の「磨石」、「凹石」、「敲石」と重複した内容を有するものである。本遺跡では稜線上に形成された磨痕（磨Ⅰ類）と線状の凹み（凹Ⅰ類）が共存する資料が多くみられる。

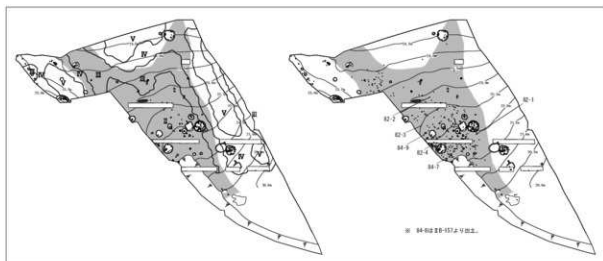
14 石錘

第Ⅲ層で 1 点、第Ⅳ層で 2 点、攪乱範囲より 2 点、総数 5 点が出土している。石材には頁岩、砂岩、粘板岩が用いられている。いずれの資料でも抉入部の剥離の深さが浅く、両極加撃によって抉りが加えられている。

第Ⅲ層および第Ⅳ層で出土した自然礫、礫石器、剥片石器等の石製遺物の空間分布を図 82 に示す。第Ⅳ層の分布がやや広域になるのは精査を行うことのできた層の偏りに起因する。遺構の上位に位置する資料がみられるが、今回は現場での所見を優先し、敢えて遺物の出土地点を遺構内に回帰させるといった操作は一切行っていない。（斉藤）

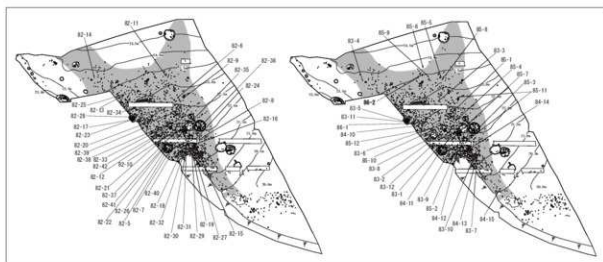
器種	物型	I層	II層	III層	IV層	V層	カタラン	総計
石錘	I a 類	1	1	9	5			16
	I b 類		1	4	3			8
	I c 類		1	32	6			40
	I d 類			2	1			3
	II a 類			5				5
	II b 類			4				4
	II c 類	1		4				5
	未製品・失敗品		6	4				10
石輪	未製品・失敗品		2	1				3
	未製品		1					1
石匙	I 類		2	1				3
	II 類		2	2				4
	III 類	1	1	2				4
	IV 類			2				2
石匙	—		2	3	1			7
	II 類	1	1	1				3
	IV 類			4				4
両極加撃痕跡のある剥片	—		1	10	3			14
	二次調整のある剥片	1	8	63	32	2		108
微小剥離痕のある剥片			1	37	20			58
剥片			20	112	78	2		212
砂片			9	84	23			116
石核				2				2
磨製石斧	—		5	7	3			15
	未製品		1	1				2
礫石	—		2	16	43	5	2	69
	敲石		3	1	1			5
敲磨器	—			1	9			9
	平円状偏平打製石器?		1					1
凹石	—		8	6				14
	石籠・石石		1	2				3
敲石	—		1	2				3
	石錘		1	2				3
石製品	—		1					1
	未製品			1				1
総計		5	51	427	255	11	7	756

表 3 遺構外出土石器集計表



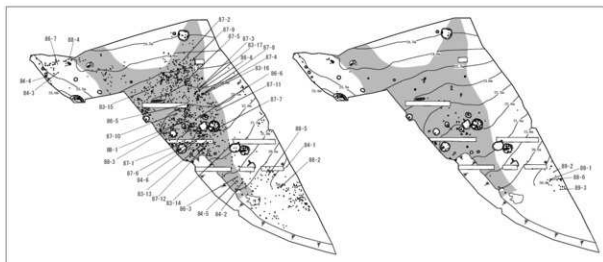
第1層除去後に検出された層序区分

遺構外第Ⅱ層出土石製遺物分布図



遺構外第Ⅲ層出土石製遺物分布図①

遺構外第Ⅲ層出土石製遺物分布図②



遺構外第Ⅳ層出土石製遺物分布図

遺構外第Ⅴ層出土石製遺物分布図

図 82 遺構外出土石製遺物分布図

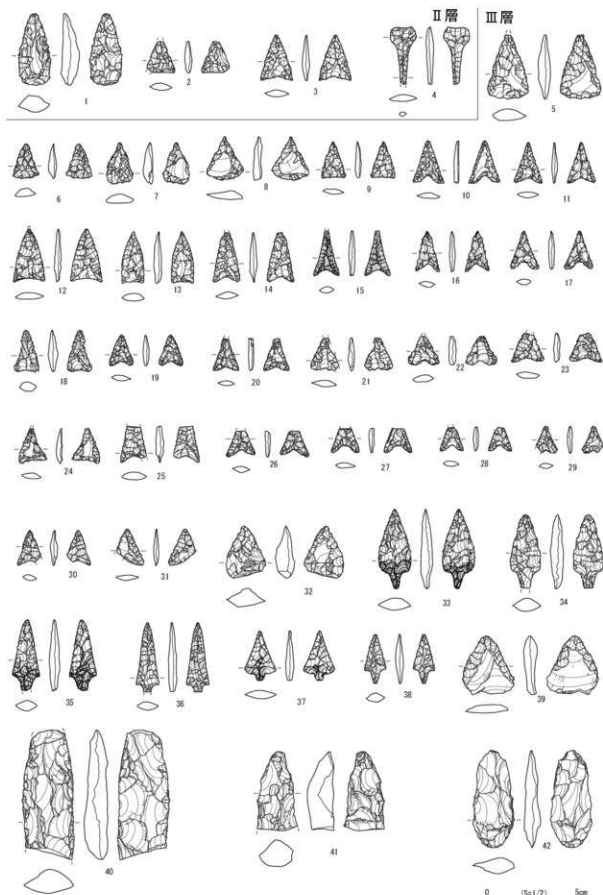


図 83 遺構外出土剥片石器 (1)

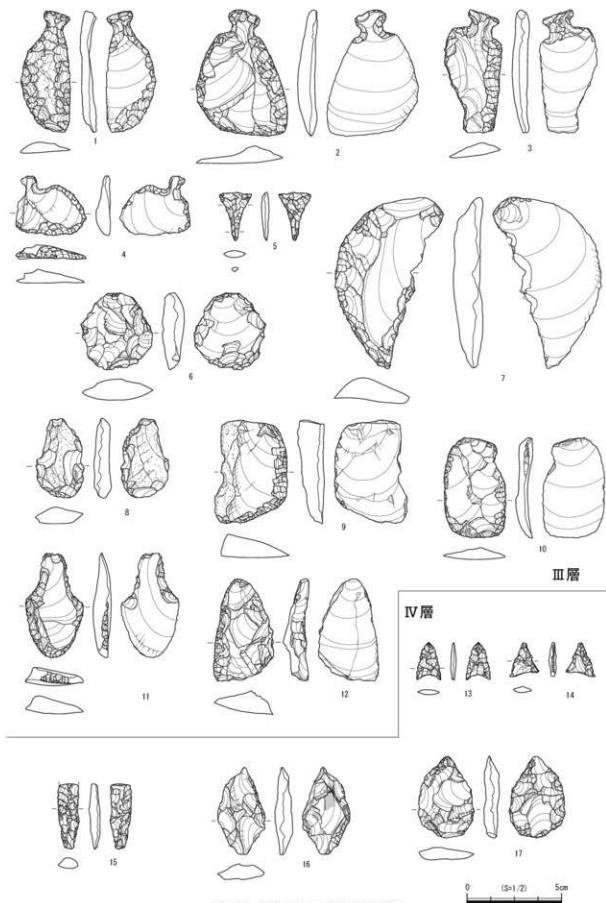


图 84 遺構外出土剥片石器 (2)

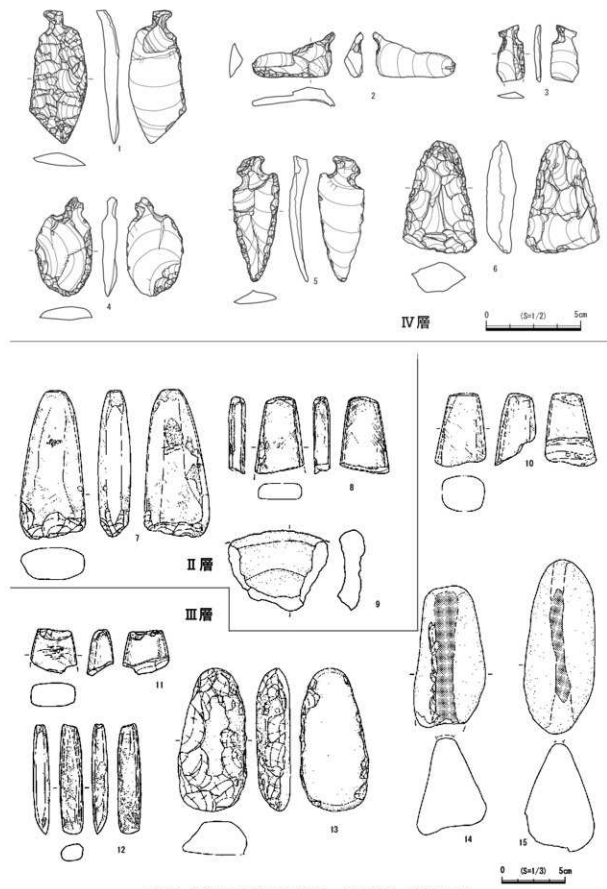


図85 遺構外出土剥片石器(3)・磨製石斧・礫石器(1)

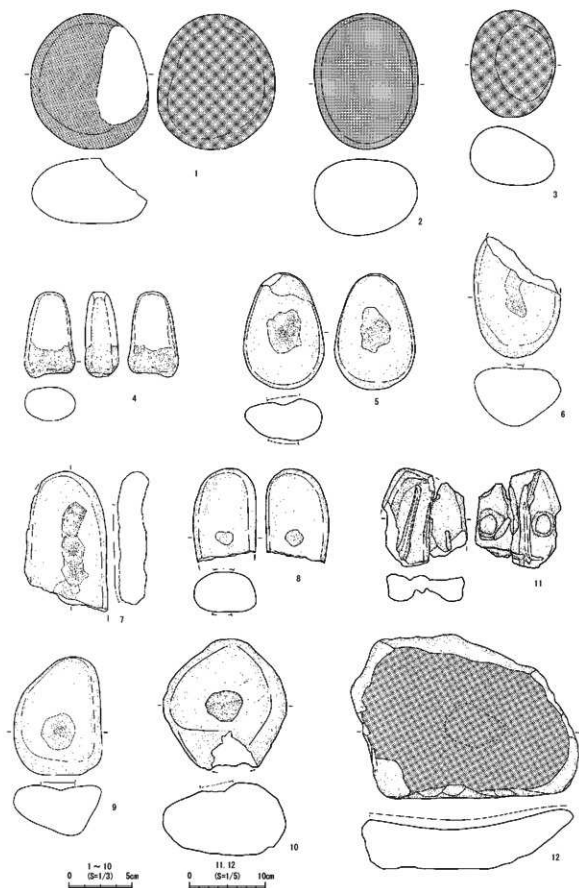


図86 遺構外出土礫石器(2)

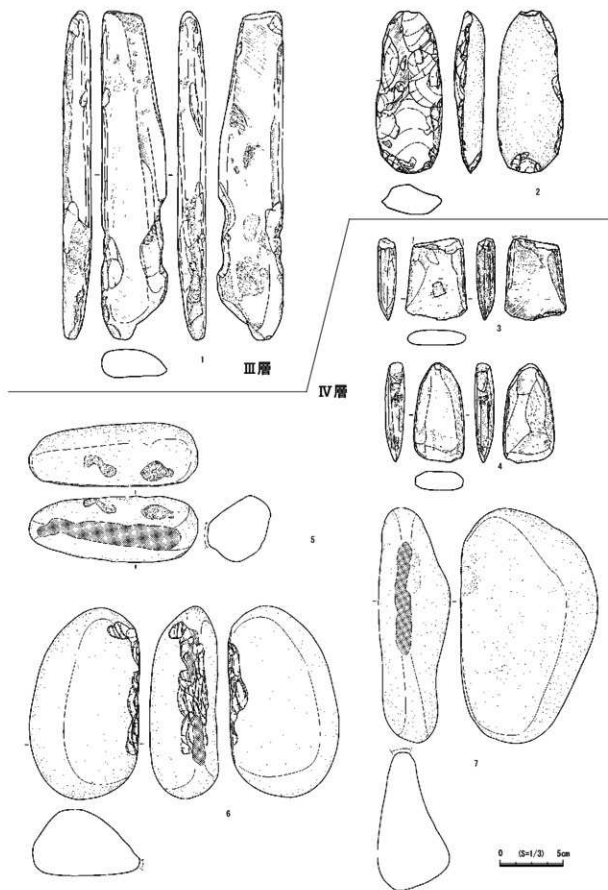


図87 遺構外出土磨製石斧・礫石器(3)

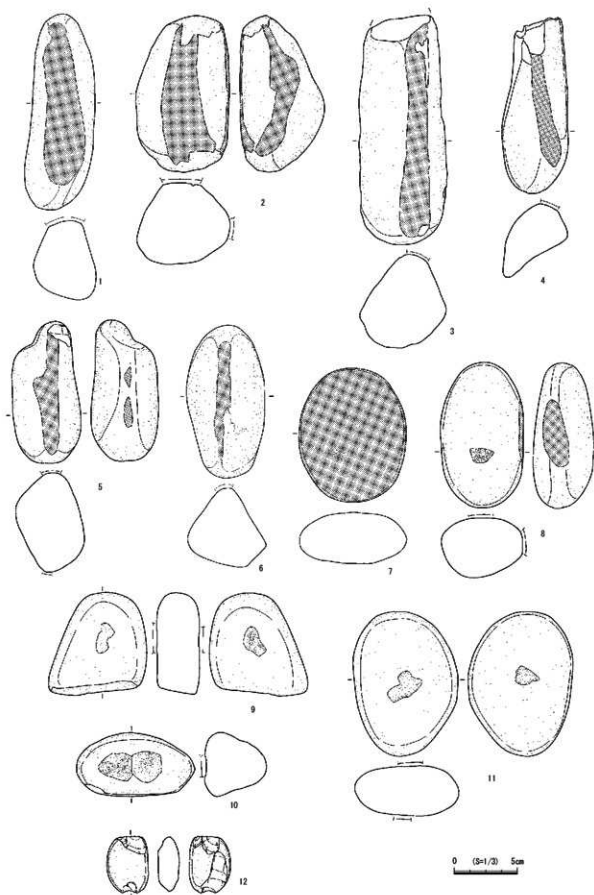


图88 遺構外出土礫石器(4)

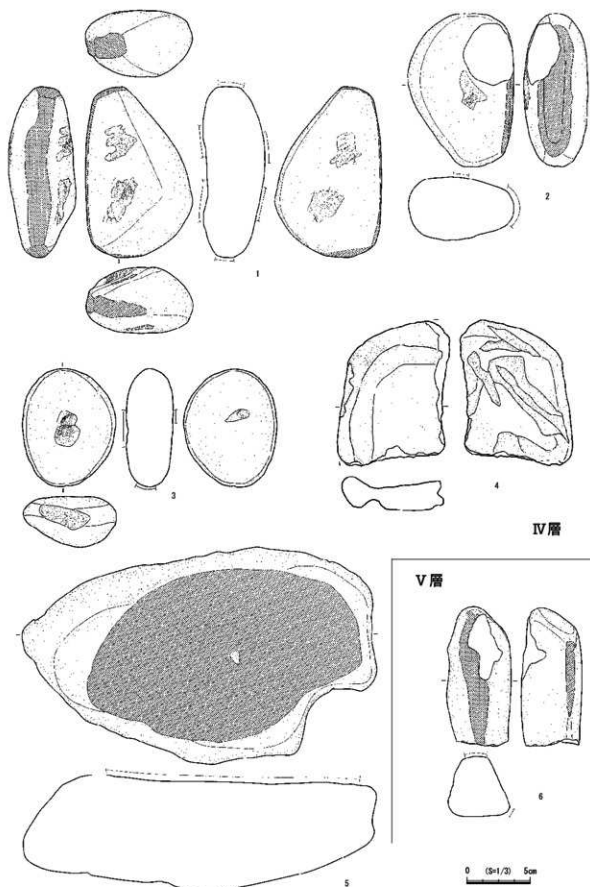


图 89 遺構外出土礫石器 (5)

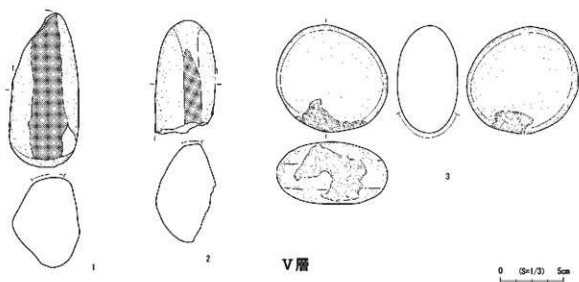


図90 遺構外出土礫石器(6)

第3節 その他の出土遺物

1 陶磁器（写真図版42）

第I層・攪乱土層から陶磁器が55点出土した。大きく分けて、中国産青磁、肥前IV～V期の肥前系陶磁器、18C末葉から19C中葉の瀬戸美濃系陶磁器、明治時代からそれ以降のものがある。

2 煙管（写真図版42）

第I層・攪乱土層から煙管が2点出土した。いずれも雁首で、1点は火皿を欠く。火皿は小さく、油返部は直角に曲がっている。縦ぎ目は上面に来る。古泉弘の編年（古泉 1983）に対比すれば、第VI期の形態を示し、19世紀になって現れるとされる。（中村）

第 5 章 自然科学的分析

第 1 節 八戸市新田遺跡出土炭化材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は 30 点（以下、仮試料番号 No. 1～30 で表す）で、5 基の竪穴住居跡と 1 基の土坑から検出されたものである（表 4）。このうち SI-05 住居跡は奈良時代、他の 5 遺構は縄文時代中期末葉（大木 10 式併行期）～後期初頭のものと考えられている。住居の跡から検出されたものと SK-15 土坑から検出された試料は燃料材、他は住居の構築材と考えられている。

遺跡は新井田川左岸に位置し、調査区の標高は約 20～25m である。遺跡の西には潟野遺跡があり、奈良時代とされる SI-05 住居跡は潟野遺跡の同時期の住居と同じ集落を構成していたと考えられている。

2. 方法

同定には調査担当者の立ち会いのもとで、保管されていたブロックから筆者が採取した材片を用いた。試料は乾燥していたが、大半が小片であった。試料の木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）3 面を实体顕微鏡で観察する方法と、3 断面を走査型電子顕微鏡（SEM、加速電圧 10kV）で観察する方法を併用し同定した。併せて各分類群 1 点の電子顕微鏡写真図版を作成した（図 91、92）。SEM 観察にご協力いただいた（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターに感謝いたします。なお、残った炭化材とネガ・フィルムは木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

確実な同定ができず類似種としたものが 1 点あったが、試料は以下の 4 分類群に同定された。○を付けた試料番号が類似種としたものである。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名と配列は「日本の野生植物 木本 I・II」（佐竹ほか 1989）にしたがい、県内での自然分布については「北本州産高等植物チェックリスト」（上野 1991）を参照した。また、一般的な性質については「木の事典 第 2～4 巻」（平井 1979, 1980）も参考にした。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*) クルミ科 No. 15

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および 2～4 個が複合、横断面では楕円形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性～異性、1～6 細胞幅、1～40 細胞高。柔組織は短接線状、周囲状。

オニグルミは北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として広く用いられるほか、各種器具・家具材などの

用途も知られている。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科 No. 2, 20

環孔材で孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形〜楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独で配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとして複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(ドングリ)が開花の年に熟オグループで、カシワ(*Quercus dentata*)、ミズナラ(*Q. crispula*)、コナラ(*Q. serrata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)といくつかの変・品種がある。県内にはナラガシワを除く3種が分布する。このうちコナラは樹高20mになる落葉高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽・薪炭材などの用途がある。

- ・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No. 1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, (12), 13, 14, 16, 17, 18, 19, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30

環孔材で孔圏部は1-多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形〜円形、小道管は単独および2-3個が複合、横断面では角張った楕円形〜多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状〜網目状となる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。No. 12は小片で、十分な観察ができなかったため類似種とした。

クリは北海道西南部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫛木などに用いられる。

- ・カエデ属 (*Acer* sp.) カエデ科 No. 11

散孔材で横断面ではやや角張った楕円形、単独および2-4個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔をもち、壁孔は対列〜交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-60細胞高。柔組織は周囲状または随伴散在状、接線状。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属は国内に26種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い落葉高木〜低木である。県内にはハウチワカエデ (*Acer japonicum*) やコミネカエデ (*A. micranthum*) など11種ほどが自生する。材は一般にやや重硬・強靱で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。

以上の同定結果を検出遺構などととも一覧表で示す(表4)。

4. 考察

縄文時代中期末葉〜後期初頭とされている遺構から検出された炭化材は住居の構築材と燃料材とみられているが、ともにクリと同定されたものが多い(表5)。

表4 新田遺跡出土炭化材の樹種

仮試料番号	検出遺構など	分類群
1	SI-02 複式か埋設土器内	クリ
2	SI-05 C1 堆積土	コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	SI-07 C1 堆積土	クリ
4	SI-07 C2 堆積土	クリ
5	SI-07 C3 堆積土	クリ
6	SI-07 C1 複式か堆積土	クリ
7	SI-07 C2 複式か堆積土	クリ
8	SI-07 C3 複式か堆積土	クリ
9	SI-07 C4 複式か堆積土	クリ
10	SI-07 C4 複式か堆積土	クリ
11	SI-09 C1 堆積土	カエデ属
12	SI-11 C1 堆積土	クリ類似種
13	SI-11 C2 堆積土	クリ
14	SI-11 C3 堆積土	クリ
15	SI-11 C4 堆積土	オニグルミ
15	SI-11 C5 堆積土	クリ
17	SI-11 C6 堆積土	クリ
18	SI-11 C7 堆積土	クリ
19	SI-11 C8 堆積土	クリ
20	SI-11 C9 堆積土	コナラ属コナラ亜属コナラ節
21	SI-11 C10 堆積土	クリ
22	SI-11 C11 堆積土	クリ
23	SI-11 C12 堆積土	クリ
24	SI-11 C13 堆積土	クリ
25	SI-11 C14 堆積土	クリ
26	SI-11 C16 堆積土	クリ
27	SI-11 C17 堆積土	クリ
28	SI-11 C18 堆積土	クリ
29	SI-11 C19 堆積土	クリ
30	SK-15 C1 焼土上面	クリ

試料と近い時期では、本遺跡の南約10Kmに位置する南郷村田ノ上遺跡検出の縄文時代中期～後期³¹⁾とされる2住居跡覆土出土材3点がクリ・ケヤキ?・カエデに、炉検出材がクリに同定されている例(嶋倉 1981)や、田ノ上遺跡の南西約1Kmに位置する畑内遺跡検出の中期初頭とされる住居跡検出材がケヤキに同定されている例(高橋 2001)などがあるが、試料数が少ないためか、あるいは本試料とは時期が異なるためか、特にクリが多用されているという傾向はうかがえない。

また、奈良時代とされるSI-05検出材はコナラ節に同定されたが、同じ集落を構成していたとされる瀧野遺跡の住居跡出土材でもコナラ節が多く認められている(高橋 2006)。

表5 新田遺跡の縄文時代中期末葉～後期初頭とされる遺構検出材の遺構別用途別樹種構成。
燃は燃料材、構は構築材と推定されているもの。

分類群	SI-02	SI-07		SI-09	SI-11	SK-15	合計	
	燃	燃	構	構	構	燃	燃	構
オニグルミ	-	-	-	-	1	-	-	1
コナラ節	-	-	-	-	1	-	-	1
クリ	1	5	3	-	16*	1	7	19*
カエデ属	-	-	-	1	-	-	-	1
合計	1	5	3	1	18	1	7	22
		8					29	

* 類似種1点を含む。

注) 14C年代測定値(β線法)は $3730 \pm 130\text{BP}$ が得られている(木越 1981)。これを採用すれば縄文時代後期中頃となり、本試料より数百年新しい時期のものとなる。

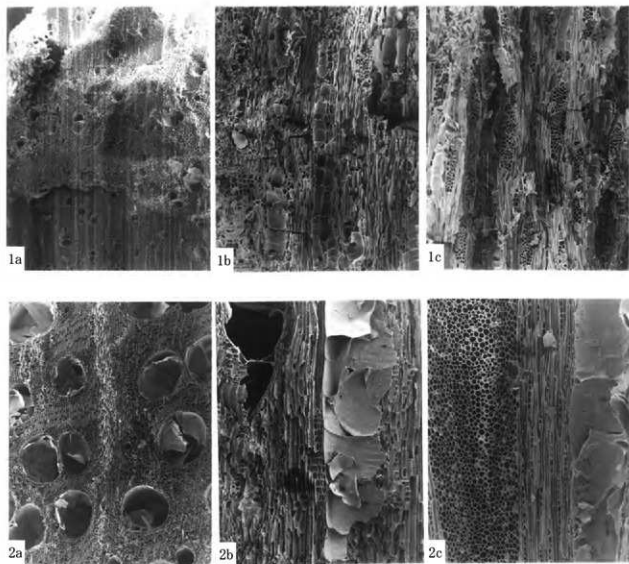


図91 炭化材の電子顕微鏡写真(1)

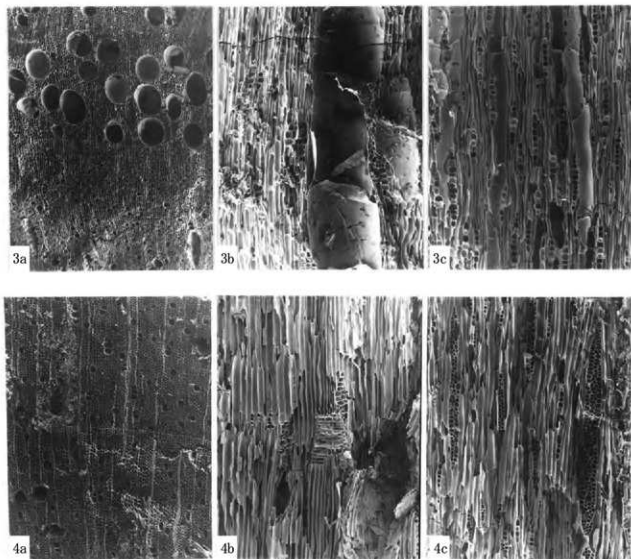


図 92 炭化材の電子顕微鏡写真 (2)

- 図 91 1. オニグルミ No. 15
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 No. 2

- 図 92 3. クリ No. 3
4. カエデ属 No. 11

a: 木口 $\times 40$ b: 柾目 $\times 100$ c: 板目 $\times 100$
樹木の肥大成長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右。

引用文献

- 平井信二 1979 「木の事典 第2・3巻」, かなえ書房.
- 平井信二 1980 「木の事典 第4巻」, かなえ書房.
- 木越邦彦 1981 放射性炭素年代測定結果, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第65集 国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」, 116, 青森県教育委員会.
- 佐竹義輔・原寛・亙理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」, 平凡社.
- 嶋倉巳三郎 1981 炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第65集 国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」, 116, 青森県教育委員会.
- 高橋利彦 2001 南郷村畑内遺跡第126号住居跡出土炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第308集 畑内遺跡Ⅶ(第2分冊) -八戸平原開拓建設事業(世増ダム建設)に伴う遺跡発掘調査報告-」, 1-2, 青森県教育委員会.
- 高橋利彦 2006 八戸市潟野遺跡出土炭化材の樹種同定結果, 『潟野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第412集 pp. 163-168, 2pls., 木工舎「ゆい」.
- 上野雄規(編) 1991 「北本州産高等植物チェックリスト」, 東北植物研究会.

第2節 八戸市新田遺跡縄文時代中期より出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究会）

1. はじめに

新田遺跡は、八戸市の市街地から南に約3kmの新井田川河岸に位置する、おもに縄文時代中期末葉から後期初頃を中心とした集落跡である。当時の植物利用を解明する目的で、住居炉跡及び遺構の焼土層の炭化物の調査をおこなった。

2. 同定結果

同定された炭化種実を表6に示す。表中の数値は個数を示している。クリ子葉破片、果皮破片、トチノキ種皮破片、子葉破片はさまざまな大きさの破片が混在しているので、客観的に比較するために重さ(g)で示した。

S102住居跡では、炉内埋設土器3試料からクリの子葉及び果皮破片を出土した。また、1試料からトチノキ種皮破片、子葉破片をわずかに出土している。ほかにはヒユ属とザクロソウ種子、核菌綱の菌核、不明炭化物を出土した。S111住居跡の複式炉内からは焼土及び土器内からオニグルミ内果皮破片とクリ子葉破片をわずかに出土した。S114住居跡では複式炉土器内からオニグルミ内果皮破片

表6 八戸市新田遺跡より出土した炭化種実

分類群	出土部位	S102炉内埋設土器			S102複式B	S102複式炉内埋設土器3層		S111複式炉内
		3層	4層	3~6層(上)	4層	C-2	C-3	焼土
オニグルミ	内果皮破片	-	-	-	-	-	-	3
クリ	種子完形	-	-	-	-	-	-	-
	子葉破片	1.04g	-	-	-	0.13g	-	0.23g
	果皮破片	0.1g	-	-	-	-	0.1g	-
トチノキ	種皮破片	0.1g	-	-	-	-	-	-
	子葉破片	0.4g	-	-	-	-	-	-
ヒユ属	種子	-	-	-	2	-	-	-
ザクロソウ	種子	17	1	-	-	-	-	-
核菌綱	菌核	-	-	1	-	-	-	-
不明		3	-	-	-	-	-	-
		S111複式B	S114複式B土器内	S114複式B	S k 1 4 焼土			
分類群	出土部位	土器内14層	4層	6層	土器底面付近	1層	2層	3層
オニグルミ	内果皮破片	1	-	-	1	-	-	-
クリ	種子完形	-	-	-	-	-	-	-
	子葉破片	-	0.1g	-	-	-	-	-
	果皮破片	-	0.05g	-	-	-	-	-
トチノキ	種皮破片	-	-	-	-	25.95g	2.93g	10.11g
	子葉破片	-	-	-	-	0.1g	-	0.09g
ヒユ属	種子	-	-	-	-	-	-	-
ザクロソウ	種子	-	-	-	-	-	-	-
核菌綱	菌核	-	-	-	-	1	-	-
不明		1	-	1	-	-	-	-
		SK14炭化物	S k 14 焼土		SK15焼土			SK06焼土
分類群	出土部位	C-1	C-2	C-3	C-4	2層		
オニグルミ	内果皮破片	4	-	-	-	-	-	-
クリ	種子完形	1	-	-	1	-	1	-
	子葉破片	1.98g	0.50g	0.21g	-	1.62g	1.98g	-
	果皮破片	12.63g	-	-	-	41.93g	0.31g	-
トチノキ	種皮破片	0.06g	-	-	-	-	0.1g	-
	子葉破片	0.46g	-	-	-	-	-	-
ヒユ属	種子	-	-	-	-	-	-	-
ザクロソウ	種子	-	-	-	-	-	-	-
核菌綱	菌核	-	-	-	-	-	-	-
不明		0.70g	-	-	-	-	-	1

片、クリ子葉破片、果皮破片、不明をわずかに出土した。

用途不明のSK14、SK15は遺構の中央に焼土と炭化物があり、その上に土器片

と炭化物が覆っている。SK14 焼土からはやや多くのトチノキ種皮破片と微量のトチノキ子葉破片、担子菌を出土した。焼土上の覆土からは、少量のトチノキ種皮及び子葉破片と完形のクリ種子、やや多くのクリ子葉破片及び果皮破片を出土した。また、オニグルミ内果皮破片と不明炭化物もわずかに出土した。SK15 焼土からはクリ完形種子1個と子葉破片、果皮破片、わずかなトチノキ種皮破片を出土した。SX06 焼土からは不明炭化物をわずかに出土した

炭化したクリ種子のうち、計測可能な種子について高さ、幅、厚さ、重さ、及び平均値を示した(表7)。本遺跡で出土したクリ種子1個の平均の重さは0.95gであった。これにより破片試料を個数換算すると、S102 複式炉埋設土器 C-2、C-3、S111 複式炉内焼土、S114 複式炉土器内4層、SK14 覆土 C-1、C-2 はいずれも1個以下である。また、S102 炉内埋設土器3層、SK14 炭化物、SK14 覆土 C-4、SK15 焼土2層は、完形出土数とあわせても4個以下であった。

以下に同定された炭化種実の形態記載をおこなう。

オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura): 出土した内果皮破片は緻密で壁は無構造、不規則な曲面としばしば壁に空隙がある。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.): 完形種子はまれに一部種皮が残存し、三角形で縦方向に波状の不規則なしわが入る。種子が壊れた子葉破片は一面にしわが残存し、きわめて緻密もしくは縦方向にひびが入る。果実基部の果皮破片は微少な丘状突起が密布してざらつき、それ以外の表面は規則的に構造的な縦筋が密に入る。本遺跡ではクリの完形および外形が一部わかる種子を5個出土した。これら5個のサイズの平均は高さ14.7mm、幅17.5mm、厚さ8.3mm、重さ0.95gであった。北海道函館市(旧南茅部町)の大船C遺跡縄文時代中期後半のH-95住居跡覆土より出土した炭化クリ84個の平均は高さ13mm幅14mmであった(南茅部町2000)。また、ほぼ同時期である大木10式前半の縄文時代中期末葉の福島県飯野町和台遺跡183号住居跡床面直上より出土した炭化クリ47個の平均は高さ19.2mm幅19.7mm厚さ10.8mm重さ1.62gであった(吉川2003)。つまり、北海道の南茅部町よりやや大きい、南方の福島県飯野町に比べるとかなり小さい。

トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume): 種子基部の破片は平滑だがざらつく。それ以外の表面は炭化しても光沢が残る場合が多く、表面には流紋状ないし指紋状の微少模様があり、不規則な形に割れることが多い。子葉破片は表面に不規則な丘状のおうとつがあり、内部に放射状のひびが入ることが多い。なお、トチノキは本遺跡でかなり細かい破片でしか出土せず、完形の種子の重量が不明なため、個数換算ができなかった。

ヒユ属 (*Amaranthus*): 種子は円形で扁平、炭化しても光沢があり、一端にへこんだへそがあり、そこから種子中心に向かってやや深い溝が入る。

ザクロソウ (*Mollugo pentaphylla* Linn.): 種子は腎円形で扁平、一端にややへこんだへそがあり、全面に瘤状の突起が密布する。

表7 新田遺跡より出土したクリ種子計測値

遺構	番号	状況	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
SK14 覆土	C-1	半分破損	14.0	16.3	6.0	0.55
SK14 覆土	C-3	完形	14	19.6	6.9	0.75
SK14 炭化物		完形	14.8	16	7.7	0.79
SK14 炭化物		半分破損	15.4	-	-	0.62
SK15 焼土2層		完形	15.5	18.1	12	0.87
完形種子平均値		完形	14.74	17.5	8.3	0.95

核菌綱 (Ascomycotina): 菌核を出土した。内部は発泡状で無構造、枯死した材や樹皮に付着して生活する。元々黒くて堅いので炭化しているかどうか不明である。

不明 (Unknown): 形状から球体破片で果実の一部と思われるが、特徴的な構造がなく、表面にも特徴的な模様がないので不明とした。

3. 出土炭化種実からみた当時の植物利用

本遺跡では炭化したクリ、トチノキ、オニグルミを出土した。また、ヒユ属、ザクロソウ、核菌綱をわずかに出土したが、これらは燃焼材に付着していたと考えられる。クリ種子は完形種子に換算すると 1 試料 4、5 個以下であった。また、SK14 炭化物、SK14 覆土 C-4 の試料では種子重量よりも果皮重量がかなり多く、種子よりも多くの果皮破片が火にくべられた可能性がある。福島県飯野町の和台遺跡では、縄文時代中期末葉の祭祀跡と考えられる遺構からクリ、トチノキ、オニグルミが多量に出土し、果皮や種皮よりも子葉の量が圧倒的に多く、さらにクリ、トチノキは完形種子や半分の種子が多い (吉川 2003)。一般に完形の種子を焼却すると水分の少ない果皮や種皮は先に燃焼し、温度が低い条件では種子に付着して残る。水分の多い子葉はほぼ完形の状態に炭化し、ひびがはいった種子は取り上げ時に破壊される。つまり和台遺跡の祭祀遺構ではこれらの果実を完形のまま燃やしたと考えられる。

本遺跡の場合には子葉よりも果皮の方が多く、剥いた皮を火にくべた可能性が高い。完形種子は虫食いなどの食べられない種子と考えられる。トチノキは、クリの完形種子が出土した同一試料でも、完形や半分などの大きな種子がなく、かなり小さな破片のみ出土した。したがって火にくべられたときにすでに破片であったと考えられる。重さで比較すると子葉破片が種皮破片より少なく、特に SK14 焼土 1 ~ 3 層で種皮を多く出土している。このことから、剥いた種皮だけを火にくべた可能性が高い。

東北地方の縄文時代中期末頃の複式炉期ではトチノキ属が一部で急増、特に遺跡周辺でこの傾向が顕著であり、クリとともに主要な植物資源であったと考えられている (吉川ほか 2005) が、八戸市の複式炉期においても、クリとともにトチノキが利用されていたことが明らかになった。

引用文献

- 南茅部町教育委員会、2000、5 節 H-95 検出のクリ炭化子葉。大船 C 遺跡、38-39。
 吉川純子、2003、附章 1 183 号住居跡出土炭化種実の同定分析。和台遺跡。飯野町教育委員会福島県北建設事務所、733-741。
 吉川昌伸・吉川純子、2005、縄文時代中・後期の環境変化。日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集。日本考古学協会 2005 年度福島大会実行委員会、13-22。

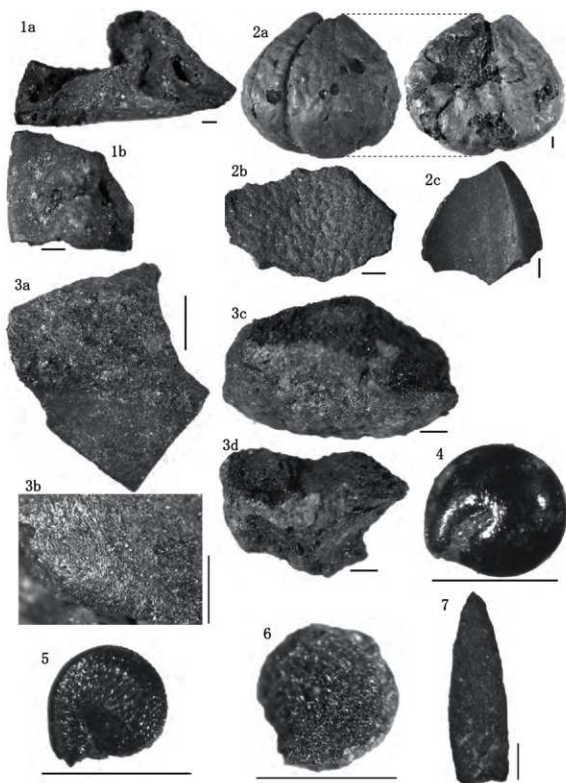


図93 新田遺跡より出土した炭化種実

1 オニグルミ内果皮破片。-1a(SI14複式炉内土器底面)。-1b(SK14炭化物), 2 クリ(SK14炭化物)。-2a 完形種子。-2b 基部果皮破片。-2c 果皮破片, 3トチノキ。-3a 種子破片。-3b 種子表面拡大(SK14焼土1層)。-3c;3d 子葉破片(SI02炉内埋設土器3層), 4 ヒユ属種子(SI02炉内埋設土器6層), 5 ザクロソウ種子(SI02炉内埋設土器4層), 6 核菌綱菌核(SI02炉内埋設土器3~6層上部), 7 不明(SK15焼土2層) スケール=1mm

第3節 土器付着漆および顔料分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

新田遺跡の調査では、縄文時代中期末の土器胴部（下半）内面に漆質物が付着した土器が出土した。また、これら漆質物の一部には、赤色物が点状に見られた。

ここでは、漆質物および赤色物の材質を検討するために顕微鏡赤外分光分析および蛍光X線分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、縄文時代中期末の土器胴部（下半）内面に漆質物である（図1）。試料は、予め顕微鏡を用いて写真撮影した（図94）。黒色部表面には明瞭に縮みじわが見られ、点状に赤色物も観察された。分析は、黒色物が漆であるかどうかを同定するために顕微鏡の赤外分光分析を行った。また、赤色物がベンガラ（赤鉄鉱； Fe_2O_3 ）または水銀朱（硫化水銀； HgS ）であるかを同定するために蛍光X線分析を行った。各分析の試料採取と分析方法は以下の通りである。

赤外分光分析の測定試料は、黒色部表面において手術用メスなどを用いて0.2mm角程度の薄片を採取した。採取した試料片は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光株式会社 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

蛍光X線分析の測定試料は、ピンセットを用いて赤色部分を 1mm^3 以下で採取し、アクリル板試料台上に載せて点分析した。測定は、X線分析顕微鏡（株式会社 株式会社 XGT-5000Type II）を用いた。測定条件は、X線導管径 $100\ \mu\text{m}$ 、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。なお、定量計算は、標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

3. 結果および考察

図94に、生漆とともに、黒色部の赤外吸収スペクトル図を示す。縦軸は透過率（%；Transmittance）、横軸は波数（Wavenumber（ cm^{-1} ）；カイザー）である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり縦軸の透過率は相対強度である。

図94の吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す。生漆の吸収位置（単位： cm^{-1} ）は、No.1:2925.48、No.2:2854.13、No.3:1710.55、No.4:1629.55、No.5:1454.06、No.6:1351.86、No.7:1270.86、No.8:1087.66である。

分析した試料は、生漆の吸収位置とほぼ一致することから、漆と同定される。なお、No.8の吸収はゴム質であるが、劣化した漆ではこのゴム質の吸収が大きくなることから、この試料は劣化程度の低い漆と考えられる。漆が付着した土器は、内面全体に残留していないが、その表面において明瞭に縮みじわが見られたこと、点状にベンガラも観察されたこと、土器破断面においても付着する様子が

確認されていることから、容器またはパレットの可能性が考えられる。

一方、赤色部の蛍光X線分析では、鉄 (Fe) のピークが明瞭に検出され、半定量分析において最大 56.97% と高いことから、ベンガラと推定される (図 94 の下段の図)。ベンガラは、大きく鉄細菌系と非鉄細菌系に分かれる (馬淵ほか、2003)。鉄細菌系のベンガラとしては、パイプ状ベンガラが知られており、珪藻化石を伴うことから崖端の湧水部や水田などの環境下で生成されたことが考えられている (岡田、1997)。

一部を採取し、偏光顕微鏡で観察した結果、パイプ状ベンガラは認められなかった。

4. おわりに

土器胴部内面の一部に付着する黒色物は、赤外分光分析において漆と同定された。この土器は、明瞭に縮みじわを伴うことなどから、容器またはパレットの可能性がある。なお、随所に点状に見られた赤色物は、蛍光X線分析によりベンガラと推定されたが、パイプ状ベンガラは認められなかった。

引用文献

- 馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊 (2003) 文化財科学の事典、522p. 朝倉書店
岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元、日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集、p38-39.

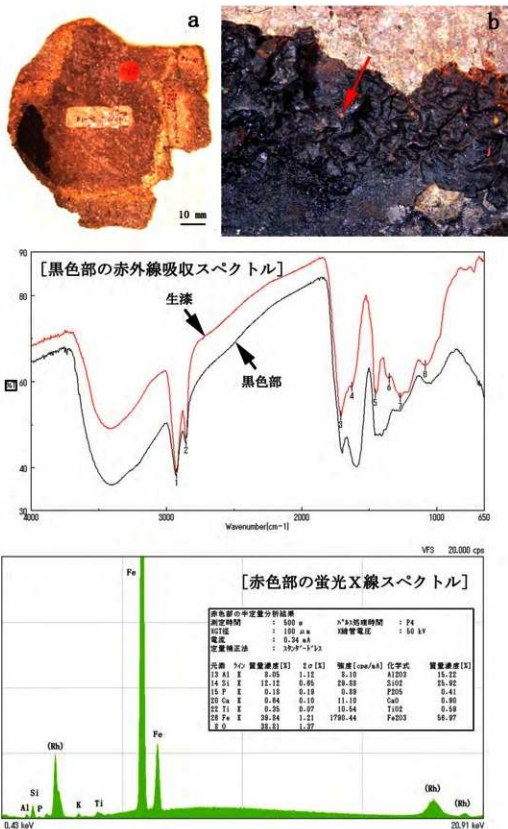


図 94 試料と各分析スペクトル

a. 上層断面内部に付着する塗物 b. 拡大 (矢印は赤色物；蛍光X線分析採取位置)

上図：黒色部の赤外線吸収スペクトル図

下図：赤色部の蛍光X線スペクトル図と半定量分析結果

第4節 青森県八戸市新田遺跡出土炭化材の¹⁴C年代測定

小林謙一¹⁾・遠部慎¹⁾¹⁾ 国立歴史民俗博物館

青森県八戸市新田遺跡出土炭化材の¹⁴C年代測定を試みた。試料は、青森県埋蔵文化財センターにおいて、小林が採取されていた炭化材を実見し、後から調査担当者の中村哲也氏が送付した。なお、中村が最外縁から採取したほか、樹幹が形をなしていた試料については土ごと塊のまま歴博に送付し、小林が最外縁から採取した。預かった11試料のうち、1点は状態が不良のため保留し、10試料について年代を測定することができた。

試料については、一覧を表8に付す。

1 炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において遠部、(2)(3)は、㈱パレオ・ラボに委託した。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

AAA処理は、自動処理装置(Sakamoto et al. 2002)を用いた。80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去(2回)し、さらにアルカリ溶液(1N-NaOH)でフミン酸等を除去する工程を5回、さらに2回酸処理(1N-HCl 240分以上)を行いアルカリ分を除いた後、純水を使って洗浄した(5回)。

試料の重量について、AAA前処理を行った量(処理量)、処理後回収した量(回収量)、二酸化炭素を得るために燃焼した量(燃焼量)、精製して得られた二酸化炭素の量に相当する炭素量(ガス)をmg単位で、処理した量に対する回収量の比(回収/処理)、燃焼量に対する炭素相当量の比(含有率)、処理量に対する炭素相当量の比、すなわち前者と後者の積(炭素量/処理)を%で、表2に記す。今回測定できた試料は、炭素含有率が50～60%と高い炭素含有率であり、良好な年代測定用試料といえる。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

2 測定結果と暦年較正

AMSによる¹⁴C測定は、㈱パレオ・ラボ(機関番号PLD)へ委託した。

年代データの¹⁴C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した¹⁴C年代(モデル年代)であることを示す(BPまたはyr BPと記すことも多いが、本稿では¹⁴C BPとする)。¹⁴C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標

準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比により、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比に対する同位体効果を調べ補正する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は、標準体(古生物 belemnite 化石の炭酸カルシウムの $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比)に対する千分率偏差 $\delta^{13}\text{C}$ (パーミル, ‰)で示され、この値を -25‰ に規格化して得られる $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比によって補正する。補正した $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、 ^{14}C 年代値(モデル年代)が得られる(英語表記では Conventional Age とされることが多い)。 $\delta^{13}\text{C}$ 値については、同位体効果を補正するために加速器により測定した結果を、誤差を付した上で参考として示す。

測定値を較正曲線 IntCal04(^{14}C 年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版)(Reimer, P. et al. 2004)と比較することによって暦年代(実年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラム RHCAL (OxCal Program に準じた方法)を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BC で示す。()内は推定確率である。図95は、各試料の暦年較正の確率分布である。

3 年代的考察

暦年較正年代について遺構ごとみにみていく。

SI07 住居出土のC1~4は、C1は1層、C2~4はSI07住居下部検出の複式炉内の炭化材である。SI07 覆土中のAOMEN-C1のみは、炭素14年代で $3785 \pm 25^\circ\text{C}$ BPと明らかに新しく、他の複式炉内出土試料は、 1355°C BPと明らかに新しいC4と 4150°C BP頃のC2・3に分かれる。較正年代でみると、 2σ の確率で、C1は紀元前2290-2140年(calBC)に含まれる較正年代で、縄文時代後期前葉に相当する年代である(小林2003)。複式炉出土の試料では、C2・3は、紀元前2800~2650年頃を含む較正年代で縄文中期後葉(関東地方では加曽利E2式後半~E3式前半ころ)に当たる(註1)。一方、C4は奈良時代~平安時代の年代である。同一の複式炉内の炭化物であり、出土位置や、試料の採取部位(樹木の内側年輪部分など不適な部位でないかどうか)をもう一度確認する必要もある(註2)。

SI11 住居1層出土のC6~9は、C8が $4135 \pm 25^\circ\text{C}$ BPと数十年程度古いのが、他の試料は、 $4070 \sim 4095 \pm 25^\circ\text{C}$ BPと、 1σ の誤差範囲内で重なり、整合的である。較正年代でみると、 2σ の確率で、やや古いC8を除き、紀元前2855-2490年の中に含まれる年代である。その中でも較正曲線との関係から紀元前2700-2560年ころに含まれる年代である可能性が92.5%ともっとも高くなる。やや古く測定されたC8についても、紀元前2780-2620年に含まれる確率が66%で、それほど大きな差はなく、仮にこれら4試料が本来同一の年代に帰属する試料であるならば、紀元前2700-2620年の中の一時点と仮定することもできる。これらの年代は、小林らのこれまでの測定からみると、縄文中期後葉(加曽利E3式後半 新地平編年12b・c期)の年代ととらえられる(小林2004)。

SK15号土坑1層出土のC10・11は、 $4150 \pm 25^\circ\text{C}$ BPと $4135 \pm 25^\circ\text{C}$ BPと、 1σ の誤差範囲内で重なり、整合的である。較正年代でみると、 2σ の確率で、紀元前2870-2620年の中に含まれる年代であり、その中でもC11では紀元前2780-2620年、またC10を重ねるならば紀元前2655以前

の較正年代の確率ももっとも高く65%程度の確率で重なる。関東地方での測定結果に対比させると、縄文中期後葉（加曾利E3式前半 新地平編年12a・b期または新しくみると12c期）に近い値となっている。

この分析は、国立歴史民俗博物館 平成17年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（研究代表 今村峯雄）および学術振興財団平成17年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」（研究代表 西本豊弘 課題番号16GS0118）、平成17年度科学研究費補助金「基盤研究(C) AMS炭素14年代測定を利用した東日本縄紋時代前半期の実年代の研究」（研究代表 小林謙一 課題番号17520529）の成果を用いている。

本稿を草するにあたり、暦年較正については今村峯雄氏のご教示を得た。感謝します。本稿は、1を遠部、他を小林が執筆した。

<注>

(1) 調査担当者によれば、S107号住居は重複住居であり、下層の住居は複式炉、上層の住居は石囲炉で、反復住居の可能性もある。上層からは縄文地文のみの土器も出土しており、時期比定が困難だが、後期まで下る可能性もあり、検討を要する。

(2) 調査担当者によれば、奈良時代の焼失住居跡が調査区内に存在しており、混在の可能性も考慮される。

<参考文献>

今村峯雄 2004『課題番号13308009 基盤研究(A・1) (一般) 縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』(代表今村峯雄)

小林謙一 2004『縄紋社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—』六一書房

小林謙一・西本豊弘 2003「年代がわかると歴史観が変わる・2」『歴史を探る サイエンス』国立歴史民俗博物館、pp.1-64

Bronk R. C., 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

Reimer et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0?26 Cal Kyr BP Radiocarbon 46(3), 1029-1058(30).

M. Sakamoto et al. 2002 An Automated AAA preparation system for? AMS radiocarbon dating. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224: 298-301.

表 8 新田遺跡年代測定試料一覧

試料	ラボコード	出土区	種類	型式
AOMBN C1	PLD-4161	SI-07/1層 C-1	炭化材クリ 塊状	大木 10 式併行
AOMBN C2	PLD-4162	SI-07/複式炉1層 C-1	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C3	PLD-4163	SI-07/複式炉1層 C-2	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C4	PLD-4164	SI-07/複式炉1層 C-4	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C6	PLD-4165	SI-11/1層 C-5	炭化材クリ 塊状	大木 10 式併行
AOMBN C7	PLD-4166	SI-11/1層 C-7	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C8	PLD-4167	SI-11/1層 C-15	炭化材クリ 塊状	大木 10 式併行
AOMBN C9	PLD-4168	SI-11/1層 C-17	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C10	PLD-4169	SK-15/焼土上面 C-1	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C11	PLD-4170	SK-15/1層 C-2	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行

表 9 新田遺跡年代測定用試料炭素含有量

試料	処理量	回収量	回収/処理	前処理後	燃焼量	ガス	含有率	炭素量/処理
AOMBN C1	62.0	22.40	36.1%	良	6.30	3.54	56%	20.3%
AOMBN C2	79.0	13.72	17.4%	良	3.40	1.80	53%	9.2%
AOMBN C3	42.0	14.61	34.8%	良	5.20	2.85	55%	19.1%
AOMBN C4	72.0	10.81	15.0%	良	2.60	1.54	59%	8.9%
AOMBN C6	65.0	33.79	52.0%	良	6.50	3.72	57%	29.8%
AOMBN C7	30.0	17.78	59.3%	良	5.20	3.00	58%	34.2%
AOMBN C8	31.0	12.77	41.2%	良	5.50	3.15	57%	23.6%
AOMBN C9	29.0	5.30	18.3%	良	3.50	1.90	54%	9.9%
AOMBN C10	161.0	79.05	49.1%	良	6.90	3.97	58%	28.3%
AOMBN C11	34.0	16.82	49.5%	良	4.20	2.48	59%	29.2%

表 10 測定結果と暦年較正年代

試料 番号	測定機関 番号	炭素年代 $\delta^{13}C_{\text{‰}}$	$^{\circ}C$ BP (補正值)	暦年較正 cal BC	(%) は確率密度
AOMBN-C1	PLD-4161	(-26.1 ± 0.2)	3785 ± 25	2290-2140	95.6%
AOMBN-C2	PLD-4162	(-26 ± 0.1)	4140 ± 25	2870-2825	18.9%
				2825-2800	8.6%
				2795-2625	67.9%
AOMBN-C3	PLD-4163	(-25.9 ± 0.1)	4150 ± 25	2875-2830	19.0%
				2820-2655	70.5%
				2655-2630	6.0%
AOMBT-C4	PLD-4164	(-28 ± 0.1)	1355 ± 25	AD640-AD690	92.9%
				AD750-AD765	2.5%
AOMBN-C6	PLD-4165	(-26.1 ± 0.1)	4075 ± 30	2855-2810	14.2%
				2745-2725	3.0%
				2695-2560	66.6%
				2535-2495	11.7%
AOMBN-C7	PLD-4166	(-25.2 ± 0.1)	4095 ± 25	2855-2810	20.6%
				2750-2720	6.3%
				2700-2570	67.7%
				2510-2505	0.8%
AOMBN-C8	PLD-4167	(-27.8 ± 0.1)	4135 ± 25	2870-2800	27.7%
				2795-2780	1.8%
				2780-2620	65.9%
AOMBN-C9	PLD-4168	(-31.5 ± 0.3)	4070 ± 25	2850-2840	0.5%
				2840-2810	10.7%
				2695-2685	0.5%
				2675-2560	69.4%
				2535-2490	14.3%
AOMBN-C10	PLD-4169	(-26.1 ± 0.1)	4150 ± 25	2875-2830	19.0%
				2820-2655	70.5%
				2655-2630	6.0%
AOMBN-C11	PLD-4170	(-25.7 ± 0.2)	4135 ± 25	2870-2800	27.7%
				2795-2780	1.8%
				2780-2620	65.9%

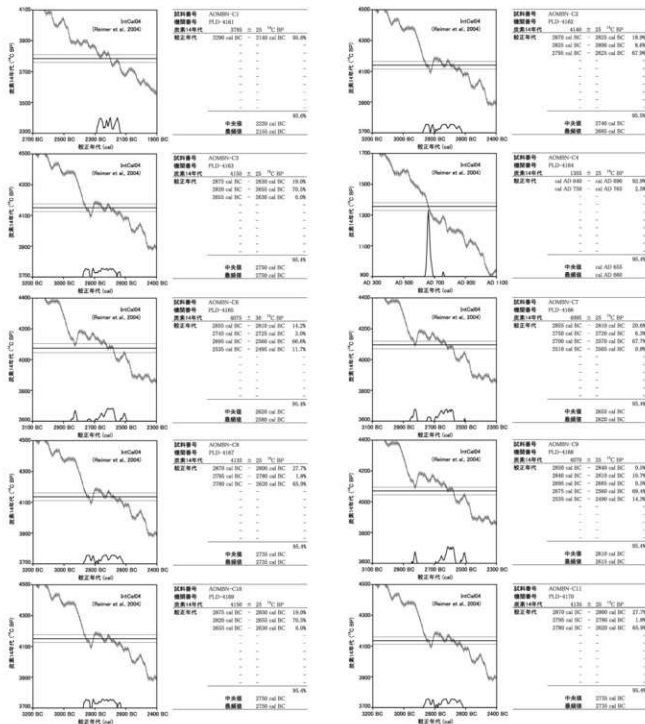


図 95 新田遺跡測定試料の暦年較正確率密度分布

中央値はその左右で確率密度が等しくなる値、最頻値はもっとも高い確率を与える値である、
どちらも統計学上の数値であり、試料の年代として推奨される値とは限らない。

第 5 節 新田遺跡土器胎土分析について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴 正敏

新田遺跡より出土した土器について胎土分析を行った。土器のペースト部及び砂粒子について、それらを構成する鉱物について X 線粉末回折法 (XRD 法) を用いて決定した (表 11)。使用した装置は、弘前大学理工学部所有の理学電機社製ガイガーフレックス 2013 型である。分析条件は以下の通りである。

対陰極: Cu、フィルター: Ni、電圧: 30 kV、電流: 15 mA、レンジ: 2 keps、
 時定数: 2 秒、チャートスピード: 20mm/分、走査速度: $2\theta = 2^\circ / \text{分}$ 、
 走査範囲: $2\theta = 2^\circ \sim 30^\circ$ 、スリット: $1^\circ - 0.15\text{mm} - 1^\circ$ 。

ペースト部を構成する粘土鉱物はセリサイト (二八面体型雲母鉱物) が殆どである (表 11)。代表的な粘土鉱物の分解温度は、セリサイトが約 1,000°C、緑泥石が約 800°C、カオリン鉱物が 600 ~ 700°C である。そのためセリサイトのみが初生の粘土鉱物として残存すると考えられる。セリサイトのほかに、スメクタイト、ハロイサイト、パーミキュライト、パイロフィライト、イライト / スメクタイト混合層鉱物及び緑泥石 / スメクタイト混合層鉱物が認められるが (表 11)、これらは土器の風化や変質により生じたか、あるいは焼成温度が低かった可能性がある。

砂粒子を構成する鉱物は、主に石英と斜長石であり、黒雲母 (真珠状光沢持つ)、ホルンブレンド、普通輝石が認められる試料も多い (表 11)。黒雲母は特に早期の土器に含まれている。砂粒子は鉱物のほかに、軽石粒子、流紋岩やチャートなどの岩片からなる。

セリサイトは泥岩の続成作用、酸性～中性の火成岩類や火砕岩類の変質作用などによって形成される。泥岩は砕屑粒子として含まれることも多い。一方、ホルンブレンドや黒雲母はカルクアルカリ系列の酸性～中性の火山岩類及び深成岩類に初生鉱物として出現する。単斜輝石 (主にオージャイト) は、中性～塩基性の火山岩類や同質の火砕岩類及び中性～塩基性やカルクシリケート質の変成岩類にも形成される。

ペースト部をなすセリサイト、砂粒子を構成する黒雲母、ホルンブレンド、普通輝石、軽石粒子、岩片などを供給できる地質は遺跡周辺に広く分布している。セリサイトは新第三紀中新世の泥岩に広く出現する。例えば、津軽山地を構成する小泊層の泥岩に多産する。黒雲母は白亜紀の花崗岩～花崗閃緑岩に広く産出する。例えば、階上岳を構成する階上岳花崗岩類や深浦の白神岳花崗岩類などある。また、黒雲母は新第三紀中新世の流紋岩質火砕岩類にも出現する。津軽山地の太田凝灰岩や湯ノ沢カルデラを構成する尾開山凝灰岩類などがその例である。ホルンブレンドは黒雲母とともに、上述の花崗岩類や火砕岩類に産出する。単斜輝石 (オージャイト) は第四紀の火山岩類に広く出現する。青森県に分布する第四紀の安山岩質～玄武岩質火山岩類には殆ど含まれている。また、新第三紀中新世の

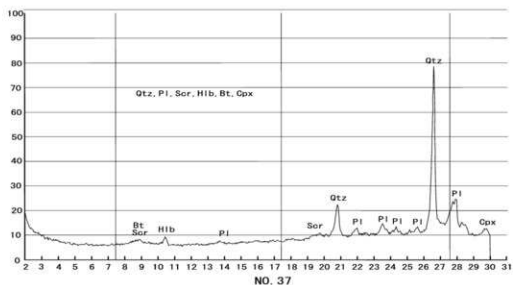
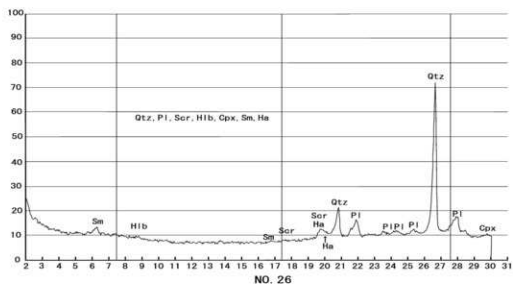
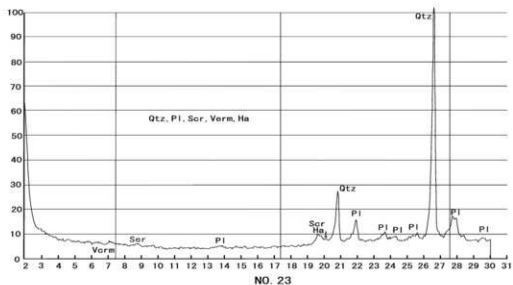
安山岩質～玄武岩質火山岩類及び同質火砕岩類にも多産する。津軽山地の長根層や西津軽地域の尻高沢層や藤倉川層の火山岩類や火砕岩類などがその例である。

従って、土器原料の産地特定についてはより詳細な調査が必要である。鉱物や軽石を構成する火山ガラスの化学組成をEPMAなどで決定し、露頭より採集した試料のガラス及び鉱物組成と比較する方法が考えられる。今後のデータの蓄積に期待したい。

表11. 新田遺跡土器胎土分析

試料No.	注記	時期	色調	鉱物	特記事項
1	S1-02 9内土器P-2	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト	軽石粒子(径約1mm)を含む
2	S1-11 儀式貯P-26 12.0	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、セリサイト、(スメクタイト)	
3	S1-13 9層	中期木葉	褐色系	石英、斜長石、セリサイト	薄片(径約1mm)を含む
4	S1-11P-126 床土0.4	中期木葉	灰褐色系	石英、斜長石、黒雲母、ホルンブレンダ、セリサイト、(ハロイサイト)	
5	S8-14 P-16・17・42	中期木葉	灰褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)	薄片(径約1mm)を含む
6	S8-01	中期木葉	褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(ハロイサイト)	薄片(径約1mm)を含む
7	S3-06 P-133 12.0	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、普通輝石、セリサイト	
8	S3-06 P-25 P-26 P-71 P-127 12.0	中期木葉	灰褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト	
9	II J-111 P-X 層層	中期木葉	白色系	石英、斜長石、セリサイト	
10	P-1208	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
11	P-1207	後期		石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)、(イタリト/スメクタイト)混合鉱物	
12	P-1250	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、緑泥石、(緑泥石/スメクタイト)混合鉱物	薄片(径1～0.5mm)を含む
13	P-1302	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(イタリト/スメクタイト)混合鉱物	
14	P-1483	中期木葉	褐色系	石英、斜長石、普通輝石、セリサイト	
15	P-1705 1708 1709 12.0	中期木葉	褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト	
16	P-1742	後期		石英、斜長石、普通輝石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
17	P-1803	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、普通輝石、セリサイト	
18	P-1820	後期		石英、斜長石、ホルンブレンダ、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
19	P-1904	中期木葉	灰褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	薄片(径約1mm)、黒雲母針を含む
20	P-2206	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(ハロイサイト)	
21	P-2481	中期木葉	灰褐色系	石英、斜長石、セリサイト	
22	P-2545 2546 3811	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	軽石粒子を含む
23	P-2576	後期		石英、斜長石、セリサイト、(ハロイサイト)、(ハロイサイト)	
24	P-2820	中期木葉	褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(ハロイサイト)	
25	P-2892	中期木葉	褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、セリサイト、(スメクタイト)	
26	P-2783	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
27	P-4302	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト	
28	P-4720	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石	軽石粒子
29	P-5104	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	薄片(径1～0.5mm)を含む
30	P-6147	中期木葉	褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト	軽石粒子(径約1mm)を含む
31	P-6281	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
32	P-6874	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)	
33	P-7801	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、セリサイト	
34	P-8412	後期		石英、斜長石、ホルンブレンダ、セリサイト	
35	P-8419	後期		石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)	
36	P-8867	後期		石英、斜長石、黒雲母、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト	黒雲母針を含む
37	P-8897	後期		石英、斜長石、黒雲母、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト	黒雲母針を含む
38	P-8913	後期		石英、斜長石、黒雲母、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト	黒雲母針を含む
39	P-907	中期木葉	白色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト	
40	P-X 1層	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、(ハロイサイト)、(ハロイサイト)	薄片(径1～0.5mm)を含む
41	P-X 層上11 層層	中期木葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
42	P-X 層層	中期木葉	褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンダ、普通輝石、セリサイト	
43	P-X	中期木葉	白色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)	
44	S1-07 船土1	中期木葉～後期初期		石英、斜長石、スメクタイト、ハロイサイト	
45	仮定産地土			石英、斜長石、スメクタイト、ハロイサイト、パイロフィライト	

*カマツの内の鉱物土器の実質によるものと考えられる



Bt: 黒雲母、Cpx: 普通輝石、Ha: ハロサイト、Hib: ホルンブレンド、pl: 斜長石、Qtz: 石英、Ser: セリサイト、Sm: スメクタイト、Verm: パーミキュライト

図 96 X 線粉末回折分析の結果

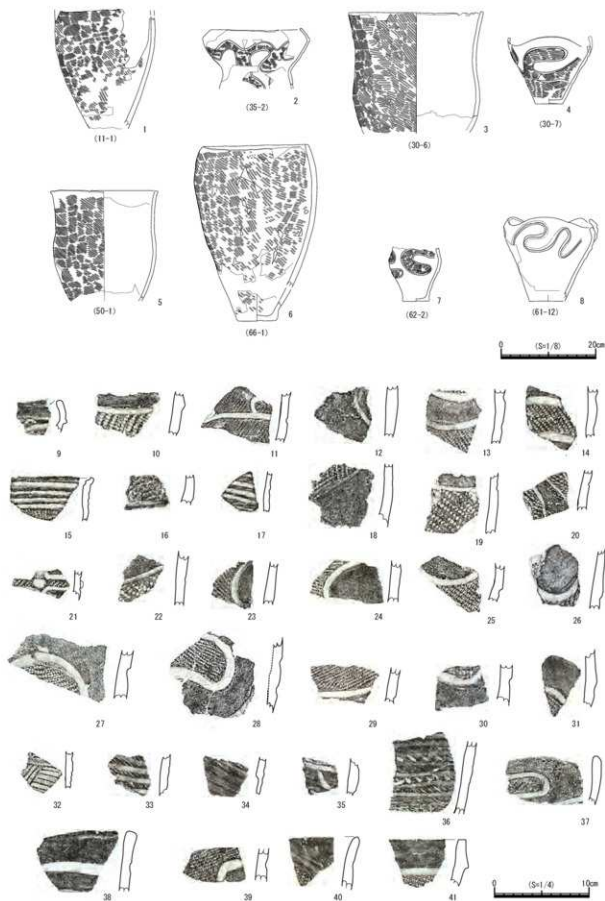


图 97 胎土分析资料实测图

第 6 節 新田遺跡出土の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴 正敏

新田遺跡より採集された、火山灰サンプル（10 試料）について、以下の観察・分析を行った。これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表 12 に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定できる可能性がある（町田・新井、2003）。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー（以下 EPMA）がもちいられるようになってきた。本報告では、1 試料の火山ガラスについて EPMA 分析を行った。使用した EPMA は弘前大学・理工学部所有の日本電子製 JXA - 8800RL、使用条件は加速電圧 15 kV、試料電流 3×10^{-9} アンペアである。補正計算は ZAF 法に従った。

ガラスの形態及び共存鉱物（アルカリ長石及びヘデン輝石の共存）より、試料 1、5 及び 8 の 3 試料は、白頭山苫小牧テフラ起源のガラスを含むと考えられる（表 12）。これらの試料には、粗粒な褐色ガラスや石英、針状のホルンブレンド、粗粒な軽石粒子が認められることより、十和田 a テフラ及び十和田八戸テフラが混入していると考えられる。

試料 2 に含まれる火山ガラスについて EPMA 分析を行った（表 13）。上記の観察結果により、十和田 a 及び十和田八戸テフラ起源のガラスの可能性がある。表 2 には比較のため、両テフラガラスの組成を示した。これらのデータからわかるように、両テフラガラスの化学組成は良く似ている（青木・新井、2000；柴他、2001）。本データのみから、両テフラの帰属決定は困難である。ガラスを分離・濃集し蛍光 X 線分析法や ICP 法などによる微量元素の定量が必要であろう。今後の課題としたい。

表 12 にて、「十和田系」とした試料は、ホルンブレンド及び石英を含まず、褐色ガラスが変質しているものである。

（引用文献）

- 青木かおり・新井房夫（2000）、三陸沖海底コア KH94 - 3、LM-8 の後期更新世テフラ層序。
第四紀研究、第 39 巻、107-120。
- 町田 洋・新井房夫（2003）、新編火山灰アトラス ー日本列島とその周辺ー、東京大学出版会、
pp. 336。
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実（2001）、十和田火山、降下軽石の化学組成変化 ー宇博部の一露
頭を例としてー、弘前大学理工学部研究報告、第 4 巻、第 1 号、11-17。

表 12. 新田遺跡火山灰試料

試料No.	採取地点	層位	ガラス及び鉱物	ガラスの帰属	特記事項
1	SI-05	第2層	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス、アルカリ長石、ヘデン輝石、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm, To-a, To-H	
2*	SI-05	第2層	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子 (1.0 ~ 2.0mm)
3	SI-05	第4層	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.0 ~ 2.0mm)
4	SI-05	第4層	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.0 ~ 2.0mm)
5	SI-08	第2 a 層	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス、アルカリ長石、ヘデン輝石、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm, To-a	
6	SI-08	第2 b 層	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.0 ~ 2.0mm)
7	SI-08	第2 c 層下部	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.5 ~ 2.0mm)
8	SI-08	第2 c 層上部	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス、アルカリ長石、ヘデン輝石、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm, To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.0 ~ 2.0mm)
9	SI-08	第2 d 層上部	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス (実質)、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	十和田系	岩片 (0.5 ~ 1.0mm)
10	SI-08	第2 d 層下部	ガラス (p m, b w)、褐色ガラス (実質)、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	十和田系	軽石粒子、岩片 (1.5 ~ 2.5mm)

p m: 軽石型, b w: バブルウォール型, B-Tm: 白頭山若小牧テフラ, To-a: 十和田 a テフラ, To-H: 十和田八戸テフラ,

* EPMA 分析を行った試料。

表 13. 新田遺跡、火山ガラスの EPMA データ

十和田系テフラ		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n	Total	EPMA
試料番号 2	最小	76.04	0.28	12.78	1.68	0.00	0.27	2.01	3.02	1.23			
	最大	78.62	0.45	13.95	2.07	0.20	0.43	2.70	3.67	1.46			
第2層	平均	76.94	0.35	13.27	1.90	0.11	0.33	2.36	3.36	1.37	7	99.17	WDS
	標準偏差	0.90	0.05	0.46	0.13	0.08	0.06	0.23	0.21	0.08			
十和田八戸テフラ													
	青木・新井 (2000)	76.38	0.40	13.43	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24	8	96.56	WDS
十和田 a テフラ													
	青木・新井 (2000)	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	9	98.41	WDS

測定値は無水で 100% になるように再計算した。FeO*: 全鉄を FeO として計算した。n は分析点数を表す。

WDS は、波長分散型 EPMA を表す。

第 7 節 新田遺跡採取土壌の自然科学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

青森県八戸市に所在する新田遺跡は、八戸南環状道路建設事業に伴い平成 15 年・平成 16 年に緊急発掘調査された遺跡である。平成 16 年度の発掘調査において、縄文時代早期および大木 10 式期を主体とする集落跡が確認され、その中から複式炉系列の炉跡や焼土とみられる遺構が多数検出された。焼土遺構には赤褐色を呈しているものの、それが熱の影響を受けたものか、あるいは褐鉄鉱をはじめとする化学物質の混入によるものかを判別することが困難なものもみられた¹⁾。当該遺構が赤褐色を呈する要因を明らかにするため、遺構面から採取した土壌を自然科学的方法で調査した。以下に調査結果を報告する。

2 調査試料

調査資料は表 14 に示す遺構から採取された 6 試料 (No. 1 ~ No. 6)、および近隣の沢地から採取された褐鉄鉱 (No. 7) である。赤褐色を呈する要因の特定が困難な試料は表 14 No. 2 で、No. 1・No. 3、および No. 4 はそれぞれ No. 2 の上層、下層、および No. 2 と同じ層位から採取した比較試料である。No. 5 は石囲炉内焼土、No. 6 は焼土遺構と判定された遺構面から採取した試料である。

調査試料の採取は、青森県埋蔵文化財調査センター・中村哲也氏および斉藤慶史氏によって行われた採取された試料の中から赤褐色を呈している部分を選別し、真空凍結乾燥した。乾燥した試料を 2 分し、一方は組織観察に、もう一方は蛍光 X 線分析法で含有元素を定性分析した後、酸で溶解し化学成分分析した。

3 分析方法

真空凍結乾燥した No. 1 ~ No. 7 の試料を、メノウ乳鉢で粉碎した後、No. 1 ~ No. 6 については純度 99.99% Ti 製カップにセットし、蛍光 X 線分析した。測定装置はサイドウインドー型クロム管球を装着した装置で、印加電圧 50kV、印加電流 50mA、真空下で、重元素および軽元素を定性分析した。No. 1 ~ No. 6 については蛍光 X 線分析が終了後、No. 7 については粉碎した粉末試料から 0.02g をテフロン分解容器に直接秤量し、0.797ml の HCl (31.3wt%)、0.217ml の HNO₃ (60wt%)、0.2ml の HF (50wt%)、および 3ml の蒸留水を加え密栓した後、マイクロウェーブサンプル分解装置にセットし、振動数 2,450MHz、三段階 (第一段階:100-400W、5分、第二段階:600W、5分、第三段階:1,000W、15分) で分解した。冷却後、4.8ml 硝酸 (4wt%) を加え、再びマイクロウェーブサンプル分解装置を用い 1000W で 10 分間分解した。冷却後、溶液をポリプロピレン製容器に移し、全量が 20g になるよう蒸留水で希釈した。このようにして作成した溶液中の全鉄 (T.Fe)、Cu (銅)、ニッケル (Ni)、コバルト (Co)、マンガン (Mn)、リン (P)、チタン (Ti)、ケイ素 (Si)、カルシウム (Ca)、アルミニウム (Al)、マグネシウム (Mg)、およびジルコニウム (Zr) の 12 元素を、誘導結合プラズマ発光分光分析法 (ICP-AES

法)で分析した。

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を顕微鏡で観察し、部分溶解していると思われる領域を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー (EPMA) で分析した。

4 分析結果ならびに考察

4-1 抽出した試料の化学組成

図 98～図 101 は表 14 に示す 6 試料に含有される重元素の蛍光 X 線分析結果である。6 試料からは一様に Fe、Mn、Sr (ストロンチウム)、および Br (臭素) が検出され、軽元素として、Si、Al、P、および S の含有が確認された。

表 15 は 7 試料の ICP-AES 法による化学成分分析結果である。No. 1～No. 6 の Si、Al はそれぞれ 23.2～27.5mass%、8.15～9.87mass%、Fe は 3.81～6.16mass%、Mn は 0.101～0.150mass% である。No. 7 褐鉄鉱に含有される Fe は 20.2mass%、Mn、Si、および Al はそれぞれ 0.211mass%、16.8mass%、4.17mass% で、No. 1～No. 6 の約 3～5 倍の Fe が含有されている。

化学成分分析の結果、No. 1～No. 6 に化学組成上明瞭な差異はみられない。赤色の発色源となる Fe の、No. 2 における含有量は 5.73mass% で、No. 7 はもとより、No. 5 および No. 6 に比べても低レベルである。

4-2 抽出した試料の組織観察結果

図 102a は、No. 2 から抽出した試料の EPMA による組成像 (COMP) である。火山ガラス片および微細鉱物を内包する、ガラス化した領域 (G1) が観察される。領域 G1 には Si、Al、Fe、および Mn が高濃度に含有されている (図 102b)。

No. 5 から抽出した試料からは、斜長石 (Pl) と推定される鉱物が、ガラス化した領域 (G1) によって取り囲まれた組織が観察される (図 103a・b)。ガラス化した領域にはいたるところに空隙がみられる (図 103a)。No. 6 から抽出した試料にも No. 2 同様、ガラス化した領域および粘土状物質が部分溶解した組織が観察される (図 104a・b)。

No. 1、No. 3、および No. 4 から抽出した試料には、斜長石 (Pl)、酸化ケイ素 (Qtz: 石英と推定される)、鉄チタン酸化物 (Xt)、および火山ガラス片などが観察されるが (図 105)、No. 2、No. 5、および No. 6 において確認された、溶解または部分溶解した後固化したと推定される組織は見出されなかった。

No. 1～No. 7 から抽出した試料の化学成分分析結果、および No. 1～No. 6 から抽出した試料の組織観察結果に基づけば、No. 2、No. 5、および No. 6 の 3 試料からはガラス化した組織が見出されており、外熱を受けた可能性が高い。とりわけ、石囲炉内から採取された No. 5、および焼土遺構から採取された No. 6 は No. 1 に比べ溶解が著しく、より高温下にさらされたとみることができる。

No. 2 の上層および下層、No. 2 と同じ層位から採取した No. 1、No. 3、および No. 4 に被熱の跡がみられなかったこと、赤褐色を呈していなかったことを考え合わせると、No. 2 の来歴としては、①他の場所で熱が加えられ、赤変した資料が運び込まれた、②No. 2 が検出された場所に炉等の熱を発す

る設備が設置されていた、という 2 点を考えることができる。この点については考古学の発掘調査結果を加味し、検討する必要がある。

註

- 1) 新田遺跡を発掘調査された青森県埋蔵文化財調査センター・中村哲也、斉藤慶史両氏からのご教授による。

表 14 調査資料の概要

試料 No.	検出遺構	遺構の土質 (内装観察)	採取した試料の内装観察結果	推定年代	検出状況
No.1	第Ⅲ層 中掘浮のブロック	日記なし	黄褐色浮石ブロック	-	-
No.2	S11 第Ⅰ層「灰土」	1032/3 黒褐色粘土	7.50% 褐色の粘土質(φ1~5mm)2% 灰入、しまりややあり 粘性強 アブズナが母材?	縄文時代早期末~前期初期	遺跡中で周囲と比較して赤味の強い範囲が確認された。試料 No.1 の下位であることから縄文時代前期初期以前の年代が考えられる。
No.3	第Ⅳ層	1032/2 黒褐色	砂を含まない堅質なシルト φ1cm の 1030% 黄褐色浮石 10% 含む 下層との境界は急激的である	-	-
No.4	第Ⅳ層	1032/1 黒色シルト	上層よりやや明度高い 上層より粘り強かつまったりあり 中掘浮石粒の黄褐色黒粒砂子含む	-	-
No.5	S102 儀式伊第Ⅰ層 石割の内装土	1031.7/1 黒色シルト	1030% 黄褐色浮石(φ1~4mm) 1% 未満混入、しまりあり 中掘浮石粒面と思われる黄褐色黒粒砂子含む	縄文時代中期末	-
No.6	S08 第Ⅰ層 壁土	1032/1 黒色土 主床	壁土 1~5% 混入	縄文時代中期末	遺跡中で周囲と比較して赤味の強い範囲が確認された。縄文時代中期の S114 の遺構確認面とはほぼ同一レベルで確認し、該当する時期の土層が同層で出土していることから縄文時代中期の年代が考えられる。
No.7	掘跡面	日記なし	-	-	-

注) No. は分析番号、検出遺構、遺構の土質、採取した試料の内装観察結果、推定年代および検出状況は、青森県埋蔵文化財調査センター・中村哲也、斉藤慶史氏による。

表 15 採取した土壌の化学組成 (mass%)

No.	Ti	Fe	Cu	Si	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	Zr
1	3.81	0.003	0.002	0.003	0.114	0.071	0.442	25.5	3.43	8.93	0.881	0.009	
2	5.73	0.005	0.002	0.004	0.133	0.059	0.505	25.0	3.03	8.99	1.14	0.008	
3	5.21	0.005	0.002	0.004	0.101	0.088	0.507	23.7	2.94	8.67	0.79	0.009	
4	5.60	0.001	0.002	0.004	0.118	0.074	0.543	23.2	2.49	8.91	1.01	0.008	
5	6.16	0.007	0.002	0.004	0.150	0.152	0.506	24.6	2.98	9.87	1.34	0.009	
6	5.25	0.003	0.002	0.004	0.133	0.093	0.607	25.3	3.11	8.15	1.19	0.008	
7	20.2	0.003	0.004	0.003	0.211	1.43	0.279	36.8	2.98	8.17	0.657	0.005	

注) No. は表 1 に対応、化学成分分析は ICP-AES 法による。

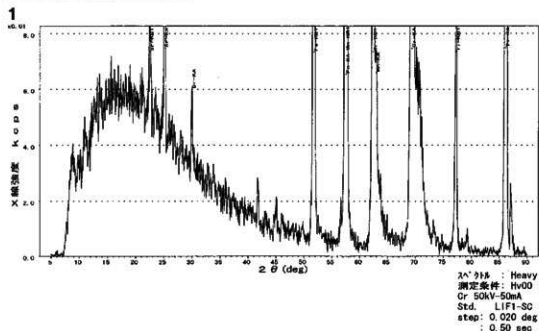


図 98 No. 1 の蛍光 X 線分析結果

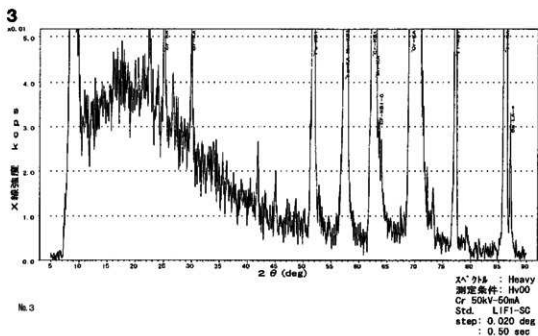
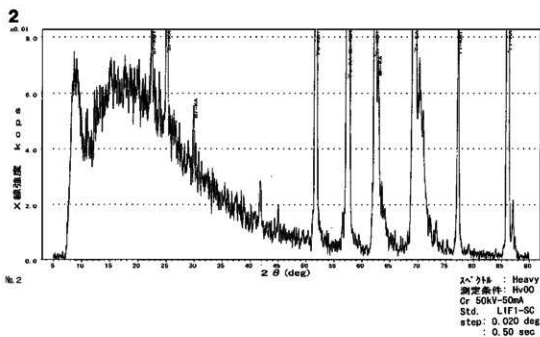


図99 No. 2・No. 3の蛍光X線分析結果

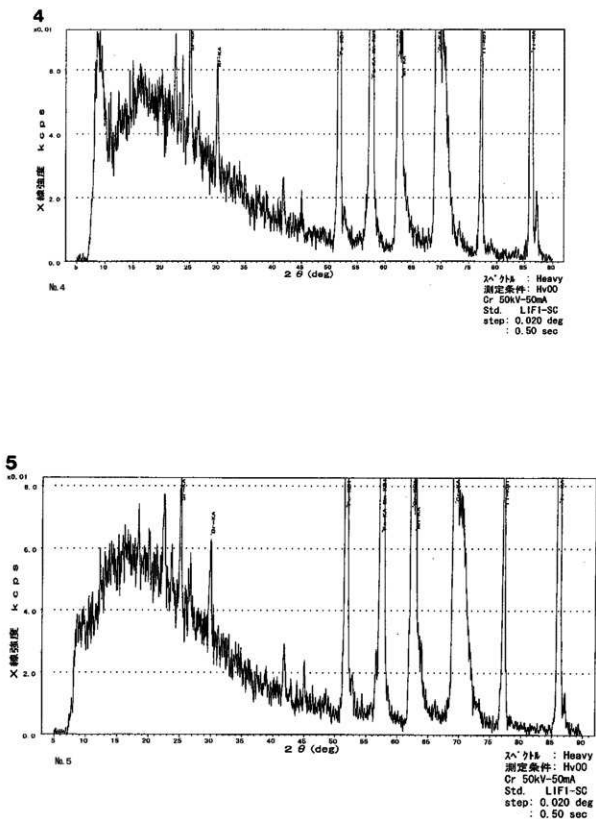
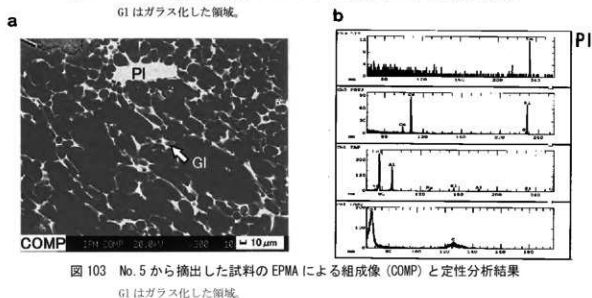
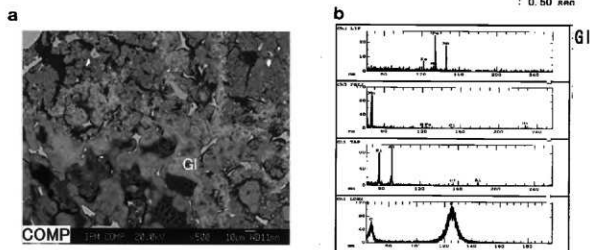
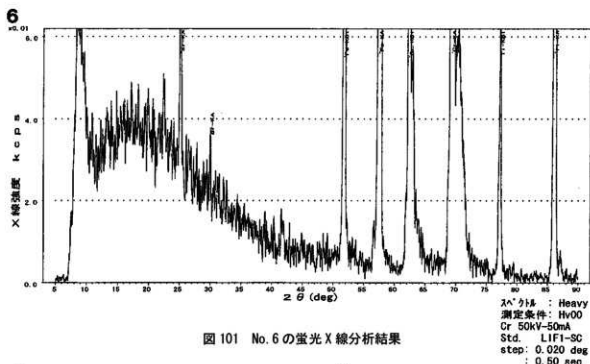


図 100 No. 4・No. 5 の蛍光 X 線分析結果



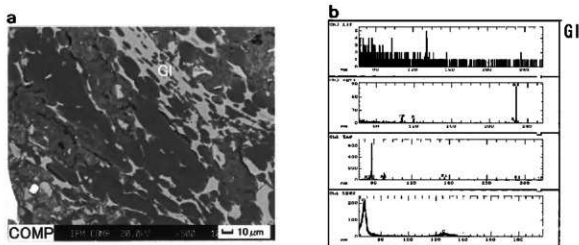


図 104 No. 6 から抽出した試料の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果
Gl はガラス化した領域。

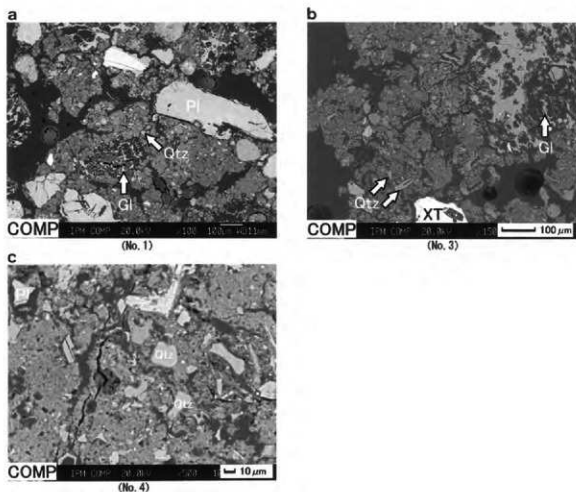


図 105 No. 1・No. 3・No. 4 から抽出した試料の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果
Qtz: 酸化ケイ素 (石英と推定される)、XT: 鉄チタン酸化物、Gl はガラス化した領域 (火山ガラス片と推定される)。

第6章 考察

第1節 縄文時代中期末葉の土器について

本遺跡の出土土器の大半を占めるのが第Ⅷ・Ⅸ群とした縄文時代中期末葉に属する土器である。これまで、青森県内の縄文時代中期末葉の土器型式は大木10式併行期の土器、あるいは大曲Ⅰ式として理解することが一般的であった。それは、上北・下北・津軽地域において、縄文地文に沈線文を施す土器が分布することが知られており、大木10式と区別する必要があるからである。しかし、本遺跡の第Ⅷ群土器には縄文地文に沈線文を施す土器は存在せず、広義の磨消縄文手法で文様が描出されるのが一般的で、大木10式に直接対比しうるものである。以下に、大木10式との対比をとおして第Ⅷ群土器の時間的位置づけを考える。

第4章において出土遺物の分類を示したが、小破片から大型の破片、復元土器をすべて同じ基準で分類することは困難で、手法を中心にした分類にとどまらざるを得なかった。そこで、出土遺物を再掲し、属性単位で検討を加える。

口縁部形状	文様の区画線	文様
a. 平縁	1 沈線	1 縄文施文部が文様の主体をなす。 磨消部は比較的幅が狭く、文様帯のキャンパスの役割を果たしている。
b. 緩い波状口縁	2 複沈線	2 無文部が文様の主体をなす(19-11)。
	3 微隆起線	

主モチーフ

- 1 波頭文(30-7, 35-17, 61-12)
- 2 O字文(35-14)
- 3 縦位のS字文(「S」を反転したものも含む)S字類似文様(30-16, 43-8, 74-17)
- 4 x字状の連繋文(35-2, 36-1, 53-15, 75-3)
- 5 C字文(「C」を反転したものも含む)(36-1, 61-8, 62-2)
- 6 無文部が水平方向に伸びるもの(19-11)

文様下地画区画モチーフ

- 1 波状文(35-14, 35-17, 48-7, 49-12, 61-1, 75-3)
- 2 形骸化した波状文(49-4)
- 3 平行沈線文(48-4, 62-1, 75-2)

文様描出技法

縄文と沈線の切り合い関係では縄文が沈線を切るもの、沈線が縄文を切るもの両者がある。沈線は、引き直した痕跡をとどめているものがある(35-14, 44-8, 49-2, 76-5など)。また、縄文部は、文様のモチーフに沿って縄文の回転方向を順次変えるものが見られる。これは、縄文を沈線が切るものの中にも認められる。文様モチーフに沿って縄文施文の方向が変化することは、縄文施文時点で既に沈線が認識できること意味している。従って、縄文と沈線の切り合い関係は、狭い意味での充填が磨消しかを定義する条件になりえず、縄文を沈線が切るものは再調整が施されたものとして理解できる。これらの点から、文様描出技法は沈線(下書き)→縄文施文→沈線の再調整という工程をとったものと考えられる(充填縄文)。縄文施文の方向が変化せず、沈線が縄文を切るものは、縄文施文→沈線の工程を採った可能性と、上記の充填縄文の可能性がある。この両者を合わせて、広義の磨消縄文と呼称する。この両者を分類基準は小林(1993)に準ずる。

属性の分類



図106 土器集成図1(S=1/6)

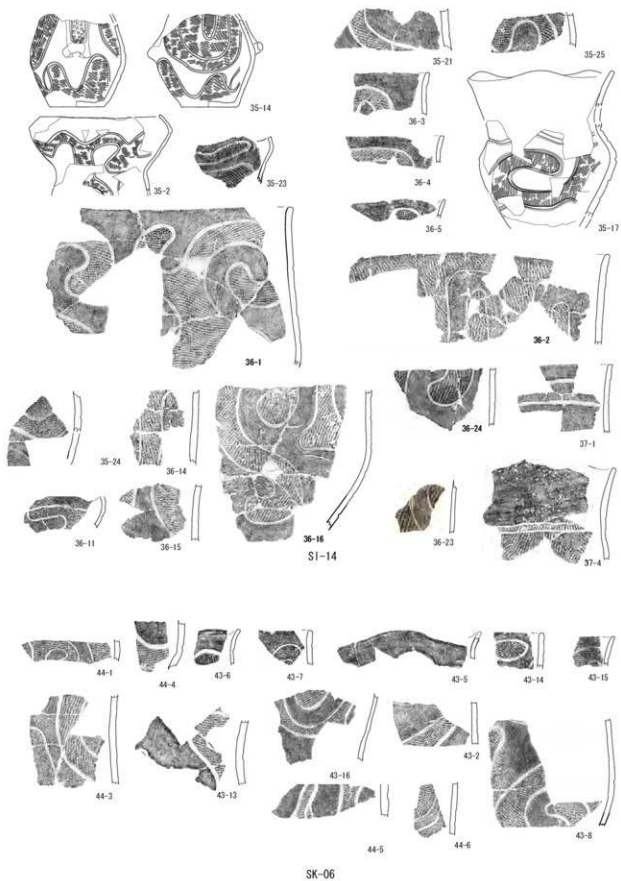


図 107 土器集成図 2 (S=1/6)

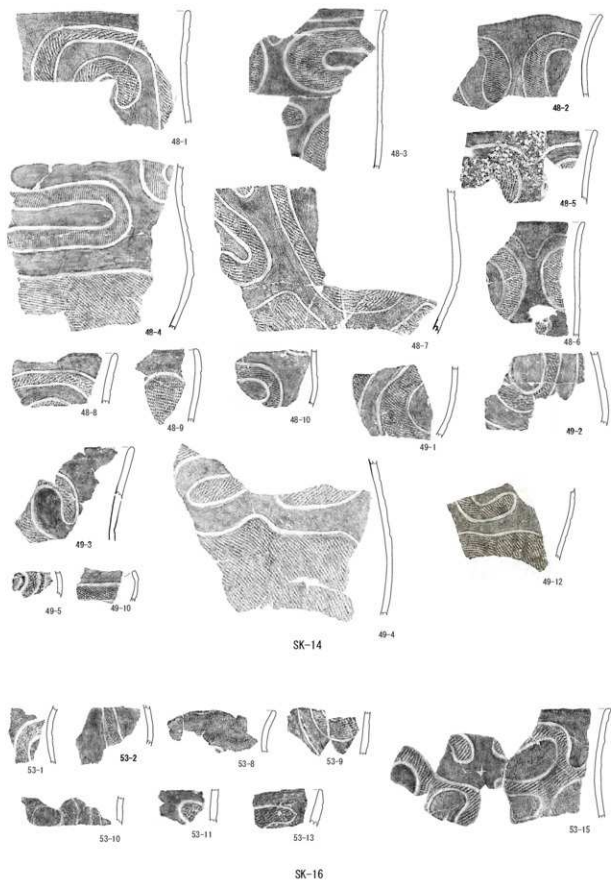
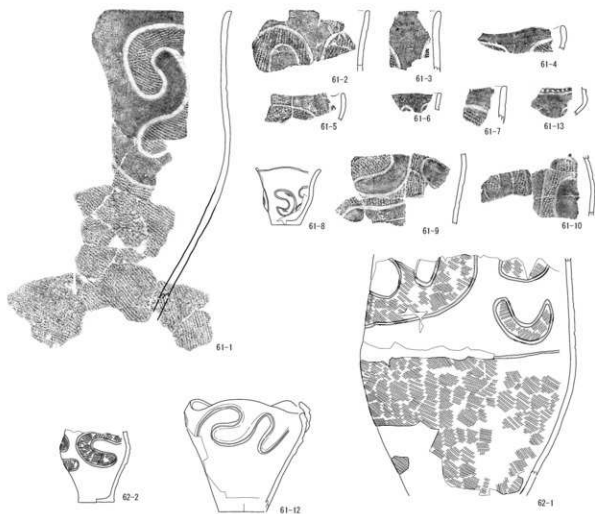
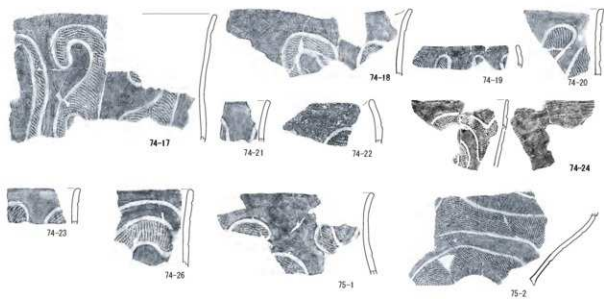


图 108 土器集成图 3(S=1/6)

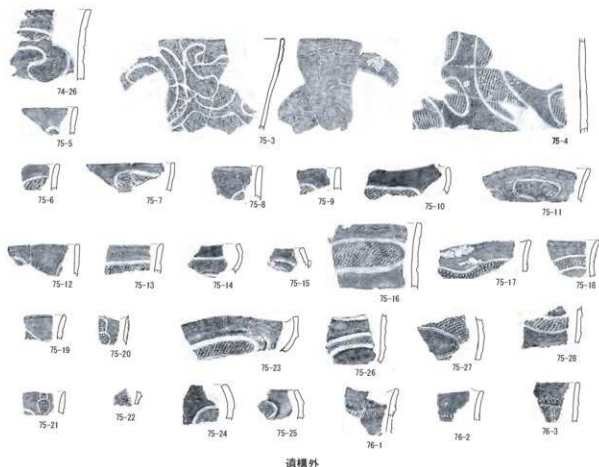


SX-06



遺構外

図 109 土器集成図 4(S=1/6)



遺構外

図110 土器集成図5(S=1/6)

個体内の属性の組み合わせを表16に示した。組み合わせを判別できる個体が少ないため、数量的に有意な差を求めることは困難である。そこで、既存の編年により諸属性の変化を概観し、これと対比することとする。

大木10式土器の編年は、近年の豊富な発掘調査資料を基に、遺構出土遺物を用いた編年が提示されている(稲村 1997、日本考古学協会福島大会実行委員会 2005)。中でも、福島県伊達郡飯野町に所在する和台遺跡の発掘調査資料を用いて編まれた新井の編年(新井 2005)は竈穴住居の炉埋設土器を主体に型式学的な検討を加え、大木9式を2細分、大木10式を4細分する精緻なものである。供伴関係も明瞭で、編年観を共有するための基礎的な資料といえる。

新井の編年は掲載誌の性格上、詳細な解説が付されていないので、その概略を読み取らざるを得ない。大木10期の土器はおおむね、古い方から新しい方へ向かって、文様面モチーフは単独単位文様→単独単位文様+横位展開文様→横位展開文様→方形区画文、文様描出技法は、沈線→沈線+微隆起線→沈線+微隆起線+鱗状突起→沈線+鱗状突起という変化をたどる。

以上が新井の編年のうち、新田遺跡第Ⅷ群に関わる部分の概略である。北上市横欠遺跡とその周辺

		主モチーフ					区画モチーフ				
		波頭文	0字文	縦位のS字文	ㄨ字状の連繋文	C字文	水平化したS字文	無文部が水平方向に伸びるもの	波状文	形骸化した波状文	平行線文
描出技法	沈線	○	○	○	○	○			○	○	○
	稜沈線				○		○		○		○
	隆起線	○						○			
		主モチーフ					区画モチーフ				
		波頭文	○					○			○
		0字文	○								
		縦位のS字文	○								
		ㄨ字状の連繋文									
		C字文									
		無文部が水平方向に伸びるもの									○

表 16 属性の供伴関係

の遺跡の資料を用いて検討された稲村の編年も概略は同様である。和台遺跡では稜沈線の施される土器が少なく、大木 10 式前半Ⅱ期の時点では、稜（微隆起線）の縄文側が太い棒状工具で調整されるが、調整の及ぶ深さは表面にとどまっておき、沈線とは言い難いものが多い。まれに 2 号住 11 のように沈線ととらえることが可能なものがある。新田遺跡第Ⅷ群土器は、無文部を磨き込むことで隆起線と無文部の傾斜変換点が不明瞭となり、沈線との境目でもっとも厚くなり、沈線に向かって急激に切れ落ちるものが一般的である（図 111）。このような点で違いがあるものの、文様モチーフや文様帯区画モチーフは大半が和台遺跡大木 10 式前半Ⅰ期～前半Ⅱ期に対比できると思われる。19-11 は大木 10 式後半Ⅰ期に対比されよう。

次に新田遺跡第Ⅷ群土器を新井の大木 10 式前半Ⅰ期とⅡ期に対応させて分離できるかどうか検討する。新田遺跡第Ⅷ群土器の中に、微隆起線で文様を描くものは 19-11、61-12 を除いて存在しない。このうち、19-11 は微隆起線に挟まれる無文部が横方向に伸びることから和台遺跡大木 10 式後半Ⅰ期に位置付けられることは前述の通りである。新田遺跡第Ⅷ群土器には微隆起線がほとんどなく、稜沈線が多いという特徴がある。また、新田遺跡第Ⅷ群の中には横位に連繋する S 字文（図 112 大木 10 式前半Ⅰ期の 134 号住炉埋外側）も確認できない。これが地域差としてとらえられるのか時間差としてとらえられるのかは現時点で不明である。現状では大木 10 式前半期の細分というレベルでは他地域の編年と直接的に対比することは困難である。そこで遺跡内での出土状況を検討してみたい。遺構単独で層位的に遺物が分離される例はほとんどない。これは、黒色土中に遺構が形成されることが多く、分層自体が難しい遺構が多かったためである。わずかに、SI-14 の壁際から出土した 35-14・16 とその他の土器が分離できる可能性が指摘されるが、数量的に僅少で様相の差は読み取れない。次に遺構単位で土器の様相に差があるかどうかを検討する。ここでは、まず遺構堆積土出土土器の接合関係を検討することとする。遺物を包含する土層が厚い SI-14、SX-06 の場合、図示していないが上下関係にある遺物が接合している。また、遺構間で遺物が接合した事例は図 113 に示したとおり



図 111 新田遺跡の稜沈線



図 112 和台遺跡における模式炉と土器型式の分類 (新井 2005 より転載)

であり、SI-14、SX-06 出土土器はお互いに接合するものがあり、また遺構外出土遺物とも接合している。これらのことから、SI-14・SX-06 の出土土器はどちらも大型の破片や完形に近い個体を含み、

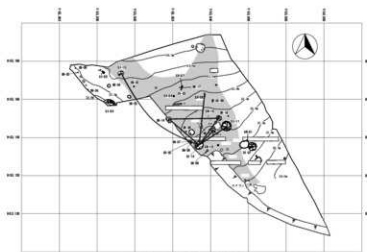


図 113 遺構間の接合関係

すべてが二次的な廃棄とは考えがたいが、相当量の二次的な廃棄の様相を示すものが混在すると思われる。SK-14 には平行化した S 字文を稜沈線で描出する個体があり、型式学的には新しい様相を含んでいる。SK-14 出土土器は SI-14 出土土器と接合するものがある。SK-14 の遺物の出土状況から、土器・石器・炭化物を一括廃棄したことは確かであるが、二次的な廃棄が混在する可能性も否定できない。いずれにせよ、遺跡内の

出土状況から供伴関係を決定することは困難である。

新田遺跡第Ⅷ群土器は、型式学的には新旧の要素を持っているが、出土状況からは明瞭に分離できず、大部分が大木 10 式前半期に比定され、ごく一部の土器（図 19-11）が大木 10 式後半 I 期に比定されるものと考えておきたい。また、図 76-3 は、後半 II 期～後半初頭の可能性がある。

第 2 節 複式炉の使用法について

本遺跡では縄文時代中期末葉～後期初頭に属すると考えられる竪穴住居跡が 7 棟（同一掘方内での重複を数えれば 8 棟）検出された。そのうち、4 棟がいわゆる複式炉、1 棟が複式炉系列の炉を有している。また、1 棟は石囲炉と埋設土器を有する。複式炉はいずれも土器埋設部・石囲部・前庭部を有するものである。ここでは、土器埋設部に使用された土器の使用痕跡・土器内出土物、炉埋設土器内土層堆積状況から複式炉土器埋設部の使用法について考察する。

「土器の使用痕」の用法

炉に埋設された土器は、当然ながら容器として使用された際の使用痕も残している。しかしここでは、容器としての使用痕は、土器が炉体として使用された際の痕跡と識別が必要な場合のみ扱うこととし、単に「使用痕」とした場合、炉体として使用された際の痕跡を指すものとする。

以下に特徴を列記する。

炉埋設土器内の土層堆積状況（図 114、115-9）

炉埋設土器内の土層堆積状況は、住居堆積土と一連のものと解釈できる上層と、炭化物や焼土の混じる下層に区分できる。土器内には現地性の焼土は形成されていない。

土器の使用痕（図115-1～8）

土器上端付近の赤化が著しい。下位では、褐色・暗褐色・暗灰褐色等の色調を呈し、SI-02・

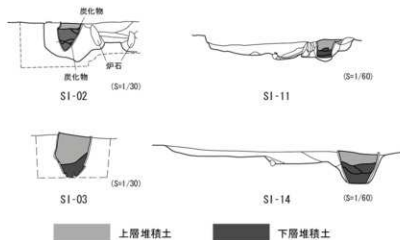


図114 複式炉埋設土器土層堆積状況集成図

形成されることはない。

土器内堆積土の上・下層の境界と土器内面の使用痕の境界線は、おおむね一致する。このことから、土器内堆積土下層は、炉廃絶後に堆積した土層ではなく、炉使用時に既に存在した土層である可能性が高い。一方、土器外に焼土が形成されることや、土器の上位がよく焼けていることから考えて、土器内で火を使用したことは明らかである。この点は、土器内に現地性の焼土が形成されないことと矛盾する。土器内では、上位1/2～1/3程度まで土を入れて火床としたが、この土は頻繁に攪拌されたとすれば一見矛盾する状況を総合的に解釈できる。このような現象と解釈は、SK-14・15・16の底面に形成された焼土にも相通じるものである。土器内からは、炭化材のみならず、炭化種子なども出土する場合がある（第5章第2節参照）。土壌中で種実を加熱するのが目的であったとすれば、頻繁に土壌が攪拌され、焼土が形成されないという状況も肯ける。しかし、出土した炭化種実片は、果皮が多く、必ずしも種実の加熱という使用法を支持するものではない（第5章第2節参照）。具体的な使用法を特定することは現状では難しい。

第3節 複式炉の分布について

これまで、青森県内では土器埋設部・石囲い部・前庭部の構成をとる複式炉（以下、三部構成の複式炉と呼称）は八戸市丹後谷地遺跡第30号竪穴住居跡、永野遺跡縄文第6号竪穴住居跡の2例が知られている。どちらも大木式土器の分布圏に近い地域である。

新田遺跡の所在する太平洋側で三部構成の複式炉が検出された遺跡の分布を見ると（図116）、本地域に隣接する岩手県では、県南部に多く、県北部では少ない。駒木野の集成（駒木野 2004）によれば、二戸・久慈地域⁽¹⁾では、三部構成の複式炉は、複式炉・複式炉系列の炉の約15%を占める⁽²⁾。一方、県南部の千厩・一関・水沢地域では約51%で、県北部の約2.5倍の占有率である。複式炉・

SI-11例ではハジケが観察できる。上位と下位の色調の変化は急激で、SI-02・SI-14例では、幅の狭い黒色帯が認められる。SI-03例はハジケや色調の変化は観察できないが、内面が赤化している。

土器外の状況（図114）

土器外には焼土が形成されている（SI-02・11・24）が、土器断面に沿って鉛直方向に深く形



図 115 複式炉埋設土器の使用痕

1・2 SI-02 伊埋設土器 3・4 SI-03 伊埋設土器 5・6 SI-11 伊埋設土器 7・8 SI-14 伊埋設土器 9 SI-14 伊埋設土器使用痕と土器内堆積土の関係

複式炉系列の炉を検出した遺跡数に対する三部構成の複式炉検出遺跡数は、県北部で 13%、県南部で 69%である。県南部では、石囲い部底面が石敷きになるいわゆる上原型も含んでいる。時期的

には、県南部では大木9式の段階で三部構成の複式炉が出現している。

青森県でこれまでに検出された三部構成の複式炉は上述のとおりで、丹後谷地遺跡第30号竪穴住居跡が大木10式前半期、永野遺跡調査第6号竪穴住居跡は直接的な対比は困難であるが、文様モチーフの上端が平行なことから、大木10式後半期の可能性がある。

新田遺跡の所在する青森県南部地方は、大木9式に平行する時期には在地の型式である最花式と大木9式が共存する。大木10式前半期の様相はこれまで断片的な資料が知られていだけで、不明な点も多々あるが、本遺跡の例からすると、文様モチーフや文様描出技法において独自性を示す在地の土器は見られず、大木10式の分布圏に含まれるといえそうである。

このような状況から、新田遺跡の三部構成の複式炉は、大木式系土器の分布圏の拡大と連動して出現したものと理解できる。岩手県下では県南部・県央部内陸

には底面を石敷とするもの（いわゆる上原型）が分布するが県北部では見られない。今後、土器埋設部の使用法などを加味することでより詳細な地域区分が可能になるかもしれない⁽²⁾。（中村）



図116 東北北部太平洋側の複式炉検出遺跡分布
(駒木野 2004、坂本 2002 を基に作図)

註

(1) 地域区分は、県内地方振興局の管轄区域を7ヶ所に区分したものを採用し、地域区分は下表の通り（駒木野 2004）であるという。

1. 盛岡（南部） ・盛岡市 ・岩手郡・雫石町・滝沢村 ・紫波郡・矢巾町・紫波町	2. 盛岡（北部） ・二戸郡・安代町 ・岩手郡・葛巻町・岩手町・西根町・松尾村・玉山村	3. 二戸・久慈 ・久慈市・二戸市 ・九戸郡・種市町・大野村・軽米町・九戸村・山形村 ・下閉伊郡・普代村 ・二戸郡・一戸町・浄法寺町	4. 宮古 ・宮古市 ・下閉伊郡・田野畑村・岩泉町・田老町・新里村・川井村・山田町
5. 釜石・遠野・大船渡 ・遠野市・釜石市・大船渡市・陸前高田市 ・上閉伊郡・大槌町・宮守村 ・気仙郡・住田町	6. 千厩・一関・水沢 ・江刺市・水沢市・一関市 ・胆沢郡・金ヶ崎町・胆沢町・前沢町・衣川村 ・西磐井郡・平泉町・花泉町 ・東磐井郡・大東町・東山町・千厩町・藤沢町・室根村・川崎村	7. 北上・花巻 ・花巻市・北上市 ・押賀郡・大迫町・石鳥谷町 ・和賀郡・東和町・湯田町・沢内村	

(2) 「三部構成の複式炉」という分類と駒木野の分類は一致しない部分があるので、約●●とした。

(3) 筆者が観察した福島県和台遺跡、法正尻、馬場前の各遺跡では、伊理設土器は底面付近まで熱を受けた痕跡があるものが多く、本遺跡例のように部位によって急激に受熱痕跡が急激に変化するものは観察できなかった。このことは、伊理設土器の使用法に違いがあったことを示していると考えられる。

第4節 石器について

1) 新田遺跡石製遺物の概要と整理、分析の方法

新田遺跡の調査では表土および攪乱部分をのぞいた第Ⅱ層以下の遺物包含層、遺構内堆積土から出土したこぶし大以上の礫、剥片石器の可能性が考えられた石製遺物（自然礫を含む剥片石器、礫石器、石製品などの総称として以下用いる）全点について出土位置の三次元座標を記録している。取り上げられた石製遺物は6,220点、総重量は約1,565kgに達した。これら石製遺物は室内整理作業で自然礫、剥片石器、礫石器、石製品に選別し、剥片石器、礫石器については後述する基準に基づいた分類を行った。また、あわせて個別重量を測定し、それぞれの石が有する属性を可能な限り抽出した。各類型の総点数・総重量は表35に示す通りである。接合関係の確認については遺構内外出土の剥片石器を対象にして重点的に実施し、自然礫、礫石器、炉石については個々の資料の扱いにくさから、遺構内出土資料を中心に整理作業過程の中で個別的に確認するに留まった。剥片石器では9組、礫石器では2組、自然礫では8組の接合関係が確認されている。（図117）等高線に直交する形で標高の高いものと低いものが互いに接合するケースが多く、標高の低い位置で出土している資料では層位的に上位になるものもみられる。

本節では分析対象資料を増やし、層位と器種類型の対応について考察をすすめるために遺構内の石器についても共伴する土器型式から遺構内堆積土が相当する基本層位に振り分けている。特に断りのない限り、ここで表記するローマ数字の層位は遺構外資料だけではなく、遺構内堆積土を包括した内容を有するものである。

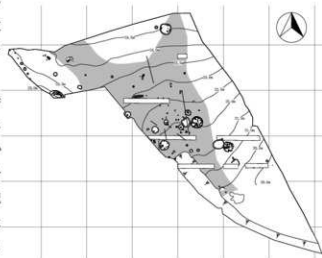


図117 石製遺物の接合関係

2) 新田遺跡出土石器の分類

本報告書では剥片石器を11器種、礫石器を7器種に分類している。剥片石器の器種は想定される最終的な機能形態に基づいて設定した。礫石器についても基本的には同様であるが、複数の使用痕が観察され、時間的な前後関係が不明確なものも多く存在する。これらについては一つの石器が特定の機能に収まらないことが考えられるため、複合的な使用痕を有するものを「敵磨器」という器種に一括してまとめた。出土点数については断りのない限り、平成15年度および16年度調査で出土した資料の総数である。以下、各器種の細別類型および、出土資料の概要について記載をおこなう。尚、石材点数の後の括弧内数値は同一器種内における石材組成比である。

1 剥片石器

総数949点が出土している。珪質頁岩の利用度が極めて高く、自然礫として多く確認されたチャート素材とする剥片はほとんどみられない。

(1) 石鏃 長さ50mm未満で矢尻としての機能が想定される小型尖頭状の両面加工石器を「石鏃」とした。総数129点が出土しており、未製品・失敗品と考えられる半製品段階の資料が12点含まれる。素材として用いられている石材は珪質頁岩127点(98%)、鉄石英1点(1%)、流紋岩1点(1%)である。

基部の形状と平面形態から6類型に細別した。層位との対応としては第IV層には有茎鏃(II類)が含まれない。本遺跡で主体をなすのは無茎凹基(Ic類)であり、遺構外第III層および中期末に帰属する遺構内堆積土からの出土が多い。(図120)

I a類(無茎円基): 基部の平面形状が外彎するもの。第III層を主体に総数23点が出土している。

I b類(無茎平基): 基部の平面形状が直線的に整えられているもの。第III層を主体に総数11点が出土している。

I c類(無茎凹基): 基部が抉入しているもの。第III層を主体に総数66点が出土している。

I d類(無茎凸基): 基部が尖頭状をなすもの。第III層を主体に総数5点が出土している。

II a類(有茎凸基): 肩部から茎にかけて緩やかに外彎するもの。総数7点が出土している。出土層位は第III層のみである。

II b類(有茎平基): 肩部から茎にかけての形状がほぼ直角をなすもの。第III層で4点が出土している。

II c類(有茎凹基): 肩部から茎にかけて内彎するもの。第I層から1点出土している。

未製品・失敗品: 調整が粗雑で、厚みがあり先端部についても十分な加工がなされていないもの。総数12点が出土している。

第121図に長さとの相関を示した。I c類は厚さに強い規則性がみられるが、I a類は未製品・失敗品並に変異が大きい。これらの一部については未製品・失敗品に相当する可能性がある。

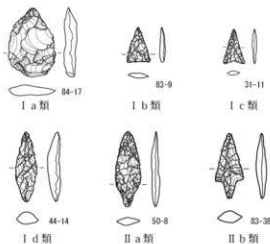


図118 石鏃の分類

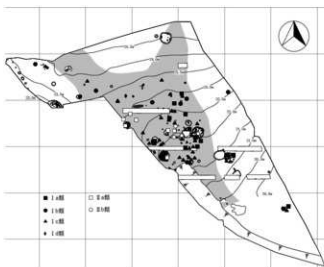


図119 石鏃平面分布図

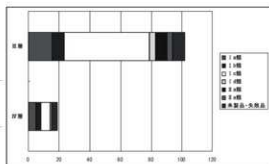


図120 石鏃類型組成

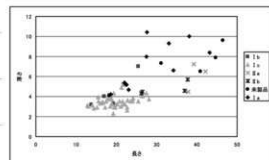


図121 石鏃長さ・厚さ

(2) 石槍 長さ 50mm 以上で刺突機能が想定される大型尖頭状の両面加工石器を「石槍」とした。総数 5 点が出土している。石材は全て珪質頁岩である。SI14 周辺で比較的多く出土している。調査区内の分布を図 125 に示した。

(3) 石匙 つまみ部を有し、片面加工で側縁の整えられている石器を「石匙」とした。総数 14 点が出土している。素材として用いられている石材は全て珪質頁岩である。

I 類: 背面の右側縁に連続的な調整を施し、その剥離面を打面として正面に長い調整剥離を施しているもの。いわゆる「松原型石匙」(秦 1991)である。第 III 層および第 IV 層から総数 3 点が出土している。縄文時代早期後葉から前期前葉の遺構内で多く出土することが指摘されている。出土点数が少なく、層位、空間分布いずれからも時期を限定する状況は確認できなかった。2 点出土している調査区南東部分は縄文時代早期の土器が比較的多く集中する。(図 80, 123)

II 類: 円形に調整加工を施し、平面形態は巾着状を呈するもの。第 III 層および第 IV 層から総数 4 点が出土している。

III 類: 縦長の剥片を素材とし、両側縁の加工が腹面側から直線的に施されているもの。総数 4 点が出土している。

IV 類: 縦長もしくは横長の剥片を素材とし、一側縁に連続的な調整を施し、対になる側縁に刃器としての機能が想定されるもの。第 IV 層で 3 点が出土している。

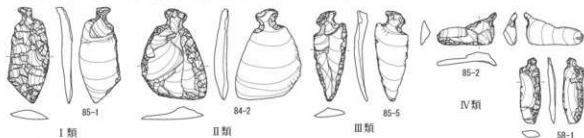


図 122 石匙の分類

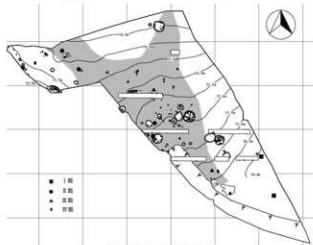


図 123 石匙平面分布

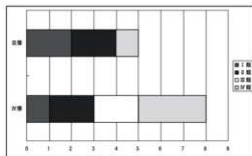


図 124 石匙類型組成

(4) 石筥 直接打撃によって平面形態が撥型に整えられているものを「石筥」とした。総数 8 点が出土している。石材には珪質頁岩 7 点 (88%)、細粒凝灰岩 1 点 (12%) が用いられている。後線部分に摩擦光沢のみられるものが含まれる。(85-6 他) 調査区内の分布を図 125 に示した。

(5) 両極加撃痕跡のある剥片 主要剥離面に複数対になる状態で顕著な階段状剥離と発達したリン

グがみられるもの、もしくは打点に伴うフィッシャーが同一剥離面に対して複数生じているものを「両極加撃痕跡のある剥片」とした。総数 24 点が出土している。長さは 30mm 程度に集中しており、加撃方向は側縁全体にめぐるのが多い。石材は全て珪質頁岩であるが、玉髓質の透明感のあるものが含まれている。

(6) 二次調整のある剥片 (不定形石器) 剥片の側縁に連続的な調整剥離が加えられているものを「二次調整のある剥片」とした。本器種にはいわゆる「搔器」、「削器」等のスクレイパー類、器種が特定できない定形石器の未製品などが含まれる。総数 157 点が出土している。

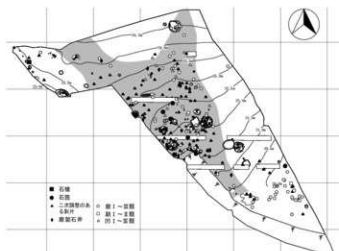


図 125 石鏃、石筥、二次調整のある剥片、磨製石斧、敲磨器類平面分布

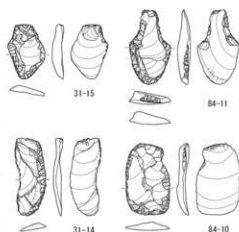


図 126 二次調整のある剥片 (不定形石器)

(7) 石鏃 先端部に摩擦、刃こぼれ等の使用痕がみられ、刺突、穿孔の機能が想定される尖頭状の小型両面加工石器を「石鏃」とした。総数 17 点が出土している。石材は全て珪質頁岩である。平面形態から 4 類型に分類した。

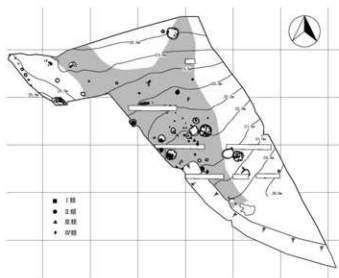


図 127 石鏃平面分布

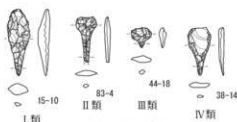


図 128 石鏃の分類

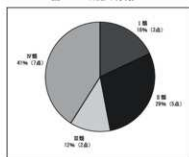


図 129 石鏃類型構成

I 類: 先端部の径が 4mm 程度で、先端部とつまみ部の境界が不明瞭なもの。石鏃の転用もしくは石鏃失敗品を再加工したものなどが含まれている。第 III 層より 3 点が出土している。

II 類: 先端部の径は 3mm 程度で、長く棒状を呈する。先端部とつまみ部の境界は明瞭である。第 III 層を主体に総数 5 点が出土している。

Ⅲ類：先端部の径は2mm程度で、短い。つまみ部を含めても長さ13mm程度であり、先端部とつまみ部の境界は明瞭である。第Ⅲ層より2点が出土している。

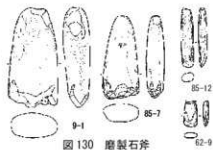
Ⅳ類：先端部の径は4mm程度で、棒状を呈する。先端部とつまみ部の境界は明瞭である。第Ⅲ層を主体に総数7点が出土している。

(8) 微小剥離痕のある剥片 鋭利な側縁部に刃こぼれ状の微小剥離痕がみられる剥片を「微小剥離痕のある剥片」とした。微小剥離痕は剥片作出時に生じた偶発剥離、刃器として使用された際に生じた刃こぼれに由来する可能性が考えられる。SI11剥片集積およびSX07、SX11では構成される剥片のほとんどに微小剥離痕がみられた。第Ⅲ層を主体に総数185点出土している。

(9) 剥片・碎片・石核 二次調整、微小剥離痕などが一切確認できず、主要剥離面の長軸が概ね2cm以上の剥片石器を「剥片」とした。同様に2cm未満を「碎片」とし、また、素材剥片を作出した後の残核で、ネガ面のみで構成されているものを「石核」とした。剥片370点、碎片138点、石核3点が出土している。

2 磨製石斧

研磨によって整形され、一端に刃部を有する石斧類を「磨製石斧」とした。総数25点が出土している。側縁に擦り切り痕跡を残す資料が多くみられる。複数の資料で基部付近に線状の傷のつく資料がみられる。(85-7、85-11他)後述する敲打の使用痕である敲Ⅰ類、Ⅱ類に共通する特徴であり、敲石としての機能が想定される。石材には緑色細粒凝灰岩が多く用いられており、輝緑岩、閃緑岩、緑色細粒凝灰岩(古期)、頁岩、砂岩なども用いられている。破損品を再加工したことをうかがわせる資料(19-25、44-22他)が複数みついている。



3 礫石器

敲打や磨り潰しなどに使用された礫で、使用痕が明瞭にみられるものを「礫石器」として抽出した。総数171点が出土している。使用痕の状態から細別類型を設定し、出土位置の平面分布については図125に示した。

(1) 敲石 敲打痕が礫面の端部に形成されているもので下記の使用痕のみからなるものを「敲石」とした。総数6点が出土している。

敲Ⅰ類：線状の敲打痕がみられるもの。軸が「右上がり」になるものが多い。

敲Ⅱ類：あばた状の敲打痕がみられるもの。

敲Ⅱ類は、敲Ⅰ類が同一の機能部に重複して形成され、発達した形状と考えることもできる。



(2) 石錘 総数7点が出土している。礫の端部に一对の袂りが加えられているもの。新田遺跡出土資料は袂りが浅く、挿入部が「紐かけ」の機能をはたせるかどうか疑問が残る。9-2、45-1についてはパンチの可能性も考えられる。

(3) 磨石 下記の使用痕のみからなる礫を「磨石」とした。総数80点が出土している。

磨Ⅰ類：亜円礫、亜角礫の稜が研磨面として利用されているもの。いわゆる「三角柱状磨石」「特殊磨石」である。縄文時代早期から前期を特徴づける石器であり、本遺跡では第Ⅳ層で多量に出土している。

磨Ⅱ類：円礫の全面が研磨面として利用されているもの。

磨Ⅲ類：亜円礫、亜角礫の平坦面が研磨面として利用されているもの。

(4) 石皿・台石 総数 13 点が出土している。大礫の一部に平坦面の形成されているものを「石皿・台石」とした。縁や脚が形成されているもの(86-11、89-4 他)もみられる。

(5) 凹石 総数 17 点が出土している。直径 3cm 程度の凹みが礫の平坦面に形成されているもの。凹み痕の特徴から以下の 3 類型に分類した。

凹Ⅰ類：線状の敲打痕が単位となるもの。「右上がり」が多い。

凹Ⅱ類：あばた状の敲打痕が単位となるもの。

凹Ⅲ類：凹面が滑らかで、平滑な状態のもの。

(6) 敲磨器 特徴の異なる使用痕が重複するものを本器種にまとめた。総数 18 点が出土している。「凹み」と「磨り」の重複するものが 13 点、「敲き」と「凹み」が重複するものが 4 点、「磨り」、「敲き」、「凹み」の重複するものが 1 点出土している。「凹み」と「磨り」が同一個体にみられる資料が全体の約 72% を占めており、「凹み」と「磨り」は礫を使用する行為の中で時間的に連続する率が高いということがうかがえる。凹Ⅰ・Ⅱ類と敲Ⅰ・Ⅱ類は状態として近いものであり、これらについては「凹み」と「敲き」の差は選択された機能部位の差として考えることができる。

(7) 石製品 遺構外第Ⅲ層より研磨によって板状に成形されている石製品 1 点が出土している。(87-1) 側縁と裏面には敲打痕がみられ、側縁部が大きく抉られている。敲石に転用された磨製石斧未製品の可能性も考えられる。

3) 被熱礫の空間分布

被熱した石製造物の分布を図 134 に示した。基本層序第Ⅲ層相当の被熱礫には 7 箇所の集中区(集中区 1～7)が確認された。これらのうち、調査区北寄りに位置する集中区 1 は集石遺構(SX04)として、集中区 2 は廃棄城(SX06)として確認した箇所である。集中区 3～6 は中期末葉の土坑、ないしは住居跡の覆土にあたる。集中区 2～6 では自然礫のみならず、多量の土器・石器類、炭化物が含まれており、遺物を包含する層の底面が窪地になるという点で共通する。集中区 1 の礫は被熱したチャート、粘板岩類 59 点、被熱の痕跡がみられないもの 70 点からなる。磨石の破片が 1 点含まれている他に、土器や剥片石器は伴っていない。集中区 7 は上記した 1～6 と比較して、散漫でやや広い集中区である。中期末葉の住居跡が集中する箇所であると同時に沢地形にあたることなどから人為的に搬入され利用されていた礫が消極的な廃棄行為と地形に起因する転石によって集積された可能性が考えられる。いずれにせよ、前 6 者とは様相が異なる。

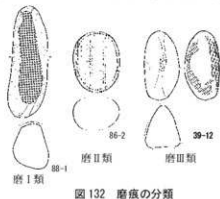


図 132 磨痕の分類



図 133 凹み痕の分類

基本層序第IV層相当の被熱礫の集中区は1箇所が確認された。周辺からは縄文時代早期の土器が出土しており、被熱礫の時期もこれに帰属するものと考えられる。

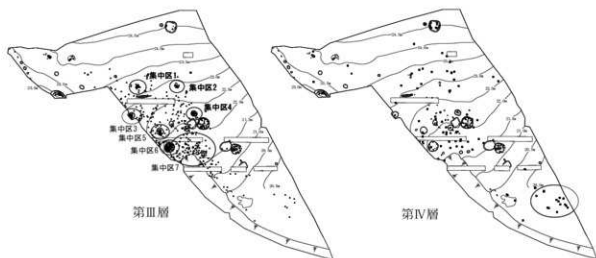


図 134 被熱礫平面分布

4) 青森県内における剥片集中遺構について

第11号竪穴住居跡第1号・第2号剥片集積、第7号不明遺構、第11号不明遺構は剥片石器が重ねられた状態（以下「剥片集中遺構」）で出土していることを特徴とするものである。検出位置は壁際や炉、焼土遺構の近くであり、構成する剥片の多くに微小剥離痕がみられる。いずれも珪質頁岩を素材とし、複数の母岩で構成される。周辺からは碎片がほとんど確認されず、石器製作残滓の集積である可能性は低い。石器の産状としては一箇所に積み上げられているような状態であり、掘方は確認されていない。これらの剥片類は微小剥離痕と母岩の多様性、薄手の碎片に近い形状が多いといった特徴などから、加工を目的とした素材の確保というよりも刃器としての利用を想定し、備蓄されていた可能性が強いものと考えられる。

東北地方南部から岩手県にかけて、住居跡内の床面で検出される剥片石器の集積については、中期末葉およびその前後の時期に多いことが指摘されており、複式炉との関連や石材流通の観点から議論されている。（植村 1997、阿部 2003、門脇 2003 他）表 34 に青森県内で検出されている剥片集中遺構の事例をまとめた。縄文時代早期から晩期まで各時期にわたって報告があるが、中期から後期にかけての時期に帰属するものが多い。地域的には八戸周辺の南部地域で多く確認されており、津軽地域では少ない。中期末から後期前葉の時期には玉髄や透明感のある「玉髄質珪質頁岩」が小型の両極剥片として多く出土することが知られているが、丹後谷地遺跡では後期後葉以前の時期に帰属する住居跡ピットから両極剥片が 80 点近く出土している。（八戸市教育委員会 1986）新田遺跡の剥片集中遺構を構成する石材は全て珪質頁岩であり、下北半島産の特徴がみられる。（松山力氏のご教示による）東北地方南部では中期末葉の石器群に最上川流域で採取された珪質頁岩を素材とした縦長剥片が加わることが知られており、中期後葉から後期の時期に珪質頁岩を中心とする石材流通の画期が存在することを指摘する意見もある。（宮城県教育委員会 1988 他）新田遺跡で確認された事例は東北北部地域における中期末の石材利用、流通、保有形態を考える上で重要な資料である。

（齊藤）

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1980 『永野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
1998 『青森県遺跡地図』
2005 『大開遺跡・新田遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書384集
- 阿部朝衛 2000 「先史時代人の失敗と練習 ―石鏃と磨製石斧の分析から―」『考古学雑誌』86-1pp. 1-26
- 阿部勝則 2003 「岩手県における縄文時代中期の剥片集中遺構について」『紀要』XXII（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）pp. 1-16
- 新井達哉 2005 「和台遺跡」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会 pp. 197-202
- 稲村晃嗣 1997 「IV 考察 1 11号住居跡覆土出土遺物について」『横欠遺跡（本文編）』北上市教育委員会 pp. 25-47
- 植村泰徳 1997 「縄文時代の剥片・砕片集中遺構、集中地点について ―福島県内の事例―」『福島考古』38 pp. 1-10
- 門脇秀典 2003 「縄文石器に関する2・3の問題 ―橋葉町馬場前遺跡出土の石器 について―」『研究紀要2002』pp. 153-164
- 北上市教育委員会 1997 『横欠遺跡（本文編）』
- 北上市教育委員会 1995 『横欠遺跡（図版編）』
- 工藤竹久 1977 「北日本の石槍・石鏃について」『北奥古代文化』9 pp. 40-55
- 古泉 弘 1983 『江戸を掘る』
- 小林正史 1993 「東北地方・縄文晩期後半の単位文様施文手法」日本考古学協会第59回総会研究発表要旨 pp. 38-43
- 坂本真弓 2002 「沢部型複式炉の現在」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希記念論文集刊行会 pp. 83-99
- 駒木野智寛 2004 「複式炉の研究」『紀要XXIII』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp. 41-50
- 日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会 2005 『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』
- 秦 昭繁 1991 「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙―松原型石匙の分布と製作時期について―」『考古学雑誌』76-4 pp. 1-29
- 八戸市教育委員会 1986 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―丹後谷地遺跡―』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 本間 宏 1994 「大木10式土器の考え方」『しのぶ考古』10 pp. 3-24
- 松山 力 1983 『八戸の地質』八戸市教育委員会
- 宮城県教育委員会 1988 「石器の考察」『大築川遺跡・小梁川遺跡 石器編』pp. 480-494

出土遺物観察表

*年代測定試料番号は、平成 18 年度日本学術振興会科学研究補助金基盤研究 C「AMS 炭素 14 年代測定を利用した東日本縄文中期の文化年代の研究」(代表 小林謙一) (I7S02020604) に土器片着目化物を提供した際の分析試料番号である。

図版番号	遺物名	尸番	層位	材質	内容	産量	備考	分類	年代測定 資料番号
B-1	SI-01	13, 14, 15, 19, 20, 22-1, 2 遺構片 6766	3, 5, 7, 22	口縁部→伏工具による割み 口縁部 底部 割欠、肩隆縁による割欠 胴部 二枚貝 条痕	条痕調整後縦位のびげ			I-2	
B-2	SI-01	16, 17	7	条痕	びげ			I	
B-3	SI-01	6	6	口縁部→伏工具による割み 口縁部 底部 割欠 胴部 二枚貝条痕	口縁部→伏工具による割み 縦位のびげ			I	
B-4	SI-01	9 遺構片 8385	5, 22		縦位のびげ			I-3	
B-5	SI-01	21	3	口縁部→伏工具による割み 口縁部以下 二枚貝条痕	縦位のびげ			I-3	
B-6	SI-01	5	5	口縁部→伏工具による割み 口縁部 底部 割欠・貝殻縁線割欠	斜・縦方向のびげ			0	ADM67
11-1	SI-02 横 式伊豫段 土器	2-1		L,R 縦位回転	FF 横断によるびげ調整			I-2	
11-2	SI-02 横 式伊豫段 土器内	1, 1-1	1 層上, 3	FF	FF			IX-1	
13-1	SI-03 横 段土器	1, 2, 4, 6, 8, 15	1, 2	L,R 縦位回転	びげ 下平→底部付近まで軽い びげが認められる。内底 面から 4cm～10cm の高さまで 肩条痕がゆるい。それ以上は やや凸出している。			IX-1	
13-2	SI-03	23, 30	1	L,R 縦位回転	縦位のびげ			IX-1	
13-3	SI-03	29	1	板状工具による条痕調整	縦位のびげ			IX-1	
13-4	SI-03	46 遺構片 8223	1, 面	胴部 L,R 側面圧成 胴部 L,R 縦位回転	縦位・縦位のびげ			IX-1	
13-5	SI-03	25 遺構片 8186, 9188	1, 面	R, 斜位回転	FF			IX-1	
13-6	SI-03	1 遺構片 8331	1, 面	L,R 斜位回転	FF			IX-1	
13-7	SI-03	7 遺構片 7864	1, 面	L,R 垂直縦文	縦方向のびげ			Ⅷ	
13-8	SI-03	13-1	1	沈積, L,R 縦位回転	FF			Ⅷ	
13-9	SI-03	3	1	L,R 垂直縦文	びげ			Ⅷ	
15-1	SI-04	33, 41, 44, 45	1, 2	板状工具による条痕調整	条痕			IX-1	
15-2	SI-04	40, P-X 395v	1	L,R 斜位回転	板状工具による縦位のびげ			IX-1	
15-3	SI-04	8	1	L,R 斜位回転	条痕			IX-1	
15-4	SI-04	27 遺構片 P-X	1, 1	R, 縦位回転	条痕			IX-1	
15-5	SI-04	4, 9	1	R, 斜位回転	びげ			IX-1	
15-6	SI-04	26, 32	1	R, 斜位回転	条痕			IX-1	
15-7	SI-04	5, 6	1	L,R 縦位回転	びげ			IX-1	
15-8	SI-04	12, 13	1	L,R 縦位回転	びげ			IX-1	
16-1	SI-05	2	1	びげ, 垂直びげ	びげ	黒葉ヘラ びげ		土器類	
16-2	SI-05	o111-p1, 2, 4, 5, 13 P-X	1, 2, 7	びげ→口縁部びげ, 底辺 5X	びげ(黒色底理)	切り直し 後再調整		土器類	
16-3	SI-05 群 8, 14-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 12, 14, 15, 16, 17 F, 15-1, 2, 3, 18, 21		1, 2	口縁部 びげ, 胴部 びげ	o111-びげ			土器類	
16-4	SI-05	4	1	口縁部 びげ, 胴部 びげ	o111			土器類	
17-1	SI-05	初群率	1					初群率	
17-2	SI-05	P-X-4 遺構片 1518-1, 2, 106, 2109-2, 2110-1, 2, 2111, 2112, 2122-2, 2801, 3024, 3025, 3026 P-X	5, 面	R, 縦位回転, 底辺びげ	びげ	板状工具 によるびげ		Ⅷ	
19-1	SI-07 横 式伊内	125, 130, 141, 152, 155-1, 2, 156	o1t2	R, 縦位, 底辺部びげ	板状工具によるびげ			IX-1	
19-2	SI-07 横 式伊内	96, 105-2, 107, 145-1	1, o1t2	R, 斜位から縦位回転	縦方向のびげ			IX-1	
19-3	SI-07 横 式伊内	106, 117-2, 147-1, 4, 151, 152, 154, P-X	1, o1t2	L,R 縦位回転	条痕			IX-1	
19-4	SI-07 横 式伊内	132	3	R, 縦位回転	縦方向のびげ			IX-3	
19-5	SI-07 横 式伊内	136	3	斜・縦方向のびげ	縦方向のびげ			Ⅷ	
19-6	SI-07 横 式伊内	131	3	FF	FF			IX-1	

表 17 土器・土製品観察表 1

図版番号	遺構名	尸番	層位	外面	内面	断面	備考	分類	年代測定 資料番号
19-7	S1-07 複式炉	119, 120	3	土層位部趾	横方向の付			Ⅸ-1	
19-8	S1-07 複式炉	98	1	土層による垂線文(7) 摩滅顯著	横方向の付			Ⅸ-1	
19-9	S1-07 複式炉	103	1	土層消滅文	付	0	0	Ⅸ	
19-10	S1-07	98-7, 93-6	1, p113 土層	丸 磨消滅文	横方向の付	0	0	Ⅸ	
19-11	S1-07	11, 14, 58, 93-4	1, p113 土層	磨消滅文・土線	付			Ⅸ-4	
19-12	S1-07	34-1, 3, 79-1	1	丸 磨位部趾	横・斜方向の付			Ⅸ-1	
19-13	S1-07	26, 27, 38	1	土層消滅文	横方向の付			Ⅸ-1	
19-14	S1-07	5	1	横方向の付	横方向の付			Ⅸ	
19-15	S1-07	64	1	丸 磨位部趾 口縁部下 5mm 磨消	横方向の付			Ⅸ-1	
19-16	S1-07	48, 48, 62	1	丸 磨位部趾 口縁部下 5mm 磨消	横方向の付			Ⅸ-1	
19-17	S1-07	34-2	1	土層位部趾	横方向の付			Ⅸ	
19-18	S1-07	4	1	土層消滅文	付			Ⅸ-1	
19-19	S1-07	23	1	土層による垂線文	横方向の付			Ⅸ	
19-20	S1-07	61	1	丸 磨位部趾	横・斜方向の付			Ⅸ-1	
19-21	S1-07	77	1	土層消滅文	付			Ⅸ-1	
20-1	S1-08	7	3	磨消滅文 縦文を先端の丸い棒状工具で高調整し、土線跡になる。無文部はなし。	横方向の付			Ⅸ	
20-2	S1-08	40	2d	丸 磨位部趾	横方向の付			Ⅸ 1	
20-3	S1-08	38	1	磨いた内側による純磨位部趾 磨位部趾	付			Ⅸ-9	
22-1	S1-09 972		床裏	付→2付→1付	摩滅		底部穿孔	土器類	
30-1	S1-11 複式炉	4	14	土層位部趾	横方向の付			Ⅸ-1	
30-2	S1-11 複式炉 2	6		土層消滅文、無文部 付	横方向の付			Ⅸ-2	
30-3	S1-11 複式炉 2	2		土層消滅文、磨消滅文 無文部 付	横方向の付			Ⅸ-1	
30-4	S1-11 複式炉 2	7		土層位部趾	横方向の付			Ⅸ-1	
30-5	S1-11	1	p112 遺土	土層位部趾	摩滅			Ⅸ-1	
30-6	S1-11 複式炉埋設			土層位部趾	付、磨滅による凹凸顯著			Ⅸ-1	
30-7	S1-11	103, 111, 121, 122, 124, 126	1, 床裏	土層消滅文 縦文より無文部が厚くなる。	付			Ⅸ-1	A09B2
30-8	S1-11	78	1	土層消滅文	横方向の付			Ⅸ-1	
30-9	S1-11	101, 105 遺構外 4718	1, Ⅲ	土層による垂線文	横方向の付			Ⅸ-1	
30-10	S1-11	29, 71	1	丸 磨消滅文、結沈跡	横方向の付			Ⅸ-2	
30-11	S1-11	58	1	丸 磨消滅文	横方向の付			Ⅸ-1	
30-12	S1-11	83	1	土層消滅文	横方向の付			Ⅸ-1	
30-13	S1-11	21	1	丸 磨消滅文、結沈跡	横方向の付			Ⅸ-1	
30-14	S1-11	49	1	土線	横方向の付			Ⅸ-1	
30-15	S1-11	48	1	丸 磨消滅文	横方向の付			Ⅸ-1	
30-16	S1-11	53	1	土層消滅文	横方向の付			Ⅸ-1	
30-17	S1-11	79	1	土層消滅文、結沈跡	板状工具による付			Ⅸ-1	
30-18	S1-11	64	1	丸 磨消滅文、結沈跡	横方向の付			Ⅸ-1	
30-19	S1-11	32	1	丸 磨位部趾後沈跡 C	縦・横方向の付			Ⅸ	
30-20	S1-11	10, 13, 14, 16, 18, 90 遺構外 6207, 6483, 6484, 6554-1	1, Ⅲ, IV	土層位部趾後沈跡 C	板状工具による横方向の付			Ⅸ	
30-21	S1-11	4, 9, 12 遺構外 6469 6474, 6552	1, Ⅲ, IV	土層位部趾後沈跡 C	横方向の付			Ⅸ	
31-1	S1-11	39	1	丸 磨位部趾 口縁部 15mm 磨消	横方向の付			Ⅸ-1	
31-2	S1-11	24	1	土層位部趾	横方向の付			Ⅸ-1	
31-3	S1-11	80	1	土層位部趾	横方向の付			Ⅸ-1	
31-4	S1-11 118 遺構外 2280, 3478		1, Ⅲ, Ⅳ	丸 磨位部趾	板状工具による横方向の付			Ⅸ-1	
31-5	S1-11	57	1	丸 磨位部趾	横方向の付			Ⅸ-1	
31-6	S1-11	28	1	土層位部趾	横方向の付			Ⅸ-1	
31-7	S1-11	95	1	丸 磨位部趾	付			Ⅸ-1	
31-8	S1-11 14, 38-16	S1-11 46, S1-14 125, 137, 147, 263, 266, 269, 622 780, 781, 782, 783, 784, 786, 963, 1129, 98-16 44 遺構外 1806, 2259, 2735, 3000, 3621-1	1, 3, Ⅲ	土層位部趾	割棄			Ⅸ-1	
31-9	S1-11	17, 20 遺構外 2205-1, 2771, 3096, 3104, 3152, 3284, 3285, 3289, 3430, 3436, 4603, 5151, 5169, 5170, 6741, 8428, 8432, 8433, 8437, 8439, 8466-2, 8472-2, 8479, 8484, 9487, 9646	1, Ⅲ	丸 磨位部趾	付			Ⅸ-1	

表 18 土器・土製品観覧表 2

図版番号	遺構名	P番号	層位	外周	内周	断面	備考	分類	年代測定資料番号
35-1	51-14 複式炉埋設土器			LR 縦位回転	15°			Ⅱ-1	
35-2	51-14, 36-15	51-14 複式炉 P26, 51-14 P571, 594, 659, 59-15 11, 12, 24, 29 遺構材 3151, 4731, 5797, 9292-2, 3, 9297-1, 2, 3 P-X	51-14 複式炉埋設土器, 51-14 埋設土器, 50-15 I 層, I	LR 光線	15°			Ⅱ-1	AD061
35-3	51-14 複式炉	8	複式炉埋設土器	LR 縦位・斜位回転 口唇部下 10mm 板状工具による行	行			Ⅱ-1	
35-4	51-14 複式炉	42	複式炉埋設土器	LR 垂直線文	横方向の15°			Ⅱ-1	
35-5	51-14 複式炉	30	複式炉埋設土器	LR 縦位回転	垂直			Ⅱ-1	
35-6	51-14 複式炉	41, P-3-91, 133	複式炉埋設土器	LR 光線線文	15°			Ⅱ-1	
35-7	51-14 複式炉	43, 44	複式炉埋設土器	15°	行			Ⅱ-1	
35-8	51-14 複式炉	29	複式炉埋設土器	LR 光線線文	横方向の15°			Ⅱ-1	
35-9	51-14 複式炉	5	複式炉埋設土器	LR 光線線文	横方向の行			Ⅱ-1	
35-10	51-14 複式炉	28	複式炉埋設土器	垂直線文	斜方向の行			Ⅱ-1	
35-11	51-14 複式炉	4	複式炉埋設土器	沈線による曲線文	横方向の15°			Ⅱ-1	
35-12	51-14 複式炉	16	複式炉埋設土器	LR 縦位回転	斜・縦方向の15°			Ⅱ-1	
35-13	51-14 複式炉	P-3-3	複式炉土器内1	LR 縦位回転	横方向の15°			Ⅱ-1	
35-14	51-14	972	I	LR 光線線文, 肥平, 竹管状工具による刻痕	板状工具による行			Ⅱ-1	
35-15	51-14	1163	床	LR 縦位回転	横方向の15°			Ⅱ-1	
35-16	51-14	730, 786, 850-5, 970-1, 1165-1	I, 2, I	LR 縦位回転	行			Ⅱ-1	
35-17	51-14 36-14	51-14 531, 56-14 22, 30 遺構材 1817, 2623, 749, 2383, 3299, 3300-2, 3396, 4453, 4486, 4469, 4471, 4295, 6696, 7189, 7496, 7885, 8396 P-X	I, Ⅱ	複沈線, 光線線文	行			Ⅱ-2	
35-18	51-14	1149	2	LR 縦位回転, 口唇部 5 ~ 10mm 垂直	横方向の行			Ⅱ-1	
35-19	51-14	1142	2	LR 縦位回転	行			Ⅱ-1	
35-20	51-14	1155	2	LR 垂直線文	横方向の行			Ⅱ-1	
35-21	51-14	448, 998 遺構材 2626, 6406	I, Ⅱ	LR 垂直線文	垂直			Ⅱ-1	
35-22	51-14	358	I	LR 垂直線文	行			Ⅱ-1	
35-23	51-14	855, 1103	I	LR 光線線文, 一部に沈線等	横方向の15°			Ⅱ-1	AD064
35-24	51-14 51-06	51-14 327, 51-06 164	I	LR 垂直線文	横方向の行			Ⅱ-1	
35-25	51-14	1029	I	LR 垂直線文	垂直			Ⅱ-1	
36-1	51-14	303-1, 660, 1051, 1073, 3046, 3063, 3064, 5418, 5419, 5421	I, Ⅱ	LR 光線線文	横方向の行			Ⅱ-1	
36-2	51-14 51-06	51-14 301, 406, 493, 505, 809, 1005, 1027, 51-06 54 遺構材 844, 1235, 2236, 2740, 5622-1, 6416, 6417, 6584-1, 8671	I, Ⅱ	LR 光線線文	垂直			Ⅱ-1	
36-3	51-14	776	I	LR 光線線文	横方向の行			Ⅱ-1	
36-4	51-14	719, 890, 995	I	LR 垂直線文	横方向の15°			Ⅱ-1	
36-5	51-14	393, 1000	I	LR 光線線文	垂直			Ⅱ-1	
36-6	51-14 51-15	51-14 324, 51-15 2, 7	I	沈線	横方向の15°			Ⅱ-1	
36-7	51-14	591	I	LR 垂直線文	横方向の15°			Ⅱ-1	
36-8	51-14	496	I	LR 垂直線文	横方向の行			Ⅱ-1	
36-9	51-14	593	I	LR 垂直線文	行			Ⅱ-1	
36-10	51-14	151	I	沈線による曲線文	横方向の15°			Ⅱ-1	
36-11	51-14	1031, 1141	I	LR 光線線文	横方向の行			Ⅱ-1	
36-12	51-14	964-1	I	沈線による曲線文	横方向の行			Ⅱ-1	
36-13	51-14	845, 1161	I, 2	LR 垂直線文	行			Ⅱ-1	
36-14	51-14 51-06	51-14 29, 51-06 166 遺構材 7216, P-X	I, I, Ⅱ	LR 垂直線文	垂直			Ⅱ-1	

表 19 土器・土製品観察表 3

図録番号	遺構名	尸番	層位	外周	内容	底面	備考	年代測定資料番号
36-15	SI-14	132, 146, 265	I	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
36-16	SI-14	595, 621, 1112, 1117	I	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
36-17	SI-14	418	I	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
36-18	SI-14	922	I	丸 竪線文	摩滅			Ⅱ-1
36-19	SI-14	5	I	丸 竪線文	割落			Ⅱ-1
36-20	SI-14	425 遺構外 1557	I, II	丸 竪線文	割落			Ⅱ-1
36-21	SI-14	730	I	条痕後、沈線による竪線文	横方向の1区			Ⅱ-1
36-22	SI-14	449	I	丸 竪線文	1区			Ⅱ-1
36-23	SI-14	980, 894	I	丸 竪線文	横・斜方向の3区			Ⅱ-1
36-24	SI-14	443, 677, 1030	I	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
36-25	SI-14	154, 162	I	丸 竪線文	横方向の1区			Ⅱ-1
36-26	SI-14	117	I	沈線による竪線文、赤線文に囲まれた部分が他の部分に比べて厚くなる。	横方向の3区			Ⅱ-2
36-27	SI-14	291	I	丸 竪線文、一部沈線	摩滅			Ⅱ-2
36-28	SI-14	702	I	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
36-29	SI-14	1061-1	I	丸 竪線文、沈線	横方向の3区			Ⅱ-2
37-1	SI-14	722, 976 遺構外 P-X	I	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-4
37-2	SI-14	985, 958	I	丸 竪線文、沈線	横方向の3区			Ⅱ-2
37-3	SI-14	1135	I	丸 竪線文、平行沈線	横方向の1区			Ⅱ-1
37-4	SI-14	181, 585, 680, 801, 834-1, 893	I	平行沈線間に1区状工具による刻み 磨削丸 竪線文	摩滅			ADMGIS
37-5	SI-14	541	I	沈線、磨削工具による新装	横方向の1区			Ⅱ-6
37-6	SI-14	512	I	粘土層貼り付け、粘土層上に竹管状工具による新装、半円形新装	横方向の1区			Ⅱ-6
37-7	SI-14	921-1	I	丸 竪線文、口縁部下 10mm 磨滅	横方向の3区			Ⅱ-1
37-8	SI-14	872-2	I	口縁部下に粘土層	摩滅			Ⅱ-1
37-9	SI-14	52-1, 2, 53, 187-1	I	丸 竪線文	横方向の1区・1区			Ⅱ-1
37-10	SI-14	928	I	丸 竪線文、口縁部下 5mm 磨滅	横方向の1区			Ⅱ-1
37-11	SI-14 DK-06	SI-14 927, DK-06 43 遺構外 4936	I, III	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
37-12	SI-14	276 遺構外 2972	I, III	丸 竪線文、口縁部下 15 ~ 20mm 磨滅	横方向の1区			Ⅱ-1
37-13	SI-14	363, 755, 757	I	丸 竪線文、口縁部下 7mm 磨滅	斜・横方向の1区			Ⅱ-1
37-14	SI-14	322, 632, 1041	I	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
37-15	SI-14	747-1	I	丸 竪線文、口縁部下 20mm 工具による1区	横方向の1区			Ⅱ-1
37-16	SI-14	599, 600	I	丸 竪線文、口縁部下のみ丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
37-17	SI-14	856 遺構外 6871	I, III	条線全体に丸 竪線文	摩滅			Ⅱ-1
37-18	SI-14	586, 1079	I	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
37-19	SI-14	834-2	I	丸 竪線文	横方向の1区			Ⅱ-1
37-20	SI-14 DK-16	SI-14 274, 279, 476, DK-16 47, 142-2	I, 3, 3a	丸 竪線文	横方向の1区			Ⅱ-1
37-21	SI-14	690, 883, 904, 902, 902-1 遺構外 2479-1, 2484, 2812, 2813	I, II, III	丸 竪線文	横方向の1区			Ⅱ-1
37-22	SI-14	1854, 1855, 1067	I	丸 竪線文	割落			Ⅱ-1
38-1	SI-14	733, 158, 257, 365, 518, 605, 610, 614, 712, 761, 1010, 1049, 1122 P-8-85	I	丸 竪線文	摩滅			Ⅱ-1
38-2	SI-14	1633	I	丸 竪線文	斜方向の1区			Ⅱ-1
38-3	SI-14	961 遺構外 6541, 6856	I, III	丸 竪線文	横方向の3区			Ⅱ-1
38-4	SI-14	427, 428	I	条痕（板状工具の木口）	板状工具による斜方向の1区			Ⅱ-1
38-5	SI-14	345	I	条痕（板状工具の木口）	板状工具による横方向の1区			Ⅱ-1
38-6	SI-14	480, 621, 1043, 1112, 1133, 1137-1 遺構外 6464	I, III	丸 竪線文、磨削による1区・1区	炭化物付着			Ⅱ-1
38-7	SI-14	822, 826-1, 891 遺構外 2245	I, III	丸 竪線文、底面 1区	1区			Ⅱ-1
38-8	SI-14	662	I		1区			Ⅱ-1
38-9	SI-14	316	I		1区		板状工具によるナシ 工具径 30mm	Ⅱ-1
38-10	SI-14	819, 872-1	I		1区			Ⅱ-1
38-11	SI-14	40, 58, 214 遺構外 3403	I, III	1区	1区			Ⅱ-1
38-12	SI-14	32-1 遺構外 2154, 8546	I, II, III	粘土層貼り付け、沈線、磨削下半丸 竪線文	1区			Ⅱ-2
41-1	DK-04	3	6	丸 竪線文	1区			Ⅱ-1
41-2	DK-04	2	2	1区	1区			Ⅱ-1
41-3	DK-04	6	1	丸 竪線文	2万牛			Ⅱ-1
41-4	DK-04	8	1	ナシ	ナシ			Ⅱ-1
41-5	DK-05	1, 13	2, 6	板状文	ナシ			Ⅱ-2
41-6	DK-05	14	5	0.5mm 条丸	ナシ			Ⅱ-2
41-7	DK-05	2	1・2層	摩滅	摩滅			Ⅱ-1

表 20 土器・土製品観察表 4

図版番号	遺構名	尸番	部位	材質	内容	測量	備考	分類	年代測定資料番号
41~8	5K-05	99-2	1. 壁跡礎部	懸糸割込土成 灰	ミガキ			IV-10	
43-1	5K-06	1. 4, 312 遺構材 1340, 1342, 1343, 1346, 1347, 1355, 1362, 1365, 1520, 1548, 1554, 1558, 1560, 1622, 1846, 1867, 1888, 1869, 1870, 1872, 1875, 1946, 1961, 2003, 2080, 2082, 2083, 2084, 2093, 2094, 2095, 2612, 2613, 2614, 2616, 2617, 2618, 2619, 2621, 2622, 2623, 2624, 2625, 2626, 2628, 2630, 2632, 2634, 2635, 2636, 2637, 2638, 2691, 2692, 2694, 1, 3002, 3235, 3206, 3207, 3210, 3246, 4224, 4225, 4257, 4258, 4261, 5492, 5493, 6166-1, 6169, 6170, 6171, 6172, 6173, 6174-1, 2, 6175, 6539, 6590, 6591, 6592, 6700, 6845, 6266 P-107, カクラン、一筋	1. 3. III III	丸 縦位置瓦	フ			Ⅹ-2	
43-2	5K-06	7, 299	1. 3. p11	沈積による曲線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
43-3	5K-06	2, P-X	2. p111	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
43-4	5K-06	24, 164, 166, 192, 249, 251, 253, 254	2, 3	丸 縦位置瓦	横方向のフ			Ⅹ-1	
43-5	5K-06	298, 300, 328, 329	3	沈積による曲線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
43-6	5K-06	105	3	丸 磨消線文	縦・横方向のフ			Ⅹ-1	
43-7	5K-06	205	3	丸 充墳線文	新式工堀によるフ 工具堀 5cm			Ⅹ-1	
43-8	5K-06	175	3	沈積による曲線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
43-9	5K-06	101, 217, P-X	3. III	沈積による曲線文	フ			Ⅹ?	
43-10	5K-06	96-1, 2, 66, 125, 160, 197, 206, 212, 229, 239, 241, 242, 263, 277	2, 3	丸 縦位置瓦	フ			Ⅹ-1	
43-11	5K-06	103, 221, 222, 289, 314, 340 遺構材 1900, 2765, 5474, 5626, 8101, 8189	3. III, IV	丸 縦位置瓦 口部直下の小横位置瓦 口部直下 1 ~ 2cm 磨消	縦・横方向の工具フ			Ⅹ-1	
43-12	5K-06	90	3	丸 縦位置瓦	横方向のフ 工具堀 5mm			Ⅹ-1	
43-13	5K-06	147, 215, 246 遺構材 2156	3. III	丸 充墳線文 横沈線	横方向のフ			Ⅹ-1	
43-14	5K-06	307	3	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
43-15	5K-06	156	3	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	ADMS6
43-16	5K-06	84, 87	3	丸 充墳線文	縦・横方向のフ 工具堀 7mm			Ⅹ-1	
44-1	5K-06	325-1	3	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
44-2	5K-06	326-1	3	丸 充墳線文	磨消			Ⅹ-1	
44-3	5K-06	216, 311, 312, 315	3	丸 磨消線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
44-4	5K-06	198	3	丸 磨消線文	フ			Ⅹ-1	
44-5	5K-06	189 遺構材 2611, 6189	3. III	丸 磨消線文 横沈線 (縄文期の陶器を数枚取り囲んだ部分は無文部が浮き彫り状に見える)	フ			Ⅹ-1	
44-6	5K-06	313	3	丸 充墳線文 引き直し沈線あり	割違			Ⅹ-1	
44-7	5K-06	342	3	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
44-8	5K-06	51, 247 遺構材, 854	2, 3. III	丸 充墳線文	フ			Ⅹ-1	
44-9	5K-06	79 遺構材 2622-1, 3950	2. III	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
44-10	5K-06	52-1	2	丸 充墳線文	Ⅹ-1			Ⅹ-1	
45-2	5K-12	5K-12 3, 6, 9, 5K-12 2, 13, 14 遺構材	1. III	丸 斜位置瓦	フ			Ⅹ-1	Ⅹ-1
45-3	5K-12	2400, 2406-1, 2512-1, 3028, 3853, P-X	1	丸 斜位置瓦	フ			Ⅹ-1	
45-4	5K-12	2-1	1	丸 縦位置瓦	フ			Ⅹ-1	
45-5	5K-12	5	1	丸 充墳線文	フ			Ⅹ-1	
46-1	5K-13	4	1	丸 斜位置瓦	フ			Ⅹ	
46-2	5K-13	1	1	沈積による曲線文	フ			Ⅹ-1	
48-1	5K-14	5, 144	1	丸 充墳線文	縦・横方向のフ 工具堀 5mm			Ⅹ-1	
48-2	5K-14	15	1	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
48-3	5K-14	18-1, 29	1	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
48-4	5K-14	24	1	丸 充墳線文 横沈線	横方向のフ			Ⅹ-2	
48-5	5K-14	30-1, 33-1, 2, 72	1	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
48-6	5K-14	25-1, 2	1	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
48-7	5K-14	3, 9, 35	1	丸 充墳線文	縦・横方向のフ			Ⅹ-1	
48-8	5K-14	1, 13	1	丸 充墳線文	縦・横方向のフ 横方向のフ			Ⅹ-1	
48-9	5K-14	109, 153	1	丸 充墳線文	縦・横方向のフ			Ⅹ-1	
48-10	5K-14	27	1	丸 充墳線文	縦・横方向のフ			Ⅹ-1	
49-1	5K-14	18-2	1	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
49-2	5K-14	22-1	1	丸 充墳線文 引き直し沈線あり	フ			Ⅹ-1	
49-3	5K-14	26-1 遺構材 9164	1. III	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
49-4	5K-14	26	1	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-1	
49-5	5K-14	117	1	丸 充墳線文	横方向のフ			Ⅹ-2	
49-6	5K-14	80	1	丸 磨消線文	横方向のフ			Ⅹ-1	

表 21 土器・土製品観察表 5

図版番号	遺構名	戸番	層位	外面	内面	断面	備考	分類	年代測定資料番号
49-7	DK-14	59	1	L 灰濁縄文	横方向のHf			縄-1	
49-8	DK-14	14-14	1	L 縄位回転 沈線C	横方向のHf			縄-1	
49-9	DK-14	37	1	ミ打牛	ミ打牛		内面透け	DK-2	
49-10	DK-14	122	1	L 灰濁縄文、焼漆線	横方向のHf			縄-2	
49-11	DK-14	65	1	沈線による曲線文	摩痕			縄-1	
49-12	DK-14	28	1	L 灰濁縄文	Hf			縄-1	ADW63
49-13	DK-14	21	1	沈線 脚部下平 L 縄位回転	横方向のHf			縄-1	
49-14	DK-14	12-1,2	1	L 灰濁縄文	横方向のHf			縄-1	
50-1	DK-14 DK-16	DK-14 96, 98, 99, 100, 101, 102, 106, 109, 112, 133, 168, 171, 179 171 97-1, 2, 102, 106, 109, 112, 133, 168, 171, 179 遺構外2181, 5945	DK-14 L DK-16	L 縄位回転、脚部中心に炭化物が塊状に付着	15°, 下平15度炭化物付着			DK-1	
50-2	DK-14	16, 17-1, 42	1	L 縄位回転	Hf			DK-1	
50-3	DK-14	19	1	L 斜位—口唇部直下のみ丸 縄位回転地文 漆線	横方向のHf			DK-1	
50-4	DK-14	17(2)	1	L 縄位回転	縦軸によるHfが顕著			DK-1	
50-5	DK-14	123	1	L 灰濁縄文 焼漆線	Hf			土器品	
51-1	DK-15	29	1	L 灰濁縄文	Hf			縄-1	
51-2	DK-15	38	1	L 灰濁縄文 沈線C	Hf			縄	
51-3	DK-15	28	1	Hf	横方向のHf			縄	
51-4	DK-15	19	1	L 灰濁縄文	横方向のHf			縄-1	
51-5	DK-15	32-1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 12, 18, 23 遺構外 8700-1, 2, 8714-2, 3	1, Ⅲ	L 縄位回転 底部付直線	Hf			DK-1	
53-1	DK-16	174	9・10	L 灰濁縄文	摩痕			縄-1	
53-2	DK-16	172	9・10	L 灰濁縄文	横方向の板状工具によるHf 工具幅 5mm			縄-1	
53-3	DK-16	173	9・10	L 縄位回転 口唇部 5mm Hf	横方向の板状工具によるHf 工具幅 5mm			縄	
53-4	DK-16	124	3a	板状工具による横方向のHf	板状工具による縦・横方向のHf 工具幅 7mm 底面磨材			DK-1	
53-5	DK-16	88, 92, 96, 113, 114, 120, 140, 141, 161	1, 3, 3a	L 縄位回転 口唇部 6mm Hf	横方向のHf			DK-1	
53-6	DK-16	140	3a	L 縄位回転 底面Hf	Hf			DK-1	
53-7	DK-16	32, 58, 110, 111, 138, 129	3c, 1, 3, 3a	L 斜位回転 口唇部下 1cm Hf	横方向のHf			DK-1	
53-8	DK-16	86, 90, 127, 151	1, 3, 3a	沈線による曲線文	横方向のHf			縄-1	
53-9	DK-16	6, 62	1, 3	L 灰濁縄文	横・斜方向のHf			縄-1	
53-10	DK-16	103	3	L 灰濁縄文	横・斜方向のHf			縄-1	
53-11	DK-16	61	3	L 灰濁縄文	横・斜方向のHf			縄-1	
53-12	DK-16	104	3	L 灰濁縄文 焼漆線	横方向のHf			縄-1	
53-13	DK-16	5-2	1	L 灰濁縄文	横方向のHf			縄-1	
53-14	DK-16	75	1	沈線による曲線文	横方向のHf			縄-1	
53-15	DK-16	21	Ⅲ	L 灰濁縄文 焼漆線	横方向のHf			縄-2	
53-16	DK-16	10	1	底面Hf	Hf			DK-1	
53-17	DK-16	12, 29, 52	1, 3	Hf	Hf			DK-1	
61-1	DK-06 S1-14	DK-06 51, S1-14 97, 219, 220-2, 289-1, 286, 3 38, 341, 342, 1025, 1026, 1148, 1175	1	L 灰濁縄文	Hf 内外面とも、最大径以下が最もよく磨けており、内面のハジケもこれに対応する。胴部以上の内面は磨痕が顕著ではない。これらのことから、通常の磨器として使用されたものと考えられる。			縄-1	
61-2	DK-06	1, 106, 131	Ⅲ, Ⅲ 磨痕なし	L 灰濁縄文	横方向のHf			縄-1	
61-3	DK-06	126, 194-2	1	L 灰濁縄文	横方向のHf			縄-1	
61-4	DK-06	23, 209	1	L 灰濁縄文	横方向のHf			縄-1	
61-5	DK-06	38	Ⅲ	L 灰濁縄文	摩痕			縄-1	
61-6	DK-06	214	1	沈線による曲線文	摩痕			縄-1	
61-7	DK-06	53	1	L 灰濁縄文	横方向のHf			縄-1	
61-8	DK-06	206	Ⅲ	L 灰濁縄文	15°			15°	
61-9	DK-06	11, 21, 24, 81	1	L 灰濁縄文	横・斜方向のHf			縄-1	
61-10	DK-06	194-1, 202	Ⅲ	L 灰濁縄文	横方向のHf			縄-1	
61-11	DK-06	192-1	Ⅲ	L 灰濁縄文	摩痕			縄-1	
61-12	DK-06	30, 25, 26-1, 71, 72, 102, 103, 110-1, 127, 155, 178, 220-2	Ⅲ	焼漆線	Hf			縄-3	
61-13	DK-06	231	1	斜位 沈線部に斜定 L 灰濁縄文	横方向のHf			縄	
61-14	S1-05 DK-06	S1-05 2, 5, 11, 13 DK-06 216	Ⅲ	L 斜位回転	Hf			DK-1	

表 22 土器・土製品観察表 6

図版番号	遺構名	時期	部位	内容	位置	断面	備考	分類	年代測定資料番号
62-1	5R-06	163, 168, 169, 180, 181, 182, 183-1, 2, 184, 185, 186-1, 2, 187-1, 2, 188, 190-1, 2, 191, 192-2, 3, 193, 196-1, 2, 198, 200, 205, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 243, 244, 245, 246	I	上半 1R 先端 下半 1R 龍位部 上位 1/4 は龍位のため赤也	行'、上位 1/4 龍位のため赤黒 黒赤、下位 1/2 は龍位部～黒 褐色を呈する。			Ⅱ-1	
62-2	5R-06	133	I	瓦、片断破文	1R 4			Ⅱ-1	
62-3	5R-06 5R-05	5R-06 225, 5R-05 P-8-16 遺構外 5132	I, 7, III	1R 龍位部 庭部部 横方向の行'	横'方向の行'			Ⅱ-1	
62-4	5R-06	4, 5, 6, 8, 105-1, 2, 137, 138	I	1R 龍位部 口縁部 2cm 行'	斜'横'方向の行'			Ⅱ-1	
62-5	5R-06	10, 32	I	1R 龍位部 縁 沈積 C				Ⅱ	
62-6	5R-06	221	I	瓦、龍位部	1R 4			Ⅱ-1	
65-3	5R-08	1, 2, 3, 4, 7, 8-1, 2, 9, 10-1, 2, 11, 12, 13, 14, 16-1, 2, 17, 18, 19, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 一階 1-5, 7, 11 P-8-4, 6, 12, 13	I	龍位から斜位の委曲 (条幅 2cm)	龍位の委曲 (条幅 1cm)			Ⅲ-3	
66-1	5R-01	1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 10, 12, 13, 14, 15, 20-1, 2, 21, 22, 23, 24-1, 2, 26, 27-1, 2	II	1R 龍位部 外面の龍位部は下位 1/2 以下に龍位に見られる。上半には僅片断	行' 内面の龍位部は不明確である。			Ⅱ-1	
67-1	5I-13	5, 6 遺構外 2872, 6744, 7083	6, Ⅷ	瓦 5 条幅破文	龍位のため残っている			X-2	
67-2	5I-13	2	I	条幅破文	行'			X-2	
68-1	5I-01	P-X-9	横積土	1R 龍位部	層底			Ⅱ-1	
68-2	5I-01	P-X-12, 15	積土	1R 龍位部	行'			X	
68-3	5I-01	P-X-7	横積土	行'				Ⅱ-1	
68-4	5I-01	P-X-8	積土・横積土	庭部部 横方向の行'	横方向の行'	横代玉溝 →粘土層付		Ⅱ-1	
70-1	遺構外	717, 6767, 7711, 8772	Ⅲ, IV	口唇部上面 → 伏工具による割み 口縁部 三角割定 縁状沈積	縦'龍位の行'			1-1	AD671
70-2	遺構外	713-2	Ⅲ	口唇部前面 → 伏工具による割み 口縁部 長方形割定 三角割定	行'			1-2	
70-3	遺構外	895v	Ⅲ	口唇部前面 → 伏工具による割み 口縁部 長方形割定 三角割定	行'			1-2	
70-4	遺構外	8058	IV	口唇部前面 → 伏工具による割み 口縁部 長方形割定 三角割定	割溝			1-2	
70-5	遺構外	895v	Ⅲ	口唇部上面 → 伏工具による割み 口縁部 条幅	龍位の行'			1-5	
70-6	遺構外	8072	IV	口唇部前面 → 伏工具による割み 口縁部 条幅	龍位の行'			1-5	
70-7	遺構外	793, 895v	Ⅲ	沈積 長方形割定	横方向の行'			Ⅱ	
70-8	遺構外	853	Ⅲ	口唇部上面割み 沈積状長方形割定	層底			Ⅱ	
70-9	遺構外	9445	V	沈積 長方形割定	縦方向の行'			Ⅱ	
70-10	遺構外	867	IV	沈積 上長方形割定	縦方向の行'			Ⅱ	
70-11	遺構外	843	Ⅲ	沈積 上長方形割定	Ⅱ			Ⅱ	
70-12	遺構外	9464, 9476, 9483	IV, V	沈積 長方形割定による割定	縦方向の行'			Ⅱ	
70-13	遺構外	9405, 9047, 9429, 9431, 9444, 9458	IV, V	沈積 長方形割定 平行沈積	縦方向の行'			Ⅱ	
70-14	遺構外	226, 841	IV	沈積 長方形割定	層底			Ⅱ	
70-15	遺構外	911	IV	沈積 長方形割定	縦方向の行'			Ⅱ	
70-16	遺構外	895v	IV	沈積	行'			Ⅱ	
70-17	遺構外	895v	Ⅲ	沈積 上長方形割定	行'			Ⅱ	
70-18	遺構外	P-X	IV	沈積 長方形割定 特殊工具による割定	条幅 (条幅 1cm 工具幅 5cm)			Ⅱ	
70-19	遺構外	769-1, 3	IV	沈積 上長方形割定	縦方向の行'			Ⅱ	
70-20	遺構外	770	Ⅲ	沈積 上長方形割定	縦方向の行'			Ⅱ	
70-21	遺構外	385	Ⅲ	沈積 長方形割定	縦方向の行'			Ⅱ	
70-22	遺構外	9125	IV	沈積 長方形割定	行'			Ⅱ	
70-23	遺構外	849-1	IV	沈積 上長方形割定	斜方向の行'			Ⅱ	
70-24	遺構外	9437	IV	沈積 上に長方形割定 特殊工具による割定	口唇部 長方形割定 行'			Ⅱ	
70-25	遺構外	9436	IV	沈積 長方形割定	層底			Ⅱ	
70-26	遺構外	9422	IV	行'	条幅 (条幅 1cm)			Ⅱ	
70-27	遺構外	9410-1	V	沈積 上に長方形割定 特殊工具による割定	横方向の条幅 (条幅 1cm) 工具幅 10cm			Ⅱ	
70-28	遺構外	9488-2	IV	沈積 上に長方形割定 特殊工具による割定	横方向の条幅 (条幅 1cm)			Ⅱ	
70-29	遺構外	9468	V	沈積 上に長方形割定 特殊工具による割定	横方向の条幅 (条幅 1cm)			Ⅱ	
70-30	遺構外	2 F-116	IV	沈積 上長方形割定	口唇部 長方形割定 行'			Ⅱ	
70-31	遺構外	9410-3	V	沈積 上長方形割定	横方向の条幅			Ⅱ	
70-32	遺構外	9410-2	V	沈積 上長方形割定	板状工具による行' (条幅)			Ⅱ	
70-33	遺構外	9459	V	沈積 長方形割定	横方向の行'			Ⅱ	

表 23 土器・土製品観察表 7

図版番号	図録名	尸番	層位	外題	内容	通量	備考	分類	年代測定資料番号
70-34	透視図	8400	IV	沈積 神杖工具による割突	斜方向の13枚			Ⅱ	
70-35	透視図	844	IV	沈積 貝類類群割突	FF			Ⅱ	
70-36	透視図	831	Ⅲ	沈積 貝類類群割突	FF			Ⅱ	
70-37	透視図	8227, 8238	IV	無層区層による無層学文	条痕 (条幅 1.5mm) 板?			Ⅲ-1	
70-38	透視図	8072	IV	無層区層による無層学文	条痕 (条幅 0.5 ~ 1mm) 板?			Ⅲ-1	
70-39	透視図	256, 257	IV	無層区層による無層学文	条痕 (条幅 0.5 ~ 1mm) 板?			Ⅲ-1	ADM569
70-40	透視図	8486	IV	無層区層による無層学文	条痕 (条幅 1.5mm) 板?			Ⅲ-1	ADM569(No. 3)
70-42	透視図	P-X	Ⅲ土	条痕区層後 無層区層による無層学文	条痕 (条幅 1.5mm) 板?			Ⅲ-1	
70-42	透視図	8454-2, 8456	IV	無層区層による無層学文	条痕 (条幅 1.5mm) 板?			Ⅲ-1	
70-43	透視図	8257	Ⅲ	条痕区層後無層区層による無層学文	条痕 (条幅 1mm)			Ⅲ-1	
71-1	透視図	8461	IV	無層区層による無層学文	条痕 (条幅 0.5 ~ 1mm) 板			Ⅲ-1	
71-2	透視図	8284	IV	条痕区層後 無層区層による無層学文	条痕 (条幅 0.5 ~ 1mm) 板?			Ⅲ-1	
71-3	透視図	229	IV	無層区層上粘赤土層 条痕区層	条痕 (条幅 1 ~ 1.5mm)			Ⅲ-1	
71-4	透視図	762-2	Ⅲ	口唇部 粘赤土層 無層区層	条痕 (条幅 2.5mm)			Ⅲ-1	
71-5	透視図	371	Ⅲ	口唇上折断面 口唇直下に無層区層 無層区層上折断面	条痕 (条幅 1mm) 板?			Ⅲ-2	
71-6	透視図	8158	IV	条痕 中円形の刻み (右一定) 条幅 6mm	FF 条痕 条幅 1mm			Ⅲ-3	
71-7	透視図	8222	IV	条痕 条幅 6mm	条痕 条幅 2.5mm			Ⅲ-3	
71-8	透視図	8371-2, 8372	IV	条痕 条幅 4mm 先端の不揃な神杖工具による割突	条痕 条幅 2mm			Ⅲ-3	
71-9	透視図	798, 799, 801, 797	Ⅲ	条痕 条幅 4 ~ 6mm 二枚貝?	条痕 条幅 1.5 ~ 2mm 二枚貝			Ⅲ-3	
71-10	透視図	8152-1	IV	条痕 条幅 3 ~ 4mm 二枚貝?	条痕			Ⅲ-3	
71-11	透視図	8057	IV	条痕 条幅 3 ~ 3.5mm 二枚貝?	階状天欠 FF?			Ⅲ-3	
71-12	透視図	826, 804	Ⅲ, IV	条痕 条幅 1 ~ 1.5mm	条痕 条幅 1mm			Ⅲ-3	
71-13	透視図	Ⅱ-116	Ⅲ	カクラン	条痕 条幅 2mm 二枚貝?			Ⅲ-3	
71-14	透視図	8153	Ⅲ	条痕 条幅 2mm 二枚貝?	条痕 条幅 2mm			Ⅲ-3	
71-15	透視図	818	Ⅲ	条痕 条幅 0.5 ~ 1.5mm 板状工具	条痕 条幅 1 ~ 1.5mm?			Ⅲ-3	
71-16	透視図	850, 879-2, 897	Ⅲ, IV	条痕 条幅 1mm	条痕 条幅 1mm			Ⅲ-3	
71-17	透視図	1663	Ⅲ	条痕による無層学文 条幅 4mm 二枚貝	条痕 条幅 1mm			Ⅲ-4	
71-18	透視図	8090	IV	条痕による無層学文 条幅 4mm 二枚貝	条痕 条幅 1mm			Ⅲ-4	
71-19	透視図	8691	IV	条痕による無層学文 条幅 4mm 二枚貝	条痕 条幅 1mm 二枚貝			Ⅲ-4	
71-20	透視図	8236	Ⅲ	条痕による無層学文 条幅 4mm 二枚貝	条痕 条幅 1mm 二枚貝			Ⅲ-4	
71-21	透視図	8287	IV	条痕 条幅 1 種 (形) 条痕区層	条痕 条幅 1mm			Ⅲ-5	
71-22	透視図	8225-1	IV	条痕 条幅 1 種 (形) 条痕区層	条痕 条幅 0.5 ~ 1mm			Ⅲ-5	
71-23	透視図	8291	IV	条痕 条幅 1 種 (形) 条痕区層	条痕 条幅 0.5 ~ 1mm 板状工具			Ⅲ-5	
71-24	透視図	8289	IV	条痕 条幅 1 種 (形) 条痕区層	条痕 条幅 2mm			Ⅲ-5	
71-25	透視図	8284	IV	条痕 条幅 1 種 (形) 条痕区層	条痕 条幅 1mm			Ⅲ-5	
71-26	透視図	8225-2	IV	条痕 条幅 1 種 (形) 条痕区層	条痕 条幅 1mm 二枚貝			Ⅲ-5	
71-27	透視図	8290	IV	条痕 条幅 1 種 (形) 条痕区層	条痕 条幅 1mm 板状工具			Ⅲ-5	
71-28	透視図	754	IV	条痕 条幅 1 種 (形) 条痕区層	条痕 条幅 1.5mm 二枚貝			Ⅲ-5	
71-29	透視図	8227	IV	沈積 条幅 4mm 深さ 2.5mm	FF			Ⅲ-6	
71-30	透視図	8215	IV	沈積 条幅 4mm 深さ 2.5mm	FF			Ⅲ-6	
71-31	透視図	8251-12	IV	沈積 条幅 4mm 深さ 2.5mm	FF			Ⅲ-6	
71-32	透視図	8113	IV	沈積 条幅 4mm 深さ 2.5mm	FF			Ⅲ-6	
71-33	透視図	7885	IV	FF?	FF?			Ⅲ-7	
71-34	透視図	8054	IV	FF?	FF?			Ⅲ-7	
72-1	透視図	Ⅱ L-152		口唇部 刻み 口唇部下 15mm 無文 0 段多量 凡 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-1	
72-2	透視図	Ⅱ N-153		口唇部 刻み 口唇部下 16mm 無文 0 段多量 凡 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-1	
72-3	透視図	Ⅱ L-152		口唇部 刻み 口唇部下 10mm 無文 0 段多量 凡 階位階	FF?		階位	Ⅲ-1	
72-4	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-1	
72-5	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	FF?		階位	Ⅲ-1	
72-6	透視図	582	Ⅲ	L, R 示伏線文 階位階	FF		階位	Ⅲ-4	
72-7	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-1	
72-8	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-1	
72-9	透視図	714	Ⅲ	0 段多量 示伏線文 階位階	FF?		階位	Ⅲ-2	
72-10	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-1	
72-11	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-1	
72-12	透視図	P-X	Ⅲ	0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-2	
72-13	透視図	P-X	カクラン	示伏線文 階位階	FF?		階位	Ⅲ-2	
72-14	透視図	Ⅱ P-96	I	L 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-2	
72-15	透視図	7029	Ⅲ	0 段多量 (L, R) 階位階	FF?		階位	Ⅲ-2	
72-16	透視図	3796, 4047, P-X	Ⅲ	L, R 階位 粘赤土層	FF		階位	Ⅲ-3	
72-17	透視図	P-X	Ⅲ	0 段多量 (L, R) 階位階	FF?		階位	Ⅲ-2	
72-18	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-2	
72-19	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-2	
72-20	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-2	
72-21	透視図	Ⅱ L-152		0 段多量 (L, R) 階位階	横方向のFF?		階位	Ⅲ-2	

表 24 土器・土製品観察表 8

図版番号	遺構名	尸番	部位	内容	内容	断面	備考	分期	年代測定資料番号
72-22	遺構外	9172	Ⅲ	L/R 積位	付		縦積舎	IV-2	
72-23	遺構外	2331	Ⅲ	単軸結晶体1層(天) 縦位回転	付		縦積舎	IV-6	
72-24	遺構外	9603	IV	0 段多量 L/R 積位回転	縦方向の付		縦積舎	IV-2	
72-25	遺構外	Ⅱ L-152	Ⅲ	0 段多量 L/R 積位回転	横方向の付		縦積舎	IV-2	
72-26	遺構外	296, 846	Ⅲ	0 段多量 L/R 積位回転	付		縦積舎	IV-1	
72-27	遺構外	9178, 9185, 9188, 9190, 9198, 9191, 9192, 9199, 9200, 9202, 9203	Ⅲ	印状縄文結束帯1層 縦位回転	ナシ		縦積舎	0	
72-28	遺構外	1630, 3030, 5082, 5032, 7977-1, 7978, 7981, 7982, 7976, 7946, 7945, 7943, 7949, 7947, 7972, 8049, 8050, 8051, 8053	Ⅲ, IV	口縁部-胴部上 半 縦積位回転 胴部下 半 L/R 積位回転	ナシ		縦積舎	IV-7	
72-29	遺構外	9177-1	Ⅲ	上半 0 段多量 L/R 積位回転 下半 印状縄文結束帯1層 縦積位回転	付		縦積舎	IV-4	
72-30	遺構外	9300, 9302, 9293-1, 2, 9296, 9299, 9366-1, 2, 9295, 9365, 9364, 9366-1, 8976, 9292-1, 2, 8963, P-X	IV	単軸結晶体1層(L) 縦位	付, 下半に指押入痕あり。		縦積舎	IV-6	
73-1	遺構外	9422-1	IV	押し引き縄文 0 段多量 L/R 胴体末縁部の回転	縦方向の付		縦積舎	IV-5	
73-2	遺構外	7587	Ⅲ	0 段多量 L/R 積位回転	付		縦積舎	IV-2	
73-3	遺構外	7407	Ⅲ	0 段多量 L/R 積位回転	付		縦積舎	IV-2	
73-4	遺構外	6605	Ⅲ	0 段多量 L/R 積位回転	付		縦積舎	IV-2	
73-5	遺構外	7409	Ⅲ	0 段多量 L/R 積位回転	付		縦積舎	IV-2	
73-6	遺構外	Ⅱ N-153	Ⅲ	0 段多量 L/R, L/R 積位回転	付		縦積舎	IV-4	
73-7	遺構外	5700, 5847, 5882, 6815, 6884, 6600, 7080, 9174, 9176-1, 2, 3, 4, 5, 6, 9178, 9179-1, 2, 9182, 9185, 9206, 9210	Ⅲ	L/R 直前直後多量積位回転	委曲調整後付		L/R 直前直後多量積位	IV-8	
73-8	遺構外	9339, 9510	IV	0 段多量 L/R 積位回転 印状縄文結束帯1層 縦位回転	縦方向の付		縦積舎	IV-8	
73-9	遺構外	7038	IV	内いへいへ縞による結節か回転付	付		縦積舎	IV-9	
73-10	遺構外	2735	Ⅲ	内いへいへ縞による結節か回転付	付		縦積舎	IV-9	
73-11	遺構外	270, 271	Ⅲ	内いへいへ縞による結節か回転付	付		縦積舎	IV-9	
73-12	遺構外	P-X	Ⅲ	内いへいへ縞による結節か回転付	付		縦積舎	IV-9	
73-13	遺構外	Ⅱ R-116	カウラン	口縁部 L/R 側面圧縮縦位 口縁部 C 字状溝 底 L/R 側面圧縮による平行縦文期に属する	縦方向の付		付		
73-14	遺構外	Ⅱ S-100	Ⅲ	L/R 側面圧縮による平行縦文期に属する縦文	縦方向の付		付		
73-15	遺構外	511	Ⅱ	口縁部 腹等上 L/R 側面圧縮 口縁部 斜位 縦位の腹等上 L/R 側面圧縮 L/R 側面圧縮による平行縦文	縦位の付		付		
73-16	遺構外	708	Ⅲ	胴部 腹等上 L/R 側面圧縮 胴部 結節回転付(天) 縦位	縦位の付		付		
73-17	遺構外	8926, 9117, 9205	Ⅲ, IV	口縁部 腹等上 L/R 側面圧縮 棒状工具による斜交 L/R 積位回転	縦方向の付		付		
73-18	遺構外	551, 552	Ⅱ	口縁部 腹等上 L/R 側面圧縮 棒状工具による斜交 L/R 積位回転	縦方向の付		付		
73-19	遺構外	516	Ⅲ	印状縄文結束帯1層 縦位	付		付		
73-20	遺構外	8524	Ⅲ	口縁部 腹等上 L/R 側面圧縮 口縁部 縦位の腹等上 L/R 側面圧縮 縦位 縦位回転	縦方向の付		付		
73-21	遺構外	2994-2, 3005, 3019, 7251, 7252, 7254, 7256, 8525-2, 8526-2, 8528-1, 3, 4, 8529-3, 8530, 8531, 8533, 8574, 7250	Ⅲ, IV	L/R 地に二本一線の腹等上による斜交文 腹帯部に調整による沈線	付		付		
74-1	遺構外	1705, 1708, 1709, 4843, 4848, 4849, 4893, 5599, 8003, P-X, 一層	Ⅲ	L/R 縦位回転-沈線	付		付		
74-2	遺構外	4198	Ⅲ	肥厚した口部部に沈線-円形斜交	腹下部に円形斜交		付		
74-3	遺構外	641, 671-2	Ⅲ	二本一線の沈線 L/R 縦位	縦方向の付		付		
74-4	遺構外	1507, 5664	Ⅲ	二本一線の沈線 L/R 縦位	縦方向の付		付		
74-5	遺構外	179, Ⅱ C-112, P-X	Ⅲ カウラン	L/R 斜交縄文	縦方向の付		付		
74-6	遺構外	2283	Ⅲ	L/R 光線縄文 沈線 C	縦方向の付		付		
74-7	遺構外	Ⅱ L-101	Ⅲ カウラン	糸縷の不明な竹管状工具による斜交 L/R 縦位回転	縦方向の付		付		
74-8	遺構外	471-3	Ⅲ	胴部 平行沈線下に糸縷が不明な棒状工具による斜交 胴部 L/R 縦位回転	縦方向の付		付		
74-9	遺構外	2068, 2090, 2091, P-X	Ⅲ	口縁部 腹等上竹管状工具による斜交	縦方向の付		付		
74-10	遺構外	548, 580, 647, 686, 687, 688, 689-1, 2, 709	Ⅱ, Ⅲ	胴部 糸縷文-平行沈線 沈線 B 編部 L/R 縦位 沈線下の付 L/R 縦位	付		付		
74-11	遺構外	4854, 5590, 5600	Ⅲ	胴部 糸縷の平行い工具による糸縷文 胴部 L/R 縦位-縦位	付		付		
74-12	遺構外	5586	Ⅲ	平截竹管状工具による二本一線の沈線 L/R 縦位	縦方向の付		付		

表 25 土器・土製品観察 9

図帳番号	遺構名	P番号	層位	外周	内周	断面	備考	分類	年代測定資料番号
74-13	遺構外	4871, 4876	Ⅲ	口縁部 折り返し口縁 胴部 L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-4	
74-14	遺構外	2092, 2091-1, 2, 2062, 2060-2, P-X	Ⅲ	口縁部 竹管状工具による斜突 車輪軸本体(穴) 縦位置	横方向の13分			Ⅲ-3	
74-15	遺構外	3614, 3639, 4006, P-X	1, Ⅲ	L形縦位置 口縁下 10mm 折り返し口縁	13分			Ⅲ-4	
74-16	遺構外	471-5	Ⅲ	胴部 平打突縁と突縁が平縁いかな挿状工具による斜突	L形縦位置			Ⅲ-2	
74-17	遺構外	5906, 5655, 5656, 5657, 5658, 5654	Ⅲ, IV	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
74-18	遺構外	1929, 1890-3, P-X	Ⅲ	L形縦位置 横位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
74-19	遺構外	5386, 9876-3, 7774	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
74-20	遺構外	5288, 5710	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
74-21	遺構外	2066	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
74-22	遺構外	2633	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
74-23	遺構外	8482	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
74-24	遺構外	7191, 8642, 2691, 8642, 7081-1	Ⅲ	L形縦位置	縦状工具によるIV 突縁			Ⅲ-1	
74-25	遺構外	1794, 4646	Ⅲ	L形縦位置	IV			Ⅲ-1	
74-26	遺構外	2792, 2889, 5515, 7923	Ⅲ	L形縦位置	IV			Ⅲ-1	
75-1	遺構外	3092, 3093, 6471, 6752, 6753	Ⅲ	L形縦位置 横位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-2	遺構外	2545, 2546, 3811	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-3	遺構外	2193-2, 2196, 3116-2, 7345, 7346, 7431-1, 2, 3, 7431, 7792	Ⅲ	L形縦位置 注縁 A2	突縁 突縁 5-1mm 折状工具			Ⅲ-1	
75-4	遺構外	1347, 1356, 1359, 4584, 4682, 5522, 6650	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-5	遺構外	5886	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-6	遺構外	6521	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-7	遺構外	2722, 4657	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-8	遺構外	2676	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-9	遺構外	4693	IV	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-10	遺構外	3528	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-11	遺構外	1653, 2004, 2006	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-12	遺構外	1241	Ⅲ	突縁	突縁			Ⅲ-1	
75-13	遺構外	2631	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-14	遺構外	4756	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-15	遺構外	2367	Ⅲ	突縁	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-16	遺構外	8749	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-17	遺構外	5960, 7438	Ⅲ	注縁による曲線突 突縁内にて状工具による斜突	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-18	遺構外	5620	Ⅲ	注縁による曲線突内にて半円形斜突突縁	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-19	遺構外	2279	Ⅲ	注縁による曲線突内にて半円形斜突突縁	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-20	遺構外	P-X 試土レ	Ⅲ	注縁による曲線突内にて半円形斜突	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-21	遺構外	4798	Ⅲ	注縁による曲線突内にて半円形斜突	横方向の13分			Ⅲ-1	
75-22	遺構外	7569	Ⅲ	突縁 半円形斜突	横方向の13分			Ⅲ-2	
75-23	遺構外	1475, 2294	Ⅲ	突縁 半円形斜突	横方向の13分			Ⅲ-2	
75-24	遺構外	2599	Ⅲ	L形縦位置 横位置	横方向の13分			Ⅲ-2	
75-25	遺構外	1366	Ⅲ	突縁等 L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-2	
75-26	遺構外	8572	Ⅲ	L形縦位置 横位置	横方向の13分			Ⅲ-2	
75-27	遺構外	P-X	Ⅲ	L形縦位置 注縁 C	横方向の13分			Ⅲ-2	
75-28	遺構外	5281	Ⅲ	L形縦位置 横位置	横方向の13分			Ⅲ-2	
76-1	遺構外	3466, 3556	IV	突縁等の上下にて半円形斜突	横方向の13分			Ⅲ-6	
76-2	遺構外	7714	Ⅲ	胴部 半円形斜突	横方向の13分			Ⅲ-6	
76-3	遺構外	2806	Ⅲ	胴部 半円形斜突下に微塵等 垂下する注縁 L形突起	横方向の13分			Ⅲ-6	
76-4	遺構外	3328	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-5	遺構外	4666	Ⅲ	L形縦位置 引き通し 注縁あり	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-6	遺構外	2217	Ⅲ	L形縦位置 横位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-7	遺構外	1158	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-8	遺構外	3397-2, P-X	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-9	遺構外	1730, 4761, 4779, 4781, 5542, 5543, 5547, 7173, 7913, 8076, 8729-2	Ⅲ, IV	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-10	遺構外	2962	Ⅲ	L形縦位置 口縁部下 10mm 磨消	縦状工具による横方向の13分			Ⅲ-1	
76-11	遺構外	1903	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-12	遺構外	1207, 1208	Ⅲ	L形縦位置 口縁部下 7mm 磨消	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-13	遺構外	555	Ⅲ	L形縦位置 口縁部下 15mm 磨消	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-14	遺構外	1044	Ⅲ	L形縦位置 口縁部下 10mm 磨消	縦状工具による横方向の13分			Ⅲ-1	
76-15	遺構外	2054	Ⅲ	L形縦位置 口縁部下 1cm 磨消	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-16	遺構外	981, 4332, 4381, 4333, 4336, 4338, 4339, 4408, P-X	Ⅲ	L形縦位置 口縁部下 1cm 磨消	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-17	遺構外	2378	Ⅲ	L形縦位置	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-18	遺構外	6284, 6285, 6287, 6289, 6357	Ⅲ, IV	L形縦位置 口縁部下 2cm 磨消	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-19	遺構外	4571	Ⅲ	L形縦位置 口縁部下 10cm 磨消	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-20	遺構外	4869	Ⅲ	L形縦位置 口縁部下 25mm 磨消	横方向の13分			Ⅲ-1	
76-21	遺構外	1704, 4645	Ⅲ	L形縦位置 口縁部下 2.5cm 磨消 口唇部 断面 2.5cm 幅の取付	横方向の13分			Ⅲ-1	

表 26 土器・土製品観察表 10

図版番号	遺構名	P 番	層位	内容	内容	断面	備考	分期	年代測定資料番号
77-1	遺構外	3008, 3010, 3027, 3582, 3661, 5065, 5068, 5072, 5074, 5077, 5443, 7272, 7275, 8576, 8581, 7260, 7263, 7833-1, 8578, 8579, 8663	Ⅲ	丸石敷地+礎石回転	礎石向の1'±			Ⅸ-1	
77-2	遺構外	P-X	I	L形礎石回転	礎石向の1'±			Ⅸ-1	
77-3	遺構外	992, 1613, 1625, 1626, 4291, 4292, 4293, 4295, 4419, 4985, 4985, 4995, 6332, 6333, 6334, 6336, 6337, 6338, 6342, 6343, 6344, 6345, 6346, 7213, 7216, 7869, 8020, 4290-2, 6335, 7186	Ⅲ	L形礎石	板状工具による1'± (1'±位の積層が残る)			Ⅸ-1	
77-4	遺構外	1438, 4644, 4654-1, 4655	Ⅲ	L形礎石回転 渡辺部1'±	礎石向の1'±			Ⅸ-1	
77-5	遺構外	3019-1, 2, 3	Ⅲ	単軸橋条体1層(礎石回転, 扉部)+貫通孔, 溝	溝±			Ⅸ-3	
77-6	遺構外	8011	Ⅲ	単軸橋条体1層(礎石回転, 渡辺部)1'	礎石向の1'±			Ⅸ-3	
77-7	遺構外	6559	IV					Ⅸ-3	
77-8	遺構外	5902, 6073, P-X	Ⅲ, IV	1段多条L形礎石回転	礎石向の1'±			Ⅸ-3	
77-9	遺構外	P-X	I	L形礎石回転	1'±			Ⅸ-3	
77-10	遺構外	2219, 7327	Ⅲ	-, 外庭面 周縁部 粘土層付	1'±		内庭面?±		
77-11	遺構外	P-X		-, 外庭面 1'±	1'±		内庭面?±	Ⅸ	
78-1	遺構外	3990, 3714, 3999, 3996, 3708, 3679, 3681, 3984, 3726, 3691, 3749, 3986, 3720, 3724-2, 4134, 5727, 5736	Ⅲ	口部部 階等上L形礎石回転 口縁部 垂下する階等上L形回転 階等による深溝内に沈積A1による曲線文	礎石向の1'±			X-2	
78-2	遺構外	6772	Ⅲ	沈積A1による曲線文	礎石向の1'±			X-2	
78-3	遺構外	2520, 3844	Ⅲ	口部部 丸, 礎石回転後沈積 垂下する階等	礎石向の1'±			X-2	
78-4	遺構外	2447, 4065	Ⅲ	丸, 充填沈積 沈積A2による曲線文	礎石向の1'±			X-2	
78-5	遺構外	1328, 3870	Ⅲ	口部部 階等上L形礎石回転 口縁部 沈積 垂下する階等上L形	礎石向の1'±			X-2	
78-6	遺構外	2502, 2506-1, 2460, 3773	Ⅲ	沈積A2による曲線文 0段多条丸, 充填層 穴	礎石向の1'±			X-2	
78-7	遺構外	2501-1, 2506-2, 2502-2, 3768	Ⅲ	沈積A2による曲線文 0段多条丸, 充填層 穴	礎石向の1'±			X-2	
78-8	遺構外	2516	Ⅲ	口部部 丸, 礎石回転 扉部 丸, 礎石回転	板状工具による礎石向の1'±			X-2	
78-9	遺構外	2527	Ⅲ	渡辺部 板状工具による新築 口部部 0段多条丸, 礎石回転 渡辺部下に短い礎石の粘土層より沈積付	礎石向の1'±			X-2	
78-10	遺構外	P-X	カクラン	渡辺部 板状工具による新築 口部部 L形礎石回転 沈積A2	礎石向の1'±			X-2	
78-11	遺構外	2585	Ⅲ	口部部 階等上L形礎石回転 口縁部 L形礎石回転 沈積A2	礎石向の1'±			X-2	
78-12	遺構外	2450-1, 3744, 3747, 3752, 3753	Ⅲ	扉部 階等上板状工具による新築 垂下する階等上板状工具による新築 沈積による方形深溝内+曲線文 L形溝溝 沈積A2				X-1	
78-13	遺構外	7366-2, 3	Ⅲ	丸, 壺溝縦文 沈積A2	礎石向の1'±			X-2	
79-1	遺構外	2418, 2422, 2424, 2429, 2436, 2442, 244							
2		8, 3665, 3666, 3668, 3669, 3671, 3672, 3							
3		673, 3709, 3713, 3715, 3722, 3723, 3726							
		, 3741, 3995, 4117, 4119, 4116, 5715-1, 5208, 5210, 5211, 5214, 5248, 5786, 6226,		L形礎石回転	溝±		板?±	X-2	
79-4	遺構外	2489	Ⅲ	二本一組の沈積層に階等付付 溝巻き文	礎石向の1'±			X-3	
79-5	遺構外	2163, 5166	Ⅲ	沈積による曲線文 粘土層付付	礎石向の1'±			X-3	
79-6	遺構外	4695	Ⅲ	丸, 礎石回転 沈積による曲線文	礎石向の1'±			X-3	
79-7	遺構外	5442	Ⅲ	扉状部手元に粘土層付付 竹管状工具による新築	1'±			X-3	
79-8	遺構外	2119	Ⅲ	扉状部手	1'±			X-3	
79-9	遺構外	344, 325, 327, 329, 332, 335, 336, 337, 338, 345, 346, 347, 343, 351, 355, 359-3, 359-2, 301, 802, 803, 80	Ⅲ	L形礎石回転	溝±			X-3	
		9, 811, 812, 813, 815, 815, 856-1, 2, 3, 6, 7, 961,							
79-10	遺構外	2521	Ⅲ	口部部 充填が不揃いな板状工具による新築 扉部 平行沈積 扉部 丸, 礎石回転	礎石向の1'±			X 1	
79-11	遺構外	4494-2	Ⅲ	口部部 扉付 口縁部 平行沈積 扉部 丸, 礎石回転	礎石向の1'±			X 1	
79-12	遺構外	2405, P-X	Ⅲ, Ⅳ	扉部 壺状体階等	口部部 沈積			X 1	
79-13	遺構外	1160	Ⅲ	口縁部 無文 扉部 丸, 礎石回転	礎石向の1'±			X 1	
79-14	遺構外	1161	Ⅲ	口縁部 無文 扉部 丸, 礎石回転	礎石向の1'±			X 1	
79-15	遺構外	P-X	Ⅲ	平行沈積の壺状体階等	口部部 沈積 1'±			X 1	
79-16	遺構外	1028, 1407, 1408, 1751, 1754, 1755, 1756, 1757, 175	Ⅲ, Ⅳ	口縁部 平行沈積 0段多条丸 粘土層上に沈積 縦位の条痕				X 1	

表27 土器・土製品観察表11

図版番号	部 種	類 型	造 構	階位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	受熱	備考
9-1	耐磨部	耐Ⅱ類、耐Ⅲ類	S101	10層	110	79	35	395	砂岩	無	
9-2	石礎	—	S101	7層	100	69	24	230.7	頁岩	無	
9-3	磨製石弁	—	S101	7層	145	71	38	602.3	頁岩	無	
9-4	耐磨部	耐Ⅰ類、耐Ⅱ類	S101	7層	132	93	34	575.5	砂岩	無	
9-5	石皿・台石	—	S101	7層	266	182	90	3800	ディザイト	有	
9-6	磨石	磨Ⅰ類	S101	5層	83	61	32	181.9	砂岩	有	
9-7	耐磨部	磨Ⅰ類、耐Ⅲ類	S101	5層	108	70	51	480	砂岩	有	煤?付着
10-1	石皿・台石	—	S101	5層	330	366	106	15000	頁岩	無	
10-2	磨石	磨Ⅰ類	S101	3層	109	53	44	255.8	砂岩	有	
10-3	耐磨部	磨Ⅰ類、耐Ⅲ類	S101	3層	122	82	25	372.6	砂岩	無	
10-4	耐磨部	磨Ⅰ類、耐Ⅲ類	S101	3層	66	76	23	178.9	砂岩	無	
10-5	耐磨部	磨Ⅰ類、耐Ⅲ類	S101	3層	126	61	28	218.7	砂岩	無	
11-3	石礎	I c 類	S102 覆式炉埋設土層	3層	15.2	15.8	2.9	0.6	珪質頁岩	有	
15-9	石礎	IV類	S104	床面	34.4	19.8	6.7	3	珪質頁岩	無	
15-10	石礎	I 類	S104 pit1	覆土	44.6	15.6	8.2	3.8	珪質頁岩	無	
15-11	石礎	I d 類	S104	1層	37.8	13.4	4.4	1.6	珪質頁岩	無	
15-12	二次調整のある剥片	—	S104	1層	25.9	25.6	9	3.1	珪質頁岩	無	
19-22	石礎	I c 類	S107	1層	15.9	11.5	3.3	0.3	珪質頁岩	無	
19-23	石礎	I c 類	S107	1層	16.3	12.4	3.3	0.3	珪質頁岩	無	アスファルト 汚物付着
19-24	石礎	I c 類	S107	1層	17.7	14.8	3.7	0.7	珪質頁岩	無	
19-25	磨製石弁	異加工残欠?	S107 pit3	上面	32	26	10	15.4	頁岩	無	
19-26	耐磨部	耐Ⅰ類、耐Ⅲ類	S107 pit7	2層	100	66	27	217.6	砂岩	有	
25-1	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	51	30	10	11	珪質頁岩	無	
25-2	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	31	28	8	2.8	珪質頁岩	無	
25-3	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	21	31	4	1.6	珪質頁岩	無	
25-4	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	34	44	11	14.5	珪質頁岩	無	
25-5	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	50	32	15	14.1	珪質頁岩	無	
25-6	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	51	46	13	14.2	珪質頁岩	無	
25-7	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	25	29	5	2.5	珪質頁岩	無	
25-8	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	51	36	14	16.2	珪質頁岩	無	
25-9	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	25	31	6	3.8	珪質頁岩	無	
25-10	高橋加掣痕跡のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	42	32	10	11.9	珪質頁岩	無	
25-11	剥片	—	S111 剥片集積1	—	27	31	6	2.5	珪質頁岩	無	
25-12	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	43	48	6	8	珪質頁岩	無	
25-13	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	54	54	15	25.7	珪質頁岩	無	
25-14	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	47	30	12	12.3	珪質頁岩	無	
25-15	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	37	49	12	16.1	珪質頁岩	無	
26-1	剥片	—	S111 剥片集積1	—	50	66	13	31.4	珪質頁岩	無	
26-2	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	42	50	12	13.5	珪質頁岩	無	
26-3	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	31	26	11	7.1	珪質頁岩	無	
26-4	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	39	18	10	4.8	珪質頁岩	無	
26-5	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	32	36	9	6.9	珪質頁岩	無	
26-6	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	31	26	7	3.7	珪質頁岩	無	
26-7	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	58	33	13	11.4	珪質頁岩	無	
26-8	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	32	39	11	7.8	珪質頁岩	無	
26-9	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	54	63	12	20.6	珪質頁岩	無	
26-10	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	44	62	13	28.7	珪質頁岩	無	
26-11	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	40	57	15	22.7	珪質頁岩	無	
27-1	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	47	40	22	27.2	珪質頁岩	無	
27-2	二次調整のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	46	54	21	37.4	珪質頁岩	無	
27-3	剥片	—	S111 剥片集積2	—	16	34	12	4.3	珪質頁岩	無	
27-4	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	37	40	10	8	珪質頁岩	無	
27-5	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	20	28	6	3.7	珪質頁岩	無	
27-6	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	37	24	13	7.5	珪質頁岩	無	
27-7	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	30	34	8	3.7	珪質頁岩	無	
27-8	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	31	45	8	3	珪質頁岩	無	
27-9	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	32	30	5	2.8	珪質頁岩	無	
27-10	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	35	23	10	4.2	珪質頁岩	無	
27-11	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	35	37	9	1.4	珪質頁岩	無	
27-12	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	23	37	8	2.3	珪質頁岩	無	
27-13	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	38	41	9	5.5	珪質頁岩	無	
27-14	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	33	42	14	6.8	珪質頁岩	無	
28-1	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	45	25	6	3.9	珪質頁岩	無	
28-2	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	13	23	7	1.7	珪質頁岩	無	
28-3	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	40	31	7	4.4	珪質頁岩	無	
28-4	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	34	47	11	9	珪質頁岩	無	
28-5	剥片	—	S111 剥片集積2	—	16	16	8	1.6	珪質頁岩	無	
28-6	微小割離底のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	29	24	10	5.2	珪質頁岩	無	
28-7	剥片	—	S111 剥片集積2	—	24	20	8	7.1	珪質頁岩	無	

表 28 石器・石製品観察表 1

図版番号	器 種	類 型	造 構	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	受熱	備 考
28-8	微小彫刻痕のある割片	—	S111 割片集積 2	—	42	23	8	7.7	珉質頁岩	無	
28-9	割片	—	S111 割片集積 2	—	37	25	9	6.4	珉質頁岩	無	
28-10	高極加撃痕跡のある割片	—	S111 割片集積 2	—	40	39	13	16.5	珉質頁岩	無	
28-11	微小彫刻痕のある割片	—	S111 割片集積 2	—	46	49	11	10	珉質頁岩	無	
28-12	二次調整のある割片	—	S111 割片集積 2	—	50	32	8	10.6	珉質頁岩	無	複合資料
28-13	微小彫刻痕のある割片	—	S111 割片集積 2	—	32	48	8	6.7	珉質頁岩	無	複合資料
31-10	二次調整のある割片	—	S111 様式炉	I 層	26.4	27.4	9.5	6.1	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
31-11	石鏝	I c 類	S111	I 層	25.5	15.9	3.5	0.8	珉質頁岩	無	
31-12	石鏝	I c 類	S111	I 層	19.7	14.1	2.9	0.6	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
31-13	二次調整のある割片	—	S111	I 層	38.2	24.2	10.2	7.3	珉質頁岩	無	
31-14	二次調整のある割片	—	S111	I 層	57.9	23.6	7.3	6.1	珉質頁岩	無	
31-15	二次調整のある割片	—	S111	I 層	40.8	27.8	8.9	7.5	珉質頁岩	無	
32-1	二次調整のある割片	—	S111	I 層	50.4	48.8	11.7	19.4	珉質頁岩	無	
32-2	磨製石斧	—	S111	床面	92	40	16	85.4	緑色細粒凝 灰石	無	
32-3	觔磨器 (伊石)	磨 I 類、磨 II 類	S111 様式伊	伊休	180	69	36	849.7	灰山岩	有	
32-13	石鏝	I 類	S114	床面	38	16	9.1	4	珉質頁岩	無	
38-14	石鏝	IV 類	S114	床面	32.2	15.6	4	1.6	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
38-15	石鏝	未製品・失敗品	S114	2 層	44.7	22.2	7.9	7.2	珉質頁岩	無	
38-16	石鏝	I b 類	S114	1 層	25.5	18.6	7	1.8	珉質頁岩	無	
38-17	石鏝	I c 類	S114	1 層	19.2	8.5	2.3	0.3	珉質頁岩	無	
38-18	石鏝	I c 類	S114	1 層	23.5	15.5	3.5	0.7	鉄石英	無	アスファルト 状物質付着
38-19	石鏝	I c 類	S114	1 層	21.1	13.4	3	0.5	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
38-20	石鏝	I c 類	S114	1 層	22.8	14	3.6	0.2	珉質頁岩	無	
38-21	石鏝	I c 類	S114	1 層	18.7	16.3	3.2	0.6	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
39-1	石鏝	I c 類	S114	1 層	21.3	15.5	4.9	0.9	珉質頁岩	無	
39-2	石鏝	I c 類	S114	1 層	22.6	14.9	2.6	0.6	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
39-3	石鏝	I c 類	S114	1 層	22.2	14.4	3.2	0.6	珉質頁岩	無	
39-4	石鏝	I c 類	S114	1 層	18.8	15.9	3.7	0.6	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
39-5	石鏝	II a 類	S114	1 層	21.7	13.5	5.2	1.5	珉質頁岩	無	
39-6	石鏝	未製品・失敗品	S114	1 層	61.7	33	13.2	17	珉質頁岩	有	
39-7	石鏝	I 類	S114	1 層	37.9	11.1	8.2	2.6	珉質頁岩	無	
39-8	高極加撃痕跡のある割片	—	S114	1 層	29.9	24.9	8.8	5.8	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
39-9	二次調整のある割片	—	S114	1 層	17.7	15.4	4.7	1.1	珉質頁岩	無	
39-10	磨石	磨 II 類	S114	1 層	104	83	54	669.1	粗粒玄武岩	無	
39-11	磨石	磨 II 類	S114	1 層	158	77	45	696	砂岩	有	
39-12	觔磨器	磨 III 類、磨 II 類	S114	1 層	102	52	66	405.8	砂岩	無	
39-13	觔磨器	磨 II 類、磨 II 類	S114	1 層	118	75	45	512	砂岩	無	
39-14	觔磨器	磨 II 類、磨 II 類	S114	1 層	63	112	44	427.1	砂岩	無	
41-9	石鏝	I b 類	SK05	5 層	13.8	18	3.2	0.8	珉質頁岩	無	
44-11	石鏝	I a 類	SK06	3 層	22.5	15.6	5.2	1.2	珉質頁岩	無	
44-12	石鏝	I c 類	SK06	3 層	16.7	16.4	3.4	0.6	珉質頁岩	無	
44-13	石鏝	I c 類	SK06	3 層	21.2	13	3	0.5	珉質頁岩	無	
44-14	石鏝	I d 類	SK06	3 層	35.1	11.1	6.9	2.2	珉質頁岩	無	
44-15	石鏝	I a 類	SK06	3 層	32.1	24.4	9.3	6.2	珉質頁岩	無	
44-16	石鏝	—	SK06	3 層	44.3	23.9	11.9	15	珉質頁岩	無	
44-17	石鏝	III 類	SK06	3 層	17.3	17.6	6.4	1.1	珉質頁岩	無	
44-18	石鏝	III 類	SK06	1 層	13.7	13.7	5.1	0.6	珉質頁岩	無	
44-19	石鏝	I a 類	SK06	1 層	27.5	23	8	3.9	珉質頁岩	無	
44-20	石鏝	未製品・失敗品	SK06	産土	40.9	28.4	6.5	5.2	珉質頁岩	無	
44-21	磨製石斧	—	SK06	3 層	109	51	24	240.4	粗粒凝灰岩	無	
44-22	磨製石斧	二次残欠	SK06	2 層	26	10	12	3.6	頁岩	無	
44-23	觔磨器	磨 I 類、磨 I 類	SK06	2 層	95	38	29	149.6	粗粒玄武岩	有	
45-1	石鏝	—	SK11	1 層	51	86	28	152.7	粘板岩	無	
50-6	石鏝	I c 類	SK14	1 層	18.4	14.9	3.9	0.7	珉質頁岩	無	
50-7	石鏝	I c 類	SK14	1 層	18.5	14.3	3	0.5	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
50-8	石鏝	II a 類	SK14	1 層	37.9	13	4.5	1.7	珉質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
53-18	觔磨器	磨 I 類、磨 II 類	SK16	6 層	123	69	86	727.8	砂岩	無	

表 29 石器・石製品観察表 2

図番番号	器種	類型	遺構	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	受熱	備考
53-19	磨石	磨Ⅱ類	SK16	3a層	125	68	58	694.3	粗粒玄武岩	有	
58-1	石匙	IV類	SK03	—	486	159	58	4.2	埴貫頁岩	無	
58-2	磨石	磨Ⅰ類	SK03	—	215	89	41	1017.6	砂岩	無	
59-1	微小剥離痕のある割片	—	SK05	—	44	59	13	22.9	埴貫頁岩	無	
59-2	微小剥離痕のある割片	—	SK05	—	52	41	13	15.8	埴貫頁岩	無	
59-3	微小剥離痕のある割片	—	SK05	—	34	52	11	10.7	埴貫頁岩	無	
59-4	微小剥離痕のある割片	—	SK05	—	32	28	5	3.5	埴貫頁岩	無	
59-5	微小剥離痕のある割片	—	SK05	—	29	35	9	5.2	埴貫頁岩	無	
59-6	微小剥離痕のある割片	—	SK05	—	44	55	12	13.3	埴貫頁岩	無	
59-7	微小剥離痕のある割片	—	SK05	—	55	49	10	14.9	埴貫頁岩	無	
59-8	微小剥離痕のある割片	—	SK05	—	45	52	11	19.6	埴貫頁岩	無	
62-7	石皿	I c 類	SK06	I 層	20.7	13.2	3.5	0.7	埴貫頁岩	無	
62-8	石皿	II 類	SK06	I 層	27.5	4.7	2.8	0.3	埴貫頁岩	無	
62-9	磨製石斧	—	SK06	I 層	35	18	7	8.2	緑色凝結燧灰岩	無	
63-1	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	43	50	11	13.8	埴貫頁岩	無	
63-2	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	47	64	15	25.6	埴貫頁岩	無	
63-3	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	26	30	10	6.5	埴貫頁岩	無	
63-4	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	38	49	10	11.9	埴貫頁岩	無	
63-5	割片	—	SK07	—	31	28	10	4.5	埴貫頁岩	無	
63-6	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	25	25	6	2.3	埴貫頁岩	無	
63-7	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	34	36	9	7.3	埴貫頁岩	無	
63-8	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	42	75	18	27.6	埴貫頁岩	無	
63-9	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	33	58	11	11.8	埴貫頁岩	無	
63-10	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	12	15	4	0.3	埴貫頁岩	無	
63-11	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	21	42	11	6.8	埴貫頁岩	無	
63-12	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	40	50	11	11.3	埴貫頁岩	無	
63-13	割片	—	SK07	—	20	17	4	0.8	埴貫頁岩	無	
63-14	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	31	25	13	8.3	埴貫頁岩	無	
64-1	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	24	24	6	1.7	埴貫頁岩	無	64-16 と接合
64-2	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	38	35	10	7	埴貫頁岩	無	
64-3	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	24	27	5	1.7	埴貫頁岩	無	
64-4	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	27	37	6	2.3	埴貫頁岩	無	
64-5	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	62	71	16	42.7	埴貫頁岩	無	
64-6	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	53	55	12	20.9	埴貫頁岩	無	
64-7	割片	—	SK07	—	37	22	4	1.3	埴貫頁岩	無	
64-8	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	33	50	13	14.8	埴貫頁岩	無	
64-9	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	30	33	12	6	埴貫頁岩	無	
64-10	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	45	46	10	13.8	埴貫頁岩	無	
64-11	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	40	48	9	7.5	埴貫頁岩	無	
64-12	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	37	35	12	5.6	埴貫頁岩	無	
64-13	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	42	40	16	17.3	埴貫頁岩	無	
64-14	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	38	38	14	13.8	埴貫頁岩	無	
64-15	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	34	42	12	9	埴貫頁岩	無	
64-16	微小剥離痕のある割片	—	SK07	—	25	51	11	5.6	埴貫頁岩	無	64-1 と接合
65-1	割片	—	SK07	—	20	50	4	3	埴貫頁岩	無	接合資料
82-1	石皿	I a 類	遺構外	II 層	38.1	17.5	5	5	埴貫頁岩	無	
82-2	石皿	I b 類	遺構外	II 層	16.9	14.8	4	0.6	埴貫頁岩	無	
82-3	石皿	I c 類	遺構外	II 層	24.2	17.1	3.8	0.7	埴貫頁岩	無	
82-4	石皿	II 類	遺構外	II 層	30.4	14.1	4	1.4	埴貫頁岩	無	
82-5	石皿	I a 類	遺構外	III 層	34.2	21.8	6.6	3.7	埴貫頁岩	無	
82-6	石皿	I a 類	遺構外	III 層	18.6	13.9	4.2	0.6	埴貫頁岩	無	
82-7	石皿	I a 類	遺構外	III 層	22	14.4	5.4	1.5	埴貫頁岩	無	
82-8	石皿	I a 類	遺構外	III 層	23.1	19.7	4.7	1.6	埴貫頁岩	無	
82-9	石皿	I b 類	遺構外	III 層	19.3	12.8	3.3	0.7	埴貫頁岩	無	
82-10	石皿	I c 類	遺構外	III 層	22.6	16.6	2.9	0.7	埴貫頁岩	無	アスファルト状物質付着
82-11	石皿	I c 類	遺構外	III 層	21.8	14.9	3.2	2.4	埴貫頁岩	無	
82-12	石皿	I c 類	遺構外	III 層	28.1	16.8	3.7	1.2	埴貫頁岩	無	
82-13	石皿	I c 類	遺構外	III 層	27.5	12.1	4.3	1.4	埴貫頁岩	無	
82-14	石皿	I c 類	遺構外	III 層	26.4	14.4	4	1	埴貫頁岩	無	アスファルト状物質付着 アスファルト状物質付着
82-15	石皿	I c 類	遺構外	III 層	24	13.6	3.5	0.6	埴貫頁岩	無	アスファルト状物質付着
82-16	石皿	I c 類	遺構外	III 層	21.5	12.8	3.5	1	埴貫頁岩	無	
82-17	石皿	I c 類	遺構外	III 層	20.2	15.3	3.2	0.4	埴貫頁岩	無	
82-18	石皿	I c 類	遺構外	III 層	22	12.9	5.2	1	埴貫頁岩	無	
82-19	石皿	I c 類	遺構外	III 層	16.5	12.8	3.4	0.4	埴貫頁岩	無	
82-20	石皿	I c 類	遺構外	III 層	17.2	13.7	2.9	0.5	埴貫頁岩	無	
82-21	石皿	I c 類	遺構外	III 層	17.5	15	3.5	0.8	埴貫頁岩	無	
82-22	石皿	I c 類	遺構外	III 層	15.5	16.5	3.9	1.1	埴貫頁岩	有	

表 30 石器・石製品観察表 3

図番番号	器種	類型	遺構	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	受胎	備考
83-23	石皿	I c 類	遺構外	Ⅱ層	15.6	17.2	3.5	13.2	珪質頁岩	無	
83-24	石皿	I c 類	遺構外	Ⅱ層	18.8	14.8	3.3	1.1	珪質頁岩	無	
83-25	石皿	I c 類	遺構外	Ⅱ層	19.4	13.7	4.3	0.7	珪質頁岩	無	
83-26	石皿	I c 類	遺構外	Ⅱ層	14	15.4	3.1	0.6	珪質頁岩	無	
83-27	石皿	I c 類	遺構外	Ⅱ層	13.1	15	3	0.4	珪質頁岩	無	
83-28	石皿	I c 類	遺構外	Ⅱ層	12.8	12.5	3.1	0.3	珪質頁岩	無	
83-29	石皿	I c 類	遺構外	Ⅱ層	14.4	11.5	2.8	0.3	珪質頁岩	無	
83-30	石皿	I c 類	遺構外	Ⅱ層	18.6	12.5	3.8	0.9	珪質頁岩	無	
83-31	石皿	I c 類	遺構外	Ⅱ層	19.5	14.8	2.9	0.5	珪質頁岩	無	
83-32	石皿	I a 類	遺構外	Ⅱ層	27.6	21	10.4	4.2	珪質頁岩	無	
83-33	石皿	Ⅱ a 類	遺構外	Ⅱ層	42.2	17.4	6.5	3.3	珪質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
83-34	石皿	Ⅱ a 類	遺構外	Ⅱ層	39.3	16.3	7.2	3.7	珪質頁岩	無	
83-35	石皿	Ⅱ b 類	遺構外	Ⅱ層	37.7	14.5	5.7	2.1	珪質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
83-36	石皿	Ⅱ b 類	遺構外	Ⅱ層	36.9	12.1	4.8	1.5	珪質頁岩	無	
83-37	石皿	Ⅱ b 類	遺構外	Ⅱ層	26.5	16.7	4.5	1.1	珪質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
83-38	石皿	Ⅱ b 類	遺構外	Ⅱ層	26.2	11.5	4.3	0.8	珪質頁岩	無	
83-39	石皿	未製品・失敗品	遺構外	Ⅱ層	31.2	27.4	7.3	4.9	珪質頁岩	無	
83-40	石皿	—	遺構外	Ⅱ層	68.7	27.8	12.6	26.2	珪質頁岩	有	
83-41	石皿	—	遺構外	Ⅱ層	41.9	21.8	14.7	12.3	珪質頁岩	有	
83-42	石皿	未製品・失敗品	遺構外	Ⅱ層	51.6	22.3	8.9	9.2	珪質頁岩	無	
84-1	石匙	I 類	遺構外	Ⅱ層	64.3	26.4	8.8	10.2	珪質頁岩	無	
84-2	石匙	Ⅱ 類	遺構外	Ⅱ層	67	48.7	10.6	25.7	珪質頁岩	無	
84-3	石匙	Ⅲ 類	遺構外	Ⅱ層	65.3	30.8	9.5	14.4	珪質頁岩	無	
84-4	石匙	Ⅳ 類	遺構外	Ⅱ層	31.6	37.4	7.7	6.7	珪質頁岩	有	
84-5	石匙	Ⅳ 類	遺構外	Ⅱ層	25.7	17.2	4.2	1	珪質頁岩	無	
84-6	二次調整のある割片	—	遺構外	Ⅱ層	40.7	38	12.7	17.8	珪質頁岩	無	
84-7	二次調整のある割片	—	遺構外	Ⅱ層	92.6	50	16.1	55.5	珪質頁岩	無	
84-8	二次調整のある割片	—	遺構外	Ⅱ層	42.3	25.6	9.3	11.3	珪質頁岩	無	
84-9	二次調整のある割片	—	遺構外	Ⅱ層	54.9	38.7	14.6	29.6	珪質頁岩	無	
84-10	二次調整のある割片	—	遺構外	Ⅱ層	53.2	33	9.2	14.3	珪質頁岩	無	
84-11	二次調整のある割片	—	遺構外	Ⅱ層	55.5	30.8	9.7	14.3	珪質頁岩	無	
84-12	二次調整のある割片	—	遺構外	Ⅱ層	54.2	32	13.6	18	珪質頁岩	無	
84-13	石匙	I c 類	遺構外	Ⅱ層	19.9	12.9	3.2	0.9	珪質頁岩	無	
84-14	石匙	未製品・失敗品	遺構外	Ⅱ層	18.2	15.6	4.1	0.6	珪質頁岩	無	
84-15	石匙	I a 類	遺構外	Ⅱ層	34.5	11.6	6.2	1.9	珪質頁岩	無	
84-16	石匙	未製品・失敗品	遺構外	Ⅱ層	46.4	25.4	9.6	9	珪質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
84-17	石匙	I a 類	遺構外	Ⅱ層	43.2	29.7	8.4	10.2	珪質頁岩	無	
85-1	石匙	I 類	遺構外	Ⅱ層	70.6	30.5	12	14.8	珪質頁岩	無	
85-2	石匙	Ⅳ 類	遺構外	Ⅱ層	24.2	43.8	10.1	4.1	珪質頁岩	無	
85-3	石匙	Ⅳ 類	遺構外	Ⅱ層	30.3	14.9	3.7	1.2	珪質頁岩	無	
85-4	石匙	Ⅱ 類	遺構外	Ⅱ層	52.5	30.2	8.3	11.6	珪質頁岩	無	
85-5	石匙	Ⅲ 類	遺構外	Ⅱ層	66.6	24.8	10.3	9.3	珪質頁岩	無	
85-6	石匙	—	遺構外	Ⅱ層	59.8	29.1	15.8	32.8	珪質頁岩	無	
85-7	磨製石斧	—	遺構外	Ⅱ層	116	91	25	240.7	緑色凝灰岩	無	
85-8	磨製石斧	—	遺構外	Ⅱ層	61	39	13	56.1	緑色凝灰岩 灰岩	無	Ⅱ B-157
85-9	石皿・台石	—	遺構外	Ⅱ層	63	78	12	87	砂岩	無	
85-10	磨製石斧	—	遺構外	Ⅱ層	57	41	32	105.3	緑色凝灰岩 灰岩	無	
85-11	磨製石斧	—	遺構外	Ⅱ層	35	31	22	38.4	頁岩	無	
85-12	磨製石斧	—	遺構外	Ⅱ層	86	18	12	35.5	緑色凝灰岩 灰岩	無	
85-13	磨製石斧	未製品	遺構外	Ⅱ層	114	54	26	259	閃緑岩	無	
85-14	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅱ層	111	54	48	581.8	粗粒玄武岩	無	
85-15	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅱ層	123	54	87	801.7	安山岩	無	
86-1	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	110	95	52	803.2	安山岩	無	
86-2	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	110	84	62	884.1	凝灰岩	無	
86-3	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	87	68	46	432.4	安山岩	無	
86-4	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	66	41	27	119	花崗閃緑岩	無	
86-5	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	94	66	34	262.7	砂岩	無	
86-6	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	98	70	47	370.1	砂岩	無	
86-7	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	113	68	26	263.9	砂岩	無	
86-8	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	75	51	32	200.1	砂岩	無	
86-9	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	96	71	41	348.2	砂岩	無	
86-10	磨石	磨 II 類	遺構外	Ⅱ層	108	99	57	732.2	砂岩	無	
86-11	磨石 (石皿・台石)	—	遺構外	Ⅱ層	130	115	15	351.3	砂岩	無	

表 31 石器・石製品観察表 4

図版番号	器 種	類 型	遺 構	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	受熱 備考
86-12	石皿・台石	—	遺構外	IV層	224	380	82	66000	デイスサイト	無
87-1	石製品	—	遺構外	IV層	265	55	23	505.1	頁岩	無
87-2	磨製石斧	—	遺構外	IV層	129	54	24	24.9	頁岩	無
87-3	磨製石斧	—	遺構外	IV層	22	48	12	80.8	緑色細粒凝灰岩 (古期)	無
87-4	磨製石斧	—	遺構外	IV層	79	42	16	87.6	緑色細粒凝灰岩	無
87-5	磨製器	磨I類、磨II類	遺構外	IV層	137	54	51	499.4	砂岩	無
87-6	磨石	磨I類	遺構外	IV層	165	89	55	1092.7	頁岩	無
87-7	磨石	磨I類	遺構外	IV層	190	58	112	1452.9	頁岩	無
88-1	磨石	磨I類	遺構外	IV層	156	56	63	710.3	砂岩	無
88-2	磨石	磨I類	遺構外	IV層	125	73	67	758.7	砂岩	無
88-3	磨石	磨I類	遺構外	IV層	181	69	75	1297.2	細粒凝灰岩	有
88-4	磨石	磨I類	遺構外	IV層	140	52	60	495.6	砂岩	有
88-5	磨石	磨I類	遺構外	IV層	113	54	79	700.8	細粒玄武岩	有
88-6	磨石	磨I類	遺構外	IV層	122	82	63	497.8	砂岩	無
88-7	磨製器	磨II類、磨III類	遺構外	IV層	107	85	41	552.3	凝灰岩	無
88-8	磨製器	磨I類、磨II類	遺構外	IV層	115	86	48	507.2	砂岩	無
88-9	磨石	磨I類	遺構外	IV層	82	78	35	329.6	砂岩	無
88-10	磨石	磨II類	遺構外	IV層	93	51	51	287.8	安山岩	無
88-11	磨石	磨I類	遺構外	IV層	114	84	39	592.7	閃緑岩	有
88-12	石鏃	—	遺構外	IV層	44	33	17	35.5	砂岩	有
89-1	磨製器	磨I類、磨II類、磨III類	遺構外	IV層	136	84	53	749.2	砂岩	無
89-2	磨製器	磨II類、磨III類	遺構外	IV層	122	83	51	736.3	閃緑岩	無
89-3	磨製器	磨II類、磨III類	遺構外	IV層	93	74	40	358.5	砂岩	無
89-4	石皿・台石	—	遺構外	IV層	105	81	21	215.2	凝灰岩	有
89-5	石皿・台石	—	遺構外	IV層	288	470	155	23.4kg	デイスサイト	無
89-6	磨石	磨I類	遺構外	V層	111	51	48	392.6	砂岩	有
90-1	磨石	磨I類	遺構外	V層	123	54	72	584.4	砂岩	無
90-2	磨石	磨I類	遺構外	V層	91	48	78	461.1	砂岩	有
90-3	磨石	磨II類	遺構外	V層	85	88	48	541.9	砂岩	有

表 32 石器・石製品観察表 5

遺跡名	遺跡所在地	遺構名	時期	出土位置	母岩	接合	石材
長七谷地貝塚	八戸市	第3号竪穴住居跡	早期末葉 (早稲田5類)	ビット産土		2組	
		第1号剥片集積跡	早期末葉	住居跡に隣接			頁岩
表盤 (1) 遺跡	六ヶ所村	第2号剥片集積跡※	早期末葉				頁岩 (多)、珧質頁岩、チャート
砂沢平遺跡	大野町	なし	前期前葉?	遺構外	未調査		未調査
中屋 (2) 遺跡	十和田湖町	剥片集積遺構	前期? (中層浮石下位)	遺構外			珧質頁岩
釜ノ沢 (3) 遺跡	八戸市	第19号竪穴住居跡	中期前葉 (内面上層a式)	ビット上面、住居跡壁際			珧質頁岩
近野遺跡	青森市	第E120a号竪穴住居跡	中期中葉?	底面下位	2母岩	6組	珧質頁岩
三内丸山 (6) 遺跡	青森市	第39A号竪穴住居跡	中期前葉~中葉	ビット上面~覆土上部 (深さ10cm)	単一	7組	頁岩
山崎遺跡	今別町	No.1	中期中葉 (内面上層d式)	遺構外	単一	4組	珧質頁岩
		No.2	中期中葉 (内面上層e式)	遺構外	単一	1組	珧質頁岩
		第7号竪穴住居跡※	中期後葉 (内面上層e式)	住居跡壁際、床面、雨溝			
松ヶ崎遺跡	八戸市	第11号竪穴住居跡	大木8b~椋林式以前	床面			
		第13号竪穴住居跡P19	中期後葉 (内面上層e式)	ビット産土			
		第13号竪穴住居跡P46	中期後葉 (内面上層e式)	ビット産土			
		第14号竪穴住居跡P12	中期後葉 (内面上層e式)	ビット産土			
		第14号竪穴住居跡P13	中期後葉 (内面上層e式)	ビット産土			
三内丸山遺跡	青森市	第603号竪穴住居跡	中期後葉 (内面上層e式)	ビット産土~覆土	8母岩	2組	珧質頁岩
長久保 (2) 遺跡	八戸市	第3号竪穴住居跡	中期後葉 (藪花・大木9式)	床面、住居跡壁際	複数存在	2組	無
磯ノ木遺跡	野辺地町	石器集積跡	中期末?	遺構外			無
安田 (2) 遺跡	青森市	第26号竪穴住居跡 (集積1)	後期前葉	床面	複数存在	9組	珧質頁岩、玉髄質珧質頁岩
		第26号竪穴住居跡 (集積2)	後期前葉	床面	複数存在	7組	珧質頁岩、玉髄質珧質頁岩
丹後谷地遺跡	八戸市	第45号竪穴住居跡	後期後葉 (十層内IV群)	ビット産土			
		第56号竪穴住居跡	後期後葉 (十層内IV群) 以前	ビット産土	複数存在	2組	無
丹後平遺跡	八戸市	第10号竪穴住居跡	後期中葉	床面、住居跡壁際	単一	2組	無
小牧野遺跡	青森市	剥片埋納遺構 (SX-07)	後期?	遺構外		4組	珧質頁岩
田ノ上遺跡	南郷村	第2号竪穴住居跡ビット19	後期前葉 (十層内I群)	ビット産土			珧質
細粒遺跡	川内町	SI-01	後期後葉~晚期前葉	床面、住居跡壁際			無

※ 土器等の覆土層部分に埋納し、土器や自然産を多く伴うなど、一部塚墓的傾向が強いものは表から除外した。表盤 (1) 遺跡第2号剥片集積、松ヶ崎遺跡第7号竪穴住居跡は砕片層を作ってあり、石器製作残滓の廃棄ブロックの可能性が考えられる。

表 33 青森県剥片集中遺構構成 1

遺跡名	遺構名	総数	文献
長七谷地蔵塚	第3号竪穴住居跡	70点	八戸市教育委員会 1982 『長七谷地蔵塚発掘調査報告書』
表館(1)遺跡	第1号割片集積跡	236点	青森県教育委員会 1989 『表館(1)遺跡Ⅲ』
	第2号割片集積跡※	数千点	
砂沢平遺跡	なし	未精査	大鰐町教育委員会 2004 『砂沢平遺跡 一確認調査報告書一』
中重(2)遺跡	割片集積遺構	32点	十和田湖町教育委員会 2001 『中重(2)遺跡』
笹ノ沢(3)遺跡	第19号竪穴住居跡	19点	青森県教育委員会 2004 『笹ノ沢(3)遺跡Ⅳ』
込野遺跡	第29号竪穴住居跡	45点	青森県教育委員会 2005 『込野遺跡Ⅲ』
三内丸山(6)遺跡	第39A号竪穴住居跡	67点	青森県教育委員会 2001 『三内丸山(6)遺跡Ⅲ』
山崎遺跡	No.1	22点	青森県教育委員会 1982 『山崎遺跡』
	No.2	32点	
松ヶ崎遺跡	第7号竪穴住居跡※	チップ440g	八戸市教育委員会 1994 『八戸市内遺跡発掘調査報告書6 松ヶ崎遺跡』
	第11号竪穴住居跡	14点	
	第13号竪穴住居跡P19	51点	
	第13号竪穴住居跡P46	78点	
	第14号竪穴住居跡P12	70点	
第14号竪穴住居跡P13	47点		
三内丸山遺跡	第603号竪穴住居跡	24点	青森県教育委員会 1998 『三内丸山遺跡Ⅰ』
長久保(2)遺跡	第3号竪穴住居跡	8点	青森県教育委員会 2004 『長久保(2)遺跡』
糠ノ木遺跡	石器集積跡	29点	青森県教育委員会 1983 『松原遺跡・陣馬川原遺跡・糠ノ木遺跡』
安田(2)遺跡	第26号竪穴住居跡(集積1)	59点	青森県教育委員会 2001 『安田(2)遺跡Ⅱ』
	第26号竪穴住居跡(集積2)	32点	
丹後谷地遺跡	第45号竪穴住居跡	82点(アスファルト塊含む)	八戸市教育委員会 1986 『八戸市新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
	第56号竪穴住居跡	80点	
丹後平遺跡	第10号竪穴住居跡	8点	八戸市教育委員会 1988 『八戸市新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
小牧野遺跡	割片埋納遺構(SX-07)	122点	青森市教育委員会 2002 『小牧野遺跡Ⅲ』
田ノ上遺跡	第2号竪穴住居跡ビット19	26点	青森県教育委員会 1981 『国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
報越遺跡	SI-01	12点	川内町教育委員会 1993 『報越・豊川遺跡発掘調査報告書』

表 34 青森県割片集中遺構集成2

	類型	I層	II層	III層	IV層	V層	カクラン	総点数	重量(g)	
石器	I a 類	1	1	16	5			23	70.9	
	I b 類		1	7	3			11	14.7	
	I c 類			3	56	6		1	66	72.2
	I d 類			4	1				5	11.3
	II a 類			7					7	15.8
	II b 類			4					4	5.5
	II c 類	1							1	1
	未製品・失敗品			8	4				12	77.2
	—			2	1				3	64.8
石楯	未製品・失敗品			2				2	26.2	
	I 類			2	1			3	41	
	II 類			2	2			4	55.3	
	III 類	1		1	2			4	23.7	
石匙	IV 類				3			3	9.5	
	—			3	3	1	1	8	293.2	
	—		2	20	3			25	159.1	
	二次調整のある割片	1	11	110	33	2		157	1485.9	
石鏃	I 類			3				3	10.4	
	II 類	1	1	3				5	243.9	
	III 類			2				2	1.7	
	IV 類			6			1	7	114.8	
微小剥離痕のある割片	—		2	162	21		185	1585		
割片	—		23	262	82	2	1	370	2590.4	
砕片	—		9	106	23			138	799.6	
石核	—		1		2			3	1289.3	
—	—		5	12	4			21	2330.7	
磨製石斧	残欠			2				2	19	
	未製品			1	1			2	312.7	
磨石	—		4	1	1			6	2347.8	
凹石	—		10	7				17	7343.9	
磨石	—		3	21	49	5	2	80	39279.5	
組磨盤	—		5	13				18	8718.5	
石皿・台石	—	1	8	4				13	119119.7	
石鉢	—		1	4			2	7	582.6	
磨石	—	1	3					4	2430.9	
半円状扁平打製石鏃?	—		1					1	46.6	
石製品	—			1				1	505.1	
自然塊	—	7	350	2996	1610	30	3	4996	1373082.9	
総点数		12	412	3853	1889	41	11	6220	1565162.3	

表 35 新田遺跡出土石製遺物組成



第 11 号竪穴住居跡完掘状況（南から）



第 14 号竪穴住居跡完掘状況（南から）

写真図版 1



第1号竪穴住居跡土層堆積状況（南から）



第1号竪穴住居跡完掘状況（南東から）



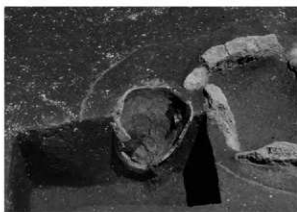
第1号竪穴住居跡Pit1土層堆積状況



第1号竪穴住居跡Pit1完掘状況



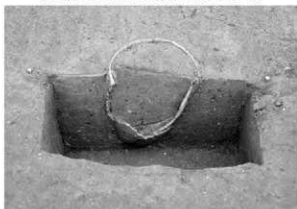
第2号竪穴住居跡完掘状況（南東から）



第2号竪穴住居跡炉設土器内面（南から）



第3号竪穴住居跡完掘状況（東から）



第3号竪穴住居跡埋設土器土層堆積状況（南から）



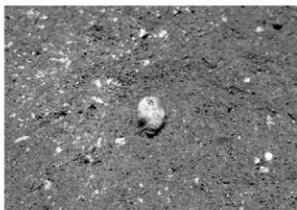
第4号竪穴住居跡土層堆積状況（東から）



第4号竪穴住居跡完掘状況（北西から）



第4号竪穴住居跡掘方完掘状況（北から）



第4号竪穴住居跡琥珀出土状況（北から）



第5号竪穴住居跡カマド遺物出土状況（南から）



第5号竪穴住居跡焼土・火山灰検出状況（南から）



第5号竪穴住居跡完掘状況（南から）



第7号竪穴住居跡完掘状況（東から）

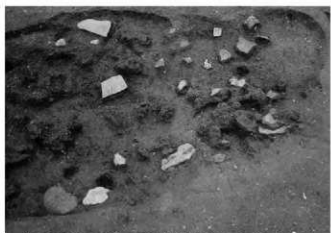
写真図版 4



第7号竪穴住居跡炭化材検出状況（南から） 第7号竪穴住居跡炭化材検出状況（部分） 第7号竪穴住居跡床面粘土出土状況



第7号竪穴住居跡複式炉炭化材検出状況（西から）



第7号竪穴住居跡複式炉炭化材検出状況 部分（南から）



第7号竪穴住居跡複式炉底面ビット土器出土状況

写真図版 5



第8号竪穴住居跡土層堆積状況（西から）



第8号竪穴住居跡土層堆積状況（南から）



第8号竪穴住居跡焼土・火山灰検出状況（南から）



第8号竪穴住居跡掘方工具痕



第8号竪穴住居跡完掘状況（南から）

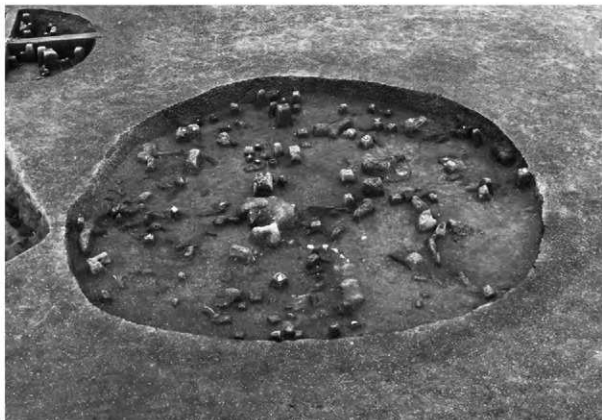
写真図版 6



第8号竪穴住居跡掘方完掘状況(南から)



第9号竪穴住居跡土器坏出土状況



第11号竪穴住居跡炭化材検出状況(南から)



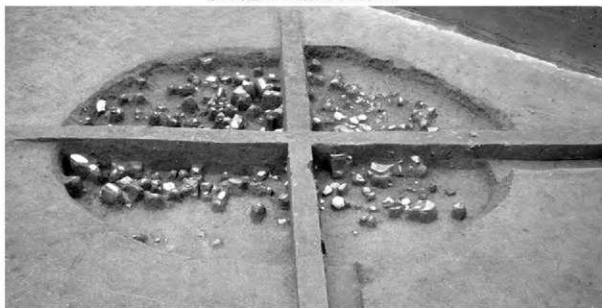
第11号竪穴住居跡剥片集積検出状況



第11号竪穴住居跡複式伊禮設土器検出状況



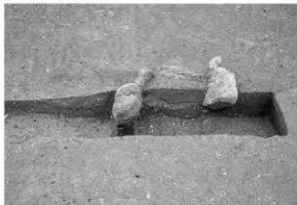
第12号竪穴住居跡完掘状況（南から）



第14号竪穴住居跡遺物出土状況（南東から）



第15号竪穴住居跡硬化面検出状況（北東から）

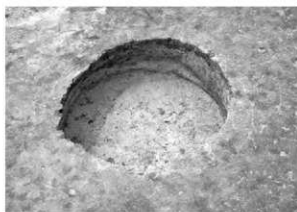


第15号竪穴住居跡石囲炉土層断面（南東から）

写真図版 8



第4号土坑土層堆積状況（東から）



第4号土坑完掘状況（東から）



第5号土坑土層堆積状況（東から）



第6号土坑完掘状況（東から）



第10号土坑土層堆積状況（東から）



第10号土坑完掘状況（東から）



第11号土坑土層堆積状況（東から）



第11号土坑完掘状況（東から）

写真図版 9



第14号土坑堆積土遺物出土状況（東から）



第14号土坑堆積土炭化種実出土状況



第14号土坑底面鏡土炭化種実片出土状況（断面）



第14号土坑堆積土炭化種実出土状況（上の写真の拡大）



第14号土坑底面鏡土炭化種実片出土状況（平面）

写真図版 10



第14号土坑底面焼土検出状況(南から)



第15号土坑底面焼土検出状況(南から)

写真図版 11



第15号土坑底面焼土断面



第15号土坑底面焼土炭化クリ出土状況



第16号土坑底面焼土検出状況（東から）



第16号土坑底面焼土断面

写真図版 12



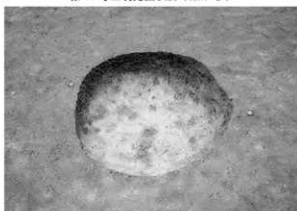
第17号土坑土層堆積状況（東から）



第17号土坑完掘状況（東から）



第18号土坑土層堆積状況（東から）



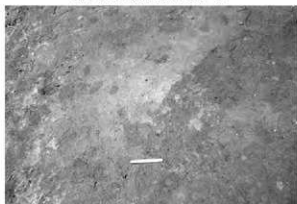
第18号土坑完掘状況（東から）



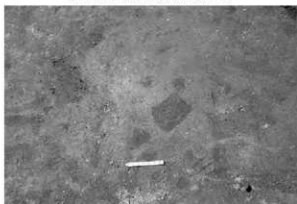
第3号焼土検出状況（東から）



第4号焼土検出状況（北東から）



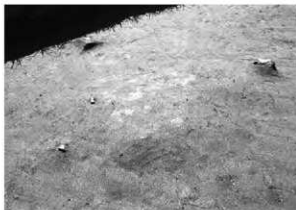
第5号焼土検出状況（南東から）



第6号焼土検出状況（北東から）



第7号焼土検出状況（東から）



第8号焼土検出状況（東から）



第11号焼土検出状況（南東から）



第11号焼土付近基本土層断面（南東から）



第12号焼土検出状況（南東から）



第13号焼土検出状況（東から）



第15号焼土断面（南東から）



第16号焼土検出状況（南から）



第1号土器埋設炉検出状況（西から）



第1号土器埋設炉断面（東から）



第1号土器埋設炉土器内焼土検出状況（南東から）



第2号土器埋設炉検出状況（南東から）



第2号土器埋設炉断面（北東から）



第2号土器埋設炉土器外焼土検出状況（南東から）



第3号不明遺構検出状況（東から）



第4号不明遺構検出状況（東から）



第5号不明遺構検出状況（東から）



第6号不明遺構建物出土状況（東から）



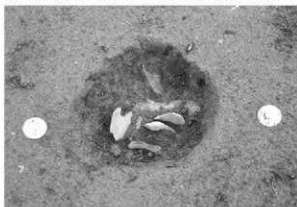
第6号不明遺構 図62-1 土器内焼土検出状況(南東から)



第6号不明遺構 図62-1 土器内焼土完掘状況(北西から)



第6号不明遺構土層堆積状況(南東から)



第7号不明遺構検出状況(北から)



第8号不明遺構検出状況(東から)



第1号溝状土坑土層堆積状況(南から)



第1号溝状土坑完掘状況(東から)



遺構外P-9176 出土状況(東から)



16-3



16-4



16-1



22-1



19-11



19-14



30-7

写真図版 18



写真図版 19



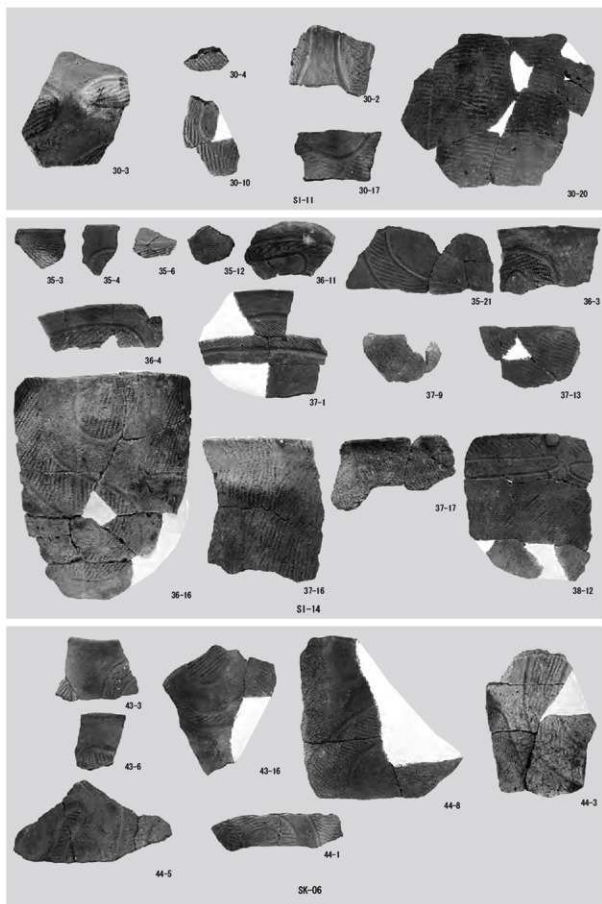
写真図版 20



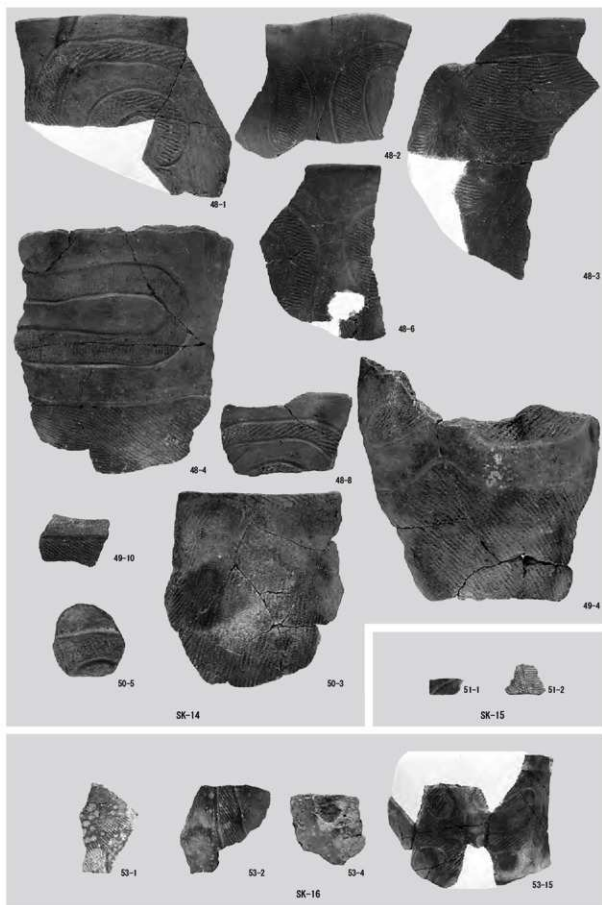
写真図版 21



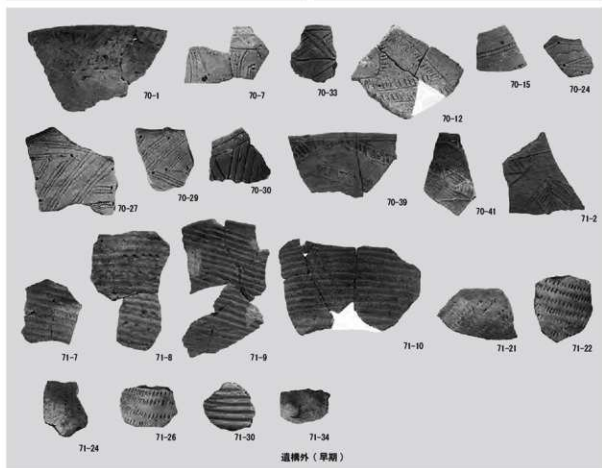
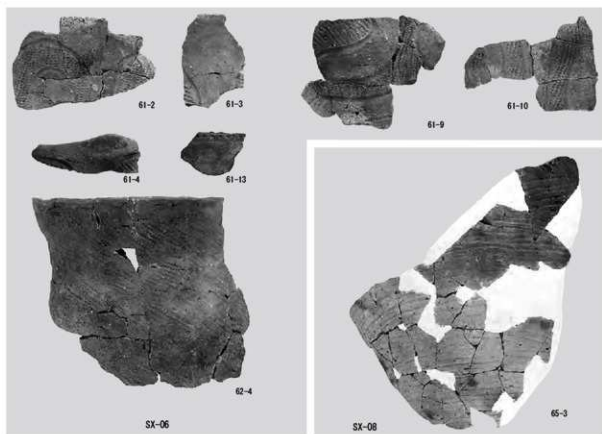
写真図版 22



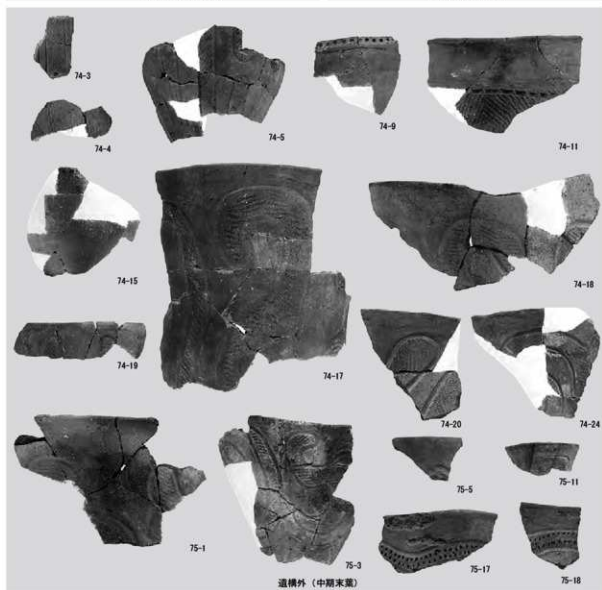
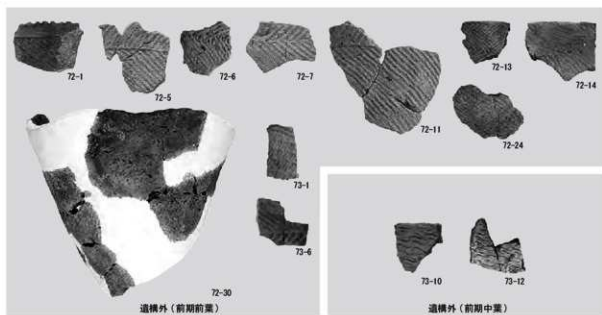
写真図版 23



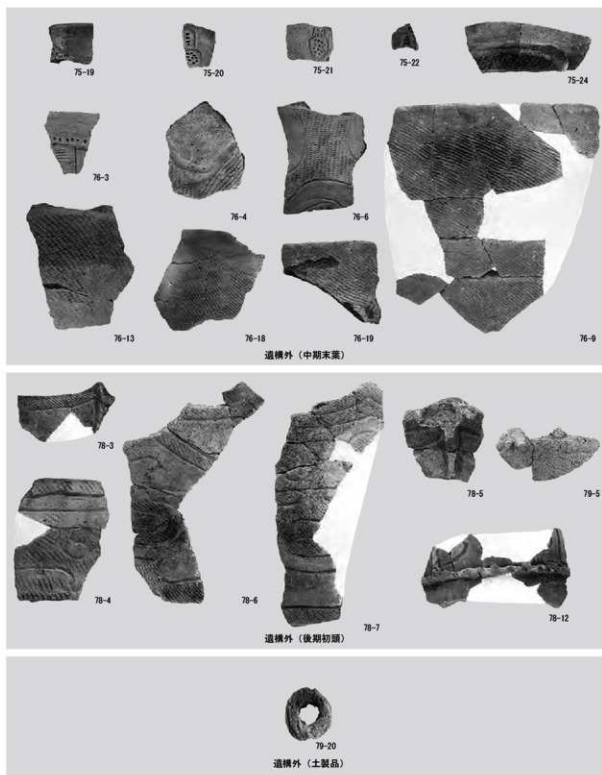
写真図版 24

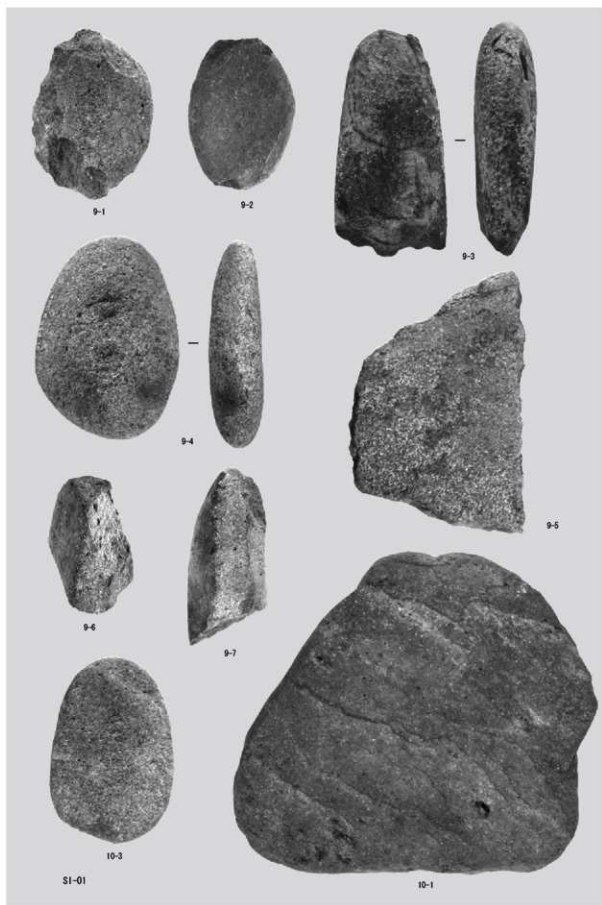


写真図版 25

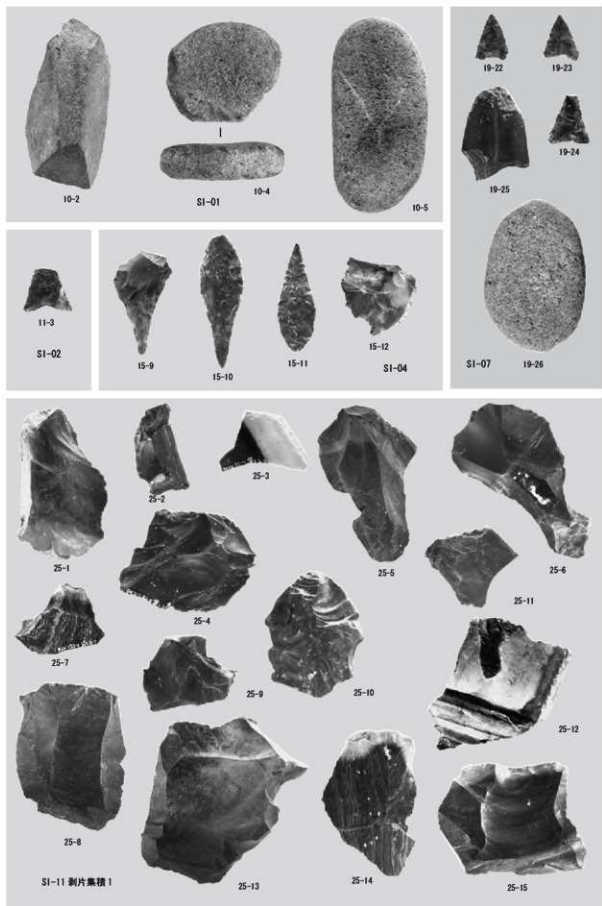


写真図版 26

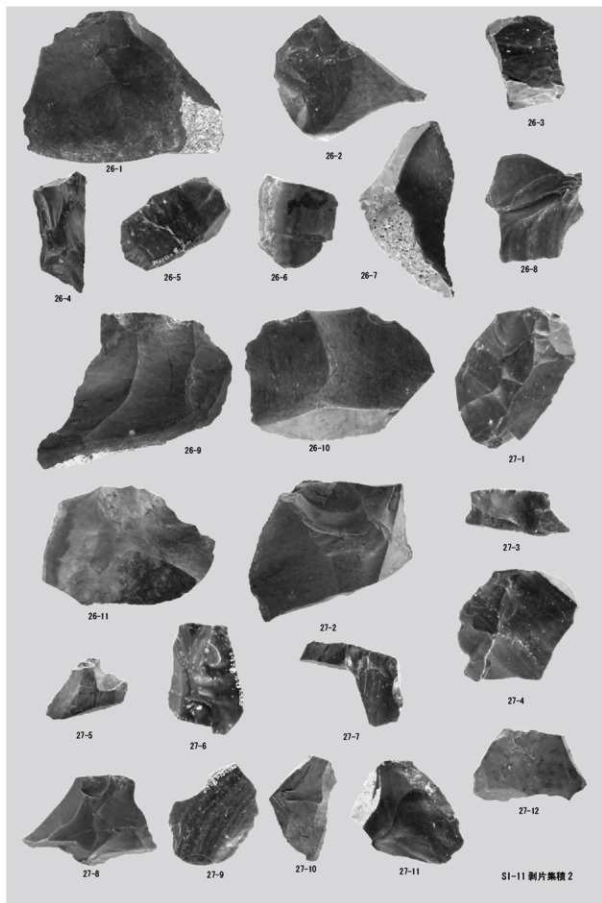




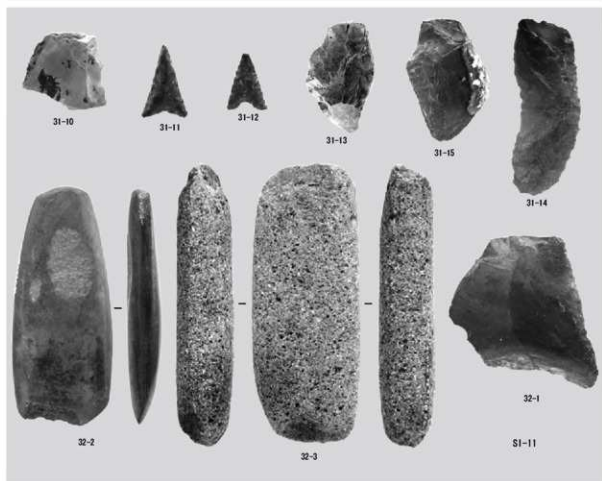
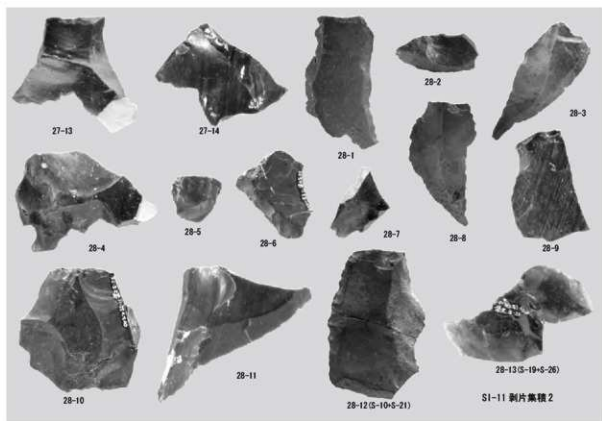
写真図版 28 遺構内出土石器 1



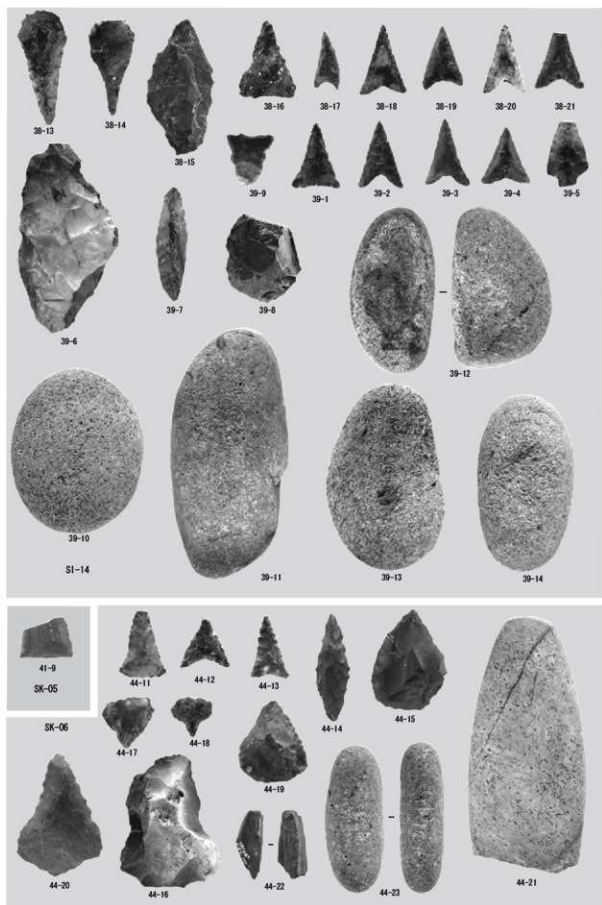
写真図版 29 遺構内出土石器 2



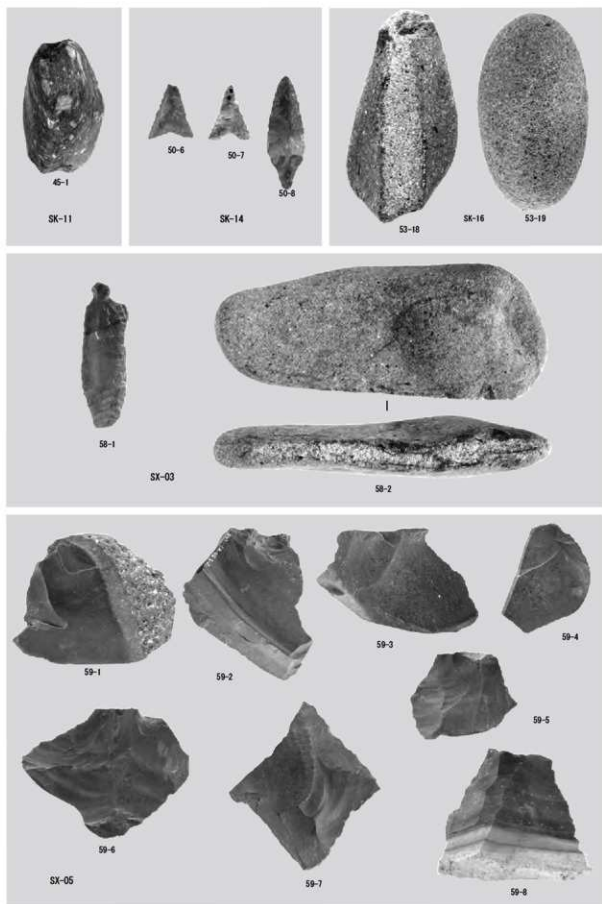
写真図版 30 遺構内出土石器 3



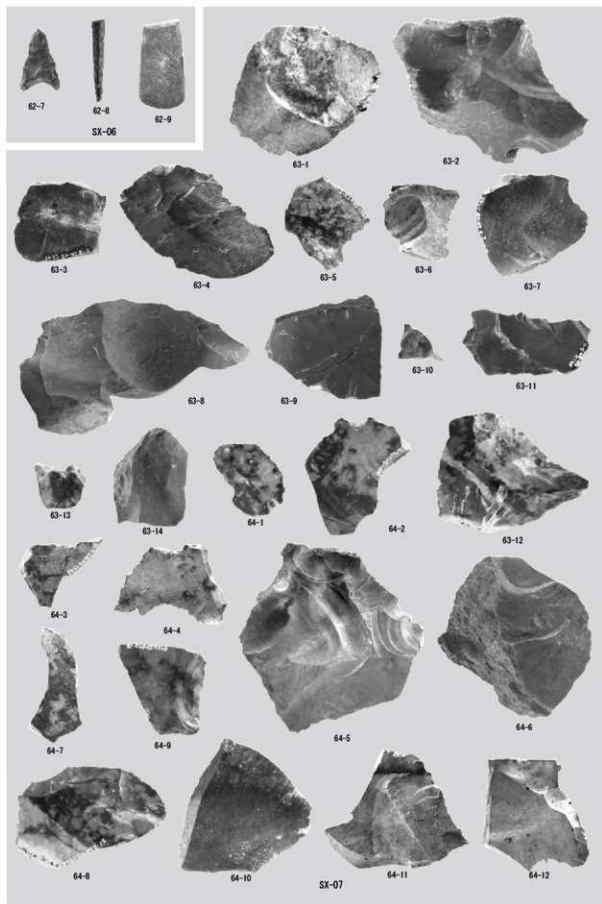
写真図版 31 遺構内出土石器 4



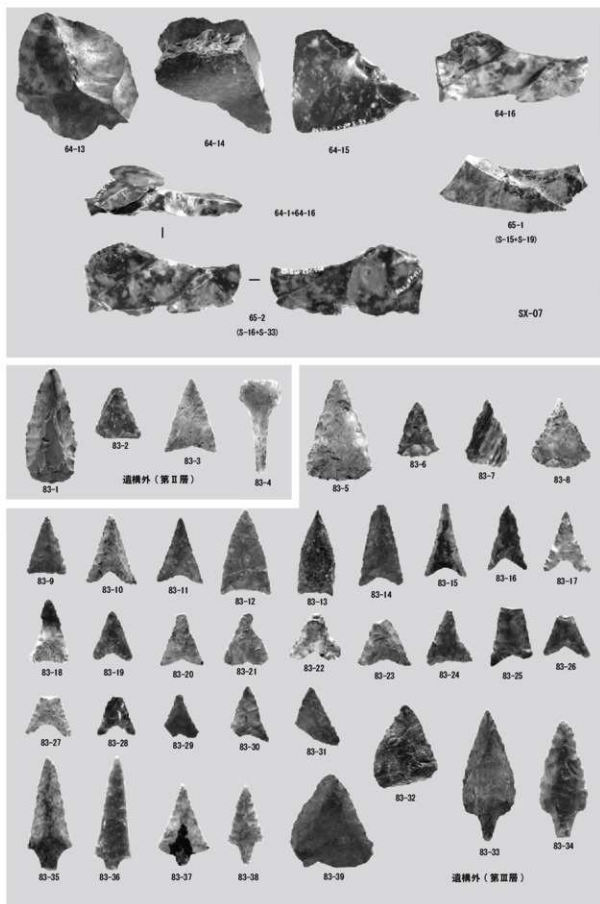
写真図版 32 遺構内出土石器 5



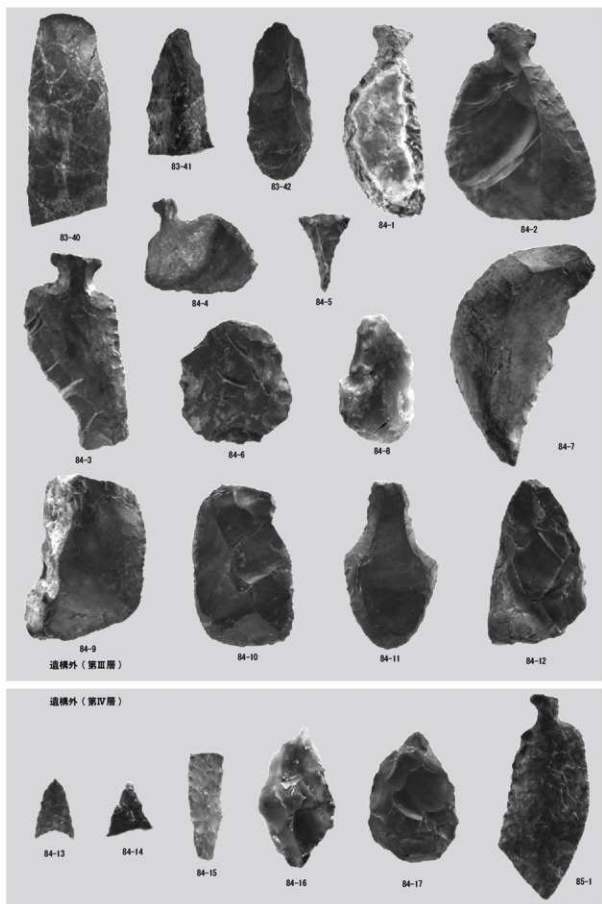
写真図版 33 遺構内出土石器 6



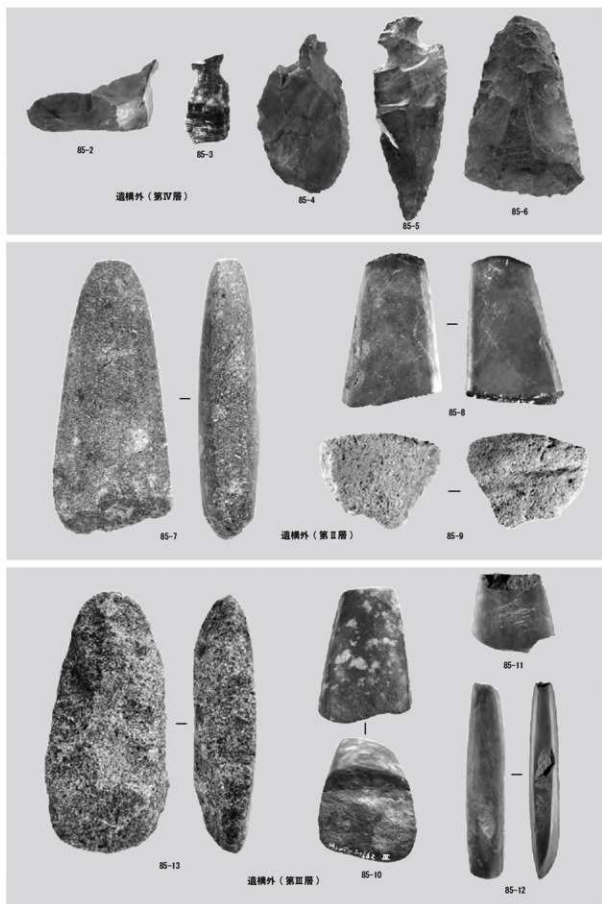
写真図版 34 遺構内出土石器 7



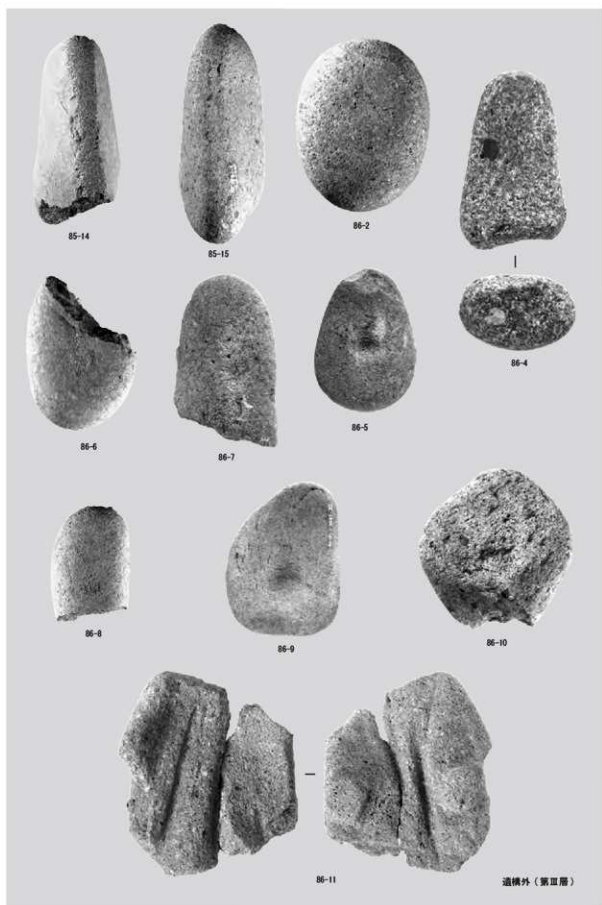
写真図版 35 遺構内出土石器 8・遺構外出土剥片石器 1



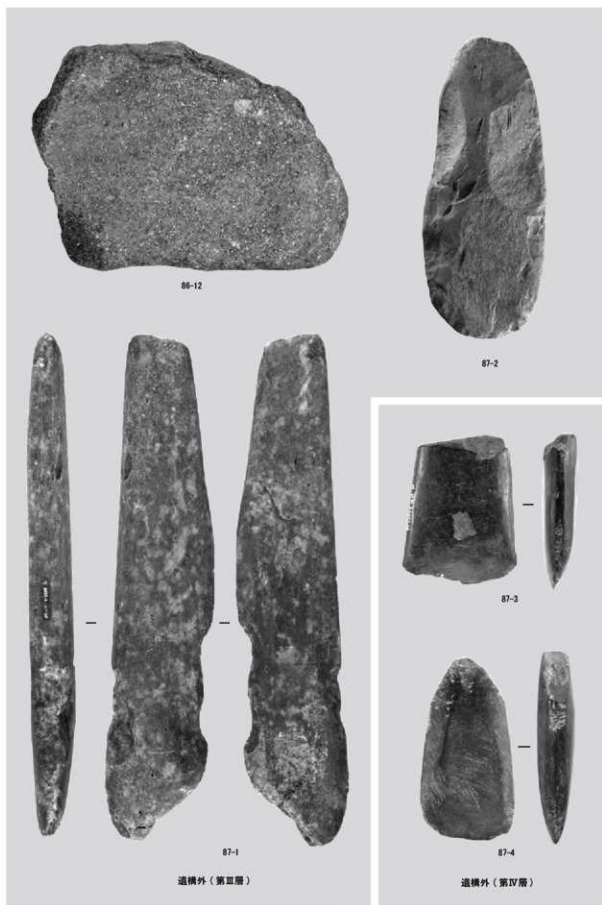
写真図版 36 遺構外出土剥片石器 2



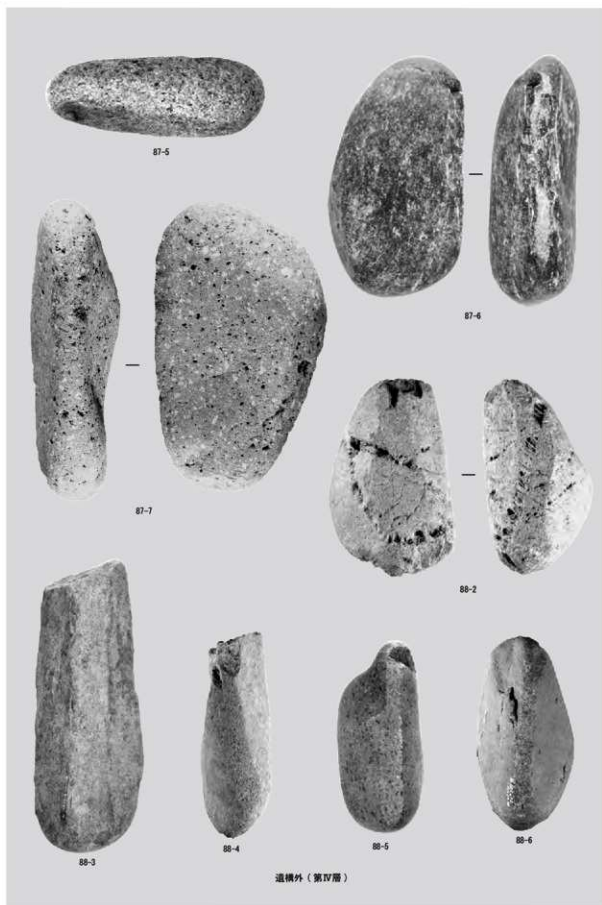
写真図版 37 遺構外出土剥片石器 3・礫石器 1



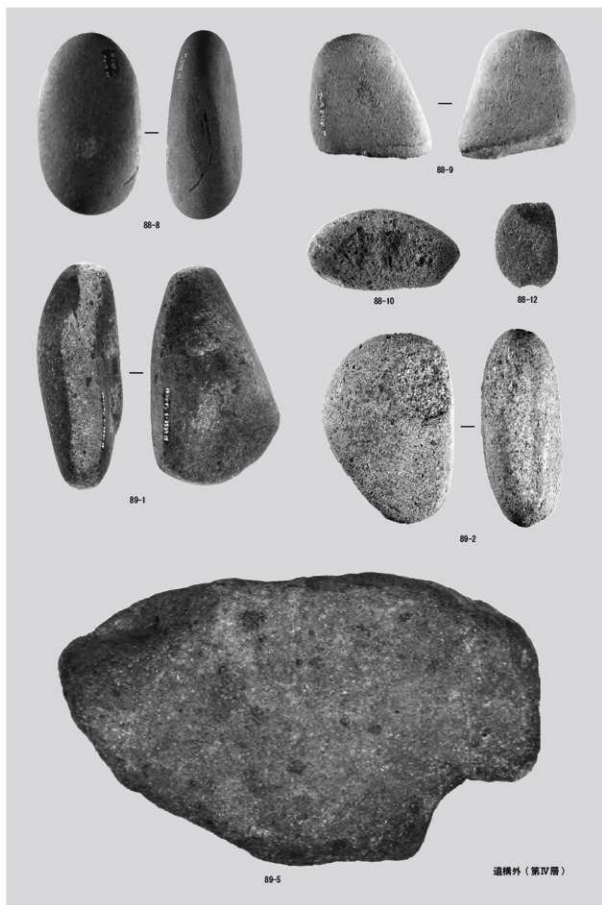
写真図版 38 遺構外出土礫石器 2



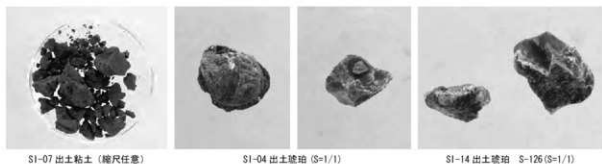
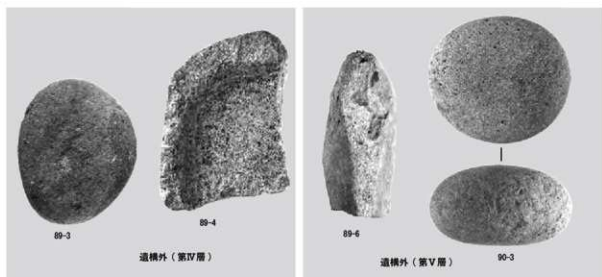
写真図版 39 遺構外出土礫石器 3



写真図版 40 遺構外出土礫石器 4



写真図版 41 遺構外出土礫石器 5



写真図版 42 遺構外出土燧石器 6・その他出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しんでんいせきに							
書名	新田遺跡Ⅱ							
副書名	八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第410集							
編著者名	中村 哲也 斉藤 慶史							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新成字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2006年3月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因
新田遺跡	八戸市大字 是川字新田 8-6、外	市町村	遺跡 番号	北緯	東経	20030801	4,900 m ²	八戸南環状道路建設事業に伴う事前調査
				40° 28' 40"	141° 29' 25"	20031023		
		日本測地系 2000 (JGD2000)		20040420				
		北緯	東経	?				
		40° 28' 29"	141° 29' 25"	20040908				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新田遺跡	集落	縄文時代 早期 早期後半～ 前期前半 前期後半以降 中期 中期末葉 ～後期初期 後期 晩期 古代（主に奈良時代）	竪穴住居跡 2軒 土坑 1基 焼土 1基 焼土 3基 土坑 4基 焼土 7基 竪穴住居跡 6軒 土坑 4基 焼土 3基、土器埋設炉 1基 竪穴住居跡 1軒 土器埋設炉 1基 土坑 2基 竪穴住居跡 3軒		土器・石器 土器 土器・石器・土製品・ 植物遺体・コハク片 土器・石器 土器 土師器・紡錘車		複式炉を伴う中期末葉の集落が検出された。	

青森県埋蔵文化財調査報告書 第410集

新田遺跡Ⅱ

—八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2006年3月24日

発行 青森県教育委員会
〒030-0801 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL. 017-788-5701 FAX. 017-788-5702

印刷 不二印刷工業株式会社
〒030-0902 青森市合浦一丁目10-16
TEL. 017-741-5439 FAX. 017-741-2541
